

パラレル・アース ～3つ目の平行世界は異世界だった？～

千円ぱすた

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

真夜中の病院に訪れた来訪者により、平行世界の存在を知らされた新納薫（ニイロカオル）。

来訪者は、新納の病気の治療と引き換えに、別の平行世界への旅を提案してきた。

しかし、そこは同じ歴史から分岐したとは思えない、魔法すら実在する異世界だった。

先行世界の先進技術による支援を受け、現代装備で身を固めたおっさんと、自律機械工学から生まれた、少女型オートノマス・マシン、サクラコ達の、異世界調査の旅が始まる。

※この作品は「小説家になろう」様にも同時投稿しております。

目次

第一章 平行世界へ

第1話 今宵、使者は来たりぬ | 1

第2話 それぞれの事情 | 15

第3話 未知への準備 | 31

第4話 旅立ち | 37

第5話 第一異世界人(に)発見(される) | 51

第6話 再会 | 63

第7話 伯爵家の事情 | 76

第8話 初陣 | 85

第9話 後始末 | 97

※第一章の登場人物※ | 105

第二章 リドリスファール王国

第10話 招待 | 109

第11話 異世界食堂 | 120

第12話 雨の街 | 128

第13話 お悩み相談室 | 140

第14話 ルードサレン城の会談 前編 | 150

第15話 ルードサレン城の会談 後編 | 161

第16話 模擬戦 | 172

第17話 戦争と平和 | 183

第18話 決断と潜入 | 197

第19話 砲艦外交 | 208

第20話 コルエバン救援 | 225

第21話 直談判 | 237

第22話	コルエバン解放戦	248
第23話	使者	261
第24話	戦場のお茶会	271
第25話	誘(いざな)い	282
※第二章の登場人物※		293
第三章 バネストリア帝国		
第26話	待ち伏せ	297
第27話	怒り	310
第28話	救出	321
第29話	首狩り姫	331
第30話	ヨーネス大森林	345
第31話	足止め	358
第32話	同行者	370
第33話	キャラバン	380
第34話	噂	395
第35話	ソーコーの街	409
第36話	いらぬ気遣い	421
第37話	ザルドの店	432
第38話	スーメリア	441
第39話	コレム口の泉	451

第一章 平行世界へ

第1話 今宵、使者は来たりぬ

深夜の入院病棟は静まり返っていた。

一般的な入院生活では、夜の九時に病室は一斉消灯され、就寝時間になることが多い。

ただ、最近の比較的新しく、大きな総合病院などでは、規則上は夜9時の消灯であっても、実際に夜11時前後くらいまでならば、一般的な家庭での生活習慣を鑑みて、消灯時間後でも病室内に患者個人で持ち込んだタブレット端末やポータブルDVDなどを、他の患者に迷惑が掛からないよう、光や音の漏れに注意した上で工夫して楽しむ分には、あまり煩く言われない所もあるようだ。

まあ、それも患者の病状や体調、夜勤担当の看護師の判断によりけりだが。

(ん…… もうこんな時間か……)

この病棟に入院する患者の一人、にいろかわる新納薫は、電動のリクライニングベッドに体を起こした状態で、今まで目を通していたタブレット端末の、画面隅に小さく表示されている時刻を見た。

深夜一時という表示に少し驚くと、顔を上げて壁に掛かった時計の時刻も確認する。

(今日は見廻り無いのかね)

壁の時計も夜光塗料の塗られた針が、確かに一時を指している。

普段であれば、いくら遅くとも夜11時過ぎて起きていると、巡回の看護師に見咎められて寝るように促されるのが普通だ。

それでも、今入院している病院は地域の救急指定病院になっているし、まあ、急患でも入って看護師も忙しいんだらうと、この時は特に不審に思うことも無かった。

(まあいいや、そろそろ寝るかあ)

病気の進行で思うに任せない体に多少の苛つきを感じつつ、入院前より細くなったように思える手で端末の電源を落とす。

緩慢な動作でベッド脇に備え付けられたテーブルに端末を置き、ふう、と物憂げに溜息を一つつきながら、端末を見るのに起こしていたりクライニングベッドを操作する為に、小さな室内灯の明かりだけが灯された薄暗い部屋で、手探りで電動ボタンを探し……

「溜息をつくると幸せは逃げるそうですよ」

いきなり掛けられた声に驚いて、声のした方を見ると、いつの間にか開けられた病室の入り口の扉を、塞ぐように大きな影が佇んでいた。

「ああ、びつくりした……。誰です？ 突然」

一瞬、看護師の誰かが声を掛けてきたのかも思ったが、聞き覚えのないハスキーな男の声と、廊下の非常灯で逆光になった黒いシルエットに思わず多少ビビってしまった恥ずかしさもあって、やや陰を含んだ口調になってしまったのは仕方のないことだろう。

「ああ、失礼。驚かせてすいません。しかもこんな時間に」

それに相手も気づいたのか、素直に謝罪の言葉を口にする、大きな体で塞いでいた入り口から病室の中、新納から顔の見える位置に移動してきた。

そして、薄暗いながらも室内灯の明かりで確認できた姿が、明らかに日本人には見えない黒人だったことに驚かされる。

「Mr. カオル・ニイロ、ニイロカオルさんで間違いありませんね？」

私はロバート・バレットと申します」

「は、はあ……」

にこやかに人の好きげな笑顔で握手を求めてきたバレットに、困惑しながらも右手を差し出すことで応えた。

こんな深夜に突然訪れた、一応友好的に話し掛けてくる、流暢な日本語を話す見ず知らずの黒人男性に、これ以外の対応ができる日本人がいるだろうか？

少し冷静になって観察してみると、バレットの身長は190センチ強くらい。グレーの上下のスーツに白いシャツ、臍脂に紺のストライプの入ったのネクタイを締め、がっしりした体つきで、映画『マイ・ボディガード』に出ていた頃のデンゼル・ワシントンに少しだけ似て

なくもないアフリカ系の顔立ちだ。

年齢は50代くらいだろうか、もう少しいつてるかも知れない。外国人、それも黒人の年齢は見慣れてないので全く自信は無いが。

「確かに新納薫は自分ですけど、バレットさん……ですか、こんな時間に何の用件で？」

こんな非常識な時間に？ という言葉は飲み込んで、取り敢えずそう尋ねると、バレットはにこにここと相変わらず人の好きそうな笑顔で、全く予想外の事を切り出してきた。

「そうですね、突然なので驚かれると思いますが、シンプルに申し上げますと、本日は貴方をヘッドハンティングさせてもらいに来ました」「はい？」 間拔けた声しか出なかった。

◇ ◇ ◇

新納がこの病院に入院して約3か月になる。

切っ掛けは33歳の誕生日を少しだけ過ぎた初夏の頃、早くも夏バテか？ と、それまで何となく感じていた体の違和感が急に激しくなり、職場を早退して受診した結果、病気が判明したのだ。

この病気について、これこれこういった病気がある、というのは、以前、引退した元プロスポーツ選手の闘病ドキュメンタリー的なTV番組を見た記憶があったので、知識として知ってはいた。

しかし、いざ自分がその病気だと判明した当初は、病院・職場・役所での様々な手続きや、否応無く退職することになる職場への仕事の引継ぎの調整に追われることになり、残酷な現実を改めて衝撃を受けたのは、入院して暫く後の事だった。

病名は何やら矢鱈とややこしい名前でも正確には覚えていない。

自分を早晩、そして確実に死に追いやるであろう病名を、わざわざ積極的に覚える気も無かった。

別にヤケになっている訳ではない。と思う。当然、最初は悩んだし、眠れない夜を幾日も過ごした。

自殺を考えた事もあったが、自殺しようとするまいと、どの道早々に

死はやって来ることが確定している。そう思うと自ら手を下す気持ちすら萎えた。

今はジタバタしても仕方が無い、今回の人生はハズレだったから次の人生こそ当たりを引こうなどと、前向きなんだかよくわからない気持ちになっっている。

別に輪廻転生を心から信じている訳でもないし、諦めてるだけだと言われれば、その通りだとも思う。

ただ、こんな心境になったのは、ネット上に転がっている無料のWEB小説に手を出した影響もあつたかも知れない。

元々本好きで、歴史物やミステリ、SF、ホラーなど、主に大衆小説ならばジャンルに拘らず読むタイプではあつたが、入院生活も1ヶ月を過ぎる頃になると、流石に自前で持ち込んだ手持ちの本は全て読み終わってしまい、仕方なくタブレット端末とネット環境だけあれば無料で読めるWEB小説にも手を出した。

それまでは、所詮子供向けだろうと、なんとなく避けていた所謂ラブと呼ばれるタイプの小説にも、他に読みたい小説も見当たらない事もあつて、無聊を慰める手段として背に腹は代えられぬと、今更ながら手を出したところ、その中の異世界転生モノにありがちな、死んで転生というパターン、死んでも次がある、というパターンに救いのようなものを感じたのだ。

もちろん、心の奥底では冷静な自分が、実際にそんな荒唐無稽な事なんてある訳がないだろうと考えている。

しかし、終点の見たえた人生の残りを、そのくらいの細やかな希望で妄想に耽ることくらい許されてもいいのではないだろうか。そう考え、今のところは比較的心穏やかに日々の入院生活を送っていた。

しかし、この突然の真夜中の来訪者は「ヘッドハンティングに来た」と、新納の一種悟りにも似た気持ちに一石を投じて来たのだ。

「へ、ヘッド？　どういう意味だ？　……ですか？　俺の、私の病気もご存知ですよ？　そんな病人をヘッドハンティングって……新しい治療？　それもこんな時間に？　……法的にブラックか、限りなくグレーの、という認識でいいのか？　……いいんですか？」

初対面の相手とは丁寧語で話すのが社会人としての礼儀だとは思
うのだが、内容から受けた衝撃に所々口調が怪しくなるのは仕方が無
い。

内容が白かろうが黒かろうが、死を回避する手段があるとなれば、
その現実を突きつけられた人間にとって絶対に無視できるような話
ではないのだから。

「気持ちはお察ししますが、まず落ち着きましようか。それと、言葉も
崩して下さって結構ですよ。」

「これが落ち着いて！」「まずは落ち着いて下さらないと続きを話せ
ません」……」

新納の逸る気持ちを抑え込むかのように、バレットはピシヤリと言
葉を被せてきた。表情は相も変わらせずにここにこととした人の好きそう
な笑顔だが、これで分かった。これは仮面だ。

仕方なく、新納は胸に手をやり、深呼吸をして気持ちを落ち着かせ
る、逸る気持ちを抑えて言葉を絞り出す。

「……すまなかつた。話の続きを」

そんな新納の様子を見つめていたバレットは、確かに落ち着いたと
判断したのか話の続きを始める。

「宜しいでしょう。少し長い話になりますので、まずはちよつと失礼
して……」

そう言うと、病室の入り口横にある室内灯のスイッチを操作して部
屋の明かりを点けると、部屋の隅に置いてあった折り畳みのパイプ椅
子をベッド脇まで持ってきて座り、話の続きを切り出した。

明るくして見廻りの看護師とかは平気か？ と少し気になるが、バ
レットは何も言わないので今は無視する。

「さて…… まず、ヘッドハンティングというのは一般的に使われる
そのままの意味です。貴方さえ良ければ、貴方には我々の元で働いて
もらいたい、という提案をしに参ったのです」

それを聞いて新納は、落胆のあまり肩を落として俯いた。バレット
は自分の病気を知らずに声を掛けたのだと思つたからだ。

しかし、続いて語られた言葉に、思わず顔を上げてバレットの顔を、

表情を、目を見た。

「もちろん貴方のご病気の事は存じていますが、その病気は治せます。我々ならば、ね」

にこにことした表情に変わりはない。だが、その目は決して嘘を言っている目にも見えなかった。いや、嘘であつて欲しくないと思う気持ちがそう見せているのか。

「しかし、この病気が治ったという話は、今まで一度も聞いたことが無いんだが……」

そう言い募ると、バレットも頷いた。

「そうですね。確かにこちらではまだ治ったという例は無いようです」

「こちらでは？」

その言い方に引つ掛かった。そして、そこで初めて、これまで変わる事のなかったバレットの表情に、なぜか恥ずかし気な、そして困ったような表情が加わったことに気づいた。

「その件については、間もなく担当者が到着する手筈になっていますので、そちらの方から説明させます。」

「担当者？」

「はい。但し、現時点で貴方にお話しできる情報は極限られます。まずは私の方から話せる情報を開示させてもらい、その上で貴方に今回の提案を受けるか判断してもらってから、受けて頂けるならば、細かい残りの情報を担当者が説明するという手順になります。ああ、ちよつと待つて頂けますか？ 確認しますので」

バレットはそう言うと、スーツの内ポケットから携帯端末を取り出して何処かへ掛け始めた。

「ああ、バレットです。そちらの準備はどうですか？」

『(……)』

「そうですね。待つていますのでなるべく早くお願いしますね」

『(……)』

「それは貴女が担当ですから」

『(……)』

「それはあの教授方せんせいに言ってお下さいよ。せつかくお二人がノリノリで準備して下さったみたいですから、使わないと悪いでしょう?」

『(……………!!)』

「それは貴女の上司に言ってもらわないと。今回の件の統括責任者は彼女ですし、私は私の仕事の序に少しお手伝いしてるだけですから、私に言われても困ってしまいますよ」

『(……………!!)』

「はいはい。待っていますのでなるべく早くお願いしますね」

バレットの携帯端末から漏れ聞こえる音声では何を言ってるのか内容までは分からなかったが、相手が恐らく女性であること、そして何やら怒っていることは窺えた。ノリノリという場にそぐわない単語にもちよつと不穏なものを感ずる。

考えすぎかも知れないが、新納としては、まだ会ったことすら無い担当の女性に嫌われているのでなければいいかと祈ることしか出来ない。

今までの人生で、特に女性にモテたことも無い代わりに、理不尽に嫌われたことも無い。と、思う。だいたい『いい人』という評価で括られて終わる事には忸怩たる思いが無きにしても非ずだが、嫌われるよりはマシだ。

それなのに、流石に会う前から嫌われいたとしたら、ちよつとシヨックが大きい。

そんな益体もないことを考えていると、通話を終えたバレットが話の続きを切り出してきたことで、ふと我に返った。

「お待たせしてすみません。取り敢えず、担当者は後20分程で到着しますので、その前に現時点で貴方に開示できる情報を説明させてもらいます。細かい事や質問などは、先程も言ったように貴方がこちらの提案を受けると判断された後に担当者から、と言うことで話を先に進めたいと思うのですが、宜しいですか?」

確かに気にはなるが、いちいち話の腰を折って、いつまで経っても話の全体像が見えてこないというのも困る。ここはバレットの提案に乗って、まずは話を進めることに同意することにした。

「わかった。続きを」

「有難うございます。まず、病気は治せるという前提で話を進めますが、治療には当然、代償が必要になります」

黙って聞くつもりだったが、その代償という言葉に不安を感じて思わず疑問を口にした。現実的に最も考えられるのが、治療を装って大金をせしめる詐欺という線だったからだ。

「代償？ もちろん、治療費が掛かるのは当たり前だし理解できるが……」

その不安を感じ取ったであろうバレットは、スツと掌を新納に向けて言葉を押しとどめる。そして、これまで浮かべていた笑みを消すと、真剣な表情でこう言った。

「不安は分かりますよ。こういった場合に最も警戒すべきは詐欺と考えて当たり前ですからね。我々は別に犯罪組織でも怪しい宗教団体でもありませんが、今はそれを証明する手段がありませんし、そう疑われるであろう事も理解しています。」

但し、誤解を恐れずに言うならば、我々が貴方に求めるのはお金ではありませんが、ある意味、お金よりも大きな代償を払って頂くことになるということも正直に申し上げます」

「お金より大きな代償……」

「はい、貴方には体を治した上で、一定の準備期間を置いた後に、ある所へ行って頂きます。そして現地調査員としてデータの収集に携わって欲しい。それが今回、ニイロさんに接触させて頂いた理由なのです」

益々話が分からなくなる。

代償としてお金より大きなものと言えば命くらいしか思い浮かないが、それにしたって態々、手間暇費用を掛けてまで新納の治療をし、送り出す必要性が理解できない。

単なる調査ならば、それこそその辺の調査会社に依頼すればいい。

仮に非合法的な調査活動であっても、新納の治療に掛かるであろう費用の金額——根拠はないが恐らく莫大な金額——を考えるなら、引き受ける人間は多いのではないだろうか。

後は新納個人の能力が必須な内容であるとも考えられるが、Fランクとは言われなくても、そんなに優秀な大学を出ている訳でなし、就職した会社も所謂中小企業で、営業も事務も両方の仕事をそれなりに求められるが、だからと言って特に何か特殊な技術を求められたことは一度も無い。

自分と同等以上の能力の人間なんて、それこそ星の数ほど存在するだろう。

バレットの正体にしても、話の内容から想像できるのは米軍とかCIAくらいしか思いつかないが、それならば新納以上に適した能力で、尚且つ健康な人材をチョイスすることくらい簡単なように思える。

「現地調査員としてデータの収集、か……俺とそちらのメリット・デメリットを考えるなら、命の危険もあると判断していいんだよね？断ったらどうなる？」

そう尋ねると、バレットはやや大げさな仕草で肩をすくめて答えた。

「別にどうもしません。確かに命の危険について否定はしませんが、それについてはこちら最大限のサポートを約束させてもらいます。

もし断られるのであれば、私はその入り口から出て行き、二度と貴方の前には現れません。ただそれだけの話です」

「一旦受けるふりをして、治療の後で拒否したり逃げたり……」

「我々の規則に則って、必要な、それ相応の対処をします。しかし、我々もそんな事態は望んでませんので、断るのであれば今ここで断って頂きたいものです」

「この話を人に話しても？」

「それは別に構いません。貴方の病気が治せるなんて誰かに言っても信じてもらえないでしょうし、願望を夢に見るのはよくあることですから」

「と言うことは、ロバート・バレットは偽名と？」

そう突っ込むと、意外にも嬉しそうにバレットは答えた。

「ははは、いえいえ、私は真正正銘ロバート・バレットです。ロバート

は親に貰った名前だし、両親の姓もバレットです。嘘はありません。残念ながらここで証明できる手段はありませんが、今回私が貴方に話したことに一切の嘘はありませんよ」

「つまり、言っていないことはある、と」

「現時点で言える事は言いました。これ以上は貴方の決断が先です」

「無茶だ！ たったこれだけの情報で決断しろと？」

「確かに少なすぎる情報量であることは理解していますが、こちらもリスクを負っていますので、現時点でこれ以上の事は話せません。」

逆に言えば、ここまでの話が、私が黙って立ち去るだけで今以上のリスクを貴方に負わせることなく断つてもらえるボーダーラインなんですよ」

バレットは、話は終わりとばかりに言い切ると、またあのにこにことした笑顔を顔に張り付かせて黙ってしまった。

確かに、新納の命は終了へのカウントダウンが始まっている。提案を受ければ、そのタイムリミットを伸ばせる可能性が残るが、断ればそれまでだ。どう考えても断る理由は少ないように思える。

しかし、命をベットする賭けに、たったこれだけの情報でベットしろと言われても、漠然とした不安がそれを躊躇わせる。

これまで「次の人生」などといった絵空事で誤魔化してきた死への恐怖が、どうしても決断を躊躇わせる。

そう、ここに来て、腹を括ったと思っていた気持ち単なる現実逃避に過ぎなかった、その事実を突き付けられたのだ。

二人が黙った静かな病室内にカチコチと、壁に掛けられた時計の秒針が刻む音だけが響く。

バレットは新納を見ている。あの笑顔のまま。

新納もバレットを見ている。その表情は硬い。

ふと、緊張に身を硬くしていた新納の肩が、微かに降りるのをバレットは見逃さなかった。

そして、バレットが、顔にあの笑顔を張り付かせたまま、呟くように口を開く。いや、明らかにあの仮面の笑顔ではない。人懐っこい、本当の意味での笑顔だった。

「……決まりましたね」

それは確認ではない。確信だ。

新納がそれ以外の選択をするとは露程も思っていない。

「ああ、決めたよ。腹あ括った。って言うか、最初から選択肢なんか無いじゃないか」

新納は頷くと、吹っ切れたような口調でバレットに細やかな抗議をする。表情は笑っているので本気で無いことは明らかだ。

「まあ、このこのクソツツタレな状況で、ゼロだった残機を増やしてくれるって言うんだから、受けなきや馬鹿だろ」

「ははは、シューティングゲームですか。私もこちらに来た後で一期やりました。大丈夫、簡単にゲームオーバーになんかささせません。最大限のサポートと言った言葉に嘘はありませんよ」

言いながら差し出すバレットの右手に、新納は同じく右手を出して握手を交わしながら、これからの事を質問する。

「で、これからどうなる？」

「では、これから話すことは、ニイロさんに合意してもらったという前提でお話します。聞いてしまえばもう、絶対に後戻りは出来ませんし、私も不幸な事故は望みません。いいですね？」

バレットがこれまでに無い真剣な表情で再度の確認を促してくるが、不幸な事故という単語には不安を感じるものの、新納としてはもう覚悟を決めている。

「分かってるさ。ファイナルアンサーってやつだ」

その答えに満足げな笑みを浮かべてバレットは話始める。

「結構。では、改めてちゃんと自己紹介しておきましょうか。」

私はロバート・バレット。元国際安全保障条約機構軍予備役少佐で、今は国際科学技術管理局に出向中です」

「国際……なんだって？」

「言ったでしょう？ 我々は犯罪組織でも宗教団体でもないって。」

れつきとした国際団体である国際安全保障条約機構、International Security Treaty Organization が運営組織する軍の元少佐で、今はその下部組織であ

る国際科学技術管理局、International Science and Technology Administration に出向しています。ISTAでは、セキュリティ部門の担当チーフマネージャーを仰せつかっています」

一度も聞いたことのない組織名に新納は戸惑う。しかし、国際団体の名前を全部そらんじている訳でもないし、現状での判断も下しかねる。

「それは……全然聞いたことが無いけど国連関係とかか？」

「そうですね、似て非なるもの、とでも言いましょうか…… でも世界中の国々からちゃんと合法的に認知された国際機関という認識で間違っていないません。

ああ、よくある『国連の方から来ました』的な団体とも違いますので、そのの所は理解して欲しいですね」

そう言ったバレットの顔には、またあの仮面が笑顔が張り付いていた。

新納は何となく理解する。

「嘘は言ってなくても、何か言っていないことはあるよな？」

そう突っ込まれたバレットは、嬉しそうにウインクして見せた。

「それについては担当者が説明しますよ。納得は出来なくても理解はして貰えると思います。

それで、取り敢えず簡単な段取りですが、貴方にはこの後、我々の保有する施設に移動してもらい、そこで治療を開始します。予定では完治と予後のリハビリで1ヶ月。

それから任務に必要なと思われる技術の習得に1年前後といったところでしょうか。

そして準備が整ったら任務地へと出発してもらい、実際に調査活動に従事してもらいます。」

「たった1ヶ月で治るのか……」

新納の認識では、この病気は不治の病だった。それがたったの1ヶ月で治ると断言され、しばし茫然となる。

「ええ、言ったでしょう？ 治るって。あの言葉に嘘はありません。

何事にも100パーセントは有り得ませんが、我々の常識では治せる病気です」

やや得意気にバレットが胸を張るが、具体的な期間を聞いたことで治るといふ事実が実感された新納の頭には、治るといふ単語がリフレインされ、今更ながら少し目頭が熱くなってくる。

「そうか……治るか……」

そんな新納の様子を優し気に見守りながらも、伝える事は伝えるべきとしてバレットは言葉が続ける。

「はい、そして具体的な調査活動の内容ですが、実は、これについてはこちらはまだ検討中で具体的な計画が完全には纏まっていません。まあ、出発までには時間もありますから、それまでには決まるでしょう。」

今のところ現地の文化や風俗、動植物のサンプル採取や分析など、当面は主に学術分野の調査になるでしょうが、担当のオペレーターと連絡を取り合いながら、指示を受けて活動してもらうことになると思います」

そう言つて申し訳なさそうに話すバレットだが、その曖昧さと予想していた内容との違いに戸惑いながら新納は確認する。

「何で俺なんだ？ 学術調査なら、他にいくらでも請け負ってくれそうな学生とか、専門の学者先生とかいるだろう。それこそバレットさんが行つてもいいじゃないか。」

聞いた感じじゃあ、態々俺みたいな死にかけを大金掛けて治してまで送り込むような仕事とは、どうしても思えない。

それに実際にどこに行かせられるのか、いつまで続く仕事なのかつても、そろそろ教えてもらつていいと思うんだがな」

「何故貴方なのか、という質問なら、直ぐに答えられます。それは、その任務地に行ける人材が、今のところ貴方しかいないからです。」

私や他の人間には行きたくても行くことができないという制限があるのですよ。

そして……何故貴方なら行けると判断したのか、何故他の人間には行けないのか、任務地は何処で期間はいつまでか、という質問には

……」

そう言つてバレットは言葉を途切れさせ、続いて病室の入り口にチラリと目をやると、スツと右手の掌を上にして入り口を指し示した。

「彼女が答えてくれます」

その言葉に釣られて病室の入り口を見ると、開け放された扉から勢いよく入ってきた若い女性が、いきなり横断幕のようなものを両手で頭上に掲げて言い放った。

「ニイロカオルさん！ 異世界の旅へようこそー!!!」

色々と台無しである。

第2話 それぞれの事情

「ニイロカオルさん！ 異世界の旅へようこそー!!!」

そう言つて彼女が両手で掲げて広げた横断幕には、『歓迎！ ニイロカオル様』と横書きで白地に赤で染め抜いてあり、赤文字の下には小さく黒い文字で『国際科学技術管理局βE支部職員一同』という文字が記されている。

横断幕の余白には、ティッシュで作つたらしいフラワーポンポンや千切つた色紙による装飾が散りばめられ、『う』『え』『る』『か』『む』『ー』のポップな手書き文字は電飾が仕込まれているらしくチカチカと煌めくなど、無駄にチープでゴージャスな意味不明の手作り感が満載だ。

横断幕を勢いよく広げることで出る仕掛けになつていたらしい、色とりどりの紙吹雪が、はらはらと虚しく彼女の足元に降り積もつている。

（あ、あれ？ もしかして思つてたより愉快的組織だったり？）

突然のことに固まつてしまった新納はともかく、いきなり入つてきて意味不明の台詞を叫んだつきり何も言わなくなった彼女は、横断幕を両手で広げて掲げたまま、顔を真っ赤に染め、泣き笑いの表情で目に涙を浮かべ、わなわなと肩を震わせてやはり固まつている。

上下ベージュのレディーススーツに白のリボンシャツ、後頭部でアップに纏めた栗色の髪、年齢は二十歳くらいだろうか。

身長は160センチを少し超えるくらいで、体型は可もなく不可もなく。バレットと同じで日本語は流暢のようだが、欧米系白人の、綺麗というよりは愛嬌のある、可愛い系の顔立ちだ。

そんなに恥ずかしいんじゃないのと思いつつ、それを口にしない程度の分別は新納にもある。

打開策を求めてバレットをチラ見すると、彼も俯いて肩を震わせてはいるが、あれは笑いを堪えてるんだと言うことくらい簡単に察しはついていた。真面目そうでいて意外と黒い。

はてさてどうしたものかと思ひながら、名案も浮かばないので意を

決して声を掛けてみることにした。

「えーつと……君が俺の担当者さん……で、いいのかな？」

恐る恐る聞いてみたものの、彼女はまだ動かない……と思ったら動いた！ バレットに向かつて。

「ほらー！ やっぱり可笑しいじゃないですか怪しいと思っただんですよおー！ こっちじゃこれが普通だって！ こうしたら絶対喜んでもらえるって皆が言うから我慢したのに、やっぱり嘘だったじゃないですかー!!」

再起動したらしい彼女は、いきなり手に持った横断幕をくしゃくしゃに丸めてバレットに投げつけると、猛然と抗議し始めた。

その抗議を胸の前に出した両手で抑えつつ、笑いながらバレットが彼女を押しとどめる。

「いやあ、ごめんごめん。一応これは通過儀礼みたいなものだから。私だってこっちに来たばかりの時は担当されたんだ。まあ、歓迎の意味もあるんだし、そう怒らずに……（私なんて女装して化粧してダンスまで）……ほら、ニイロさんが驚いているでしょう？ 後は君の仕事だよ」

（何があつたバレット!?!）

一瞬だけ遠い目をして小さく悲し気に呟いた言葉を新納は聞き逃さなかったが、触つちやいけないという警告が頭を過つたので声に出して聞くことは控えた。日本人は空気が読めるのだ。

憤慨していた彼女の方は、バレットに話の続きを促されて落ち着きを取り戻したのか、一連の流れに真面目な顔をすればいいのか笑えばいいのか、判断に困った拳句の引き攣った半笑いを顔に浮かべた新納を見ると、仕切りなおすようにコホンとわざとらしい咳払いを一つしてから新原に向かつて切り出した

「あー、えつと……驚かせてすみません。初めましてニイロさん、私がニイロさんの担当になる国際科学技術管理局オペレーターのシンシア・マツキントツシユです。ニイロさんのお仕事が円滑に進むよう、様々なサポートの窓口をさせて頂きます。精一杯頑張りますので宜しく願います」

そう言ってシンシアは新納に向かってお辞儀をした。

「マツキントツシユさん？」

「はい、私のことはシンシアって呼んで下さい」

そう言ってシンシアはニッコリ笑う。

「そうか、じゃあ、こちらこそこれから宜しく頼むよシンシアさん」

「シンシアって呼び捨てでいいですよ、カオルさんとお呼びしても？」

そう聞かれて、少しだけ困ったような表情を浮かべると新納は言った。

「あー、出来たらニイロでお願いできるかな？ 別に仲良くしたくないとかって訳じゃなくて、人にもよるけど日本人は、肉親か、よつぽど小さい頃からの幼馴染同士とかの例外はあるけど、一般的にはあんまり名前の方で呼び合うのに慣れてないんだよ。なんとなく照れくさいって言うかね。」

それに、薫って名前は男でも俺みたいに無くはないけど、女性に多い名前なんで小さい頃に揶揄われたりしたもんだから、余計に名前の方で呼ばれるのが好きじゃないんだ。悪いけど」

「そうですね、そういう事ならしょうがないですよ。じゃあ、ニイロさん、で」

少し肩を落として残念そうに言うシンシアには申し訳なく思うが、誰にだって譲れない線というものはあるのだから仕方が無い。

「うん、ごめんな」

「いえ、いいんですよ。兎に角、今は私の方から残りの説明を終わらせてしましましょう」

気持ちを切り替えたらしいシンシアが話を続けようとするが、それを新納は掌を向けることで抑えると、さつきから黙っているバレットに向かって言った。

「その前に、さつきからどうしても気になっている事を1つだけいいかな？ 話始めて結構な時間が経つけど、看護師の巡回が1度も無いのは、やっぱり何か手を打ってるのか？ それに他の病室の患者にしたらって妙に大人しい。普通は誰かしらナーズコールしたり動きがあるはずなんだが」

「ええ、それについては当然、私のスタッフ達がちゃんとケアしていますよ。決して誰にも迷惑は掛けませんので安心して下さい。病院の関係者にも患者さんにも、ね」

「そうか、分かった。じゃあ、続きを頼むよシンシア」

バレットの答えに一応納得して、シンシアに続きを促す。

「はい、じゃあ……これから話すことは、ニイロさんの常識では絶対に信じられない事だと思います。でも、全て本当の事ですし、私達にニイロさんを騙したり揶揄ったりするメリットは何も無い、と言う事を踏まえた上で聞いて下さい」

これまで、ただ元気な女の子といった雰囲気だったシンシアの表情が、真剣なものに変わったことを目にし、新納も黙って頷いた。

それを確認してシンシアも話を続ける。

「ニイロさんは、パラレルワールド並行世界という言葉、概念をご存知でしょうか。」

「ああ、SFなんかに出てくるやつだろ？」

「はい、多分、それで合ってると思います。歴史の、ある時点で分岐して並行して存在する世界。パラレルワールド私やバレットさん達、私達はその並行世界からこの世界にやって来ました」

「……」

荒唐無稽な話だ。しかし、本当の話だと何度も念を押されているので、黙ったまま話の推移を見守ることにした。

「私達のいた世界と、この世界、便宜上、私達のいた世界をアルファ・アース、この世界をベータ・アースと呼びますが、アルファとベータが分岐したのは、今の学説だと1700年代半ばごろ、歴史的出来事ですと産業革命が始まった辺りと推測されているそうです。」

但し、分岐したと思われた後も二つの世界で同じ歴史上の出来事が観測されていることから、分岐は歴史のとある一点で別れるのではなく、長い期間、曖昧な時期を経た上で、何れ完全に分岐すると考えられています。

例えば、ニイロさんに分かりやすく日本の例で言いますと、江戸幕府はアルファの方が早く終焉を迎えています。しかし、その後の混乱期を経て、正確な日時は違いますが、明治政府が打ち立てられる所は

一緒です。

また、地質学的な観測データからは、二つの世界が分岐したと思われる時期以降のデータに差異が認められているものの、天文学の観測データでは完全に同一の星座が観測されていることから、二つの世界の時間経過による差異は今のところ認められていません。

この事から、時間の流れ自体は並行世界全てに共通していて、少なくとも並行世界を移動することによるタイムトラベルは不可能らしいです。

私自身は学者じゃないから詳しい学説までは分かりませんが、学生の時に習った先生は、『人間を含む生命体の営みによって作り出される歴史の流れは、世界を分岐させる力エネルギーを持ち、その影響は地球全体の物理現象にまで影響する力エネルギーがあるが、他の天体にまでは及んでいないことから、時間にまで影響を及ぼす程の力エネルギーは無いようだ』って言ってましたよ」

シンシアは何故か両手を腰に当てて得意気だが、新納にはサツパリ理解できない。

「それで、私達のアルファは、ベータと比べると科学技術や先端医学なんかの一部特定の分野だと結構先行しているようでして、60年ほど前に並行世界が初めて観測されました。

それがこのベータなんですけど、40年ほど前には転送機を実用化して、実際に探査機プローブを送り出すことに成功しました。

そしてデータ収集を重ねて、生命体、つまり人間を転送できるようになったのは30年ほど前からで、現時点で総勢80名ほどが、こちらの世界で活動しています。

ただ、ニイロさんに絶対勘違いして欲しくないのは、私達は別にベータを侵略しようとか、利己的な目的で利用してやろうとか、そういった目的でやって来た訳じゃありません。

並行世界を転移する転送機は、軍事目的だとしてもない兵器に転用できますから、アルファでは国際安全保障条約機構、こっちで言うと国連ですね。その国際安全保障条約機構の管理下の元で、下部組織の国際科学技術管理局が一元管理しています。その使用は『世界共通

の利益に寄与する科学技術発展の為の『学術調査』に限定されています。

実際にベータに來ている人間の内、半分以上は次元物理学や文化人類学とか自然科学とか、兎に角色々な分野の研究者の方々で、残りは組織の運営なんかの裏方……私もですけど……とか、後はバレットさんみたいなセキュリティの人達がいるだけです。

予算の都合もありますし、過去にも総勢で1000人を超えたことは一度もありません。

私達のベータに対する基本方針は、極力、ベータ世界の公的権力機構とは距離を置き、飽くまでも学究機関として、第三者の視点から観測と調査を続けることにあります。」

そう言つてシンシアは新納の様子を窺う。

「なるほど、少なくとも悪の秘密結社じゃないってのは理解したよ」

新納がそう言つと、安心したようにシンシアは微笑んだ。

「はい、私達はちゃんとした真面目な団体なんですよ！」

そう言つて、フンスつと鼻を膨らませ、胸を張るシンシアの言葉に、静かだったバレットが小声で呟いた。

「ちゃんと……真面目……あの変人奇人の教授連中が……」

「そつ、それは……確かに一部はつちやけた先生もいますけど優秀な先生達ばかりだし、大部分は普通……あれ？ ……普通つてどんな意味だつて？ ……うん、普通の先生ですよ？ 多分」

思わぬフレンドリーファイアに狼狽するシンシアが気の毒で、何で俺がと思いつつも、新納も思わずフォロー(?)に走る。

「まあ、色々な人がいるのは分かったよ。会える日が楽しみだね」

「えつ？ ……(ああ、やっぱりニイロさんいい人だあ) あっ……

ええつと、話が逸れちゃいましたんで元に戻しますけど、実は最近、と言つても3年ほど前なんですけど、我々にとつて2つ目の並行世界が観測されたんです。これをガンマ・アースと呼称しています。

そしてこのガンマに対して探査機や人員の派遣が計画されたんですけど、その後の調査研究で、生命体以外の物質の場合、何故かアルファからガンマへの転送は不可能でしたが、ここベータからならガン

マへの転送が可能ということが判明して、これで探査機プロローブを送り込むことは成功しました。

ただ、生命体についてはアルファ、ベータ双方からもガンマへの転送が失敗に終わりました……あ、失敗って言っても事故で怪我人や死人が出たとかは無いですよ？ 小動物を使った事前の動物実験では、何の反応も起きなかったということです。

それに、いくらなんでも初回からいきなり人を送るなんて乱暴なこととはしませんし」

それはそうだ。最初のクローンは植物、そして哺乳類は羊のドリーだったし、最初に宇宙へ行ったのは犬、初めて月軌道を周回したのは確か亀だったはずだ。最終目標を人間に置いた計画は、その前段階で必ず動物実験から始まっている。

「それで、色々な検討や実験の結果、つい最近になって、どうやらアルファに由来を持つ人間を含んだ生命体はベータ経由でもガンマには行けないけれど、元々ベータに属する生命体なら転送可能なことが判明したんです。これは各種の動物実験からも裏付けられました。なぜそうなのか、は依然不明ですけど」

「成程。それでこのままなら死が確定してる俺に、白羽の矢が立つたってことか」

「はい、申し訳ないですが、転送機による転送には様々な条件があります。アルファからベータへの転送にしても、誰でも来れるというわけではありませんし、バレットさんも私も、条件を全てクリアしてるからこそ、今、ここにいます。」

そして、現在のところ、ガンマに行ける条件をクリアしていることが確認されたのはニイロさんだけなんです。でも、もちろん、これから条件をクリアした人材が見つかって、本人の了承を得られれば追加の人員を送ることも出来るかも知れません。保証は無いですが……」

そう言うと、シンシアは本当に申し訳無さそうに目を伏せる。

「それはいいさ、俺としても他に選択肢は無いんだし、納得もしてるよ。シンシアが最悪感を感じるような事じゃないんだから気にしないでいい。」

ともかく、それはそれとして、俺が行くガンマってのはどんな世界なんだ？

異世界がどうのって言ってたが、どこかで歴史が分岐した世界なら、まさか剣と魔法の世界ってわけじゃあるまいが……もしかして第二次大戦で枢軸国側が勝った世界だったりとかか？　だとすると色々と窮屈そうだよな。

あと、せつかく病気を治してもらっても、世紀末無法地帯みたいな世界だと長く生き残れる自信なんて無いぞ？　普通のサラリーマンだしな。

そうそう、それとあと、言葉は通じるのか？　簡単な英単語が分かるくらいで、自慢じゃないが日本語以外は話せないし読み書きも出来ないぞ、俺。

それに、5年や10年は覚悟してるが、いつまでそっちに居ればいい？」

そう聞いた途端、シンシアの様子が明らかに変わった。

「聞きましたね？　ついに聞いちやいましたね？　私の口からそれを言わせるんですね？　聞かれたからには答えますけど、私だって信じられないんですから、『こいつ頭おかしい』とか絶対思わないで下さいね？　絶対ですよ？　絶対ですからね？」

なんだか涙目になって勢いよく迫って来るシンシアに気圧されるが、突然のことに状況が理解できず、助け船を探して横目でバレットを見ると、彼は顔に仏像のようなアルカイックスマイルを浮かべて目を合わせることすら無く、我関せずを貫き通す気のようなのだ。やっぱこいつ黒い。

バレットが役立たずとなると、新納が自分で何とかするしかない。「わかったからシンシア落ち着け。全部本当の事なんだろう？　大丈夫、信じるから。例え剣と魔法の異世界ですなんて馬鹿みたいな話だったとしても頭おかしいとか思わないって約束するから」

そう言って新納がシンシアを宥めようとした途端、彼女の表情から感情が抜け落ち、能面のような顔でポツリと呟いた。

「その馬鹿みたいな世界なんですガンマって……」

「はっ？」

「だから、その……どうも魔法が実在する世界みたいなんです!!」

「そ、そうか……約束したもんな、あるって言うんなら在るんだらう、うん。あるんなら仕方ないよな、うん」

松橋は努めて冷静に、(恐らく)事実を(多分)事実として無理矢理納得することにした。

シンシアのジト目が本気で痛い。

「と！ に！ か！ く！ ガンマには魔法が実在するみたいなんです！ これは探査機^{プローブ}から送られてくる映像や音声なんかの観測データからしても、どうやら本当に実在しているらしいと結論が出てるんです。

魔法の仕組みや何故使えるのかなど、その本質については、まだデータが少なすぎてサツパリ不明ですが…… ただ、相当数の人が使えるようで、今のところの観測だと、極小さな火を出したりとかなら、ほぼ全ての人間が使える可能性があるって先生達は言っていました。

ただ、その為なのか物質文明としては近代以前のレベルらしくて、だから正に剣と魔法の世界って表現がピッタリなんです。世紀末どころか、そこまで届いてすらいなくて言うか……」

その情報に、突然、この歳になって忘れかけていた厨二病の熾火が疼き出す。転生した異世界で現代人が魔法無双。よくある話ではないか。

「えっ？ てことは俺も魔法が使えたりするのかわ？」

「えっ？ ニイロさん、魔法使えるんですか!？」

「えっ?」

「……」

一瞬見つめあう二人。しかし、察した瞬間に、どちらからともなく、スツと目を逸らす。

病室内を静寂が包んだ。

「すまん……」

「いえ、その、こちらこそ御免なさい……」

二人して真つ赤な顔で何故か互いに謝るが、この空気は耐え難いも

のがある。

打開策を探してバレットを見ても、この役立たずは相変わらずアルカイツクスマイルのまま微動だにしていけない。

(お前もう涅槃から帰ってくんや)

思わず心の内で毒づくが何の救いにもならないし、このまま二人してモジモジしても仕方が無いと、新納としても何とか再起動を試みるが、同じ事を思ったであろうシンシアの方が一瞬早く口を開いた。

どうやら精神的な立ち直りは男性より女性の方が早いという噂は本当らしい。

「それで…… 任務地に関する、判明している詳しいデータについては、ニイロさんの治療が終わって準備が出来次第、専門の先生方の方からブリーフィングを受けてもらうことになると思います。」

後、危機管理や現地の言語に関するレクチャーも同様です。これについては、アルファで確立されて実証済みの技術による学習・体得サポートも受けられますから心配しなくて大丈夫です。現地の言語については解析が進んでますし、大きく2つの言語系に分かれるみたいですが、難しくはないと思います。

私が日本語ペラペラなのも、その技術による学習効果ですし」

「私の日本語もね」

いつの間にか俗世に帰ってきたバレットが重ねる。

そんなバレット役立たずをシンシアもジト目で睨んでいるが、それを見て、新納は安心めいたものを感じた。なんとなく彼女となら上手くやっていけそうだと。

するとシンシアは、言いたい事だけ言ったら、また何処かの涅槃像に戻ってしまったバレットを無視して先を続けた。

「後は……、これも言い難いんですが、任務期間についての予定は未定です。場合によっては一生ということになります。」

実は、現時点ですと送り出す技術は開発されていますが、戻る技術についてはまだ確立されていないんです」

とんでもない事を言い出した。要するに片道切符ということだ。

「しかし……向こうに転送機を設置して送り返すとか……って簡単な

話じゃないんだろうな……」と、新納は一応確認をする。

「はい、今のところ確立されている生命体の転送技術は、アルファからベータへとベータからガンマへ。この二つだけで、それもそれぞれの始点となる世界の住人に限られています」

「えっ？ てことはシンシア達はアルファへ」はい、帰れません」

シンシアは被せるように断言した。

「それは……すまん」

「いえ、いいんです。私は……私達は皆、誰にも強制されることなく、ちゃんと自分達の意志でベータにやって来たんです。これはベータ・アース支部の全員が同じですから。

それに、今は帰れませんけど、これから先も絶対って訳じゃないですよですし。

ヒラヤマ先生が言っていました。まだ断言は出来ないけど、ブレイクスルーが起こせるかも知れないヒントは見つけたって。

ヒラヤマ先生って、アルファじゃ知らない人はいないくらい有名な物理学者なんですよ？ こっちに来て実際に本人に会ってみたら、ただの悪戯好きな愉快犯の変人ジジイでしたけどね！」

それを聞いたバレットが、珍しく少し慌た様子でシンシアに質問する。

「ちよつ、ちよつと待って下さいシンシア。それ、私は初耳なんですけど、ヒラヤマ教授がそう言ったのですか？」

「はい、昨日でしたけど、世界を隔てる壁は一つとは限らないとか何とか。

今、ハイマン先生と共同で開発してる異空間利用の研究で気づいたって。でも沢山あったら、そっちの方が大変だと思っんですけどねえ」

「ふむ…… しかし、あの先生が口に出して言うんなら希望が持てるかも知れませんね。あの人、普段はふざけてますが本物ですし」

「そうは見えませんか」

「まあ、いずれにしても、まだ年単位の時間は必要でしょうが、希望もある、ということ。如何です？ ニイロさん」

突然話を振られた新納は言った。

「まあ、今はそれで納得するしか無いんだろ？ 嫌だと言っても無駄だろうし、だったら納得しとくさ。」

しかしまあ、よくもこう荒唐無稽な話ばかりだよなあ。

ああ、信じてないって話じゃなくてな、要するに、別の世界から来た人間に、不治の病を治してやるから、代わりにこれまた別の世界へ行ってくれて言われた訳だ。それも剣と魔法の世界に。

普通は信じる方が阿呆だぞ？ でも、信じて受けようって俺も、やっぱり阿呆なんだろうなあ……。

そうだ、剣と魔法の世界ってことは、やっぱりエルフみたいな巫人や、ゴブリンとかオークとか、ドラゴンなんかもいたりするのかねえ……」

最後の方は愚痴に近い。色々と衝撃的な事がありすぎて、新納としても半ば頭がオーバーフロー気味なのだ。

「いますよドラゴン。あと、ゴブリンも」

シンシアからの追撃だった。

「はっ」

「エルフとオークは確認されていません」

「いや、そこじゃなくて…… いるの？ ドラゴン」

「はい。これは実はガンマが観測される切っ掛けになった出来事なんですけど、三年ほど前、私達のアルファに突然、ドラゴンが現れたんです。」

ニイロさんに分かりやすく言うと…… 私もベータに来て初めて見ましたけど、こっちで有名な、あの怪獣映画みたいな事が、アルファで現実起こったんです。

最初に被害に会ったのは東京じゃなくて欧州の某都市でしたけど、地方の中規模都市上空に突然現れたそれは、いくつかの都市や町を散々に蹂躪した後に、軍によって駆除されました。

ドラゴンに襲われるなんて事態の対応は国としても軍としても想定してませんし、国外からの敵国の侵攻ならともかく、国内に突然現れたんです。対応が遅れたせいで、死傷者数は十万人を超えています。

す。

現実にドラゴンがいるなんて、誰も本気で思っていないですもん。中には態々他所から見物に行つて被害に会つたなんて、笑えない人達が数万人規模でいるって言われています」

それまで淡々と語っていたシンシアの表情が、突然苦痛に耐えるかのようにくしやりと歪む。

「私もこの目でドラゴンを見ましたし、両親と兄夫婦も被害に……被害に会いました……。セドは……。甥っ子はまだ二歳だったんですよ？」

「それは……」新納は絞り出すように言ったが、それ以上の言葉が続かない。

「いいんです。でも、知りたいんです。何故あんな事が起こつたのか。

あのドラゴンがガンマから来たのは分かつてます。

だとしても何故来ることが出来たのか、自然現象だったのか、人為的なものだったのか、もう二度と起こらないのか、それともまた起こるのか。

だから私はここにいます。

実際に私がガンマに行くことは出来ないけど、ニイロさんを精一杯サポートして、もう二度とあんなことが無いように……」

最後の方の言葉は震え、小さく、囁くように消えていった。

俯いたシンシアは、涙を耐えて肩を震わせ、何も言えなくなつてしまつたようだ。

(こりゃあ、積極的に行く理由が出来ちまつたなあ)

男は女の涙に弱い。それが打算から来るものでなければ尚更だ。

これまで新納の中で、病気を治してもらう代わりに異世界へ行く、だったものが、異世界へ行く為に病気を治療してもらう、に、大きく変化したのは間違いなくこの時だった。

「俺はただのサラリーマンだからな。ドラゴン退治なんて無理だけど、それでもシンシアの協力があれば色々調べることにくらいは俺にだって出来るさ。」

何とか期待に沿えるよう、俺なりに出来る範囲で頑張るよ。それく

らいなら今の俺にも約束できる。だから、今はそれで我慢してくれ」それを聞いて顔を上げたシンシアの目は赤く、頬には涙の跡が見える。

それでも健気に笑顔を見せて感謝の言葉を口にした。

「有難うございます！ 私も頑張りますっ！」両の拳を握りしめて誓う。強い娘だ。

そんなシンシアの様子を優し気に見ていたバレットが、ここで口を挟んだ。

「でしたら私もシンシアに負けないように頑張らないといけませんね。

ドラゴンはともかく、ゴブリンについては私の知人の関係者が実際に被害に会ってますから。

と言うのも、アルファに於いてドラゴンの被害があった後、他にも転移してきた存在がいるんじゃないかと各国で調査が行われたんです。すると、東南アジアの某国で、ドラゴンが出現したのよりも以前に、どうやらゴブリンらしき群れによる被害が確認されていた、と言う事が判明しまして……。

どうもあの国は秘密主義と言うか、情報の流出に神経質で、ゴブリン個人の戦闘力が低いことも相まって、国内の反乱分子によるテロ活動なんかと情報が混同されてしまったようなんですね。それで長らく放置というか、重要視されていなかったみたいなんですよ。

それでもあの繁殖力は馬鹿にできなくて、奴らに国境なんて意味無いですから、次第に増えたゴブリン共が国境を越えて他国にまで被害を出すようになって、初めてゴブリンという存在が認識されたんです。

まあ、そんな中で私の知人の関係者も、周辺国での人道支援活動の最中に被害に会ったらしくて……幸いにも命に別状は無かったようですが、精神的にちよつと……」

新納は、バレットの苦し気な表情というのを初めて見た。

何があったのかは想像に難くないが、だからこそ詳しく聞く訳にもいかない。

「アルファも結構大変なんだな……」

「ええまあ……そんな訳でニイロさんの仕事はかなり期待されていますし、その支援については我々ベータアース支部が主体になって結構大きな自由裁量権を与えられています。」

何せアルファでは極々一部ながら、ガンマからの危険に対して軍事力を使って全ての生物を殲滅してしまえなんて過激な意見もあるんですよ。

いくらなんでも、そんな乱暴な意見が通る可能性は限りなくゼロですけれど、万が一にもそんな事態に陥ることを我々は望みません。

ですから、私の方からも、古巣の協力を得てニイロさんの護衛に元部下を付ける手筈を進めさせてもらっています」

「部下？　確か俺以外の人間は、まだ送れないんじゃないのか？

……あ、軍用犬みたいな動物とか？」

「いえ、^{ベータ}こちらで言うロボット兵器というヤツですよ。我々は単純に^{オートマン}自動機械とか^{オートマスマシン}自律機械を略して、^{エイエム}AM、又はアムと呼んでいますけど。」

アルファでは軍隊の自動化・無人化がベータより進んでいますね。人間ではありませんが、意思の疎通もそれなりに出来ますので、長く付き合っていると「装備」というより「部下」と。

残念な……　本当に残念ながら、^{ベータ}こちらのフィクションに出てくるような巨大二足歩行ロボットは、流星に存在しませんかね」
そう言うとニヤツと笑った。

それは、何故か邪気を感じない良い笑みに新納には思えた。

新納も釣られて思わずニヤリと笑ってしまう。

またも新納の厨二病の熾火に燃料が投下されたのだ。ロボットという^{単語}燃料が。

新納も現代日本人男性の例にもれず、数多の人型兵器を主人公とした物語に夢中になった時期経験がある。

ロボット兵器という単語に反応するのを誰が責められようか。

「ほー、ロボット兵器か。まあ、巨大つてのはロマンだが、兵器としては論外だよな。小型でも二足歩行つてのは兵器としての効率的に厳

しそうだ」

「そうですね。その認識でいいと思います。もつとも、介護や看護なんかの癒しを求められる現場では、セラピーという観点から二足歩行というか、ほぼ人間そっくりなAMも既に活躍してますよ」

「へえ、アルファ凄いな。いずれにしても、それは楽しみな情報だ。まあ、自分の命が掛かってるんだし、楽しんでばかりは居られないけど」
「恐らくハイマン教授辺りが、腕によりをかけてニイロさんの任務に合わせたカスタマイズを引き受けてくれるでしょう。あの人も変わり者ですけどイケル口ですから、楽しみになさって頂いていいと思いますよ」

バレットは笑顔で言う。本当に良い笑みだ。

この会話を意識するならば、『越後屋、お主も悪よのう』『いえいえお代官様ほどでは……』という会話に近いのだろうか。本心は決して表に出さずに、互いの心の中で何かを確認しあつた同志の。

「くつくつくつく……」

いい歳こいたおっさん二人の黒い含み笑いだけが病室内に響く。

「なにこれ気持ち悪い……」

シンシアだけがドン引きであった。

第3話 未知への準備

あの日から既に1年近いが過ぎた。

あの日、病院で、ロバート・バレットとシンシア・マッキントッシュという、二人のアルファ・アースの使者との邂逅を終えた後、「後の始末はちゃんとやっておきますから安心して下さい」と笑顔で言う二人に見送られ、新納の身柄は看護師姿のアキヤマとノザワと名乗る別の二人の三十代くらいに見える男性職員に委ねられた。

運んできたストレッチャーに移されると、移送と治療の前段階として必要だと言う説明を受けた上で、直ぐに睡眠薬を投与されて意識を失った。

次に目を覚ました時は三日が経過しており、いつの間にかあまり治安が良いとは言えないアフリカ某国にある国際科学技術管理局の秘密施設に運び込まれていて、心底驚ろかされた。

何せ、これまで海外旅行の経験は無く、当然、パスポートも持っていないのだから。

新納が後で聞いた説明によると、アルファ・アースに本拠を持つ国際科学技術管理局は、公式にも非公式にも、ベータ・アースのあらゆる権力機構からは距離を置いているが、学術調査のフィールドワークを円滑に進める為、長い時間を掛けて世界の数か所に活動拠点を構築しているそうだ。

各国間の移動については、普通に（多分偽造）パスポートで公共交通機関を使うこともあれば、独自のルートを使うこともあつて、今回は後者だと教えてくれた。

そんな数ある施設の中の、新納が最初に運び込まれたこの施設は、表向きとある新興宗教団体の、教会なんだか寺院なんだか、はたまた神殿なんだか、判断に困る外見の施設になっており、ここでまず病気の治療が徹底的に行われた。

（色んな神様に喧嘩売ってるっぽいけど、大丈夫かよこれ……）

サイケデリックに彩られたドリア式っぽい円柱の柱が立ち並び、紫玉葱みたいな伽藍の屋根の上には巨大な黄金に輝く十字架と、これ

がアルファ風の建築なのか、少し心配になって詰めている国際科学技術管理局のスタッフに尋ねてみたが、曰く、「この建物のデザインですか？ 多分、気にしたら負けです」と、遠い目で語っていたので、アルファ・アース人からしても異質らしかったのは少し安心させられた。

「お陰でマトモな人は絶対近づきませんから、警備が楽でいいですよ、ははは」なんて乾いた笑いで言われた日には、慰めていいのか一緒に笑えばいいのか、新納にもわからなかったが。

この設備が選ばれたのは、単に新納の病気の治療に実績を持つ医師が、現在偶々この地で調査研究活動を行っていたという理由に過ぎない。

ここでの投薬による治療と、病気の進行によつて痩せ衰えた肉体の体力回復トレーニングは順調に進み、その結果、新納は病気になる以前以上の健康的な肉体を手に入れることとなった。

172センチの身長は当然ながら変わらないが、40キロ台後半まで落ちていた体重も、60キロ台半ばまで回復している。

ちなみに、治療を担当したジェイラン医師によると、ベータでは未だに治療不可能でも、アルファでは既に治療方法が確立された病気は多く（その逆も僅かではあるが有り、ジェイラン医師は、その研究に携わっている）、その結果、ベータに於いて治せるはずの患者が亡くなることに、正直、医師として忸怩たる思いもあったそうだ。

基本的に無用な混乱やトラブルを避ける為のベータ・アースへの不干涉という方針については、ジェイラン医師個人も十分に理解しており、賛同もしているが故の悩みだが、そんな中で新納の治療に携われたことは喜びだったと語ってくれた。

また、この施設で、バレットの言っていた人型の看護ロボット、アルファ・アース流に言うならA オートノマスマシン Mも初めて目にするようになった。

新納に割り当てられた部屋で、薬の副作用で動けなかった最初の数日を含め、新納を甲斐甲斐しく世話してくれたのが彼女（女性型だった）だ。

最初、自然では在り得ない、やや薄いブルーの髪以外は殆ど人と見

分けがつかず、年齢は二十歳くらいの普通に可愛らしい看護師の女性で、こんなに華奢で力仕事とか大丈夫だろうか（患者を支えたりと、看護師は力仕事も結構多い）と心配していたら、まだ動けなかった新納を軽々と抱え上げて見せ、自分がジェイラン医師付きのケラー・メデイカル・インダストリーズ社製のメデイカルAMで、ライラだと自己紹介してくれた。

ブルーの髪はAMである証で、普通のAMは、その利用目的から、人間型である事は稀なので問題にならないが、看護師タイプの彼女のように、容姿にもセラピー効果を求められ、人間と似ていることが目的の一つである場合は、混乱防止の為に、その外見的特徴に一目見て明らかに人間と違う特徴を持たせる義務があるそうだ。

これは髪の色に限らず、例えば猫耳や兎耳などというパターンもあるそうだが、主に女性からの『あざとい』と言う意見もあつて、採用される例は少ないとのこと。

ちなみに、当然ながら人間がピンクやブルー等の自然では在り得ない色に髪を染めることは個人の自由で全く問題無い。その結果、AMと誤解される事は承知の上で染めるのだから。

◇ ◇ ◇

そんな体験を経て、次に新納が向かったのは、アフリカ大陸近郊の大西洋に浮かぶ無人島で、ここで異世界に転移した後、身をを守る為の戦闘技術とサバイバル技術を徹底的に叩き込まれることになる。

これまで新納は単なる普通のサラリーマンだったのであり、日本は徴兵制も無いことから、実際の軍隊でどういった訓練をすのか、などと言う詳しい内容など知る由も無かったが、実際に体験したここでの訓練は、新納にとって精神的にも肉体的にも非常にタフで地獄とも思えるものだった。

当初の予定は十八週間で、約4ヶ月少々。ブートキャンプ（新人基礎訓練であつてダイエットではない）から始まって、座学に武器・装備の点検整備方法や、様々な武器での個人戦闘、分隊を率いての集団

戦闘などなど、内容は多岐に及び、バレットの言っていた軍用AMの指揮も実際に体験させられることになった。

軍用AM達の姿形は、兵器だけあって効率重視で、対応任務によってどれも人間には全く似ても似つかないが、指示に的確に従って行動し、時には具体的な指示でなくても人間のようにこちらの意図を汲んで行動するなど、バレットの言っていた、一緒に行動していると兵器や装備と言うよりも、相棒や部下と言った方が確かにしっくり来るという感覚は新納にも納得できた。

ガンマ・アースへは、採取したデータの分析用AMと、護衛として汎用歩兵タイプAMを何体か、探査機を改造した支援型飛行機械を数機持ち込むことになっている。

この内汎用歩兵は体長1.5メートルほど。全長1.2メートル、幅1メートル、高さ40センチほどの車体に、無限軌道と蜘蛛のように伸びるマニピュレーターを兼ねた6本の脚を持ち、様々な地形での移動を可能にしている。

車体から上に伸びた胴体の左右には弾薬用ラックと短いマニピュレーターが付いていて、ここに任務に応じてユニット化された武装を装備することで任務に対応させることができる。

胴体の上にはサッカーボール程の丸い頭が乗っていて、センサーやアンテナが搭載されている。

装備できる武装は、現代の歩兵の携帯武器と大差無い。小は拳銃クラスの火器から、大はロケットランチャーといったところ。全体的な見た目は歪な巨大バクテリオファージといった感じだ。

また、支援型飛行機械は、非武装の探査機を改造したもので、ベータ・アースで言うドローン、もしくは地に伏せた蟹を思わせるフォルムの飛行機械から、積載量の都合でレーダー、通信、画像・音声の収録機器以外の戦闘には不要と思われる機能を大幅に撤去した上で、二本のマニピュレーターを追加し、支援火器、或いはグレネード発射機能を選択式で装備できるようにしたものだ。

追加された2本のマニピュレーターのお陰で、益々蟹っぽいフォルムになった。

ポーンもクインも、動力は電気で、バッテリーから供給される。

バッテリーは一度の交換で最低一か月は保つそうだが、この交換や武器ユニットの交換は、新納が自分でやらなくてはいけない。

また、これらの装備について、最も懸念されるのが燃料（バッテリー）と弾薬の補給であるが、これについては既にメドが付いているとだけ説明された。そこは信じるしか無いだろう。

ちなみに、現時点で既にガンマ・アースへと送り込まれて活動限界を迎えた探査機^{プローブ}については、完全にバッテリーが切れる前に、人目に付かない適当な場所でスリープ・モードへと移行して、人員が派遣されてくるのを待って待機するか、それが叶わない場合は海中や火山の火口などに投棄されているそうだ。

訓練の内容の方は、あまりのキツさに正直、逃げ出したいとも思っ
たし、理不尽とも思える指導教官達の厳しい指導に切れそうになった
ことも多々あった。

それでもどんな危険があるかわからない異世界であるガンマ・ア
ース（少なくともドラゴンとゴブリンはいるのだ）で、理不尽に死なな
い為の訓練だと言われれば耐えるしかなく、実際になんとか耐えきつ
て見せた。

筋肉達磨なのに主に座学と兵器運用担当のロンタイラー指導教官
曰く「一応使えるメドは立った」という程度らしいし、丸メガネの学
者肌なのに主に体力強化と個人戦闘担当のリプリース指導教官によ
れば、「まあ、取り敢えず戦士のとば口には立ったんじゃないか」とい
う程度らしい。

新納個人としては、元が単なるサラリーマンの自分にこの訓練は、
どう考えても流石に厳しく、当初の予定の十八週間を超え、プログラ
ムの終了まで五か月近く掛かってしまったものの、むしろクリアした
自分を褒めてもいいのでは？ などと思っていたが、訓練終了後の打
ち上げパーティーで、主に集団戦闘担当のワット指導教官（見た目は
どう見てもインテリヤクザだ）が教えてくれたたところによると、今
回の内容はベータ・アースの標準的な軍隊の軍事教育訓練より期間的

に遥かに短く、内容的に遥かに厳しく濃くなっていて、アルファ・アースでの軍隊の常識からしても相当無茶な内容だったらしい。

指導教官連中の中では、「ニイロのやつ、このプログラム設定したやつにどんな恨み買ったんだ？」なんてジョークが交されたらしいし、実際、誰一人として本気でクリアできるとは思ってたなかったそうさ。

流石にハキネン指導教官（J・クルーニー似の超イケメン紳士で主にサバイバル技術担当）から、大真面目な顔で「本当にクリアするか馬鹿じゃないのか」と言われたのには面食らったし、「でも一人だけクリアに賭けたお陰で大儲けだよ」と、札束見せびらかしながらホクホクの良い笑顔でオチを聞かされた時は、流石に両手両膝を地面につけたポーズから暫く復帰できなかつたが……。

第4話 旅立ち

そして今、新納は異世界転移の準備のラストスパートを迎えていた。

日本の某地方都市の郊外にある国際科学技術管理局の施設で、明後日に迫った異世界への旅立ちの日に備えて、準備に忙しい日々を送っている。

表向き医薬品メーカーの研究開発設備と言う事になっている三階建てのこの施設は、実際は国際科学技術管理局に出向している学者先生達の、日本に於ける宿泊設備というのが、主な利用法になっている。そんな施設に滞在しながら約半年、担当のシンシアや、他の言語学、文化人類学、生物学など学者達から、ガンマで主に使われている複数（流石に全てではない）の言語の学習と、これまでに判明している様々なデータのレクチャーを受けていたのだ。

特にシンシアは、自分もガンマの言葉や文字を覚え、学習資料を整理・分類し、ほぼ付きっ切りと言つていいほど懸命に新納のサポートをしてきている。

しかし、判明しているデータとは言つても、ガンマに送り込まれた探査機^{プローブ}から得られるデータは、積み込まれた各種センサーによる各地の気象・大気データや地形・地質・水質のデータ、人間を含めた生物・集落の分布データくらいで、今のところあまり新納の役に立ちそうなデータには乏しい。

探査機^{プローブ}で得られるデータには限界がある。だからこそ新納のような人間の調査員の派遣が望まれるのではあるが。

数少ない有益な情報として、まずガンマ・アースの地理が、新納の知っているベータ・アースの地理と全く違うことだ。ユーラシア大陸も無ければ南北アメリカ大陸も、アフリカもオーストラリアも無い。

これは少なくとも、ガンマ・アースの分岐成立時期が数万年、或いは数億年も以前にもなる可能性を示していた。

判明している地理の概略を説明すると、北半球にはオーストラリア大陸ほどの面積の大陸が5つ（仮称アークティカ、バルティカ、ケノー

ランド、エバーニア、ヌーナ）と、それより小さな大陸未満の島々が点在しており、南半球には超大陸とも言える巨大な大陸ロディニアが、南極点を中心に鎮座している。

そこで取り敢えず、調査の結果、少なくとも人が住み、都市と言える規模の社会を形成していることが確認されている地域である、北半球の大陸の一つであり、緯度的40度から70度辺りに東西に長く横たわる、仮称エバーニア大陸に転送されることが決定された。

日本周辺の緯度に当て嵌めれば、南は東北地方辺りになり、北は樺太の遙か北、北極圏を超えているが、これをヨーロッパに当て嵌めると、南はイタリア半島南部、北は北欧辺りになる。

経度はグリニッジ点が確定できないので算定不能だが、仮に最西端を経度0度とするならば、最東端は経度60度を超えている。

また、もう一つの重要な情報は、音声・画像データによる言語の存在の確認で、音声データによって話し言葉、画像データによって文字の存在が確認され、音声・画像の双方のデータを統合することで、文字の読み方まで判明している。これは大きな収穫だった。

現地での情報収集に、現地人と言葉によるコミュニケーションが取れるのと取れないのでは、当然ながらその効率に大きな影響が出るのは確実で、前もってそのリスクを潰せるのは大きい。

そんな訳で、今も新納は、建物三階にある、彼に割り当てられた部屋の机に向かって、脇に置いたタブレット端末に表示される文字の資料を、白紙のノートに書き取りながら学習に余念がなかった。右耳に差し込まれたイヤホンからは、タブレットに表示されている文字の発音が聞こえてくる。

この半年を掛けての学習で、ガンマで使われている主な言語の内、最も使用者の多い（と思われる）二つはほぼネイティブに駆使できるし、他にもカタコトながら三つの言語については知識を得ている。後は現地での実践あるのみだ。

もちろん、本来ならこんな短期間での習得は無理がある。

戦闘技術の習得にしてもそうだったが、新納はアルファ・アースの元住人達ですら驚くほどの効率で技術の習得をこなしていた。これ

は別に新納が天才だった訳でも何でも無い。

ベータ・アース人に対して後天的に、アルファ・アースのドーピング技術（薬剤・ナノマシン等の投与）や外科的肉体改造（超小型サポート機器の埋め込み等）など、先進医療技術と教育技術・手法を駆使した結果であって、これはある程度予想されていた結果だそうだ。

ドーピングや改造などといった言葉自体は、ベータ・アースに於いてあまり良いイメージを持たれないが、事前に説明してくれたジェイラン医師によると、アルファ・アースに於ける認識は病気や肉体の障害に対する治療の延長であって、全く忌避感は無いらしかった。

全ては健康な肉体を維持する為の技術であって、当然ながら副作用や後になって引き起こされる障害については、神経質なくらいに検証や改良が施され、安全性の確認された技術だそうで、実際に新納の治療も、同様の技術の賜物であり、新納個人としては文句どころか感謝しか感じなかった。

黙々と一人、ガンマ言語（仮称）の学習に耽っていた新納は、ふと疲れを感じて手を止める。タブレットの時刻表示を見ると午後三時を少し回った所だった。窓から見える外の風景も、午後の陽射しに照らされている。

始める前に昼食を摂って約二時間と少し。そろそろ休憩を入れるべき時間だ。根を詰め過ぎてもメリットは無い。

そう思って椅子の上に伸びあがって硬くなっていた筋肉を伸ばし、飲み物でもとサイドチェストに置いてあつたコーヒーを入れたポットに手を伸ばしかけた、ちょうどその時、タイミングを見計らったかの如く、背後の扉をノックする音が聞こえた。

「開いてるよ」

扉の方を振り向いてそう返事をする、ガチャリと扉が開いてシンシアが顔をのぞかせた。

「あの、お邪魔じゃないですか？……」

そう言って遠慮がちに声を掛けてきた。

「いや、丁度休憩してコーヒーでも飲もうかと思つてたところだよ」

「そうですね！ 三時だし、お茶でもどうかなーって思ってた来てみたんですけど…… ご一緒に如何ですか？」

と、嬉しそうに誘ってくれた。

そう言えば、確かシンシアはイギリス系だし、イギリスと言えば午後ティー、紅茶だろう。

新納個人は紅茶よりコーヒー派だが、別に紅茶も嫌いではないし、何よりせっかく誘ってくれる可愛らしいお嬢さんのお誘いを断る理由は無。

「そうか、じゃあ、偶には紅茶もいいな。」

そう言うのと椅子から立ち上がり、連れだつて建物一階にある食堂に移動する。

この場所は表向き社員食堂ということになっており、実際に食堂として機能していた。料理は基本的にレトルトを温めなおして食器に盛るだけのファミレス方式だが、交代で当番のスタッフが対応してくれるし、メニューも多く味も別に悪くない。さらに、基本的に全て無料だ。

また、希望すれば厨房の器具は自由に使わせてもらえるので、自分で料理することも可能で、これはいつだったかシンシアに、「これ、料理が不満だったり、メニューに無い料理が食べたければ自分で作れることなんですよ」と教えられて、そりゃそうだと納得させられた。

食堂に着くと、「すぐ準備してくるんでちよつと待って下さい」とシンシアは厨房に入っていったので、残された新納は適当に選んだテーブルに座って待つことにしたが、実際、待つという程の時間を待つこともなく、トレイにティーポットとカップ、小さい瓶が幾つかと、お菓子の盛った皿を運んでシンシアが戻ってきた。

「お待たせしましたー」

戻ってきたシンシアが、テキパキとトレイからポットその他をテーブルに移して準備してくれる。

そうやってシンシアが淹れてくれた紅茶に砂糖を一杯だけ入れて口に含むと、芳醇な紅茶の香りが口の中に広がった。

「うん、美味しいな」

その言葉に、真剣な様子で新納の表情を窺っていたシンシアの顔が綻ぶ。

「良かったあ…… あ、こっちのお菓子もどうぞ。ショートブレッドトって言って、私の国のお菓子なんですけど、こうやって……」

そう言いながら自分のカップに入ったミルクティーに、某バランス栄養補助食品にも似た短いスティック状のクッキーらしきお菓子を浸す。

「ミルクティーにディップしたり、こっちの……」

と言ってジャムの入った瓶の蓋を開ける。

「ジャムを付けて食べるんです」

「へえー」

そう勧められて一つ手に取り、ジャムを付けて食べてみると、お菓子自体は甘味の無いバタークッキーのようで、確かにジャムなどの好みの甘味をプラスして食べることが前提のお菓子だと分かる。

あまりどぎつい甘味は苦手な新納としても、これなら自分で適度に調節できるので良い感じだ。

それから暫くは、お互いの国のお菓子や飲み物など、他愛のない話に花が咲くが、それも尽きると沈黙が訪れる。

ただ黙って冷めてしまった紅茶を口に運ぶ。

そんな沈黙を破って、シンシアが小さく呟いた。

「また会えなくなっちゃうんですねえ……」

そうなのだ。

シンシアに新納に対するはつきりとした恋愛感情は、少なくとも今のところは無い。

ただ、今のシンシアにとって新納は、あの忌まわしいドラゴンによつて奪い去られた優しかった兄に再び会えた、そんな感覚に近かった。

何くれとなく新納の世話を焼いたのも、少しおしゃまで世話好きだった彼女が、それまで兄に対して行ってきた——兄が結婚してからは無かったが——ことの延長に過ぎない。

そして、そんな彼女の気持ち新納も薄々察していた。

これまで稀にだが、激務で疲れていたらしい時のシンシアが、新納の事を、つい、「兄さん」と呼んだことがあったからだ。

最初はニイロを略してのニイさんかとも思ったが、何度か呼ばれる内にどうやら違うことに気づいた。

シンシアにしてみれば無意識だったようで、特に訂正もしなかったので本人は自分がそう呼んだ事に恐らく気づいていない。

新納からしても、恋愛感情を抱くには、やや年が離れすぎており、元気で可愛い妹のような存在という感覚からは抜け出していない。

やはり、一回りという年齢差は先に進むことを躊躇わせる大きな壁だし、何より、自分はガンマ・アースへと旅立つことが決定していて、再び戻れるメドは全く立っていないのだから。

「直接は会えなくなるが、シンシアは俺の命綱だ。頼りにしてるよ」

「そう、そうですよね！ 私頑張らなくちゃ！ それに絶対帰って来れますよ、ヒラヤマ先生達がサボってたら、お尻引つ叩いてお仕事させちゃいますから！」

急に張り切り切らしたシンシアに多少気圧されながらも、新納は少し話題を軌道修正しようと、この数日気になっていたことを尋ねてみた。

「そう言えば、ここ一週間くらい姿を見なかったけど、どこか行っただのか？」

「ああ、ハイマン先生に頼まれて、お手伝いに行ってたんですよ。参考データ取らせてくれてって言われて」

「ハイマン先生って言ったら装備部の方だよな。確かガンマに持ち込む装備品の説明で何度か会ったよ」

「はい、専門はロボット工学の研究者で、アルファじゃ超有名人ですよ。ヒラヤマ先生と並んでベータに来た先生方の中では有知名度じゃトップです…… 変人度でもトップですけど…… あつ、いつけない！ ハイマン先生が時間が空いた時でいいから顔出してくれて言っていました。本当はさつき、それを伝えに行っただんです……」

申し訳し無さそうに恐縮するシンシアに、安心させるように新納は

言った。

「お陰で美味しいお茶を御馳走になったんだからいいさ。ちゃんと伝わったしね」

シンシアにお茶を御馳走になった後、新納は彼女とは別れて伝言のあった装備部に向かった。

装備部のスペースは、機密保護の観点から施設の地下に設けられている。

幾重ものセキュリティをパス（耳の後ろに埋め込まれたチップを通して勝手に認証されるので、特に何かする必要は無い）して、装備部の扉を潜ると、問題のハイマン先生が待ち構えていた。

小柄な体に禿頭にロイド眼鏡、白くなつた長い眉と、白く長い顎鬚が特徴の、いかにもマッドサイエンティストといったいで立ちの学者先生だ。

「遅いー！」

そう言つて責めるが、新納に責められる筋合いはない。

「いやいや、ご自分でシンシアには『時間の空いた時』つて言ったんでしよう？ それで『遅い』は理不尽ですよ」

この人に無駄とは知りつつ、一応は抗議はしておく。

「知らんのか、年寄りには時間は貴重なんじゃないぞ」

（知らんわ）

今度は心の中で抗議だ。

何せ、変人ツートップは伊達じゃない。この御仁、新納と最初に会つた時は、自分を「キューと呼べ！」と宣つた。

何の事かわからないでいると、偶々その時傍にいた別の研究者が、苦笑しながら「御大、最近こつちのスパイ映画に凝ってるんだよ」と新納に耳打ちして教えてくれた。キューではなくQだったらしい。

多分、マッドサイエンティストとして通じるものがあつたのだから。

その後に見せられた、ガンマに持ち込む分析用のサポートロボットについて、最新型だと紹介されたそれは、真つ赤なビヤ樽に手足を生

やし、頭には三枚の鶏冠、表面に謎のアナログメーターを散りばめて甲高い声で話す…… 確かに「分析ロボ」なのは間違いなかったが、新納としては色々な意味で責任取れないからと連れ出すことは断固反対した。

さらに、ヒラヤマ先生との合同試作品ということで自信作だと見せられたバッグは、要するに異世界ファンタジーでよくある容量無制限のアイテムバッグに近いシロモノで、並行世界の研究から派生して開発された亜空間への接続技術を利用し、大きさはバッグと言うよりポシエットに近い。

ハイマン先生が自信満々に披露した装備名は「四次元ポ（作者自主規制）ト」

曰く、『容量は理論上無限だが、入れられる物の大きさはバッグの間に依存』『中の時間は普通に経過しているので、生ものは何れ腐る』『熱いものは冷え、冷たいものは温くなる。分岐点は摂氏約26度』『生き物は中の空間に耐えられないので不可』『荷物はタグで管理し、タグのデータを紛失すると二度と出せなくなる』等、制限は多いものの確かに便利そうな装備品だったが、言うまでもなく、より大きな物も入れられるよう間口の改善と、よりによって白い半月型というデザインの変更、いくら何でも直球過ぎる名称の変更を、その場にいた全員が一致団結して求めることになった。ハイマン先生的には、「ポシエットなんじゃからポシエットでいいではないか」とブツクサ言っていたが、問題はそこじゃない。

「それで今回の用件は？ 向こうに行くのは、もう明後日なんですけど」「おう、知つとるわい。一つはこれじゃ」

そう言って取り出したのは、ウエストポーチ型に改良された例のバッグと、縦二十センチ、横三十センチで、厚さ十センチの白い樹脂製パネルで、バッグは見た目の素材的には茶色い革製に見える。

バッグはベルトに通して使うようになっており、大きさは奥行五十センチ幅三十センチ高さ十五センチほどの長方形。

そのままでも使えるが、ベルトから外し、留め具を外すと、幅は横方向に約三倍まで広げることが出来るようになっていた。構造のイ

メージ的には三つ折りの財布をイメージするといい。

「中の空間の環境までは、まだ手を出せなんなのでな。要望の大きかった外見だけ弄ってある。最新の『亜空間ポーチ』じゃ。まあ、これは儂の仕事じゃあ無いがな」

「ほー、でも、これならまだ気兼ねなく使えるよ。前のがアレだったからな」

「こっちのパネルはこうやって……」 そう言いながらハイマン先生が折り畳まれていたパネルを広げると、1.8メートル四方ほどの大きな枠が出来上がった。

「要するに大型荷物用の『亜空間ポーチ』じゃ。どこでも使えるから、名付けて『どこでも……』 名づけていい？ まあ、ええが。これ以上大きくなると消費エネルギー的に実用性が厳しくなるでな。普段は折り畳んでポーチの方に入れとけばいい。ポーンやクインの保管にも使えるじゃろ」

「なるほどねえ。流石だ」

新納が心から（名前以外に）感心すると、得意気にハイマン先生はふんぞり返る。

「それからもう一つの用がこれじゃ。おーい」

そう言うのと奥のドアに声を掛けた。

そして呼ばれて現れたのは、以前、イーノック医師の所にいたメデイカルロイドで、確か……ライラだったか。

「あれ？ 君は確かジェイラン先生の所の…… いや、似てるけど違

う？」

しかし、横から即座にハイマン先生が訂正する。

「うむ。確かにジェイランの所のライラに似とるが別個体じゃ。同型でも顔の造形は一体一体微妙に変えて造られとるからの。まあ、見慣れておらんと勘違いすることもあるが」

そう言われてみると、確かに違う。

ライラはやや薄いブルーの髪だったが、こちらは鮮やかなピンク色で、ストレートな髪質のショートボブ、瞳の色も髪と同色。体型は同じように華奢で、少女といつてもいいくらいの幼い顔立ちをしている

が、良く見ればこちらの方がやや幼く見える。

変な表現だが、一歳違いの双子姉妹というのがピツタリな感じだ。

「はい、私もライラと同じケラー・メディカル・インダストリーズ社製
メディカルAMです。名前はまだ頂いていません」

「まだ名前が無いのか」

「そこじやよー!」

突然、ハイマン先生が叫んだ。

「この嬢ちゃんは昨日ロールアウトしたばかりでの、一応、お前さんについていく手筈になつとる。」

この前見せた分析AMじゃ絶対嫌だとか抜かしたが、この嬢ちゃんなら文句無いじやろ?」

「え? でも連れて行くのは分析担当で、彼女は医療系のAMでしょう?」

「そんなもん、人間とは違うんじや。いくらでも対応はできるわえ。」

ちゃんとメディカルロイドの母体をベースに、データの収集分析機能と、序でに護衛としての役割も熟せるようにカスタマイズされとる。元々、この前見せた分析AMも、分析以外の機能山盛りじやつたからの」

それからハイマン先生は、彼女の諸元を詳しく説明してくれる。

それによると、医療については簡単なものなら外科手術にも対応し、分析機能についても問題ない。

護衛任務については、純粋な軍用には劣る部分もあるものの、個人の護衛なら必要十分な機能を保持しているそうさ。

「それでの、せっかくなんじや、お前さんがこの嬢ちゃんに名前つけてやれ」

「いいんですか? 俺が付けて」

「そりやーお前さんとは長い付き合いになる相棒じやぞ? 一番ふさわしいのはお前さんじやろ」

そう言われれば新納も否とは言えない。

確かに長い付き合いになることは確定しているし、時には命を預けることもあるだろう。

しかし、犬猫でもあるまいし、人、それも女の子（そもそもロボットだが）の名前を付けろと言われて、じゃあコレ、と簡単に思い浮かぶものでもない。

「うーん…… ピンク…… 桃…… いやいや、桜…… 桜子。サクラコで」

完全に、そのピンク色の髪からの連想だ。安易ではあるが、ピンク↓桜の花と連想するのは日本人故かも知れない。

単に『サクラ』としなかったのは、何だか自分が『出来の悪い兄貴』になりそうだったからだ。

「サクラコか。何か由来は…… まあ、ええか。付けろと言われて、ちゃんと付けたんじゃからの。聞いたの？ 今からお前さんの名前は『サクラコ』じゃ」

「……はい、私はサクラコです」彼女はそう言っただけで丁寧にお辞儀をした。



旅立つ日が来た。

新納は今、大きなMRIかCTスキャン、はたまた酸素カプセルにも似た装置の中で、仰向けに寝た姿勢のまま、その瞬間を待っている。全裸で。

これは転送に伴って個人の正確な身体データを一致させる為の措置で、このデータが合わないと、最悪の場合、ランダムに身体の一部だけが転送先に送られ（当然、送られなかった部分は残る）たり、転送先で肉体が破裂などという、スプラッタな事態に陥ってしまう。

別に装備品を着たままでも送れないことは無いのだが、生物の場合には新陳代謝等によるデータの揺れがある為、徹底的に不確定要素を排除した上で、万全を期する為に全裸での転送が推奨されているのだ。断じて個人的な趣味などではない。

『ファージ・ワン、転送成功。セルフチェック開始……グリーン』
オペレーター
管制官の声が響く。

『了解。ファージ・ワンは予定通り、そのまま周囲を警戒させて。ファージ・ツー、転送いける?』

シンシアの上司であり、今回の転送作戦の統括責任者である、アデル・オーティス女史の声だ。

『いけます』

『了解。ファージ・ツー転送スタート!』

ゴウンゴウンと低周波な機械音がリズムカルに響く中、新納よりも先に送られ、転送先の地点で周囲の安全を確保する為の汎用歩兵達、コードネーム・ファージの転送が進んでいた。

管制官達のやり取りが聞こえている。まず、汎用歩兵3体と上空警戒用の支援型飛行機、コードネーム・クラブ・ワンが1機、それにサクラコが先に送られ、それから装備ユニットのコンテナパックが送られた上で、最後に新納が送られる予定になっていた。

『ニーロさん、体調どうですか? どこか痛いとか無いですか? 大丈夫ですか?』

シンシアの心配そうな声が問いかけてきた。

本来、今回の転送作戦に彼女の順番は無いのだが、誰も見送る者がない旅立ちもアレだということで、見送り要員として彼女も立ち会っている。

彼女は今、転送管制室で上司と一緒にいるはずだ。

「大丈夫だ。絶好調とは言わないけど普通だよ。」

心配そうな声に、新納は立場が逆じゃないのかと思いつつも安心させるように応えた。

確かに緊張はあるし、心臓は早鐘を打っているが、それは言わない。

転送に支障をきたす程の異常なら、常に新納の生体反応をモニターしているオペレーターが何か言うだろうし、態々シンシアに心配を掛ける必要は無い。

『ファージ・スリー転送スタート!』

汎用歩兵達の転送も順調に進んでいる。

『大丈夫です! もう100回以上転送して、トラブルは最初期の2回だけなんですから! 成功率100パーセントですよ! 向こう

に着いての手順、ちゃんと分かっていますよね？ 生水とか飲んじやダメですよ？ 後、知らない女の人に着いて行ったりとか……』
(いやいや、2回失敗してるなら、それ、100には……それと女限定かい)

どうやら、いよいよになってテンパってしまったらしいシンシアの言葉に、思わず苦笑しながらも、彼女が混乱していることで逆に落ち着いていく。

どういった経緯で彼女が新納の担当に抜擢されたかは知らないが、いい相棒を選んでくれたと、その決定者には感謝しか無い。

全てが荒唐無稽に思えて、自らの立ち位置ですらあやふやな今の新納にとって、無条件に信じていいと思わせてくれる彼女の真心は、唯一無二の拠りどころだから。

『クラブ・ワン、転送終了!』

『引き続きサクラコ転送スタート!』

『装備パッケージの転送、開始します!』

転送作業は手筈通り着々と進んでいく。

「手順もちゃんと頭に入ってるよ。次のコンタクト予定は一カ月後か。取り敢えず、向こうに着いたら服着ないとな」

『服も装備もちゃんとバッグに入ってますから! 後で足りない物もちゃんと買ってくださいな。準備してすぐ送りますから! それとご飯も……』

『Mr. ニイロ、転送開始します!』

相変わらずテンパったままのシンシアを無視して、管制官オペレーターが声を被せる。

「オーケー、やってくれ。皆には世話になった。これからも世話になるが、ケジメとして礼を言う。ありがとう。じゃあ、また後でな、シンシア」

シンシアとの会話のお陰で、新納自身驚くほどに穏やかな気持ちで礼を言うことができた。

『にい……』

『アテにしてくれていいわ、Mr. ニイロ。いつてらっしやい。転送

スタート!!』

そう力強く宣言したアデル女史の声と共に、体の中心から胃が裏返るかのような悪心と悪寒が立ち上って来る。

「ぐうっ!!」

歯を食いしばって耐えるが、思わず唸り声漏れるのは仕方が無い。逆にここまでは事前に聞いた通りなので精神的にはまだ余裕すらあった。

しかし、次の瞬間、聞いていなかった衝撃を体全体に感じる。

音は無い。

目も見えない。

意識も……

(シンシア何か言いかけたような?)

暗転した。

第5話 第一異世界人（に）発見（される）

『ガンマとのリンク切断！』

『全目標ロスト！』

「何があつたの!?!」

コントロールルーム オペレーター
管制室に管制官達の怒声が響き渡る。

ガンマ・アースへの転送は順調に進んでいるはずだった。

計画では最初に護衛の汎用歩兵を3体と、支援型飛行機械1機、メデイカルAMを任務用にカスタムしたサポートAM、サクラコを転送し、転送地点の安全を確保してから、パッケージされた装備品、最後にニイロ本人という手順だ。

「今回のリンクはまだ後一時間以上余裕があつたはずよ！ 何か事前の兆候は観測されてなかったの!?!」

今転送作戦の責任者であり、シンシア・マツキントツシユの直属の上司でもあるアデル・オーティスが、眉間に皺を寄せて必死に状況の把握に努めている。

小柄で身長は150センチほど、ややくすんで緩いウェーブの掛かった金髪は短く切り揃えられ、に瞳の色はブルー、年齢は50歳半ばといったところか。

『事前の兆候は全く見当たりませんでした。完全にいきなりの出来事で、まだ原因も分か『ガンマとのリンク復旧しました!』』

（突然切れたと思ったら、また突然繋がる……何なの！ こんなこと一度も）

アデルは心の中では状況を呪いつつも、状況の確認を優先させる。

「Mr. ニイロの反応は!?! サクラコとポーン達とのリンクページも再度チェック！ ヒラヤマ先生に連絡、意見が聞きたいと伝えて。アルファにも連絡して、協力を要請。向こうでモニター出来てたか確認して!」

矢継ぎ早に指示が飛ぶ。今は大事なものは何故こうなったかではなく、これからどうするかだ。

『サクラコとポーン、クインの再リンクページを確認。オールグリーン

！』^{オペレーター}管制官が答える。

「サクラコ聞こえる？ オーティスです！ そちらの状況を報告して！」

『え？ こちらは何も異常ありません。装備パッケージも無事到着して、今、チエックを行っています。周囲の警戒はファージとクラブ達が引き続き続行中で、ニーロの到着を待っています……何かあったんですか？』

アデルの切羽詰まったような問いに、やや驚いたようにサクラコが返事をする。彼女の方では一切、異常を感知出来ていなかったようだ。

「さつき、一時的にガンマとこちらの接続が切れたの。Mr. ニイロの転送直後で、彼の反応もロスト。今探してるわ」

『それは……』サクラコの息を呑むような雰囲気伝わってくる。

(ほんと、人間と一緒よね)

アデルの内心には、やや場違いな感想だとは思いつつも、サクラコの人間と全く同じような反応に、感嘆とも呆れとも取れる感想が浮かぶ。

「大丈夫、必ず見つけるわ。今、そっちにいる動ける探査機^{プローブ}も全部動かして捜索するから。早くしないと、あなた達も動けなくなっちゃうものね。兎に角、今は装備のチエックを続けて。終わったら周囲を警戒しつつ待機よ。」

『……了解しました』

そう、サクラコやポーン^{ファージ}、クイン^{クラブ}の動力は電気であって、内臓のバッテリーから供給されており、当然、バッテリーが切れれば動けなくなる。

バッテリーの交換作業については、色々な意味での安全面からAM同士での作業は禁止されており、必ず人間の手を介して行われなければならないという規則になっているのだ。これは完全自律型であるサクラコであっても例外ではない。

更に転送されたばかりの今の状況では、転送に伴う衝撃等による事故を避ける為、バッテリーの残量は数日の活動で消費してしまう程度

の量に制限されており、ニイロと接触できなければ早々に活動停止に追い込まれることが確定している。

また、武装についても同様で、サクラココそ腰部のベルトに取り付けられたポーチに小型のオートマチック拳銃を一丁持っているものの、ポーンについては固定装備の圧縮空気で打ち出されるランチャーに、総弾数5発のワイヤレス・スタンガンユニットを装備しているだけであり、クインに至っては完全に非武装状態だ。

一応、事前に周囲の安全を確認した上で送り出されてはいるが、万一の場合は自壊覚悟の格闘戦でニイロの安全を確保することになっている。

「付近にいて動かせる探査機は何機いる？」

『……1機だけです』

「今はそれでも有り難いわ。転送予定ポイントから5キロづつ円周状に区切ってニイロの反応を拾って」

ニイロの体内に外科的に埋め込まれたチップから出る信号の到達距離は約二キロ。そこでエリアを五キロ幅のドーナツ状に区切りながら搜索範囲を広げていく。

『到着予定地点から半径5キロのスweep完了。反応無し』

『了解。到着予定地点から半径10キロのスweep開始します』

『到着予定地点から半径10キロのスweep完了。駄目です、反応無し』

淡々と無情な結果が読み上げられる。

芳しくない状況に内心苛立ちながらも、アデルとしては立場上苛立ちを周囲に見せる訳にはいかない。

そんな中、ふと自分を見つめる目に気づいた。

「シンシア……」

彼女はずっと此処にいた。ニイロの担当オペレーターとして。

本当は泣き叫びたい。誰彼なく取りすがって助けを求めたい。

しかし、それをしても事態が改善することは絶対に無いし、むしろ妨げになると理解しているから、ただ黙ってアデルを見つめていた。

彼女の顔面は蒼白で、目に涙を溜めてギュツと両の拳を握りしめ震

えている。

そんなシンシアに気づき、アデルは一瞬、『大丈夫』と声を掛けようとしたが止めた。

彼女の気持ちは知っている。あのドラゴン襲来で両親と兄夫婦と甥を一気に目の前で亡くし、決意を胸にベータ・アースへやって来た彼女は、ニイロに兄の面影を見ていた。

そしてそのニイロを、また目の前で失ったかも知れないのだ。安易に大丈夫などと、誰が言えよう。

本来であれば、彼女の仕事は転送後のニイロのサポート業務であつて、今回の転送作戦について彼女の居場所は無いはずだった。

しかし、それを勘案しても彼女の同席を許可して見送らせることで、その後の業務の発奮材料にでもなれば、と温情を掛けたのが裏目に出た形だ。

『到着予定地点から半径20キロのスweep完了。反応ありません』

『了解。到着予定地点から半径25キロのスweep開始』

絶望が濃くなっていく。

搜索範囲が広がるにつれ、報告の上がる間隔も長くなり、沈黙と微かな機械音だけが支配する時間が延びる。

当初の転送座標から、あまりにも遠すぎる。

これでは仮に転送が成功していたとしても、転送エネルギーの総量とのバランスからして、発見されるのはニイロの体の一部だけという可能性すらある。現実的にこれ以上の範囲に飛ばされたとは考え難い。

アデルとしても、延々とこのまま見込み無く、感情で搜索を続けさせる訳にはいかない。どこかで決断しなければならず、その時はすぐそこまで迫っていた。

『到着予定地点から半径25キロのスweep完了……反応無し』

『了解。到着予定地点から半径30キロのスweep開始』

(ダメか……)

アデルはチラリとシンシアを見る。

その目は真っ赤で涙を溜めているが、表情は変わりなく、ただ必死

にアデルを見つめている

『……30キロで搜索を打ち切る！ ……これ以上は……無駄よ。

……シンシア、すまない』

最後は眩くようにシンシアへの謝罪を口にする。と、その時、オペレーターの歓喜の絶叫が響いた。

『Mr. ニイロの反応ゲット！ 捉えました!! 転送予定地点から南西約28キロ、信じられない！ 街道らしきものの脇です！ 生体反応オールグリーン！ 無事ですちゃんと生きてます!!』

管制室に歓喜の輪が渦巻いた。

◇ ◇ ◇

ガタゴトガラガラと揺れる感覚と音、それに何やら話している男の声、ニイロの意識を覚醒させる。

と、同時に現在自分の置かれている状況に思いが至ってハツとするが、そのままの状態で周囲の様子を窺うだけの余裕は残っていた。

どうやら今、ニイロは屋根の無い馬車の荷台に、粗末な毛布に包まれた状態で他の荷物と一緒に寝かされており、御者台に一人の男の後ろ姿が見える。

さらに、寝ている状態のニイロからはやや死角になり、座った状態で投げ出したブーツを履いた足だけが見える位置に、恐らく男が一人がいるようだった。

話し声は、御者をしている男と荷台に座る男の会話で、近くの街で用事を済ませたこと、現在は自分たちの村に戻る途中で、何事も無ければ暗くなるまでには余裕で着くだろうことがわかった。

内容に剣呑なところも無く、取り敢えずは危険が無さそうな事が確認できたこと、さらに、ニイロが身に着けた現地語の知識が十分に通用することが確認できたのは良い傾向だ。

そして、次にニイロ自身の状態だが、毛布に包まれてはいるものの、その下は転送時の全裸のまま、というのはサクラコ達との接触が上手くいっていないということであり、最悪だ。

現在、文字通り裸一貫で異世界に放り込まれた状態ということなのだから。

(まーいったなア、こりゃあ……)

ニイロとしてはいきなりファーストミッションで躓いた形だが、まず第一に行くべきがサクラコ達とのコンタクトであることは変わっていない。

幸い、順番的に最後の転送だったお陰で、サクラコ達が無事に先着していることもわかっている。

後はニイロの到着したポイントが、先行したサクラコ達とどれだけの距離離れているかだが、ニイロの転送時にトラブルがあったのは間違い無いにしても、こうして転送自体は成功している以上、ポイントのズレはそこまで大きくない「はず」で、こうしていれば直にサクラコ達の方が接触してくる「はず」であった。

……そう考えてから、既に30分ほど経過したが、一向に接触の気配は無い。

それもそのはずで、ニイロの計算では目覚めた時の太陽の位置から、気を失っていたのはせいぜい1〜2時間程度、転送ポイントのズレは最大でも直線距離で2〜3キロ程度と見積もっていたのだが、実際には30キロ近い距離があることまでは気づいていなかったのだ。

そうやって来ると、今度は不安が首を擡げてくる。

(サクラコ達の方でも何かトラブルがあったのか？ だとすればベータの方から何か動きがあると思うんだが…… こういう時に連絡手段が無いのはキツイ…… 要改善だな)

一応、こういった非常事態についても想定はしていたが、このパターンだとベータから追加の人員…… は、無理なので、追加のサポートAMが転送される手筈にはなっているものの、今のところその気配も無い。

(こうなると、この第一村人達とのファーストコンタクトを無事に済ませておくか…… 危険は無さそうだし…… あ、もしかして……) 一つの可能性に思い当って、ニイロは行動することにした。

同行者に余計な疑念は与えないよう、さも今気が付いた風を装ってゆつくりと体を起こす。

すると、それに気づいた荷台の男が声を掛けてきた。

「おっ、お目覚めかい？」

野太いダミ声に、ニイ口は改めて荷台に座る男を見て、演技ではなく本気でギクリと体を強張らせる。

今まで体勢のせいで足先しか見えていなかった為、会話の様子から普通の村人くらいにしか思っていなかったのだが、実際に見ると普通の村人どころか、人間ですらなかったからだ。

「おー……くく？」 思わず声が漏れる。

「いやいや、あんな下等な連中と一緒にせんでくれ。お前達人族も、猿人族共と一緒にされたら気持ちいいもんじゃねえだろ？」

これでもれっきとした誇り高き北方のハイ・オークの一族、傭兵をしている。リュドーのダグだ。ダグでいいよ。

それで、そっちにるのが、カジユ村のトビンな」

そう言つて男(?)は(多分)フレンドリーに話し掛けて来た。

紹介された御者台にいる男の方は普通の人間で、口髭を生やした人の好きそうな年配の男は、ちらりと振り返って笑顔を見せると、ペコリと頭を下げてから、再び前を見て手綱を操っている。

言われてみればダグと名乗るハイ・オークは、確かにイメージにあるオークとは違う。オークのイメージは、鈍器を振り回す頭の悪い半裸で二足歩行の豚、というのが一般的だと思うが、目の前のそれは頭に焦げ茶色の鬘を生やし下顎から覗く牙が目立つ。古いがきちんと手入れのされた皮鎧を着こんだ二足歩行の精悍な猪人といった感じだ。何より目に知性を感じる。

「あ、ああ、すまん、気を悪くしたなら謝るよ。見慣れてないもんで…… ていうか、いるんだ、猿人族…… あと、良かったら状況を説明してもらえると有難い」

謝るべき時は素直に謝るべきだ。ニイ口は素直に頭を下げた。

「おうおう。まあ、たまにあるんでな、気にしちゃいねえが、謝罪は受け取ったよ。それで、説明つて言つても簡単だ。」

俺達が偶々この街道を通ってたら、お前さんが道の横に素っ裸で倒れてるのを見つけた。見つけちゃまったもんはしようがねえから拾って、ここまで運んだ。そんだけだ。

死んでたんなら放っておくが、生きてたんなら助けにやあ、後味悪いだろ?」

ダグはそう言って豪快にガハガハと笑って見せた。

「それにしても、追剥にでも遭ったのか? 普通、下着までは取られねえもんだが、命があっただけめつけもんだわな。見れば何も持っていないことくらいわかってるし、別に見返りが欲しくて拾ったわけでもねえ。単なる気紛れだから礼なんていらねえよう」

ぶつきらぼうな口調だが、この猪人の人柄(猪柄?)は見た目によらず善良と言って良さそうだった。

ガンマ・アースに対して、もつと殺伐とした世界を想像していたニイロとしては、ちよつと衝撃的な出会いだ。

「ありがとう。ちよつと事情があつてこんな様だが、後でちゃんと礼はするよ」

ニイロは改めて頭を下げ礼を言う。

「俺はニイロ・カオル。ニイロが姓でカオルが名だ。俺の国では姓で呼び合うことが一般的なんで、ニイロと呼んでもらえると嬉しい」

ニイロが名乗ると、何故か空気が一変した。

「ちよつ、貴族様かよ……」

ダグが顔を顰めて呻く様に呟く。御者台のコビンも、名前を聞いた途端に身を硬くしたのがわかった。

「えっ? いや、貴族なんかじゃないよ。普通の平民だ」

「しかし、苗字持ちって言ったら普通は貴族様では……?」

ダグの口調が微妙に変わっている。トビンは前を向いたままだが、全神経がニイロの言動に注がれているのがわかる。

「いやいや、この辺じゃそれが常識なのかも知れないが、俺のいた国じゃ農民だろうが商人だろうが、皆苗字は持つてるんだよ。俺も先祖代々、由緒正しい普通の平民さ」

ダグ達を安心させるように、最後は少しふざけた様子で笑いながら

誤解を解いておく。せつかく良好な関係を築けそうな相手との間に、変な垣根は必要無い。

「そうかい、なら良かったぜ。貴族様なんて関わり合いになって得することなんざ、これっぽっちもありやしねえからなあ」

どうやら誤解は解けたようで、ダグの口調は元に戻っているし、トビンの後ろ姿からも緊張が解けているように見えた。

(それにしても、この国の貴族って随分と嫌われてるっぼいな。ていうか、いるんだ貴族……)

ニイロとしては、もし、今後貴族と接触する機会があるならば要注意だな、と心のメモに書き留めておく。

そして、こうしてダグ達との一応の友好関係を築けた以上、行動に出る前に一つ思い当っていた可能性を確認することにした。

「トビンさん、時間は取らせないから、ちよつとだけ馬車を止めてもらっていいかな?」

御者台のトビンに声を掛ける。

「えっ? 少しくらいならいいけど、小用かい?」

突然声を掛けられたトビンは、少し驚きながらも手綱を操って馬車を止めてくれた。

「いや、実は、俺の部下というか、仲間というか…… うん、そんな感じのやつを呼べるかどうか確かめたいんだ。

ちよつとトラブルで逸れちゃったんだけど、もしかしたら二人を驚かせたくなくて隠れてるかも知れないと思ってね。

驚かせるかも知れないけど、二人に危険が無いことは保証するから安心してくれ」

そう言っつてニイロは周囲を見渡した。

特に視界を塞ぐような物も無く、街道は右手奥に森、左には草原というロケーションの中を、森の縁に沿うように緩く右にカーブしながら続いている。

「呼ぶ? 召喚魔法つてやつがあるとは聞いたことがあるが……」

ダグは不思議そうに首を捻っている。彼からすれば、会話をしながらでも周囲の警戒は怠ってないつもりだ。

これまでの経験に基づいて言えば、周囲に人や大型動物の気配は無い。

(さーて、俺の考えが正しいならば……でも、ハズレてたらけっこう恥ずかしいぞ、コレ)

ニイロの目にもサクラコ達の姿はやはり見えない。が、行動しなければ確認も出来ない。

「クラブ・ワン、ステルスモード解除」

やや緊張した面持ちで、コマンドを声に出す。大声は必要無い。目論見通りなら、クラブ・ワンのセンサーはニイロの声を拾える距離にいるはずだ。

実際、ニイロがコマンドを口にするのと同時に、ブーンというローターの発する音が聞こえた。

音のする方を見ると、ニイロ達がいる場所から10mほどの距離、高度約30mの、何も無かった空中に、支援型飛行機^イ械が、まるで魔法のようにその姿を現す。

「なっ!? 召喚魔法か!」

「やつぱりいたか……」

思いもよらぬ位置に突然現れた、薄いグレーの異形に、思わず得物のハルバートを構えて警戒するダグを手で制して、ニイロは少しホツとした口調で呟く。

(十分に発達した科学は魔法と見分けがつかない、だっけか? ダグの反応を見たら、頷けるねえ。アジモフ博士だったっけ……)

そんな関係のないことを考えられるくらいには、余裕が出てきたようだ。ただし、アジモフ博士ではなく、クラークが正解だが。

最初は考えうる双方の距離的にも、待つていればサクラコ達が接触してくるのに時間は掛からないと思っていた。

しかし、一向にその気配が無いことから、考えられる可能性として、1、サクラコ達もトラブルで動けない 2、予想以上に距離があつて遅れている 3、実は来ているが、現地人が傍にいる為に接触を控えている この三つが考えられた。

この内、1か2だった場合については、例え1が正解であっても、ア

ルファ及びベータからの追加の支援は必ずあると考えられるので、どちらにせよ時間が解決するはずだ。

そして、3が正解だった場合、ニイロの方から行動を起こせば反応があるはずだと考えたのだ。

最初にクラブ・ワンを選んだのは、この土地のロケーション的に、最も近くにいいそうなのが、いれば上空にいるであろうクラブ・ワンだったから。

「よし、それじゃあ、次。……サクラコ達はいるか？ いたらステルスモード解除して、こちらに来てくれ」

そう言つて周囲を見渡すが、サクラコ達が現れる様子は無かった。

代わりに、ローターの巻き起こす風で周囲の土埃を舞い上げても影響の少ない位置で、上空から降りて来たクラブ・ワンが、「ブツ、ブー」とブザー音を鳴らして否定してきた。

元が探査機^{プローブ}だったクラブ・ワンには、元が医療用AMだったサクラコのような会話機能は無く、代わりに電子音で簡単な意思表示を行うようになっている。

「近くにはいないのか……向こうもトラブルがあつたのか？」

「ブー」

「無事か。なら良かった。向こうと連絡はつくか？」

「ピンポーン！」

「そうか、この音声は向こうも拾つてる？」

「ピンポーン！」

「じゃあ、向こうの音声の中継できるか？」

「ピッ」

「サクラコ、聞こえるか？ そちらの状況は？」

クラブ・ワンを通信機代わりにして、サクラコ達との連絡を試みると、クラブ・ワンに搭載されたスピーカーから、サクラコの焦つたような日本語が聞こえて来た。

『ニーロー！ ニーロー！ 無事ですか!?!』

その、あまりに人間味豊かな反応と声に、思わず苦笑しながら、ニイロは現地語で答える。

「ああ、こっちは無事だよ。無事序でに現地の人達との友好的な接触にも成功したし、そちらの状況を教えてくれ」

『……では、このニーロの傍の反応2つは心配いらなないのですね？』

……流石はニーロです……こちらは現在、ニーロのいる場所から北に見える森を西に迂回して向かっています。

装備コンテナも運んでますので、森を突っ切るのは難しかったものですから……。それでも、あと30分ほどで追いつけると思います』

最初、やや間があつたが、察したのであろうサクラコも現地語で答えてきた。

「そうか、それでいいよ。何が流石かわからないけど、こちらは心配無い。しかし、随分と離れてたんだな……。まあ、そっちも無事ならいい。こちらは馬車で同行者と一緒に進むから、とにかく安全第一で合流してくれ」

『わかりました。では後ほど』

ようやくサクラコ達とコンタクトが取れたし、状況も把握できた。

ニーロは通信を打ち切ると、未だに固まって動かないダグとトビンに向かつて言った。

「お待たせ。んじゃ行くこうか」

第6話 再会

街道の左手に広がっていた草原は、いつしか幅10メートル程の川を挟んだ向こう側になり、右手にあった森も、今は林と言っている模のものに成り代わっていた。

太陽は、やや西に傾いてはいるものの、まだ夕方と言うには早すぎる。

そんなロケーションの中を、馬車は何事もなく、のんびりとカジユ村へ向けて順調に進んでいた。

この間、ダグからは、何も無い空中に突然現れたクラブ・ワンや、それを操る(?)ニイロの素性についての質問があったり、ニイロの方からも、この地域についての様々な情報をダグとトビンから入手したりで、なかなか有意義な時間であった。

クラブ・ワンについては所謂ゴーレムっぽいもので、ニイロ自身は魔法は使えず、クラブ・ワンが突然現れたのもニイロの魔法ではなく、クラブ・ワン自体に姿を消す能力があり、驚いて攻撃されないよう姿を隠していただけと説明して納得させた。

また、ニイロは見聞を広げる為に各地を旅している探検家だということにしている。ダグには、「それって儲かるのか?」などと不思議がられたが、そういう話に大金を出す好事家もいるんだと説明したら、思いの外あっさり納得したので、誰かそういった人物に心当たりでもあったのかも知れない。

得られた情報の中では、特に度量衡と時間単位、貨幣価値については早期に調べておかないと不便だったので、ニイロとしては大いに助かった。

度量衡については、アルファやベータのメートル法のように、地球を基本としたものではなく、あくまでも人の指の長さや歩く歩幅等、人が一日で食べる食糧の量など、人間本位の単位が使われている。

時間については、一年単位だと、所謂太陽暦で、これはニイロにとってもスムーズに受け入れやすいので助かった。ただ、一日の時間については、あまり細かい設定は使われていないようで、少なくとも庶民

の間では、一日を十二刻として、約二時間毎に区切り、細かい時間は『十、数える間』とか、『百数える間』のような使い方がされているようだ。

【作者注：作中の度量衡や時間等の表記に関しては必要な場合を除き、利便性を考えメートルや24時間単位等に変換して表記します。ご了承ください】

貨幣については、石貨・青銅貨・銀貨2種類・金貨2種類が一般に流通しており、石貨は5個で青銅貨1枚、青銅貨は100枚で小銀貨1枚、小銀貨は4枚で大銀貨（銀貨）となり、銀貨は10枚で小金貨1枚、小金貨10枚で大金貨（金貨）となるようだ。

単に銅貨と言えば青銅貨のことであり、同様に銀貨、金貨と言った場合は、それぞれ大銀貨、大金貨を言う。

現代の貨幣ではあまり見られない四進法や五進法が十進法と混在しているところから、ニイロが「凄いややこしいな」と顔を顰めて言うとき、ダグは「そうかい？ 慣れだろ慣れ」と笑い、トビンも笑いながら頷いていた。

ちなみに、石貨と銅貨を見せてもらったが、石貨は直径1cm程の、石というよりは緑掛かった、出来の悪いガラスのオハジキに刻印の押された物で、銅貨も材質が銅になった以外は石貨とほぼ同じ物だった。

普段の生活では、石貨と銅貨だけで事足りるらしく、それ以上の貨幣については生憎と手持ちが無いそうで、現物を確認することは出来なかった。

使っても大銀貨止まり。小金貨は勿論、大金貨などは見る事すら稀だそうだ。

この世界の魔法については、事前の調査の通り、かなりの数の巫人を含む人間が魔法を使うことが、証言として得られた。

ただし、その殆どは、指先にマッチの炎程度の火を発現させるのに30分以上の時間が掛かったり、コップ一杯の水を満たすのに1日が必要だったり、とても実用に耐えうるシロモノでは無いようだ。

実用に耐えうるだけの魔法を発動できるのは、数千人に1人か2人

といった具合で、そういった人物は特に魔導士と呼ばれ、ダグが普段拠点としているリユドーの街に2人。今、向かっているトビンの住むカジユ村には1人もいないそうだった。

ちなみに、ダグとトビンも使えないことはないそうだが、ニイロが見せて欲しいと頼むと、トビンには、馬車を操りながらだと一日頑張っても無理だと笑いながら断られたし、ダグには「面倒臭い」の一言で切り捨てられて膠もなかった。

「ま、そんなに見たけりや2〜3日カジユ村にいい。おっつけ仲間が2人やって来る手筈になってんだが、片方がリユドーの街でも数少ない魔導士だかな。

なあに、あの女は魔道具馬鹿^{マニア}だし、あそこに浮かんでるアレでも見せたら、喜んで魔法くらい使ってみせるだろうさ」

そう言つて肩越しに親指で、上空やや後方をフワフワ浮いて追尾しているクラブ・ワンを指してみせた。

そんな自分に話が振られたからでもないだろうが、進む馬車の後方上空で速度を合わせながら飛んでいたクラブ・ワンが、急に高度を下げて「ピポツ」とニイロに注意を促す。

ニイロがクラブ・ワンを見上げると、クラブ・ワンはその場でクルリと方向転換して、装備されているマニピュレーターで遙か後方を指し示した。

その様子に、ダグ達との会話を止めて後方を見やると、ニイロ達が通ってきた街道を、サクラコと装備コンテナを搭載した状態で三機のファージ達が、無限軌道による走行で、もうもうと土煙を上げながら追ってくる姿が確認できた。

サクラコは、控えめな飾り気で紺色の、足首丈のエプロンドレスにブーツ、腕には赤十字のマークが目立つ腕章。

頭には服と同じ紺色の、コック帽にも似た大き目のナースキャップという、大正期の従軍看護師かとツツコミたくなるようないで立ちで、先頭のファージが頭上に抱える装備コンテナの、そのまた上で仁王立ちになってこちらを見ている。

それぞれ共通のグレーのボディーに、識別用に赤、青、黄色で色分

け塗装された、フアージ・ワン、ツー、スリーのセンサーの詰まった頭頂部。それに、向かい風にバサバサと翻るスカートと、ナースキャップからはみ出たサクラコのピンクの髪は、遠目にもよく目立つ。

「おいおいおい、なんだよ、ありやあ……」

後ろを眺めたまま視線を戻さないニイロの様子に、同じく後方を振り返ったダグが呆れたように呟いた。

この街道の状態ならば、おそらく時速三十キロ程は出しているだろう。

道路がアスファルトで舗装され、自動車が主な移動手段であるベータ・アースの常識から見れば、時速三十キロというスピードは、遅いイメージがあるかも知れないが、未舗装のデコボコ道を徒歩、早くても馬車が一般的な移動手段であるガンマ・アース人からすれば、これは相当に常識外れなスピードだ。

「心配ないよ、俺の仲間だ」

ニイロはダグとトビンに知らせる。ただし、サクラコのあの格好については、後でハイマン教授を問い詰めると心に誓いながら。

「なんだか、今日は色々驚かされるねえ……」

ニイロの仲間と聞き、馬車を止めてから振り返り、後方から追ってくる異形達に気付いたトビンも、少し疲れたように呟いた。別に驚かせようとしている訳でもないし、むしろその逆なのだが。

見る見る追いついてきたサクラコ達一行は、互いの顔が認識できるくらいの距離まで来るとスピードを落とし、代わりにフアージから飛び降りたサクラコが、勢いよくニイロに駆け寄ってきた。

「ニイロ！ よくご無事でー！」

サクラコはそう言いながら馬車に飛び乗り、ニイロの様子を観察するが、特に異常の無いことを確認すると、ホツとしたように胸を撫で下ろした。

「ああ、そっちも無事で良かった。紹介しておくよ、こちらがハイ・オークでリュドローの街のダグさんと、カジユ村のトビンさん。気を失って倒れてた所を助けて頂いたんだよ。」

そして、彼女はサクラコ。俺の仲間で、後ろにいる三体はファージって言うんだ」

ニイロはダグとトビン、サクラコに、それぞれお互いを紹介する。「そうですね、それはどうも有難うございました」

サクラコはダグ達に丁寧な言葉を返す。

礼を言われた方の二人は、まだ衝撃から立ち直っていないのか、やや戸惑った風に言葉を返した。

「い、いや、礼を言われるようなこっちはねえさ。なあ」

「そう、そうですね、当たり前のことです」

そんな二人の様子に苦笑しながら、ニイロはトビンに馬車を先に進めることを促した。

「まあ、荷物も届きましたし、お礼もしたので、先に進みませんか？」

そう促されたトビンも同意して、前を向き直すと馬車を進める。

「サクラコ、俺、まだこの毛布の下、素っ裸なんだよ。『サクラコに全レベルの装備アクセスを許可』するんで、俺の服と装備を取ってくれ。装備は俺とサクラコの分のA装備。ファージとクラブは後で落ち着いてからやるので現状のままがいい」

ニイロはサクラコに指示を出したが、これには逆にサクラコが疑問を呈してきた。

「えっ？ 宜しいのですか？ 別に全レベルでなくても服だけなら……」

「いいんだ。ちゃんと考えてのことだよ」

ニイロは、ただそれだけをサクラコに伝える。ダグとトビンの耳があるということもあるが、わざわざサクラコを信用してるから、などと陳腐な言葉にするつもりも無かった。

「……わかりました」

それだけ言うと、馬車に並走するファージに積んであるコンテナに飛び移り、素早く蓋を開けて装備品をチョイスして取り出すと、再び馬車に飛び移って装備をニイロに渡す、という作業を数度繰り返した。

そんな二人の様子を、興味深く黙って眺めていたダグだったが、サ

クラコがアクロバットを披露し始めると、感心したようにニイロに話し掛けた。

「すげえ身の熟しだな、あの嬢ちゃん。それに、あの格好にしても初めて見るし、見たところ着てるものの質も、詳しくはねえが見たこと無いくらい上等に見える。あんなのを連れて旅してるって、アンタ、ホントに貴族様じゃねえのかよ」

そうは言われても、本当に貴族ではないので他に言いようもない。

ニイロはサクラコの取ってくれた服や装備一式を身に付けながら、苦笑しつつ答えた。

「ホントにホントさ。俺個人は正真正銘の単なる一般人だよ。まあ、装備やら何やらは、俺の国のパトロンが用意してくれたもんだから、一般的とは言わないけど」

サクラコが実は人間でないことは、あえて言わない。

「はー、エライ気前のいいパトロンを見つけたもんだなあ、オイ」

「その分、命がけな部分もあるけどな」

「そりゃ全てに美味しい話なんて、ありやしねえよ。どこだって一緒だ」
そんな話をしながら、ニイロはテキパキと装備を整えていく。

上半身は複合素材を用いたボディーアーマーを、ガンマ・アースの世界観にある程度寄せた、茶褐色のレザーアーマー風のデザインに改修した物を装備し、下半身はカーキ色のカーゴパンツとクラシックタイプのブーツ。

腰のベルトにはウエストポーチタイプの亜空間ポーチを装着し、頭には合成樹脂製のヘルメットと、インカム一体型の多機能ゴーグルを装着した。

ヘルメットは特殊樹脂製のカーキ色の、いわゆる鉄帽テツバチタイプに近いデザインで、ゴーグルもサバゲーのゲーマーが付けているような、コンバットゴーグル、或いはタクティカルゴーグルと言われるタイプのデザインになっている。

ニイロ個人としては、レザーアーマーっぽいボディーアーマーに、このヘルメットとゴーグルは似合ってなくない？　とも思うのだが、

ちよつとセンスのアテにならない、ハイマン教授を筆頭にした装備部の連中はともかく、シンシアも『カッコイイです！』と絶賛してたし、自分のセンスに自信があるわけではないので我慢することになっている。

シンシアの上司でもあるアデル女史が、何も言わずにただ首を振っていたのは忘れることにして。

武装は基本のA装備ということで、メイド・イン・アルファ・アースのライン・インダストリー社製トラッドC60自動小銃をメインウエポンに選択した。

外觀は、ベータ・アースでは失敗作に終わったケースレス弾を使用するG11アサルトライフルに似た、直線を主体にしたデザインで、装弾数は三十発。G11と似ているのはデザインだけで、G11と違って普通の薬莖を使った弾薬を使用する。

このライン・トラッドCベースシステムは、銃身ユニットとマガジンを交換することで、5mmから7.7mmまでの数種の口径に対応できる。軽量で一番小さな5mmを選択していないのは、大型のモンスターに対する可能性も考慮してのチョイスだ。

同じ理由で、人間以上の膂力を持つサクラコには、トラッドCの77タイプを装備させた。7.7mm弾を使用して、装弾数50発のドラムマガジンを装着している。

口径が大きくなれば、当然重量も増加して取り回しが悪くなり、携帯できる弾薬数も減るのが常識だが、そこは人間が前提の話であり、サクラコの能力であれば大した問題にはならない。

さらに、トラッドCベースシステムのオプション装備として、2人共にアンダーバレルショットガン、TC12Sを装着している。

TC12Sは、トラッドCの銃身下部に追加する装弾数5発の散弾銃で、12番ゲージと呼ばれるサイズの一般的な散弾を発射することが出来る。

他に40mmグレネード弾を発射できるTC40Tと迷ったが、現在の周囲の状況から、森林内での戦闘を想定して、より近接戦闘向けのこちらを選択した。

ファージとクラブの装備を整えて戦力化すれば、2人がここまで重武装にする必要は無いのだが、他に同行者のいる今は、その時間的余裕が無いので我慢だ。

予備のサブウエポンは、ニイロ、サクラコ共に、これもメイド・イン・アルファ・アースのエンリケ・ファイアー・アームズ製10mm小型自動拳銃で、外観的にはこれといった特徴も無い、ベータ・アースで言うところのグロックシリーズに似たデザインの自動拳銃で、性能的にも近いと言っている。

これをニイロは腰の後ろのホルスターに、サクラコは肩から襷掛けにした、ベージュ色のやや大きめのショルダーバッグに仕舞い込む。

このサクラコのショルダーバッグは、一般的なカメラバッグのように対衝撃性が多少優れている程度で特殊な機能などは無い。他に即応用の医療機器や医薬品なども仕舞い込まれているらしい。

ニイロは転送前の事前チェックでは見たことが無かったので、どうしたのかサクラコに聞くと、転送前にシンシアの私物をプレゼントされたのだそうだった。

さらに、ニイロ個人の所有物として、装備部に特注で作ってもらったマチェットを、ナイロン製のソフトシースに刺して腰に吊るした。

全長60cm弱、刃渡り40cm強程の、特注とは言っても普通の刃物用ステンレス鋼を打ち抜いて刃を付け、反射防止のコーティングをしただけの、特に性能が良かったり、特殊な機能があるわけでもない単なるマチェットだ。

ニイロ自身は一応、剣を使った戦闘訓練は受けたものの、自分が強いとは全く思っていない。ただ、中世の皮鎧風のいで立ちなのに、剣の一本も腰に差してないのはどうなの？ という、気分的なものに過ぎず、武器として使う気は毛頭無かった。

後は、予備の弾倉や様々なツールなどを、それぞれ所定の位置に取り付けて完成だ。

装備について、基本的にベータ・アースではなくアルファ・アース製が選択されているのは、調達の容易さからである。

ニイロが聞いたところによると、個人携帯火器類について性能的に

はほぼ同等、取り回しなどの使い勝手や使い心地についてはベータ・アース製に僅差で軍配が上がる、という評価で、一般兵の役割の大半が軍事用AM、ロボット兵器に置き換えられたアルファ・アースでは、どうしても人間が実際に使う個人用の銃火器の開発は後回しにされがちなのが原因だった。

ただ、そう極端な差がある訳ではなく、目安として口径の近いベータ・アース製の銃火器と同等くらいの性能と思っていれば、そう間違っていない。

多少使い勝手が劣っても、今後、どれくらい長期に渡るかわからない任務の現状では、合法的な調達に難のあるベータ・アース製よりは、確実に調達できるアルファ・アース製になるのは仕方のないことだった。

一通りの装備を終えて、色々聞きたくてウズウズしてそうなダグに向き直ると、やはり、それを待ってましたとばかりにダグが質問しました。

「そのショートソードがお前さんの得物か？」

やっぱり武器が気になるのだろう、ニイロの腰に吊るしたマチェツトを指さしながらダグが尋ねる。

「これ？ いや、まあ、武器としても使えるけど、これはマチェツトとかブツシュナイフって言われるもので、森なんかで枝打ちやら藪開きの下草刈りに使うものだよ。普通は武器として使用されることは無いね」

ニイロは、腰に吊るしていたマチェツトを、ナイロン製の鞘ごと外してダグに渡しながら説明した。

「変わった革？ 布かこれ？」受け取ったダグは、最初、鞘の素材のナイロンに驚き、続いて鞘からマチェツトを抜き放ってしげしげと眺める。

「ほう、見た目以上の重さはあるが、全体としてはけっこう軽いな。しかし、確かにこれで戦うにやあ、ちと貧弱かねえ。

グリップも俺の手には小さすぎる。しかし、こりや素材はただの鉄じゃあねえな？ この素材で普通に剣を作りや、相当な業物が出来そ

うだ。枝打ちくらいで使うのは勿体ないんじゃないか？」

マチェットのブレードは、長さの割に意外に薄く、3mm程度しかない。グリップもニイロ個人の手に合わせてあるので、2m近い体躯のダグだと確かに持ちづらいだろう。ただ、素材がこのガンマ・アースでは一般的でないステンレス鋼なのは気になったようだった。

「実際、普段使いの消耗品だよ。刃は普通の鉄じゃなくてステンレスって言われてる特殊な鉄だけど、手入れしなくても錆びにくいから、俺の国では普通に使われてるものさ」ニイロは答える。

その答えに、ダグはマチェットを鞘に納め、ニイロに返しながら「しかしよ、するつてえと、見た目はともかく、ほぼ丸腰つて訳か？ 余計なお世話かも知んねえが、いくらなんでも不用心すぎねえか？ いくら護衛のゴーレムがいるとはいえ、あれだつてどこにでも連れて歩けるわけじゃねえだろうしよ」と聞いて来た。

その問いに答えたのは、今までニイロとダグのやり取りを、ニイロの横で黙って聞いていたサクラコだった。

「大丈夫です。ニイロは強いですし、今後は私もいますから！」

勢いよく立ち上がると、両手を腰に当て、高らかに力強く宣言して見せた。

突然の横槍に、驚いた顔でダグはニイロとサクラコを見比べるが、サクラコは自信満々の表情で、ニイロはやれやれと少し困ったような顔で苦笑している。

そのニイロの表情を見れば、ダグもわざわざサクラコの宣言に正面から否定してケチをつけるような大人げない真似はしない。

「まあ、確かに嬢ちゃんのおさつき身の熟しを見たら、相当な手練れだつてことぐらいは俺にもわかるぜ。でもよ、得物はどうすんだ？

リユドーの街まで行けば、手頃な武器も売ってるが、今向かってるカジユの村じゃあ、ロクな武器なんざ入手できねえぜ？」

ダグにそう言われると、サクラコはキョトンとした顔で、タクテイ・クカル・スリングで背負っていたトラッドC77自動小銃を正面に回し、人のいない方向に向けて構えて見せる。

「武器なら、これがありますか？」

すると、今度はダグがキョトンとした顔をする番だった。

「これって、それ、武器だったのかよ……」

ダグはサクラコの構えるトラッドC77自動小銃を指さしながら言った。

ダグからすれば、刃も無く剣には見えないし、鈍器としても余計な突起が有りすぎる。弓にしては弦も矢も見当たらず、杖にしたって中途半端な長さだ。これを武器と判断するには、ダグの常識とはかけ離れ過ぎていた。

「そういやニイロも同じもの持ってんな。てことは魔道具？ どうやって使うんだよ？ 強^{つえ}えのか？」

ダグが興味津々と言った態度で聞いて来る。どうやら、ダグの中のニイロは魔道具使い、という位置に落ち着きかけているようだ。

ニイロとしては、ここで銃の威力を見せること自体は全然問題無いと思っっているが、ただ遠くに向けて撃つただけでは分かりづらいだろうし、手近な動物を探して撃つにも、単なるデモンストレーションで無益な殺生をするのは気が乗らなかつた。

「うーん、使っ^てて見せるのは別に構わないんだけどな……要するに矢の鏃^{やじり}だけを遠くに、高威力で次々に飛ばせる道具だと思っ^てくれ。単に飛ばすだけじゃ弓の良し悪しなんて分かりにくいだろ？」

「ほー、するってえと弓使いみたいなものか。まあ、手の内を全て晒せなんて無茶は言わねえよ」

「ああ、別に見せたくないって訳じゃないし、機会があつたら見せるよ」

そう言っ^てダグには納得してもらつたが、サクラコの方は、どうやら射撃の腕を披露したくて、やる気満々だったらしく、何やら不満気だ。

ニイロは苦笑しながらも、なんとかサクラコを宥めて座らせると、相変わらずガタガタゴトゴトと揺れる馬車の進行方向を眺めやる。

日は大分西に傾いているが、日没にはまだ2時間弱程度あるだろう。

「そろそろ村に着くのかな……」

そう呟いたニイロに、珍しくダグではなくトビンの方が答えた。

「そうですねえ。あと少し、日没前には余裕で着きますよ」

やはり、自分の村に帰るからなのだろうか、その声は少し弾んでい
るようにも思える。

「この辺は初めてなんだろう？ よくわかったな」 ダグが少し不思議
そうに言った。

実は、ニイロの多機能ゴーグルの内側には、並走している3機の
ファージ達や、上空を、高度を不規則に変えながら追尾しているクラ
ブ・ワンから送られてくる、レーダーと映像データから構築されたミ
ニマップがリアルタイムで表示されている。

それによれば、馬車の進む方向の約5キロ程先に、周囲を堀と柵で
囲った小さな集落があるのが確認できた。

柵の外側にも畑らしい耕作地があるようで、幾人かの村人らしき
輝点ポインタが動いている。近いものは、もう間もなく視界でも捉えられるだ
ろう。

「ああ、この辺は初めてだけど、ちよつとばかりズルしたからね」

そう言ってニイロは笑ったが、ゴーグル内に表示されるマップの輝
点の動きを見て、その笑いをすぐに引っ込める。

同時に、サクラコが馬車の進行方向右手側、林の奥に視線を向け、ニ
イロに短く報告した。ニイロの見ているデータは、サクラコも同時に
見ている。

「追われているようです」

その緊張感を伴った声に、ダグは素早く得物のハルバートを掴む
が、まだ状況が掴めずに鋭い視線でサクラコとニイロの様子を窺う。

「間違いない?」

一応、サクラコに確認を取る。

「はい、恐らく」

「クラブ・ワン、偵察を。お前はまだ非武装だから戦闘は回避。」

ニイロがゴーグル内に表示されるポインタに視線入力で目標を設
定し、上空のクラブ・ワンに指示すると、クラブ・ワンは「ピポッ」と
返事をして目標上空に向かっていく。

ニイロは、それを目で追いつつ、サクラコに向かって短く聞いた。「行ける?」

「はい、行けませんが、それではニイロの護衛が……」と、サクラコは少し渋る様子を見せる。

「俺も後を追うが、時間が命だ。先行してくれ。それに、俺は強いんだろ?」

そう言われると、最後はにこりと笑顔を見せるニイロの言葉に、サクラコは反論出来ない。

「わかりました。向かいます。なるべく早く追いついて下さいね」

サクラコは言うと同時に馬車から飛び降りると、あつと言う間に林の奥へと姿を消す。

それを見送ったニイロは、右手に広がる林の奥を指さしながら、ダグに向かって状況を説明した。

「時間が惜しいので手短に言うけど、あの林の奥で誰か2人が、何かに追われてるようだ。追手は30人以上で、まだ増えてる。サクラコに救出に向かってもらったけど、俺も追う。ダグはどうする?」

「何だ?! その数は放つてはおけん。俺も行くが……その数に嬢ちゃん一人で先行させて大丈夫なのかよ!」

ダグは即座に決断する。

「よし、それじゃ行こう、サクラコなら大丈夫。トビンさんは、このまま村に向かって下さい。護衛にフアージ達を付けますから、先に村に着いたら村の人達に説明をお願いします。フアージ達も頼んだぞ」

「ピポツ」「ピツ」「ピユイツ」フアージ達は、それぞれビーブ音で了解の意思を返す。

「ああ、わかったよ。そっちも気を付けて」

村人の危機かも知れないと聞いて狼狽えていたトビンも、ニイロの指示に戸惑いを見せながらも従ってくれた。

馬車を飛び降りたニイロとダグは、サクラコの後を追ひ、林の奥へと突き進んでいった。

第7話 伯爵家の事情

ルードサレンは、この地を統治するダスターツ伯爵家が所有する領都である。

ダスターツ伯爵領は、北にあのヒマラヤ山脈をも凌ぐ、標高1万mに達する人跡未踏のノレーゲン山脈が横たわり、平地を挟んで南には標高千mから3千m程の山々が連なるホロゲノン山地の山々が、起伏に富んだ地形を形作っていて、その峡谷は南の隣国との境界線にもなっている。

東にはサルエント子爵を筆頭にして、幾つかの弱小貴族の領地が点在し、そのさらに東には、広大な荒地を挟んでネステル帝国が牙を研いでいる。西は王家直轄領だ。

東西に長く南北に短い、帯状の領地だが、北のノレーゲン山脈から流れ出るウーノス川、マロネス川、両川の恵みで比較的耕作に適した土地も多い為、食料の自給率も高く、また、非公式ながら西の王都と東の帝国を結ぶ街道からの通行税による収入によって、王国の貴族の中では比較的裕福な方に入る。

今、このルードサレンには、2つの騒ぎが巻き起こっていた。

一つは毎年恒例のことではあれど、晩秋から初冬に掛けての季節になると、北にあるノレーゲン山脈に生息するモンスターの集団が大挙して南下し、領内に侵入してくる為、これに対する備えが必要になることだ。

これが散発で数匹や数十匹程度の規模ならば、領軍を動かすことで対処もできるのだが、稀に数百から、時として数千の規模の群れがダスターツ伯領を襲い、甚大な被害を被ることがある。

その為、これに備えてノレーゲン山脈の麓一帯に、前もって偵察隊を繰り出す必要があり、数を揃える為の傭兵の募集や、それに応募する傭兵達、それを目当てにした商人達と、非常時には数千の兵を収容した城塞となるルードサレンであっても、そのキャパシティを超える人間が集まって、混乱の極みを演出しているのだ。

実は、毎年恒例のことではあっても、例年ならばこれほどの人間は

集まらない。

今年の領都を、これほどまでに混乱させている理由の、もう一つが、最近になって南のホルーゲン山地の中、隣国との境界線にもなっているヨードフィル溪谷のダスターツ領側で大規模な銀鉱が発見されたことによる。

これによつて、南の都市国家連合がキナ臭い動きを見せ始め、これに対する備えの為に軍備を拡張する必要が出てきたことから、人員の募集をさらに拡大せざるを得ず、混乱に拍車が掛かっているのが現状だった。

今も、ルードサレン城の一角にある政庁の執務室に於いて、この地の主であるログソン・ロウ・ダスターツ伯爵が、短く刈り込んだ銀髪を掻きながら、配下の文官達から上がって来る、うんざりするような量の資料を、唸りながら処理していた。

ダスターツ家当主、ログソン・ロウ・ダスターツ伯爵は62歳。身長は165cmと、それほど高くはないが、筋肉質のがつしりした体格は、若い頃、東の帝国や、南の都市国家群相手の戦争で幾多の殊勲を挙げた猛将でもある。

リドリスファール王国国王マイオ・ドウ・リドリスファールの信も厚く、伯爵という、低くは無いが、それほど高い訳でもない家格にも関わらず、王国の東の要であり最重要地の一つである現在のダスターツ領を拝領している。

「失礼いたします、旦那様。差し出がましいようですが、お茶を用意致しますので、そろそろ一度休憩なされて、気分を変えられては如何でしょうか？」

閉ざされた執務室の扉の横で、立ったまま控えていた侍女が、ログソンの体を気遣って提案する。

その言葉に、ログソンは一瞬だけ苛立たし気な表情でチラリと侍女を見たが、ふと目を閉じて息を吐き、再び目を開けると、今度は厳つい顔に笑みを浮かべて言った。

「そうだな。根を詰めても仕方が無かろうな。侍女長殿の言う通り休憩にするか」

ログソンは、自分が短気だという自覚がある。なので、そんな自分を戒め、それがログソン、引いてはダスターツ家の為を思つての直言であるならば、それが的外れなことであつても決して叱責したり処罰しないと公言し、厳格に実行している。

身分格差の大きい、この世界に於いては、理由に係わらず平民の方から貴族へ言葉を掛けること自体、時に命懸けの行為である。

それがダスターツ家に於いては、咎められるどころか、寧ろ褒められるのであるから、侍女達に限らず、家臣は主家の為になることなら躊躇わず口に出ることが出来、それを誇りにすら感じている家臣も多かった。

エルンは自分の意見が聞き入れられたことに喜びの表情を見せながら、執務室の扉の外に控える待機番の別の若い侍女にお茶の用意を指示し、執務室中央に鎮座するテーブルに、テキパキと準備を進めていく。

そんな彼女を眺めながら、ログソンは執務机から立ち上がると、うん！ と一伸びして固くなつた筋肉や筋を伸ばす。

さらに左右に体を振じつてストレッチしながら、部屋の窓から見える庭を眺めやった。

よく手入れされた庭には秋の草花が美しく咲き誇り、その先にはログソンの孫娘であるメリーチェ・ロウ・ダスターツが、後ろに御付きの侍女を連れて、時折しやがんでは足元の草花を愛でながら散歩している姿が目映る。

夏の物とは違う、やや涼しさを伴つたそよ風に靡く金髪が美しい。

メリーチェは次期伯爵家を継ぐはずだった嫡男の忘れ形見で、ログソンにとっては目に入れても痛くない存在であつたが、同時に悩みの種でもあつた。

現在、ダスターツ伯を継ぐ人間はメリーチェしかおらず、来年15歳の社交界デビューを果たす彼女に婿を取つて、女伯爵としてダスターツ家を継がせるべきか、それとも一族の誰かを養子に迎えてダスターツ家を継がせ、メリーチェには、別に夫となるにふさわしい人物を探して宛がうべきか、どちらにしても、可愛い孫娘の幸せを一番に

考える祖父としては悩ましい限りだ。

そんなことを考えながらも、窓から視線を切つてテーブルに設えられた席に着くと、タイミング良くエルンが淹れたてのハーブティーの茶の入ったカップを置く。

ログソンはカップを手に取り、ハーブティーの香りを楽しみながらも、ふと気になったことをエルンに尋ねた。

「そういうえば、ギータンはどうした？ 珍しく今朝から一度も姿を見せておらんが」

ギータンとは、ギータン・ポアルソン。ダスターツ伯領軍のトップであり、軍事面でのログソンの右腕でもある。

彼もまた、ルードサレンで現在進行中の混乱を少しでも抑えるべく、一日中忙しく領都内を走り回っていることも珍しく無いのだが、立场上、報告を受けたり確認の為、全く政庁に姿を見せないというのも、これはこれで珍しい。

「ポアルソン様でしたら、私もまだ本日はお目に掛けておりませんが……聞いて参りましょう」

そう言つて部屋を出ようとするエルンを、ログソンは慌てて止める。

「いや、良いのだ。少し気になっただけで、用がある訳でもない。探したと知られば良い気分はせんだろう」

この気遣いが、他の貴族と、この主人の決定的な違いだとエルンは思う。

自分が知る他の貴族であれば、家臣がどう思うなど考えすらしないだろう。

しかも、この敬愛する主人は、それをたかが侍女に過ぎない自分今まで説明してくれる。

止められたエルンは、少しだけ残念そうな素振りを見せながら「畏まりました」と一礼して所定の位置に戻るが、それを待っていたかの如く、扉の外でログソンへの面会の意を告げるギータンの声が聞こえた。

その声に、ロフソンとエルンは、思わず顔を見合わせて苦笑する。

「噂は人を呼ぶ、で御座いますね」 笑いながらエルンが対応に当たる。

入室の許可を得て、ギータン・ポアルソンがログソンの前に姿を現した。

細身の男で身長は180cm強、瞳は明るめのブラウンで、軽くウェーブの掛かった赤毛は、軍人にしてはやや長め。年齢は今年42歳になる。

いつも冷静沈着を地で行くこの男には珍しく、表情には何故か困惑の色が窺え、急いで来たのだろう、前髪は汗で額に張り付いているが、それでも一応は作法通りの挨拶を述べようとしたギータンを、ログソンが制する。

「良い。何があつた？」

その問いに、ギータンは姿勢を正して答える。

「リュドローのスコバヤ殿から急使が届きました。モンスター共の移動が確認された、と」

「……始まつたか」 忌々し気にログソンは呟く。

「今年は随分と早いな。それで？ 第一波の種類と規模は？」

モンスターと一括りで呼ばれることも多いが、実際は多種多様に及ぶ。ゴブリンの100匹と、ドラゴンの100匹では対応の難易度に雲泥の差があるのは想像に難くないだろう。

なので、まず種類と規模を確認するのは基本中の基本だ。

「それが……100近いコボルドと、それに加えてギガントライが12と……」

言い難そうにギータンが報告する。

「何っ！ ギガントライが12だと!」

ログソンが椅子から飛び上がり、驚きの声を上げた。

100のコボルドは、数が数だけに簡単では無いが、まだ何とかかなる。しかし、ギガントライは全長10m弱の、毛むくじやらの犀に似たモンスターで、その突進が始まってしまうと、最早人間では止めることが難しい。

一応、出現の可能性は考慮していたが、その習性から群れで現れる

のは全くの想定外だ。

単体であれば、事前に落とし穴を掘って誘い込み、動きを封じてから仕留めるのが定石だが、それが一度に12匹では、一網打尽に出来る程の落とし穴を掘るなど人力では不可能だし、かと言って散らばられば收拾がつかなくなる。

「リュドールの常駐兵は50だったな？ 騎兵は10か………。傭兵を追加するにしても………1、2匹程度なら何とかなるが………多すぎる！」

「はい………既にルードサレンの領軍からも、騎兵を20と、傭兵から乗騎を持つ者を優先に選抜して30を、御下命あらばいつでも出立できるように準備しております。」

しかし、その後すぐに続報が届きまして………その………リュドールのスコバヤ殿はお若いが優秀な方であることはお館様もご存知の通りで、このような事に嘘や冗談を交えるとも思えず………」

驚いたのも束の間、直ぐに対応の算段を思案し始めたログソンを押しとどめて、ギータンは言葉を続けたが、この男にしては珍しく、途中から何やら言い難そうに言葉を濁した。

そのギータンの様子に何かあると感じたログソンが、単刀直入に聞く。

「続報には何と？」

そう迫られて観念したのか、ギータンは表情を引き締め直して答えた。

「それが………コボルド、ギガントライ共に、既に殲滅した。」

◇ ◇ ◇

ルードサレンのログソン・ロウ・ダスターツ伯爵宛てに鳩便を飛ばす指示を出した後、リュドールの街の代官であるアデッティ・スコバヤは、代官所の執務室で思わず頭を抱えていた。

夜更けにカジユ村からの急使が緊急事態を告げ、叩き起こされてからこれまで、事態の把握に努めてきた。

若くして抜擢され、このリュドールの代官を任されているスコバヤは、年齢24歳。この辺りでは珍しい黒髪を肩の辺りまで伸ばし、ヘーゼルの瞳をした才媛である。

「如何致しましょうか……」

やや気弱そうな表情をした副官のゾイーネが声を掛けるが、この上司にしては珍しく答えは帰ってこない。

ゾイーネは文系の副官であり、こういった状況には慣れていない。リュドールの常駐兵50にとっては、コボルドの100だけでも重荷だ。やってやれないことはないが、犠牲を考えると頭が痛い。

街の警備に騎兵2と歩兵10を残すとして、残りが騎兵8と歩兵30だ。緊急に傭兵を雇うにしても、どれだけ集まるか……。

「傭兵はどれだけ集まっているの？」

その質問に答えたのは、リュドールの常駐兵のトップである、赤ら顔のハズンだった。

「まず、乗騎を持つ傭兵が3名、それに歩兵が21名です」

「全部で24か……うちの騎兵8人に、その乗騎持ちの3人を加えて先行させて。ギガントライの前方で気を引いて、なるべく被害の少ない方に誘導しつつ時間を稼がせるように。」

歩兵は、うちの20に傭兵の21を加えてコボルドに当らせる。そちらも準備が出来次第出発させて」

それくらいしか打てる手は無かった。

「傭兵の募集は引き続きかけて。穴掘りの人手はどれだけいてもいい。今は金より人手よ」

どれだけ考えても、12体のギガントライというのが余計だった。

カジユ村に、リュドールでは有名な傭兵の、ハイ・オークのダグが先着しており、その仲間2人が既に向かっているというのは朗報だったが、それも複数のギガントライに対しては意味が無い。今、必要なのは数だ。

「私も出ます。後はゾイーネに任せるから、ある程度人数が纏まったら逐一出してちょうだい」

「しかしそれでは……」ハズンが異議を唱えるが、それを遮つ

てスコバヤは言い募った。

「今は人手が一人でも欲しいの！ ハズンも第二陣で数を纏めたら出てちょうだい」

「人手が足りないのは分かっています！ しかし、後を託すにしても、荒事に慣れてないゾイーネでは荷が重い」

荷が重いと言われたゾイーネも、青い顔で頷いている。

「カジユから続報です！」

言い争う2人を他所に、兵の一人が慌てふためいて執務室に飛び込んできた。

室内にいた3人の視線が一斉に兵に突き刺さる。

「「何があつた!?!」」

リュドールの街の権力者トップ3の視線と声にたじろぎながらも、なんとか兵はその役目を果たす。

「それが……コボルドもギガントライも排除した。と」

「は?」

「え?」

「何?」

その答えに、3人の口から三者三様ながら信じられないと疑問符が漏れる。

「何を言ってるの!?! 相手はギガントライよ? そんな簡単にケリの着く相手じゃ無いでしょう!」

アデッティが混乱にイラついたように怒声を飛ばした。

「もしかして、ギガントライは誤報だったとか?」

ハズンが真相を思いついたように予想を話すと、ゾイーネもそれに同意した。

「だとしても、もう、ルードサレンには一報を報告済みよ? 今更間違いましたとか、失態にも程があるわ……」

忌々しげにアデッティが呟く。

「やっぱり自分で確かめる! 急いで馬を用意してちょうだい。ハズンとゾイーネは残って、ギガントライが本当だという前提で準備を。ハッキリしたら鳩便を飛ばすから、それで行動するように!」

素早く指示を飛ばすと、取るものも取りあえず、アデッテイは執務室を後にした。

第8話 初陣

ニイロとダグは、倒木や灌木で足元の悪い林の中を走っていた。

とは言っても、行く手を遮る木々を迂回し、低層の枝や灌木を、案内役のニイロがその手に持つマチェットで切り払いながらの事であり、なかなか思うようには進めていないが。

前方からは、早くも先行したサクラコの放つ銃声と、幾つもの敵の絶叫が響いていた。

「クソツ、もう始まってやがるのか!？」 あの嬢ちゃん、早すぎるだろ！
にしても、何だあの音は！」

初めて聞く、木々に木霊して響いてくる銃声に戸惑いつつ、行く手を遮る枝を、得物のハルバートで薙ぎ払いながら、ダグが苛立った声で叫んだ。

やがて、一本の木の根元に倒れ込んだ若者2人を、その背後に匿いながら、トラッドC77の小銃弾と、TC12Sの散弾を巧みに使い分けて敵に対応するサクラコの姿が視界に入ってきた。

「待たせたサクラコ！」

その姿を目にしたニイロは、サクラコに呼びかけつつ、手に持ったマシエットを鞘シースに納める時間すら惜しんで、手近な敵に向かって投げつけ、代わりに背中ヒッコリのトラッドC60自動小銃を手にする。

物語の主人公ならば、格好よく敵に突き刺さるのだろうが、実際は木立に邪魔され敵の注意を引き付けただけで、ニイロに気付いた敵は、手に持った蛮刀を振り上げ、意味不明な唸り声でニイロを威嚇して来た。

そこで初めて、落ち着いて敵を観察することが出来たが、尖った鼻と大きな三角形の耳が目立つ。

その体軀は小さく、個体差はあれど、人間であれば小学生くらいのおおきさの薄汚れた青灰色の亜人だ。

粗末ながら服のようなものを身に纏い、ガウガウト、声と手振りで仲間同士のコミュニケーションを取っているらしき事から、ある程度の知能はあるらしい。

「うおつ、^{コボルド}狗人族かよ！ もうこんな所まで降りてきてやがったのかい」

追いついたダグが言う。後半の意味は不明だが、^{コボルド}狗人族という言葉に、ニイロは驚いて聞き返した。

「えっ？ あれって^{コボルド}狗人族なのか」

ニイロにすれば、この世界の亜人は初めて見るものばかりである。てつきり、^{ゴブリン}小鬼族かな？ と見当をつけていたのだが、どうやら違ったらしい。

ニイロの感覚からすれば、かなり無理矢理な解釈にも思えるが、言われてみれば、確かに、前に突き出した鼻と大きな耳は、^{コボルド}狗頭に見えなくもなかった。

「応よ！ ちと数が多いが蹴散らすぞ！」

そう言つて前に飛び出そうとするダグを、ニイロは慌てて引き留める。

「待て！ ここから前に出られるとサクラコの邪魔になる。ここは任せて、あの2人の護衛に回ってくれ！ サクラコ、そっちの2人の容態はどうだ!？」

ニイロはサクラコの後ろに倒れている若者2人を指さして、ダグに指示しながら、自分はサクラコの射線に対して共同で十字砲火を形成できる位置に移動しながら、次々と林を抜けて殺到する^{コボルド}を、バーストショットで撃ち倒していく。

「見たところ2人共に軽傷ですが、詳しい診断はまだです！」

サクラコは、その身体能力を遺憾なく発揮して、次々と襲い掛かって来る^{コボルド}を、単発で1匹づつ、確実に仕留めながら、ニイロに答える。

彼女の前には、7・7m弾で頭を吹き飛ばされ、ショットガンで腹に大穴を開けられた^{コボルド}の死体が、まるで道を成すように転がっていた。

「ダグがそっちに着いたら、交代して、2人の診察と手当を！」

その指示に、サクラコは「了解しました！」と短く応え、ダグも「よし、あつちは任せろ！」とだけ応えて、余計なことは言わずに指示に

従ってくれた。

サクラコは言わずもがなだが、傭兵であるダグが素直に指示に従ってくれるのは、ニイロからすれば非常に有難い。

次々に撃ち倒されながらも、初めて見る銃という武器を、武器として脅威に感じる知性が無いのか、それともそういう習性なのか、コボルド達は全く怯んだ様子もなく、林の中からワラワラと湧いて出ては倒されるという惨劇を、いつ果てるかともなく繰り返していた。

(まるでゲーセンの射撃ゲームだ)

ニイロにとっては初めての实战に昂りながらも、相手がコボルドという亜人だからなのだろうか、どこか冷静な自分が頭の奥で呟く。

人間相手だと、こうはいかないだろうなという予感もあるが、今はそれを考えても仕方が無いと頭から振り払い、機械的に撃ち倒していく。

見ると、サクラコと交代したダグが、未だ倒れたままの若者2人と、診察するサクラコを背に庇いながら、巨体に似合わぬスピードと、ハルバートという得物の長いリーチを生かし、殺到するコボルドを、文字通り薙ぎ払っていた。

コボルドの襲撃は途切れることなく続いたが、それも散発になり、いつしか周囲は薄暗くなっていた。所謂、黄昏時だ。

周囲に転がるコボルドの死体は既に100近い数であり、コボルドの獣臭と錆びた鉄のような血の臭いの入り混じった、不快な空気が辺り一面に立ち込めている。

疲れを知らないサクラコは兎も角、ニイロは初めての实战から来る緊張で疲労困憊だったが、コボルドの襲撃も止まったようで、やっと一息つける間が出来ていた。ちなみにダグはまだまだ元氣一杯で、鼻息も荒く周囲を警戒している。

ニイロは、やっと出来た間を機会に、多機能ゴーグルをナイトビジョンモードに切り替えて周囲を警戒しつつ、同時に表示されているミニマップを拡大して周囲の状況を確認する。

あれだけ多かったコボルドは激減しており、あと数匹もいないが、直線距離にして1km程の地点に、コボルドや人間より明らかに巨大

な点の動きがあるようだ。

ミニマップに表示されるその数は12体だが、薄暗くなった空と、周囲の木立もあって肉眼では確認できない。

直ちにクラブ・ワンに指示を出し、上空からの映像を見ると、見たことのない毛むくじやらの巨体を持った生物が確認できた。

「サクラコ、2人の様子はどうか？ 大丈夫なようなら、少しの間だけ周囲の警戒に当たってくれ。そしてダグ、ちよつとこっちに来て、これを見てくれないか？」

「はい、こちらは大丈夫です。意識はまだ戻りませんが、バイタルも安定。命に別状は有りません」

サクラコはそう言うと、脇に置いていた銃を持って、周囲の警戒に当たる。

代わってダグが、「何だ？ 見せてえものって」と言いながらニイロの所にやって来た。

ニイロは腰の亜空間ポーチを操作して、中からベータ・アースでは一般的なデザインの10インチ携帯端末を取り出して、クラブ・ワンから送られてくる上空からの映像を表示して見せる。

それを見たダグは映像を見ると、目玉が飛び出るほど驚いて声を挙げた。

「うおっ！ 何だよこりや、絵が動いてる!? こんな魔道具初めて見るぞオイ!!」

(あ、そうか。驚くところ、そこかー)

ダグの様子に、考えて見れば当たり前の反応かと思いつつも、ニイロは本題へと軌道修正を行う為に説明する。

「うん、いや、魔道具と言えば魔道具なんだけど、今はそこじゃなくって、映ってるこの角付きの毛玉のオバケを見てくれ。この画面だと分かりにくいかも知れないが、全長10m近い怪物だ。こいつが、この先1kmくらいの所に10匹以上いるんだよ。こいつは危険か？」

そう尋ねられて、ダグが改めて映像を凝視する。

最初はしきりに眉を顰めたり、首を捻っていたが、その内に、はたと何かを思いついたのか、目を見開き、驚愕した表情でニイロに告げ

た。

「こりや上から見てるんだな？ それでピンと来なかったが、大きさから言って、こいつは恐らくギガントライだ。本来はもつと北に住んでるんだが、寒くなると、時々南下してくる。」

普通は単独、運が悪けりや番の2匹で行動してるが……

1、2、3……こりや10頭以上いるな。こんな数は俺も今まで見た事ねえ。

恐らくだが、さっきのコボルド共が何かして、それで追いかけて来たか……コボルド共も様子が変だったしな。

基本は大人しいが、ちよつかい掛けたり、何かの拍子で突進を始めたら厄介で、普通は単独でいるところを、でかい落とし穴に落とし突進止めてから仕留めるんだ。

だから、こいつを仕留めるには1匹相手でも100人近い人手が必要で、準備も無しに突進始められたら、もう止まるまでは逃げるしかねえ。危険なんて生易しいシロモノじゃねえよ」

その話に、ニイロも眉を曇らせる。

アフリカ象の倍の巨体を持つとはいえ生物だ。正直に言えば手持ちのポーンとクインを動員して、全滅させるのは難しくないと思える。が、大人しい生物なら、何とか駆除せずに事を収めたい。

たった今、コボルドを殲滅しておきながら今更、と言われるかも知れないが、ニイロはこの世界に大量虐殺をしに来たわけじゃない。

「ではどうする？ 今は暗くなって止まってるみたいだが、朝になって動き出す前に、何か打てる手はあるか？」

ダグは首を左右に振って、ニイロの希望を否定した。

「無理だ。もう村に近すぎて人手を集める時間も無えし、時間があつたとしても10頭以上なんて数じゃ穴を掘る場所もねえ。どうしたもんだか…… 上手く村から逸れても、行く先で大事になるのは目に見えてる。」

取り敢えず、朝になってまた進み始める前に、急いで女子供を逃がす算段をした方がいい。

それと急いでリユドーの街の代官に知らせて、領軍を動かしてもら

うくらいしか、今は考えつかねえよ」

悔しそうにダグが言い、ニイロは決断した。他に手段が無いのであれば、自分たちがやるしかない。

村人を村から一時的に避難させても、状況によっては村に甚大な被害が及ぶ可能性は高いように思える。

貴族の嫌われっぶりを見ても、この世界で弱者の為の福祉政策が充実してるとは思えないし、これから冬に向かう季節を、村人達が無事乗り越えられる保証は無い。

「わかった。あのデカブツは俺達で対処する」

これは害獣駆除だ。ベータ・アースに於いても、街近くまで降りてきた猛獣を、己む無く射殺駆除することは毎年行われているのだから。

ニイロがそう言うと、ダグは驚いてニイロを見つめる。

「おいおい、話聞いてたのかよ。あいつをやるにやあ、1匹相手だって100人くらい人が要るんだぞ？ それを嬢ちゃんと2人でやるなんて自殺行為以前の話だ。

「だいたい、何でそこまでする必要がある？ アンタにや何の柵しがらみも無えんだから、さっさと逃げりゃいいじゃねえか。

確かに嬢ちゃんもアンタも強い。それは見て納得した。しかし、むざむざ死に行くのを、はいそうですかと見送れるもんかい！ ……おい！ 嬢ちゃんも笑ってねえで止めろよ！」

そう言って食って掛かるダグに、ニイロは苦笑しつつ答えた。

「何でって…… 何でだろうなあ？ まあ、無駄に死ぬつもりは無いし、ちゃんと目算は付いてる。それにしても……アンタ、いい漢だな」
突然の誉め言葉に、ダグは目を白黒させて絶句する。

「な…… 何を……」

「まあ、今は時間が惜しいし、あの怪我人2人を担いで村に急ごう」
そう言って行動を促すニイロに、まだ目を白黒させたままのダグは、言葉もなく従った。

所在無げに、ふとサクラコを見ると、サクラコもにっこりと笑いなから、自慢げにダグに言う。

「大丈夫です。ニイロに任せれば問題ありません」

◇ ◇ ◇

未だ意識の戻らない村の若者2人を担いで、ニイロ達が村に到着した時は、既に日はとっぷりと暮れていた。

ダグとニイロが手分けして、一人づつ担いで来たのだが、一向に戻る気配のない意識を心配してサクラコに聞くと、意識が戻らないのは鎮痛剤の効果だから心配無いということだった。

一人は背中にやや深い傷を負っているが命に別状は無く、止血と消毒、造血剤の投与と、傷口を医療用のテープで留めて手当しており、もう一人は足首に骨折があるので、患部を特殊樹脂のギプスで固定し、2人共に鎮痛剤を投与したのだそうだった。

ちなみに、ニイロが回復魔法は無いのかとダグに聞くと、「そんな都合のいいもん、あるもんかい！」と、にべもなく否定された。

魔法で火や水は出せるのに、治療だと都合のいいもん呼ばわりとは、ニイロからすれば、「解せぬ……」という思いを捨てきれなかったが。

村に到着すると、トビンから話を聞いた村人達が、篝火の焚かれた村の広場に集まっていた。

中心にはトビンがおり、その後ろにはトビンが説明し易いようにファージ・ワンが控え、ファージ・ツーとファージ・スリーは、それぞれ村の入り口の警護に当たっている。

トビンは村に帰着すると、急いで主立った村人達に異常を知らせて回り、広場に村人が集まった所でファージの存在を説明したり、今日あった出来事を詳しく説明していたのだが、その内、遠くから今まで聞いた事のない破裂音が響き、それがいつまでも止まないことから、不安がる村人を宥めつつ、3人の帰りを待っていたのだそうだった。

これからの手順は、村への道すがらダグに説明してある。

ニイロとサクラコは、早急にファージとクラブの装備を整え、夜が明けてギガントサイの群れが動き出す前に引き返して、村に被害の出

ない方向に誘導しながら群れを殲滅する。

そしてダグは、万一に備えて、これから出来るだけ早く村人達を引き連れてリュドーの街に避難させると同時に、リュドーの街の代官に早馬を走らせ、緊急事態を知らせる。

これが、今、出来ることの全てだった。

ここで少し驚かされたのは、トビンがカジユ村の村長だったことだ。

村長自身が村の外に出掛けていたとは思っていなかったが、予め信頼を築いていたお陰で、事情を話し、村人達に徹底させる手間が随分と省けたのは助かった。

ニイロとサクラコは、手分けをしてファージとクラブに武器を搭載していく。亜空間ポーチから予備機のファージとクラブも引つ張り出し、ファージ4体、クラブ4機の2個小隊+サクラコが、このニイロ支隊の全戦力だ。

最初、ニイロとしては、麻酔弾の使用も考慮したが、サクラコによれば、あれだけの巨体を10頭以上も眠らせるだけの麻酔剤は装備の在庫に無く、それならば、せめて数体でも、という提案には、眠らせて捕らえても、その後の処置を考えれば殺すしかないというダグの言葉に諦めざるを得なかった

そこで、それならばせめて、長く苦しませることのないように、と、オーバーキル気味の装備で挑むことにした。

ファージには、メイド・イン・アルファ・アースの90mm対戦車有線誘導ミサイル発射機を装備させる。本来は、対ドラゴンを想定した装備で、実際にドラゴンに対する効果も確認済みとのこと。

有線誘導という点、少し旧式のイメージがあるが、実際に旧式の在庫処分品である。国際科学技術管理局は学術研究機関であって軍隊ではないのだ。予算の都合もあるし、武器の調達の本職ではないので仕方が無い。

1機につき、1発つつキャンニスターに入ったミサイルが4発装備出来るので、合計16発。誘導はファージのAIが行うし、10頭のギガントライに1体1発以上の余裕もある。

如何に巨体とは言え、本来、戦車を相手にする対戦車ミサイルに1発以上耐える生物が、そうそういるとは思えなかったが、念には念を入れてクラブの装備も整える。

クラブ4機には、50口径12.7mm機銃を1丁づつ、弾薬300発と共に装備させた。

武装が少ないように思えるかも知れないが、元々クラブ達は非軍事用の探査機^{プローブ}を、ニイロの支援用にと急遽改造したもので、ペイロードにそれほど余裕が無いのが一因である。

それでも、^{アンチマテリアル}対物ライフルにも使用される物と同じ50口径の弾丸の徹鋼弾、それも連射を食らえば、どんなに分厚い頭蓋であっても物理的に打ち抜けないとは思えない。

ニイロ自身は、より軽量の携帯用60mm対戦車ロケットランチャーを2本担ぎ、サクラコには50口径^{アンチマテリアル}対物ライフルを持たせて準備は完了だ。

サクラコの装備はクラブの物と同じ50口径だが、より貫通力に優れた弾薬を使用する為に、連射の効かない単発リロード仕様となっている。

ニイロとサクラコの装備はあくまでも予備であり、咄嗟の事態に備える物で、今回、ニイロ自身が前に出る予定は無い。その前に片が付くと考えている。

夜が明けるまで後2時間程、という時刻になって、なんとか準備を整えたニイロ達は、どうしても着いていくと主張するダグを伴って、^{急ぎ}ギガントライの群れが屯する地点へと取って返した。

着いてこられてもすることは無いと最初は断ったのだが、村人の先導は村の自警団で事足りること、村の危機に誰も関係者がいないのは事後の報告もできないことなどを主張されれば、絶対にニイロの指示に従うことを条件に、それ以上無理に断ることも出来なかった。

現地に着くと、夜明けまでは1時間弱。

事前の打ち合わせ通りにファージとクラブの配置を済ませ、いよいよ攻撃開始を待つのみとなる。

彼我の距離は約400m。十分、有効射程距離だ。

ここに来て、タクティカルゴーグルの暗視・拡大機能で映し出されたギガントライを、ニイロは初めて落ち着いて観察することが出来た。

(おや？ これって……)

改めて観察したその姿に、ニイロは思い当たることがある。

幼い頃、凶鑑で見たあの姿に被るものがあつた。

「なあ、サクラコ、このギガントライって、もしかしてあの有名なトリケラトプスの親戚じゃあ……」

その質問に、サクラコは、やや興奮気味に答える。

「確かに、あの体毛が無ければセントロサウルス類の想像復元図に似ていると思います。後頭部の鱗状突起も確認できますし、そうであれば大発見ですよ！ 後でサンプルを回収出来たら分析してみましよう」

もし、当たりであれば、このガンマ・アースの分岐時期が、遅くとも恐竜絶滅以前という推測が成り立つ。

(恐竜が絶滅しなかつた歴史か……)

ニイロは思いを馳せるが、今は目の前に集中すべきと思いついて体勢を整える。

そして時間だけが過ぎていくが、ギガントライの群れに動きは無く、辺りは秋の蟲の声だけが響いていた。

ダグも息を殺してギガントライの群れが屯する方向を睨んでいる。

(このまま元いた処に帰ってくれば……)

ニイロとしては、それが一縷の望みだったが、その希望も虚しく、夜明けを前に起き出したギガントライ達は、最悪の方向、カジユ村に向けて移動を開始する。

(已む無し、か)

ニイロは決断した。

ゴーグルに備え付けられたインカムを通じて、ファージ達に攻撃の指示を出す。

同時に4機のファージから3発ずつの対戦車ミサイル12本が、パスン！という気の抜けた音と共に発射され、一瞬の間の後でロケット

モーターに火の入ったミサイル達は、一旦、木々を避けて頭上に舞い上がり、それぞれの目標に対して上空からのトップアタックとなつて、それぞれ目標の個体の上に降り注いだ。

「ぶもおおおおおおっー」

「ぎゅいいいっー」

突然降り注いだ成形炸薬弾の雨に、ギガントライ達は、その脅威である突進に移ることもできず、爆炎が上がると同時に頭蓋を打ち砕かれて次々と大地に倒れ伏していく。

「おいおいおいおい……」

その惨劇を目の当たりにしたダグは、衝撃の余り「おい」としか言葉が出てこないようだ。

次々と断末魔の悲鳴をあげて倒れ伏すギガントライの姿を、ニイロは痛ましいものを見る目で、しかし、決して目は逸らさずに見つめ続けた。

これは害獣駆除だ。

動物愛護の精神と、人里に害をなす鳥獣駆除に反対するのは別のことだ。

例え、それが元々動物達のテリトリーであった土地に、人間が後から踏み込んだせいで起こった軋轢であっても、そこに人が生活する以上、害獣駆除は行われる。

だから、ニイロは決断し実行した者として、最後まで見届けた。

斉射後、一旦間を置いて、その効果を確認したニイロは、第二射の必要無しと判断してファージを下がらせると、まだ息のあるギガントライに対して、長く苦しめることのないように、上空のクラブに止めを刺すよう指示した。

その指示に従って、生き残ったギガントライに止めを刺すクラブを傍目に、ニイロは、まだ呆けているダグに向かって疲れた表情で言った。

「終わったよ」

立ち昇る獣臭と血臭、肉の焼ける臭いに気分を悪くしながらも、ニイロは何とかリバースすることなく村への岐路に着くことができた。

そもそも、リバー・スしようにも、ガンマ・アースへと転送された後、何も食べていないことに気づく。

(そーういや何も食べてなかったなあ。1〜2時間気絶してたつきり睡眠も取れてねえ。ブラツクにも程があるだろ……)

そんな事を思いながらも、すっかり夜が明けた空を見ながら、現場にはクラブ・ワンとクラブ・ツーを現場保全と上空監視に残し、残るクラブ2機とファージ全機、サクラコとダグを連れて村へと戻った。

途中、あまりの空腹に、亜空間ポーチから保存食のチョコバーを取り出し、齧りながら歩くが、ダグにも分けて食べさせた時の反応が、異世界モノのテンプレ通りだったのにはニイロも笑った。

こちらに転移して、初めての、心からの笑いだったかも知れない。

やがて村に到着したが、村人達はトビン村長と自警団(とは言っても只の腕自慢の若者数名に過ぎないが)に率いられてリユドーの街に向かっており、誰も残ってはいない。

まだ体力に余裕のあるダグが一行を追いかけて事情を説明する役を買って出てくれたので、後はダグに任せ、精神的に疲労困憊だったニイロは、村の広場の隅に簡易テントを張って休ませてもらうことにした。

ダグは、村長の家にも泊まらせてもらえばいいと言ったが、そこは日本人的感觉として、余程親しい友人ならともかく、昨日今日会ったばかりの知人宅に、本人の留守中無断で上がりこむことには躊躇もあつたので、丁寧に断ってテントで寝ることを選んだ。

いそいそとテントを張ってくれたサクラコに礼を言い、テントに入ると寝袋に包まって横になる。

すると、一つ二つ呼吸する間に、ニイロの意識は無へと反転した。

テントのすぐ横で控えていたサクラコは、ニイロがテントに入っただけに寝息が聞こえてきたことを確認し、ふと優しげな表情を浮かべると、音を立てないよう、静かに立ち上がった。

第9話 後始末

一報を受け、カジユ村へと馬を飛ばして急行したアデッティ・スコバヤと護衛の騎馬兵士2人の一行を待っていたのは、リユドーでも有名な3人組の傭兵の一人であるダグだった。

馬上から視認できた村の入り口に佇むハイ・オークの巨体は、遠くからでもよく目立つ。

「おお、ダグ殿、知らせを聞いて急行したわ！ 兎に角状況が知りたいの。ギガントライが出たというのは本当のこと!?!」

馬上から挨拶もそこそこに要件を告げるアデッティに、ダグは苦笑しながら答える。

「ああ、本当だぜ…… まあ、気持ちはわかる。俺だつてまだ信じらんねえよ。兎に角、順を追って説明すつから、馬から降りて少し落ち着きなよ代官殿」

ダグに窘められて、こちらも苦笑しながら馬を降りたアデッティは、同じく馬を降りた共の護衛騎士に愛馬の手綱を預けると、先導するダグに従って村へと入っていった。

「取り合えず、もう非常事態は収まってる。だから焦る必要は無え。まずはトビン……村長宅でいいよな？ そこで落ち着いてから、あらましを説明するよ」

共に歩きながら、ダグがアデッティに確認する。

リユドーを飛び出して来た時は慌てていたが、馬を飛ばす内に少し落ち着きを取り戻したのか、アデッティもダグの意見に同意した。

「むう……それでいいけ……ん？ あれは何？」

村の広場を通り抜け、トビンの家に向かっていた一行だが、その広場の隅にアデッティは見慣れぬ物を見つけた。

色鮮やかなオレンジ色の、アウトドア用ワンタッチテントだ。しかも、その前に、異形とも言えるファージが2機、門番のごとく周囲を警戒している。

「あー、あれな。うん、あれも後で説明すつから、今はなるべく静かに着いて来てくれよ」

思わず「あちゃー」と言った表情で一行に先を促すダグだったが、アデッティはそれを振り切つて立ち止まり、身振り手振りでダグに抗議する。

「しかし、あんなあからさまに怪しいものを……………」

「ニーロが寝ています。静かにして下さい」

突然目の前に現れた少女が、人差し指で口を塞ぐ仕草をしながら、言い募るアデッティを押しとどめた。

その、ガンマ・アースでは見られないデザインの異様な風体に目を白黒させながら、アデッティは聞いた。

「寝てる？ 寝てるって誰が…………… だいたい、寝てる場合じゃないでしょう！」

「お静かに。まだ騒ぐようでしたら、強制的に黙らせますよ？」

そのサクラコの言葉に、アデッティ本人より、護衛の騎士が色めき立つ。

「小娘が何を無礼な！」

「貴様！ 誰に物を言ってるのか、わかってるのか！」

一触即発の雰囲気になったが、すかさずダグが割つて入る。

「まあ、待って。説明はするんだから、今は静かにしてくれや。それと、嬢ちゃんも、ご主人大事は結構だけだよ、そんな言い方じゃあ角も立つし、アイツにも迷惑掛ける結果にしかならねえぜ？」

そう言つて両者を宥めつつ、サクラコにも釘を刺した。

「そう……………ですね、以後、気をつけます。ご忠告、有難う御座います」

素直に頭を下げるサクラコに、ダグは苦笑しながら手でヒラヒラと了解の合図を送り、まだ渋るアデッティ一行の方を向いて言った。

「兎に角よ、今は嬢ちゃんの言う通り静かに着いて来てくれや。アイツが疲れてんのは本当なんだ。ちなみによ、あの嬢ちゃん一人でコボルドの半分以上を無傷で倒してんだぜ？ お前ら勝てるか？」

後半は護衛の騎士達への言葉である。その言葉に、騎士達は言葉を失った。

「わかつたら、行こうぜ。あと、嬢ちゃんも一緒に来て説明してくれる

か？ 俺だけじゃ上手く説明できねえしよ」

ダグの誘いにサクラコも了解して、一行はトビン村長宅へと向かった。

家に着くとトビンも在宅しており、一行を招き入れ、一番広い部屋に案内すると、テーブルを挟んで椅子に座り、両端をダグとサクラコ、向かい会った反対側に、アデッテイを中心に護衛騎士の2人が着席する。

トビン夫人が出すハーブティーに口をつける間も惜しむように、早速アデッテイが切り出した。

「それで？ 兎に角事の顛末を聞きたいのよ。こちらは鳩便と急使で伝えられたコボルド100以上、ギガントライ12という数を聞いただけ。特にギガントライは問題よ。いや．．．．問題だった、か．．．．本当に討伐できたと言うの？ 普通は1体でも100人近く動員が必要なのよ？ それとも、何か効果的な対策が編み出されたと？」

一気に捲くし立てるアデッテイに、もう何度目かわからない苦笑を漏らしながら、ダグが話し出した。

「まあ、落ち着けて。最初から話そうか」

そう言つて、倒れていたニイ口を拾った事、サクラコ達と会合した事、コボルドに追われる村人にニイ口達が気づき、すぐに救援に向かった事、そしてコボルドを追ってきたらしいギガントライを発見し、それを殲滅した事を、時々トビンの補足を挟みながら順を追って説明した。

話し終えると、さしものダグも流石に疲れたように「ふう」と息を吐き出し、冷めてしまったハーブティーを一気に呷る。

聞かされたアデッテイの方も、常識外の事柄の多さに整理がつかないのか、暫く声が出せないでいたが、やがて搾り出すように言った。「正直、信じられないわ。信じられないけど、こうして証人もいることだし、本当のことでしょうね。その、ギガントライを1発で屠った武器．．．．」

「90mm対戦車有線誘導ミサイルです」 即座にサクラコがフォ

ローする。

「うむ……その、90mmナントカというのは、具体的にどのくらいの威力があるの?」

「そうですね。貫通力に特化したものですから、普通の鉄の壁ですと約50cmほどは貫通できます」

「てつ、鉄で50cm!? そんなもの、王城の石の城壁では耐えられるか……!」

サクラコの解説に全員が息を呑む。

「危険だ! そのような物を持つ者を野放しにしておくなど……」
突然、立ち上がって吠える騎士の一人に、ダグが割って入る。

「だからってどうするよ? 力ずくか? この嬢ちゃん一人でさえ、抑えきれないぜ? あの戦いを見たら……俺だって勝てる気がしねえ」

サクラコは、目の前で自分達の脅威論が交されているというのに、顔色一つ変えず、平然としている。

もつとも、それはサクラコが人間ではないということに大きな原因があるのだが、周囲の人間（ハイ・オーク含む）達は知る由も無い。

そんなサクラコを薄気味の悪いものを見る目で眺めながら、アデッティは言った。

「……現場は見れる?」

「ああ、まだコボルドもギガントライも死骸が転がってらあ。実際、片付けようにも数に対して人手が無さすぎるんだよ……当然、人手は出してくれるんだろ?」

「それは約束します。元々ギガントライ対策に募集も掛けてあるから人数も揃うわ」

それを聞いてトビンが安堵の溜息をついた。

このまま死骸を放っておけば、それを目当てに余計な害獣まで村の近所に呼び込んでしまうことになる。村長として懸念だったのだ。

「それと、この娘と一緒に討伐に当たった……ニイロとか言っただ? 彼にも会って話を聞きたいし、その倒した武器の威力も見てみたいのだけど、可能?」

アデッテイにそう聞かれて、ダグはサクラコを見た。

ニイロの様子はサクラコにしかわからない。

その視線に応じるようにサクラコが口を開いた。

「ニーロに会うのは、彼が目覚めるまで待つて頂きます。これはニーロの健康を管理する者として譲れません。」

武器の使用に関しても、ニーロの許可無く使用することは、非常時を除いて許されていませんので、こちらもニーロが目覚めるまで待つて頂きます」

その言葉に、今度は今まで黙っていた護衛騎士達が口を挟んだ。

「さつきから待て待てと、いったい貴様は何様だと言うのだ！」

「そうだ！ リュドー代官であるスコバヤ殿をいつまで待たせると言うのか！」

いきり立つ騎士達を、アデッテイが手で制する。

「いいのよ。これ程の偉業を成したのだから、疲れもするでしょうでも、ただ待つのも時間の無駄だし、先に現場を見ましよう」

そう言つて場を取り成した。

これ幸いとダグも乗る。

「そうだな、案内するわ。嬢ちゃんはアイツに着いててやんな。こっちは俺一人がいい。んじゃ、早速だが行こうか」

そう言つて席を立つと、一行を促して先に部屋を出て行く。

サクラコは、そのダグの姿に一礼すると、部屋に残ったトビンにも礼を言い、ニイロの元へ向かうのだった。

◇ ◇ ◇

ダグに先導されてコボルドの襲撃現場に到着したアデッテイ一行は、その凄惨な状況に言葉を失っていた。

職業柄、死体には慣れてる騎士達も、その死骸の数の多さに中てられて青い顔をしている。

「これを本当に3人で？」

騎士の一人がダグに聞く。

「ああ、その木のところの10匹くらいは俺がやったけどな。残りはニイロと、あの嬢ちゃんの仕事、半分以上はあの嬢ちゃん一人の仕事だな」

「いったい、何者なんだ……」

「さあ、ニイロが言うには、あちこち見てまわってる探険家？　とか言ってたが、よくわかんねえ」

「俺、あの娘と戦わなくて良かったわ……」

騎士の片方が呟く。心の声だったのかも知れないが、思わず口に出したことすら気づいていないようだ。

「まあ、ここはこんな感じだな。見てわかると思うが、あいつらの武器は剣や槍じゃねえ。ナントカジユウとか言ってたが……要するに弓矢みたいに遠くからでも攻撃できる魔道具らしい。」

しかし、そのスピードは弓矢なんかの比じゃなかったぞ。あれじゃあ、狙われたら逃げらんねえ」

「それ程か……」

やっとアデッティが搾り出すように声を出した。

「ああ、ほれ、そのやつや、これを見てみる。体の一部が吹き飛んでるだろ？　弓矢じゃこうはならねえ。威力も弓矢の比じゃねえってこつたな。……んじゃ、ここはもういいだろ。次はメインドイツシユだ」

そう言って、ダグはギガントライとの戦闘現場へ案内すべく歩を進める。

アデッティ一行は、もうお腹一杯という感じだが、そういう訳にも行かずダグに着いて次の視察地点へと向かった。

次の現場に到着すると、一行の頭上に現場保持の為に残されていたクラブ・ワンが降下して来る。

その異形にアデッティと騎士達に緊張が走るが、それをダグが何でもないかのように制して言った。

「ああ、大丈夫だ。あれもニイロの僕しもべ？　部下？　まあ、そんなようなものだ」

そう言ってクラブに向かい、「ごくろーさん」と声を掛けて手を振る

と、クラブは「ピポツ」と返事をして、再び上空警戒に戻っていく。「あんな風にな、どうやら言葉は理解するらしいんだわ。『ぷー』とか『ぴー』とかしか言わないが、返事もするしよ」
「あんなのもいるのか……」

しばし上空を遊弋するクラブを見ていた一行だが、気を取り直し、改めてギガントライの死骸を検分する。

死骸はいずれも頭蓋を砕かれ、周囲には獣臭や血臭と共に、コボルドの時には無かった肉の焼けたような臭いが勝ちこめていた。

「魔法でも無理ね」 アデツテイの呟きに、ダグが答える。

「ああ、表面は魔法で焼けても、この分厚い骨を砕くのは無理だ。俺のハルバートでも、これだけ砕くにはどれだけ掛かるか……」
しかし、これをやったのが、たったの一撃だったのを、俺はこの目で見てるからな」

その時、上空から突然、「パン！」という破裂音が響いてきた。

思わず全員が緊張して空を見上げると同時に、今度はかなり離れた別の場所から「ギャンツ！」という獣の断末魔の叫びが聞こえてくる。

どういふことかと顔を見合わせる一行に、素早く真相に気づいたダグが解説してみせる。

「多分、死骸漁りの獣だろう。肉の焼けた臭いもしてるしな。それを上のアイツがやったんだらうよ」

そう言っ上を指差すと、そこにはクラブがフワフワと浮かんでいた。

暫し呆けたように、宙に浮くクラブを見ていたアデツテイだったが、ふと目に光を宿すと、ダグに向かって言った。

「私はこれから即座にリユドーに取って返し、ルードサレンのダスターツ伯へ連絡して指示を仰ぐ」

「えっ？ ニイロにや話を聞かなくていいの？」 ダグが言う。

「いや、もちろん聞きたいけど、まだ目覚めておられないようなら、機嫌を損ねる訳にはいかないわ。その場合は、ジウロ、貴方が責任を持って、私が戻るまで村に滞在して頂くか、リユドーの街までお越し

下さる様、丁寧をお願いして頂戴」

突然指名された護衛騎士の一人は、大慌てて異議を唱えた。

「えっ？ 私、でありますか？」

「そうよ。いい？ 相手はその気になれば、王国を滅ぼすことさえできる武力を持っていると考えて。兎に角、相手の正体と目的がハッキリするまで絶対に機嫌を損ねては駄目よ。丁寧に、王侯貴族に接するように対応しなさい」

そんなやり取りを聞きながら、ダグとしては「そんな大層な」と呆れ気味に思うのだが、それを言っても仕方が無いと別方向からフオーして置く。

「まあ、まだ短い付き合いだけんどもよ、王国を滅ぼすなんて、アイツはそんな物騒なことはしないとと思うぜ？ 何せ、ギガントライの群れだって、最初は殲滅じゃなく追い帰すって言ってたくらいだしよ」

「それならそれいでもいいのよ。でも、最悪は考えておかないと」

「そりやそうなんだろうけどな。ちなみに、アイツは仰々しい対応は嫌いみたいだぜ？ その辺が俺とも合ったんだけどよ」

「そう、それは良いことを聞いたわ。ジウロ、ダグ殿とも協力して対応に当って頂戴。頼んだわよ」

「ちよっ、俺もかよ！」

そう言うが早いか、ダグの抗議を無視して、アデッティは一刻の間も惜しむように村へと踵を返した。

ジウロと呼ばれた騎士は、「はあ……」と返事をしたつきり、所在無げに、去っていくアデッティとダグを交互に見比べている。「俺、別に仕事あるんだけどなあ……」

ボヤクダグと、事の展開についていけないジウロ、2人は仕方なく目を合わせると、互いに溜息をつきながら、トボトボとカジユ村の方へと歩き出した。

※第一章の登場人物※

○新納薫（ニイロ・カオル）

日本人、男性、34歳

身長171センチ65キロ

元普通の中小企業サラリーマンで、現代医学で不治の病であったところを、アルファ・アースの医療技術で治療され、その代価としてガンマ・アースへと派遣される。

相棒はサクラコと、汎用歩兵AM（通称ファージ）4体、及び、探査機（プローブ）改修の汎用飛行機械（通称クラブ）4機。

○サクラコ

ケラー・メデイカル・インダストリーズ社製医療用AM（メデイカル・オートノマスマシン）をハイマン教授がカスタマイズした。

ピンク色でストレートな髪質のショートボブ。瞳の色も髪と同色。見た目の年齢は17〜18歳くらい。体型は華奢で、少女といつてもいいくらいの幼い顔立ちをしている。

医療については簡単な外科手術にも対応し、各種分析機能も持つ。護衛任務については、その構造上、耐久性などで純粋な軍用AMには劣る部分もあるが、個人の護衛なら十分な機能を有する。

新納に対して少々過保護な面あり。

○ロバート・バレット

アフリカ系黒人、男性、51歳

身長192センチ、体重93キロ

映画『マイ・ボディガード』に出ていた頃のデンゼル・ワシントンに少しだけ似ている。

元国際安全保障条約機構軍の予備役少佐で、今は国際安全保障条約機構の下部組織、国際科学技術管理局の職員。

主にセキュリティ関連を担当しており、最初に新納に接触するアルファ・アース人。

意外と厨二病の気あり。

○シンシア・マツキントツシュ

イギリス系白人、女性、21歳

身長162センチ、体重とスリーサイズは非公表だが、スタイルは可もなく不可もなく。

ヘイゼルの瞳にブルネットの髪を後頭部でアップに纏めている。

新納の担当オペレーターで、明るく真面目な元気娘。何事も一生懸命だが、その元気が空回りすることも。

両親と兄夫婦を亡くした事件をきっかけにベータ・アースへやって来たアルファ・アース人。

重度のブラコンで、ニイロに亡くなった兄の面影を見ている。

○ジェイラン医師

新納の病気の治療に当った医師。

医療技術の発達したアルファ・アースではあるが、それでもベータ・アースの方が先行している部分もあり、その研究でベータ・アースにやって来た仁術の人。

アルファ・アース人。

○ライラ

サクラコと同じK・M・I社製医療用A Mメデイカル・オートノマスマシンで姉妹機の姉に当るが、こちらは純粋な医療用A M。

やや薄いブルーの髪で、年齢は二十歳くらいの普通に可愛らしい看護師に見える。

但し、見た目によらず、新納を軽々と抱え上げるパワーを持つ。

○ロンタイラー

新納の戦闘指導教官。

筋肉達磨で、座学と兵器運用担当。

アルファ・アース人。

○リプリース

新納の戦闘指導教官。

丸メガネの学者肌で、体力強化と個人戦闘担当。

アルファ・アース人。

○ワット

新納の戦闘指導教官。

集団戦闘担当で、見た目はインテリヤクザ。

アルファ・アース人。

○ハキネン

新納の戦闘指導教官。

J・クルーニー似の超イケメン紳士でサイバル技術担当。

新納が訓練課程をクリアできる方に一人賭けた結果、大金をゲットした。

アルファ・アース人。

○ヒラヤマ教授

アルファアースからベータアースへとやってきた科学者の一人。

専門は空間物理学で、アルファでは超のつく有名な。

新納が元の世界へ帰れるかは彼の働き次第？

○ハイマン教授

アルファアースからベータアースへとやってきた科学者の一人。

専門はロボット工学で、アルファでは超のつく有名な。

サクラコのカスタマイズは彼が担当した。

所謂メカオタクの爺さんで、重度のオタク文化中毒者。

○アデル・オーティス

身長150cmほど、髪はややくすんで緩いウェーブの掛かった金髪ショート、瞳の色はブルー、年齢は50歳半ば。

国際科学技術管理局の職員でシンシアの上司。

アルファ・アース人。

○ダグ

焦げ茶色の鬘を生やし、下顎から覗く牙が目立つハイ猪・オーク人。

有名な3人組の傭兵の一人で、拠点はリユドーの街。

豪放磊落な性格だが、意外と気遣いもできる善い漢。

トビンの護衛で単身カジユ村に向かう途中、倒れていたニイロを拾ったばかりに、厄介事に巻き込まれまくる苦労人。

得物はハルバート。

ガンマ・アース人。

○トビン

口髭を蓄えた年配の男。

カジユ村の村長。

ガンマ・アース人。

○ログソン・ロウ・ダスターツ伯爵

62歳で身長は165cm、筋肉質のがつしりした体格。

若い頃、南の都市国家群相手の戦争で幾多の殊勲を挙げた猛将で、現ダスターツ伯爵領当主。

唯一の肉親である孫娘のメリーチエを、目の中に入れても痛くないほど大事にしている。

ガンマ・アース人。

○メリーチエ・ロウ・アダスターツ

14歳。

ログソンの孫娘で金髪の美少女。

ガンマ・アース人。

○エルン

ダスターツ家侍女長。

28歳。

ガンマ・アース人。

○マイオ・ドウ・リドリスファアレ

リドリスファアレ王国国王。

ガンマ・アース人。

○アデツテイ・スコバヤ

年齢24歳

黒髪を肩の辺りまで伸ばし、ヘーゼルの瞳をした才媛。
リュドローの代官。

ガンマ・アース人。

第二章 リドリスファアーレ王国 第10話 招待

ホルーゲン山地の中、王国との境界線にもなっているヨードフィル溪谷の、南に位置する都市国家、ビンガイン。

この国の北はリドリスファアーレ王国に接し、残る三方にはドマイセン、ソータル、カーレムの都市国家が、対王国の名分の下に四カ国連合を形成している。

四カ国連合内でのビンガインの立場は、リドリスファアーレ王国に対する防波堤である。

山間地に位置する立地なこともあって耕作地に乏しく、他に産業も無いビンガインからすれば、対王国の矢面に立つことで残る三カ国からの経済的、軍事的な支援を引き出す、綱渡りの国家運営を強いられていた。

この世界の国々の経済基盤が農業である以上、耕作可能な土地の広さはイコール国の経済力になる。

立地上、その土地の開拓が限界に達しているビンガインには、もう発展の余地が残されていないのである。

リドリスファアーレ王国にしても、他の都市国家にしても、わざわざビンガインを攻略して傘下に収めたところで得るものは少なく、ただ防衛の負担だけが增加する。

それが、この弱小都市国家がこれまで生き延びてこられた原因であつた。

しかし、ここに来て、ヨードフィル溪谷の北側、リドリスファアーレ王国領内で大規模な銀鉱山が発見されたことによつて変化が齎された。

一言に鉱山の開発と言っても、ただそこを掘っているだけではない。

掘れば当然のごとく土砂が流出し、近隣の川に流れ込む。掘り出した鉱石は精錬する必要があり、現地には精錬施設が設けられ、精錬に

よって出た様々な毒素は、これまた近隣の川や自然を蝕むのだ。

そして、この川の下流に位置する他の都市国家、特に鉱害の直撃を受けたドマイセンが、強烈にリドリスファール王国に対する反発の声を上げ、その交渉の玄関口であるビンガインに対しての圧力を強めていた。

「どうでした？ 会議の様子は。少しは得る物でもありました？」

友人であり秘書でもあるイレーツに問われ、ビンガイン国評議会議員、フェルノアンは疲れた表情で首を左右に振りながら、溜息と共に吐き出した。

「どうもこうもない。ヴォルセン議員とルマイン議員が王国侵攻を主張してるけど、驚いたことにホーントン議員まで侵攻派に加わりそうな気配だ。ノギス議員も怪しい」

フェルノアンは、議員としては新進気鋭の38歳。小洒落たビジネスマンタイプで、貿易で財を成し、9人で構成されるビンガイン国の最高行政機関である立法府評議会議員に抜擢されている。

「まじですか……これで侵攻派が4人とは……」

イレーツが、呆れたような表情で言った。

「うん、今もし、何か事があれば、一気に侵攻って話になっても不思議じゃ無い。フォーデル議員の話じゃあ、今侵攻したとしても国境のリンデン砦すら落とせるか怪しいって話だけだな」

やれやれ、という顔でフェルノアンが言う。

「フォーデルさんは、確か軍出身でしたっけ。それに、リンデン砦を落とせても、今度はあのダスターツ將軍が出てくるでしょう？ 何でこんな判りきったことなのに、ホーントン議員もノギス議員も、今頃になって侵攻派に鞍替えなんか……」

イレーツはしきりに首を捻って思案顔をする。

フェルノアンの所に入っている情報では、どうやらドマイセン軍の動きが活発化している気配があるが、現状では情報のピースが足りない為に、まだ口には出せない。

「そう言えばイレーツ、ギガントライの話は聞いたかい？」

「おっと、随分強引に話を变えてきましたね？ ええ、聞いてますとも。王国のダスターツ伯爵領でギガントライの群れが暴れまわって大損害だとか。それがどうかしたんですか？ あ、もしかして、ホーントン議員なんかは、その噂を信じて侵攻派に傾いてるとか？」

その話を聞いたフェルアノンは、不思議そうに聞き返した。

「おや？ 私が聞いた話と違うなあ。私が聞いた話だと、どこかの街の女代官が、被害も無くあっさり撃退したって聞いたぞ？」

「まさか、あのギガントライですよ？ それも群れで。それを被害無く収めるなんて、どんな英雄ですかって話ですよ」

「まあ、被害無しってのは流石に眉唾だな。女代官に率いられた旅の傭兵団が殲滅したとか。傭兵団なら雇うことも考えられるし、それで印象に残ってたんだが……まあ、噂だからなあ」

「そんな凄い傭兵団がいたら、とうに噂になってますって。この国なんてあつという間に滅ぼされちゃいますよ？ 尾鰭付いてるんじゃないですか？……あ、もしかして、ギガントライじゃなくてもモルモスライ辺りだったのかも。それだったら納得いきますよ」

なぜか得意げに胸を張るイレーツをよそに、この他愛の無い噂話に何かしら引つ掛かるものを感じながら、フェルアノンは呟いた。

「そうだよなあ……」



馬車での移動速度というのは、意外と遅いものだ。

馬のスピードを、競走馬の走るスピードで捉えてしまうことから来る錯覚なのかも知れないが、当然、あんなスピードで馬を目一杯走らせれば、あつという間に潰れてしまう。

それに、殆どの馬車には揺れを軽減するサスペンションも無く、ちよつと高級な馬車になって、初めて板バネを使った簡単なサスペンションや、高級な貴人用の馬車だとフレームから鎖で客の乗る箱を吊り下げる形式の物が現れるくらいなので、スピードを出せば乗客の蒙る揺れは、相当酷い物にならざるを得ないのだ。

よって、実際にはポクポクとゆつくり歩かせるのが普通で、その速度は人間の歩く速度とたいして変わらない。

馬車で移動するメリットは、非常時に限りスピードを出せること、荷物を多く運べること、そして何より、自分の足で歩かなくて済むからだ。

しかし、自分で歩かなくて済むとは言っても、流星に3日目以降になると色々不満が出てくるものだ。

ニイロは今、ダスターツ伯から寄越された迎いの馬車に乗り、領都ルードサレンへと向かう馬車の、車中の人となっていた。

「どうしてこうなった……」

例えばニイロ達がこの世界へ転移して、既に2週間が経っているが、初日の騒動の後、アウトドア用ワンタッチテントで目覚めたニイロを待っていたのは、ジウロと名乗った騎士に先導されて、一斉に平伏したままギガントライ討伐の礼を述べる村人達の姿だった。

慌てたニイロが事の次第を聞くと、ジウロとしては、ニイロの機嫌を損ねないことを第一義として他は割りとどうでも良いらしく、リュドーの街の代官であるアデッティ・スコバヤが戻るまで、カジュの村に滞在してもらうか、或いはニイロ達自らリュドーの街を訪れてもらうか、どちらでも良いのでお願いしたいと平身低頭で懇願される始末となったのだった。

ニイロとしては、まだ転移したてのこともあり、この世界に関する様々な情報を得たいという希望もあって、村人達の態度を平素のものに戻してもらい、ニイロを村の英雄ではなく、只の旅人として接してもらうことを条件に、村への滞在を選択することにした。

次にベータ・アースとの連絡が取れるのは、事前の予測では約1ヶ月後であり、正確な日時については事前に短い通信で送られてくる手筈になっている。それまでに、何らかの成果は上げておきたいと思っただのだ。

かくして、転移2日目は村を上げてのお祭騒ぎとなり、出てきた黒パンと、シヨツパイだけで肉と野菜のカケラが入ったスープという、

異世界物の定番に妙な感動（やっぱり不味かった）を覚えたり、屠ったギガントライの肉に、塩を振っただけの串焼きの実食イベント（意外と食えた）にチャレンジさせられた。

また、これも異世界物の定番である、提供した食材、特に樽酒（なぜ装備品にこんなものが入っていたかは不明だが）のウケが良く、泥酔したジウロが笑い上戸だったり、ダグが脱ぎ上戸だったことには驚かされた。無論、むさ苦しい猪男の裸を見ても、これっぽっちも嬉しくなかったが。

3日目以降は情報とサンプル収集に精を出し、村の子供達を引き連れて野山を駆け巡り、様々な動植物のサンプルを入手して、それをサクラコが分析するのを手伝ったり、大人達には栽培されている作物と栽培方法を尋ねたり、古老には風習や伝承などを聞いてまわったりと、短い日数ながら充実した収穫を得ることができた。

ガンマ・アース側からの物質の転送技術が確立されていない現状では、現物のサンプルを送ることは出来ないが、サクラコが分析した結果のデータは大いに役立つってくれるはずだ。

お礼代わりに、サクラコが怪我や病気などで困っている村人の診療をして回り、これは村人達からすれば、実際に見てないせいで実感の薄かったギガントライの討伐よりも感謝され、面映い気分させられた。

ちよつと誤算だったのは、サクラコが調合した子供用の薬で、腹痛や軽い風邪、虫下しなどの薬に、大人用とは違う甘いシロップやチョコレートコーティングされた錠剤などを配った為、村の子供達の間で『病気になるとご褒美が貰える』という間違った認識を持たせてしまったことだろうか。

季節が冬に向かう中、わざと薄着したりして無理に風邪を引こうとした子供が現れたりしたので、慌てて言い聞かせ、以後は大人用と同じ苦いものに切り替えさせた。

また、追ってやってくる予告されていたダグの仲間2人も到着して紹介された。

男の方はコズノーと名乗る、赤毛を短く刈り込んだ戦士風の男で、

歳はニイロよりも少し上くらい。赤銅色に焼けた皮膚と、いかつい体軀には歴戦の風格が漂うが、その目は意外と柔和なものがあつた。

女の方は、腰まで届く栗色のストリートヘアに、切れ長のブラウンの瞳、腿の辺りまでスリットの入つた黒いタイトなイブニングドレスと、この世界に来て、初めて出会う『お色気担当』といった風体の女性だつたが、挨拶もそこそこにニイロの持つ装備や、ファージ達に被りつきで質問攻めに遭つたのは、ダグの言つていた魔道具馬鹿マニャの名に恥じぬ行動、と言つて良いのだろうか？

その見てくれはともかく、中身は残念美女のようだつた。

ちなみに、女の名はニアアレイと言うそうで、彼女の質問に答える代わりに火魔法を披露してもらふことが出来た。

暫しの集中の後、ありがちな呪文の詠唱などは無く、気合と共に放たれた炎は火炎放射器のように伸びて、標的にした木を瞬く間に燃やし尽くした。その射程は約30m程。

ニアアレイ曰く、今回はランスのイメージで一直線に撃つたが、炎の形や持続時間はイメージ次第で変えることが出来、炎を壁のように使つたり、障害物を迂回させたりも出来るとのこと。

使つた後は凄く疲れるそうだが、少し休めばまた使えるようになるそうで、気力次第で連射も可能だそうだつた。これなら確かに魔道士と呼ばれるのも頷ける。

そんな日々を送つていたニイロの元に、領都ルードサレンにいる領主、ログソン・ロウ・ダスターツ伯爵から、ルードサレンへの招待状と4頭立ての迎えの馬車が到着したのは、転移後11日目のことであつた。

伯爵旗を先頭に護衛の騎士達50名と、3輦の豪華な馬車がかジユ村の入り口に止まり、護衛団の長らしき人物が、村の入り口で声を張り上げる。

「我等、ログソン・ロウ・ダスターツ伯爵に仕える騎士団である！ わが主の命により、当かジユ村にご滞在中のニイロ殿ご一行をお迎えに参つた次第！ 願わくば、お取次ぎ願いたい！」

その声は、偶々村の広場でファージとクラブを整備しながら、興味津々に覗き込んでサクラコに押しやられるニーアーレイと、ダグ、コズノーと他愛の無い話に花を咲かせていたニイロ達にも届いた。

ニイロが騎士のジウロから聞いた最初の話では、リユドールの代官が来るという話だったのに、どういふことかと思つたが、コズノーの推測だと、どうやらリユドールの代官では荷が重いと、いきなり領都へ招待という話になり、即刻迎えの馬車を寄越したのではないか、ということだった。

ニイロは、やれやれと思いつつも対応すべく立ち上がったが、ふと横を見るとサクラコの姿が無い。

しかし、おや？　と思う間も無く声が聞こえてきた。

「出迎え痛み入ります。私はニーロに仕えるサクラコと申します。ニーロも直ぐに来ると思いますので、今しばらくお待ちください」

と、いつもの衣装で騎士団の正面に陣取り、堂々と渡り合っている。ダグがボソリと、「はえーよ、嬢ちゃん」と呟くのを聞きながら、ニイロは苦笑しつつ、出迎えの騎士達の方へ歩いていった。

そして、村の入り口に達すると、護衛騎士団の長らしき人物に対して、日本人風にペコリと頭を下げると挨拶をする。

「態々のお出迎え、有難う御座います。私がニイロ、ニイロ・カオルです。ニイロが姓、カオルが名前です」

かろうじて皮鎧に見えなくも無いアーマーと、丸いヘルメットにタクテイカルゴーグルという、この世界では見られない、一種異様なデザインガンマ・アースの装備を纏うニイロが、さらに苗字持ちだと聞くと、護衛騎士達は一瞬ざわりとしたが、直ぐに平静を保つ。

「これは、ニイロ殿は何処かの国の貴族の方でしたか！」

そう言つて改めて姿勢を正す護衛騎士団長に、ニイロは笑つて否定した。

「いいえ、苗字持ちでも貴族ではありません。平民です。私の国、ニホン国では苗字持ちが一般的なのです。普通にニイロと呼んでください」

「そう言われて対応に困つたような表情を浮かべる護衛騎士団長

だったが、直ぐに表情を引き締めて言った。

「そうでしたか。申し遅れましたが、私は今回の護衛の長を申し付けられました、スローンと申します。そして……」

スローンが背後に目配せすると、最後尾の馬車から侍女と思わしき女性の一団がわらわらと降りて来て、先頭の馬車に昇降台を設置し、馬車の扉を開けると、そこに一人の少女が現れる。

淡いピンクのドレスに身を包み、侍女に手を取られ、馬車から降りた少女は、深々と一礼すると緊張気味に口上を述べた。

「メ、メリーチェ・ロウ・ダスターツと申します。お爺様より、二、二イ口様をお迎えする使者としての役目を拝領し参上致しました。どうか、ご一緒にルードサレンへとお越し願えないでしょうか」

この少女の登場に一番衝撃を受けたのは、二イ口の後方で成り行きを見守っていたダグ達3人である。

ガンマ・アリス この世界に来て日が浅く、一般に知られている情報にも疎い二イ口にはピンと来なかったが、メリーチェ・ロウ・ダスターツと言えばダスターツ伯が目の中に入れても痛くないほど可愛がっている孫娘、唯一の肉親であり、その彼女を迎えに送り出すということは、50名という破格の人数を護衛に付けているとはいえ、二イ口の安全を保証する為の人質に差し出したという意味もあるのだ。

それだけダスターツ伯が二イ口を重要視しているという証明でもあり、その事実思い当たった3人に衝撃を与えたのだった。

「ウソ………本物？」

「本気かよ伯爵………」

「おいおいおい」

思わず声が漏れる。

しかし、そんな3人の思いなど知る由も無く、この世界の事情に疎い二イ口からすれば、『お孫さんを使者にするくらい人材不足なのかね？ それとも、そういう習わし？』くらいの認識しか無い。

明らかに緊張している少女を和ませるように、軽く笑顔で二イ口は答えた。

「行くのは構いませんが、いったいどういったご用件でしょうか？」

私が聞いていたのは代官殿が事情を聞きたいから待っていてくれという話なのですが」

「はい、お爺様が仰いますには、今回のモンスター討伐の件、その甚大な功績に対して領主として是非直接お礼を述べたいと仰いまして、重ねて御骨折り頂けませんでしょうか」

そこまで言われれば、ニイロとしても否は無い。カジユ村での調査も一段落したことでもあるし、そろそろ別の街、それも大きな都市での調査業務も悪く無い。

「わかりました。ではご同道させて頂きます」

その返答に、メリーチェは花の咲くような笑顔を見せて言った。

「有難う御座います。それから、そちらの女性の方、サクラコ様と仰いましたか。それと同じく功績のあった傭兵のダグ様と、そのお仲間の方もご一緒にお連れするよう申し付かっておりますので、是非、ご一緒に」

そう言われたダグ達が、一斉に驚きの声を上げた。

「「俺（私）達も!?!」」

にっこり笑って「はい」と頷くメリーチェに、3人は返す言葉もなく承諾するしかなかった。

かくして一行は車中の人となり、1台目の馬車にニイロとサクラコ、それにメリーチェと世話係の侍女、女性の護衛騎士の5人が乗り、2台目にはダグ達3人組と世話係の侍女、護衛騎士の5人が分乗して出発した。

ちなみに、ファージは全機ニイロの亜空間ポーチに収納し、念の為、2機のクラブを12・7mm機銃装備でステルスモードのまま上空に随行させている。

車中では、普段人と接する機会の少ないメリーチェからの、マシンガンの如き質問攻めを、なんとか当たり障りの無いよう往なしつつ、逆にこれから乗り込む領都の情報や、近隣諸国の簡単な国際情勢などの情報を取り込むことに成功したし、サクラコも、メリーチェとは（見た目）歳の近い同性同士らしく歓談していたので、それについては二

イロも色々な意味で安心させられた。

聞いたところだと領都ロードサレンまでの行程は一週間。

初日、2日目は途中の村で一夜の宿を取って宿泊し、夕食時には護衛の騎士達にも樽酒（人数が多いと瓶入りを数出すより面倒が無いのだ）を振舞って親交を深めたり、思いの他親密になつたらしいサクラコとメリーチェ、ニーアーレイから、侍女達も含めた女子会（？）に無理矢理参加させられそうになったり、途中だったファージとクラブの整備を、ニーアーレイと騎士達の好奇の目と質問の嵐を浴びながら済ませたりと、それなりに忙しく過ごした。

しかし、その旅も2日が過ぎ3日が過ぎると、思わぬ敵がニイロを悩ませることになる。

その敵とは、『退屈』と『揺れ』であった。

最初は物珍しさもあつて、それなりに馬車の旅を楽しんでいたニイロだったが、この世界の旅に慣れているものならいざ知らず、スピードに溢れた現代社会で生きてきたニイロにとって、殆ど変わり映えのない風景を眺めながら、ゴトゴトと揺られ続けるだけの馬車の旅は、ニイロの精神を『退屈』という名の苦痛で苛むのだ。

さらに、現代の車とは比べようも無い貧弱なサスペンションと、舗装すらされていない道が醸し出す『揺れ』は、34歳になったニイロの腰と臀部を猛烈に痛めつける。

こうなつてくると、不謹慎ながら盗賊団の一つも出ないものかなどと考えたりもするのだが、50名もの完全武装した護衛騎士を伴う馬車を襲う馬鹿な盗賊などいるはずもない。

実際、1度だけタクティカルゴーグルのマップの隅に複数の輝点が現れ、不謹慎にもワクワクしながら警戒していたところ、こちらの姿が視認できる距離に近づいた途端、あつという間に蜘蛛の子を散らすように消え去ってしまった。

もしかすると、これが盗賊団だったのかも知れないが、期待（？）も虚しく、行楽日和とも言える青空の下、ただ只管、『退屈』と『揺れ』に耐え続けるしかなかった。

「どうしてこうなつた……」

何度目かのニイロの呟きを、目先を変えて退屈を紛らわす目的でメンバーチェンジした際に、偶々同じ馬車に同乗したダグが耳聡く聞きつける。

ニイロを拾って以来、予定が狂いっぱなしのダグにしても、退屈が辛いのは一緒らしい。

「そりゃこつちのセリフだよ……」

二人は目を合わせ、力無く同時に項垂れて首を左右に振った。

領都ロードサレン到着まで、あと4日の予定ある。

第11話 異世界食堂

順調に消化していたルードサレンへの行程も、3日目の夜更け過ぎから雨になり、4日目の昼前には土砂降りと言っていい程の雨脚となつてしまった。

馬車の進む街道は、あつと言う間に泥濘と化し、4頭立ての馬車と言えども車輪を取られる場面が増えてきた為、ルードサレンには事情を知らせる早馬を走らせ、一行は急遽予定に無かつたデインクレルという付近の街へと進路を変更して、天候の回復を待つこととなつた。

なんとか暗くなる前にデインクレルに到着し、先触れに驚いて出迎えた街の代官に挨拶した後、宿を取ることにまつたのだが、小さい街のこと、全員が纏めて泊まれる宿などあろうはずもない。

仕方なく、ニイロとサクラコにダグ、コズノ、ニーアーレイのゲスト5人に、メリーチェと護衛の女騎士2人、護衛団長のスローンと部下の騎士3人、それに世話係の侍女6人の合計18人が、街で最も大きい宿に投宿することになり、残りの騎士達は代官役所の兵舎や、他の宿、民家などへ分宿することとなつた。

しかし、翌日になつても雨が止む気配は無く、どうやら秋の長雨にしっかりと捕まつたらしい。

元の世界でならば、雨雲レーダーや天気図などで、ある程度、天候の予想も出来たものだが、当然ながら、この世界にそのような便利なものは無い。

ファージやクラブに搭載されたレーダーにしても、そこまでの機能は無く、大人しく天候の回復を待つしか無かつた。

この分ではルードサレンに着くのはいつになるやら分からないが、元々急ぐ旅でも無いのでそれは気にしない。

今はただ、強弱を繰り返しつつ降りしきる雨を、宿の2階の窓から眺めながら、ニイロは一人、無聊を困っていた。珍しくサクラコが傍にいないのは、メリーチェに誘われて彼女の部屋に行っているからであり、ニイロもそれを勧めたからである。

部屋に備え付けのテーブルには、宿の者が差し入れてくれた酒の瓶

が置かれている。

恐らくリングに近い原料から作られた醸造酒で、酒精度は低かったものの、その分、飲み易く昨晚の内に飲み干してしまった。

その瓶を、何の気なしに眺めている内に、ニイロはふと、この世界ガンマ・テリスに来て、まだ現地の飲食屋に行つたことがないことを思い出す。

カジユ村ではトビン村長の家に世話になつていたし、ここまでの道程でも宿以外で飲み食いをしていない。

外は雨だが、街の人々の生活の営みが止まっているわけでもないのだし、営業している飲食屋くらいあるだろう。そう思いつくと同時に、これまでの退屈の反動からか、街に出てみたい気持ちが抑えられなくなってきた。

ここは思い立つたがナントヤラ。早速、いそいそと身仕度を始める。

ネイビーブルーのシャツにオリーブグリーングリーンのフィールドジャケットを羽織り、サンドベージュのカーゴパンツにブーツという出で立ちで、ジャケットの下にはシヨルダーホルスターに入つた10mm小型自動拳銃を吊るす。

腰のベルトには、いつもの亜空間ポーチをセット。

一応丸腰に見えないよう、使うつもりの無い見せ掛けのマチエツトを佩き、万一の際の本命には、所謂テイザー銃と呼ばれる拳銃に似たタイプのスタンガンをヒップホルスターにセットする。

この銃は極小の電池の入つた弾を発射し、相手を30秒ほど行動不能にすることが出来る非殺傷兵器だ。装弾数は4発で、有名なデリンジャーのCOP・357という銃に似ている。

有効射程は7〜8mほどしか無いが、護身用なので問題無い。

さらに、いつものミリタリーゴーグルは悪目立ちするので、表示範囲が狭いなど機能は限定されるが普通の眼鏡タイプの物をチョイスし、ヘルメットは置いていくことにする。

これに雨が降っているので、ビニール製の半透明の使い捨てレインコートを羽織れば完成だ。

完成した自分の姿を、部屋に備え付けられた質の悪い鏡に映してみ

るが、全体的にミリタリーファッションなのに、土方のオッサンに見えるのは何故だろう。

これに黄色いヘルメットを被って片手に一升瓶でも提げれば完璧だ。

せつかくアゲアゲだったテンションが少し下がるが、持ち込んだ装備では他に選択肢も無いのだからと思い直して、サクラコにも通信で出掛けてくる旨を告げる。

危ないからついて来るといふサクラコを、ちゃんと準備もしていきし上空にクラブ・ワンもいるから、と説得して思い止まらせ、護衛団長のスローンにも声を掛けると、こちらも護衛をつけるという申し出だったが、これも丁寧に辞退して、初めての一人外出に繰り出した。

ちなみに、現地の通貨は軍資金用にと持ち込んである貴金属・宝飾類の中から、砂金を小袋に分けたものを、宿の責任者を通じて換金してある。

ニイロはウキウキと宿を出て、篠突く雨の中を聞いた通りの道順を歩いて辿る。

「ふんぷーん、ふふつふふーん♪」

いい歳こいたおっさんが、思わず鼻歌まで奏でながら、やがて両側に商店の立ち並ぶ目抜き通りに着く。

初めての異世界の町並みに感動すら覚えながら、初めて都会に出たおのぼりさん宜しく、キヨロキヨロと周囲を見渡しながら通りを歩いていった。

武器屋、防具屋といった、異世界ものには定番の店も、実際に目にする、生活必需品の押し出しの方が強く、武器よりも農具などの金物一般、防具よりも普段着などの古着やファッション小物が主流の商品であることが分かる。

要するに、武器も扱っている鍛冶屋、防具も扱っている服屋と言った方が近い。

他にも、野菜や果物といった生鮮品を台に山盛りに積んだ店などは、一見、見たことのあるような食材が並んでいるが、良く見ると、そ

のどれもが馴染みのある食材とは違っていて興味を惹いた。

そんなウインドウショッピングを楽しんでいたが、ニイロはふと、周囲の視線が自分に集まっていることに気づく。

雨の為に人通りは多くないが、それでも街の目抜き通りとあって、それなりに人はいる。

そんな中を、明らかに異質な格好をした人間が、キヨロキヨロと物慣れない様子で歩いていけば、それは人目を惹いても仕方が無いだろう。

そんな視線に恥ずかしくなって、取りあえず手近な食堂と思しき店に飛び込んだ。

元々、地元の店で飲み食いしてみたいと思っただけで出掛けたのだから目的にも適っている。

店に入ると、古ぼけた木造の店の中には、年季の入った4人掛けのテーブルが4つ、6人掛けのテーブルが2つ置かれ、その内の1つに先客がいた。

いや、先客だと思っただけ、どうやら店の者だったらしい。

時刻はまだ午前10時を過ぎた辺りで、早すぎるせいかな他に客はいない。

「らっしやい」

年配の男は、無愛想にそう言って立ち上がると、ニイロの格好を値踏みをするように眺め回し、合格だったのか、「どこでも空いてるところに座りな」とだけ言い残すと、さっさと店の奥に引っ込んでしまった。

(あれ? 注文とか取らないのかね?)

仕方なく手近なテーブルに座ると、男と入れ替わりですぐに年配の女性が店の奥から出てきて、愛想良くニイロに声を掛けた。

適度にふくよかな、いかにも女将といった風情のおばさんで、やはりこの店の女将らしい。

「あら、いらっしやい。見掛けない人だねえ。やっぱり傭兵さんかい?」

「傭兵? いや、それは違うけど、旅の途中でね」

「あらそうかい。そりゃ失礼したね。変わった格好だからさ。この辺

「は初めてなのかい？」

「ああ、それで地元の美味しいもんでも食べようかって思ってた立ち寄ったんだ」

「そりゃ嬉しいこと言ってくれるねえ。それでウチの店かい。アンタ、若いみたいだけど、わかってるねえ。ウチの旦那は愛想は悪いけど、腕はデインクレルで一番さ」

女は相好を崩して嬉しそうに言った。別に、この店が美味しいと言った訳ではないのだが、勘違いしている分には害も無いし、そのまま勘違いさせておく。

「お勧め料理は何だい？」

「今日のお勧めは、ニガロ肉のシチューと、ウロン三種の炒め物だよ」

「じゃあ、それを。後、酒は何がある？」

「ワインとエールがあるよ。今日の料理に合うのはエールだね」

「んじゃ、エールも一緒に」

女将は注文を受けると奥の旦那に声を掛けて指示し、自分は樽からエールを木製のジョッキに注いでくれる。

「はいよ、エール」

「おおー」

異世界で、生温く不味いエールを飲む。ニイロが一度やってみたかったことだ。

でも、やっぱり不味いものは不味かったが。

「はい、お待ち。ウロン三種の炒め物だよ」

女将が皿に盛った炒め物を持って来てくれる。

出された料理を見て、ニイロが固まった。

(こ、これがあったかー)

茶色いソースを絡めて炒められた食材には、所々素の色が見て取れた。

赤だったり、黒と黄色の縞模様だったり、青味掛かった灰色だったりしているが、どう見ても虫だ。

(こっつ、これは………蜻蛉？ 蝶？ 蛾じゃないよな?)

翅は綺麗に筆られているが、所々に足が残ってるし、頭はそのまま

だ。

緑色の複眼がニイロを睨んでいる。

(こ、こっつち見んな)

そんなニイロの心の葛藤など露知らず、女将は自慢げに料理の説明をしてくれた。

「ウロンの炒め物は酒のツマミにいいって、けっこう人気なんだよ。しかも今日は、ほら、その赤いのあるだろ？ それがけっこう貴重でね、久し振りに入荷したんだけど、アンタ、運がいいねえ」

果たして運がいいかは不明だが、出てきたからには食べなければならぬ。

小さい頃から、『自分の為に作ってもらった料理は、感謝してきちんと食べる』が、ニイロの食に関するポリシーだ。

それに、イナゴの佃煮や蜂の子など、蛋白源としての昆虫食は地域によって割りとポピュラーな物なのだから、食べて悪いことなど無いはずだ。

ニイロは意を決し、木製のヘラのようなスプーンで料理を口に運ぶ。

(あれ？・けっこう美味い)

パリパリとした食感で、何ともいえない旨味がある。特に女将の言う赤いのが旨味が濃い。甘辛いソースも良く合っている。

エールを一口口に含むと、苦いだけだったエールに料理の旨味が合成され、さらに後味もスツキリ纏めてくれる。

「これは確かにエールに合う……合うけど……なんか、くやしい……」

そうやって複雑な感情のまま、炒め物に舌鼓を打つ間に、次の料理が出てきた。

「はいよ、ニガロ肉のシチューだ。熱いから気をつけてお食べ」

出てきた料理は、いかにも辛そうな赤い色をした、様々な野菜などの具材が入ったスープで、付け合せにインド料理のナンに似たパン(?) も一緒に提供される。

中の具材を確認すると、シシトウに似た形の野菜に、芋類に見える

根菜、小さめの隠元に似た豆、筋肉っぽい肉の塊など、けっこう具沢
山で、他にもよくわからない具も入っているようだが、見た目で警戒
させるようなものは無かった。

一目見た時は一瞬身構えたが、香りも優しく、異世界風ブイヤベ
スと言った感じだ。

器についてきた木製のスプーンで一口啜ってみると、意外にも何故
か海鮮風のココの感じられる絶品スープで、魚介類に見える具材が全
く見えないのは謎だが、益々ブイヤベースっぽい。

筋肉は柔らかく煮込まれていて、口の中で解けるように繊維状とな
り、中華料理の高級食材でもある燕の巣のような食感だ。

野菜類のそれぞれ違った歯ざわりと風味は良いアクセントになっ
ていて、スープの赤い色は、芋のような根菜から出る色素のようだっ
た。

ちらほらと入っている、小さめの隠元に似た豆は、噛むとプチプチ
とした食感で、エビのようなカニのような、濃厚なココが溢れ出る。

「こりや美味しい」

思わず賛辞が口をついて出る。

少し離れてニイロの様子を伺っていた女将は、そのニイロの声に満
足げな笑みを浮かべ、機嫌良さそうに声を掛けてきた。

「そうだろうそうだろう。他所じゃ食えないよ？　うちの旦那、ご自慢の
オリジナル料理さ」

「この薄い緑の豆？　かな？　から出るココがいいな」

ニイロは料理を口に運びながら女将に応じる。

すると、女将は得意げに食材の説明をしてくれた。

「肉は安いルカニガロの筋肉なんだけどね、丁寧に取り出して、手間隙
掛けて柔らかく煮込んでるんだよ。野菜類も採れ立ての新鮮なやつ
に拘ってて、バレの根つ子とアルネアの子の腹の部分を一緒に煮込む
と、その赤い色とココが出るんだ」

（ん？）

なんとなく、不穏な単語を聞いたような気がして手が止まる。

バレというのが、芋に似た野菜だと言うのは分かる。ルカニガロ？

アルネアの子？ 腹の部分？

頭の中で、警告音と共に『それ以上突っ込むな』と静止する声を聞いた気がするが、好奇心に勝てず女将に聞いてしまった。

「ルカニガロとかアルネアって？」

「ああ、ニガロもアルネアも知らないかね。この街の近所のルカの森で獲れるのさ」

そう言っただけで奥に引込むと、木箱に入った食材を持って来て見せてくれた。

そこに入っていたのは、全長30cmを越える巨大な甲クワガタムシ虫だった。体には玉虫のような虹色の模様があり、丸々とした黄金虫にクワガタの顎を付けたようなフォルムをしている。

「これがニガロだよ。こいつの雄の顎と翅の根元の筋肉が美味くてねえ。もうすぐシーズンも終わっちゃうけど、アンタ、本当に運が良かったねえ」

女将は機嫌良く説明してくれているが、ニイロの頭には入ってこない。

「そしてこつちがアルネアだ。いちいち腹の部分だけ食べるのは面倒だけど、手間隙惜しんでちや美味い料理はできないからね」

小さめの箱にウジャウジャ入っていたのは、薄い緑色の蜘蛛の子だ。

調理前のそれは、まだ頭も足も付いていて、芥子粒ほどの複数の眼がニイロを睨んでいた。

(だからこつち見んな)

食材を知ったからと言って、一旦手をつけた料理を途中で投げ出すことは、ニイロのポリシーが許さない。

何とか残りを腹に収め、女将には礼を言っただけを払い、店を後にした。

料理二品とエール一杯で代金が銅貨9枚と、感覚的に日本円にして900円くらいで、かなりリーズナブルだったことは、救いになったのか、ならなかったのか、それはニイロにも分からなかった。

第12話 雨の街

店を出ると雨は止んでいたが、雲は低く立ちこめ、いつまた降りだしてもおかしくない按配だ。

時刻は恐らく正午に届かないくらいだろうか、通りは雨の止んだ隙に買い物を済ませようとする人出で、店に入った頃に比べればけっこう賑わいになっている。

そんな通りを、ニイロは心ここに在らずといった呈でフラフラと歩いていた。

(昆虫食かー、盲点だったな。サバイバル教練でヘビやカエルは食ったけど……うー、夢に見そうだ……でも美味かつたし……ハツ、まさかこつちじやこれが普通とか!?! いやいや、カジユ村では普通の肉食べてたもんな……)

まだシヨックから立ち直れず、思考は堂々巡りを繰り返していた。それでも、トボトボと通りを歩きながら、なんとか思考を回復させる。両の手の平をパン！ と頬に打ちつけ、ニイロは気分を切り替えた。

気が付くと、そんな挙動不審な様子と、この世界では明らかに異質な格好のせいで、否応なく衆目を集めており、すれ違う人は振り返り、店の軒先からも視線が集まっている。

ニイロは急に恥ずかしくなって、急いで歩を進めようとしたのとほぼ同時に、掛けている眼鏡のつるに仕込まれたスピーカーを通じて、上空で警戒しているフラブ・ワンの警告音が鳴った。

レンズの内側にクラブ・ワンからの映像が映し出される。不審者を示す光点は4つ。内3つは護衛の騎士なので無視していない。

護衛団長のスローンには断ったが、それでもVIPであるニイロを放置できず、隠れて護衛するように付けられた者達だろう。

そしてもう1点は、どうやら身形から判断すると街の破落戸ゴロツキのようで、店に入る前からニイロの後をつけていた為に、その行動パターンからクラブ・ワンの警戒網に引っ掛かったのだろう。

見るからに余所者であるニイロを、突けば金になるとでも思ったのだろうか。

ここでカツコイイ物語の主人公であれば、わざと小路に誘い込んでお仕置きの一つもするのかもしれないが、生憎とニイロはそんな面倒な事は御免であった。

要するに人気の無い場所へ迷い込んだり、隙を見せなければ問題ないと判断して放置する。

そのままブラブラとメインの通りを歩き、やがて通りの突き当たり、広場になつている場所へと辿り着いた。

広場の中央には、誰だか知らないが馬上で剣を振るう騎士の像が設置され、立哨なのか警備兵の姿も見える。

周囲のドーナツ状の敷地には、柱と屋根だけの四阿あずまやがあり、雨宿りなのか設置されたベンチには人影があつた。

他には、雨という天候もあつてか広さの割には3軒の屋台の出店が出ているのみだった。

また少し降り出した雨に、特に理由も無く四阿あずまやの方へと歩いていく。

四阿あずまやに近づいて、雨宿りらしき人影を改めて見ると、どうも見覚えのある姿に記憶を探る。

ベンチに座り、しょんぼりと項垂れている姿は、ここまでニイロ達一行と共にやって来た世話係の侍女の一人だった。

侍女とは言つても所謂メイド服ではない、質素な無地の灰色のワンピースに身を包み、その上に雨具でもある丈の長いケープを羽織つている。

伯爵家の侍女ともなれば当然のように容姿も整っており、栗毛の髪は肩の辺りで綺麗に切りそろえられ、見た感じは中学生くらいに見えるので、年齢は13〜14歳くらいだろうか。

彼女はニイロが近くにいることも気づかない風で、まだ同じ姿勢のまま顔を上げようともしない。

全く知らない相手でもないのだし、と、ニイロが声を掛けようか一瞬迷つて立ち止まると、彼女はそこでようやく人がいることに気づい

たらしく、慌てて顔を上げた。

そして、相手がここまで同行したニイロだと気づくと、驚きの表情で「あつ」と呟くと、逃げ場を探すかのように左右を素早く見渡すが、壁も無い柱が立つだけの四阿あずまやに、身を隠す場所などありはしなかった。

「あ……、何だか驚かせたみたいで、ごめんな」

何となく謝らなければいけない気がして、思わず謝罪の言葉が口をついて出る。

ニイロは強くなってきた雨を四阿あずまやに入ることと避け、レインコートに付いた水滴を払いながら少女に言った。

「確か、伯爵家から遣わされた侍女さんだったよね？」

「はい……」

ニイロの問いに、少女はまた俯いたまま、蚊の鳴くような声で答えた。

（うーん、困ったなこりゃ……）

少女の様子を見れば、何か込み入った事情があることくらいは容易に想像つくが、ニイロの立場からすると安易に立ち入っていいものか判断に困る。

事が伯爵家の内部に関する事情であれば、ニイロに出来ることなど無いのだから。

かといって、見るからに消沈している少女をそのままに立ち去れるほど冷たい人間でもなかった。

取りあえず、少女を怯えさせないように少し距離を置いてベンチに座ると、腰の垂空間ポーチからレーシヨンのチョコバーを取り出してパッケージを剥いてから少女に差し出した。

「え？……」

少女は戸惑いながら、差し出された黒い棒状の何かとニイロの顔を交互に見つめた。

「ほら、もうお昼だし、お腹空いてないか？ 俺の経験じゃあ、腹が減るといい考えなんて浮かばないもんなんだよ。これ、チョコバーって言う食べ物だけど、あげるから食べてごらん」

そう言つて少女にチョコバーを渡し、ニイロ自身も、もう一本同じ物を取り出して食べて見せた。さつき食事をしたばかりだが、このくらいならまだ食べられる。

その様子を見て安心したのか、少女もおずおずとチョコバーを口に運び、一口齧ると驚きの表情で呟いた。

「甘い……美味……美味しい……」

少女の反応を窺っていたニイロも、その言葉と、若干ながら和らいだ表情に一安心してホッと胸を撫で下ろした。

「そうか、口に合ったなら良かった」

気に入ってもらえたらしく、あつという間に平らげてしまった様子に、一本では足りないだろうと、もう一本チョコバーを取り出して渡しながら、「ちよつと待ってて」と少女に声を掛け、一番近くの屋台に歩み寄った。

「らっしゃい。串焼きかい？ こつちがボルロン鳥で銅貨1枚、こつちがニガロで石貨3枚だ」

愛想笑いを浮かべながら言ってきた親爺に、内心、「ニガロはもういいよ」と思いながら用件を切り出した。

「いや、悪いんだけど串焼きじゃないんだ。沸いてるお湯があったら分けてもらえないかと思つてね。もちろん代金は払うよ」

そう言つて親爺の手に銅貨1枚を握らせる。売ってる商品の値段からして多すぎるかとも思うが、快く受けてもらう為の代価だ。

その効果はてき面で、あっさりとは快諾が得られた。

そこでニイロは、亜空間ポーチから紙コップを3つ取り出し、レーションのインスタントコーヒー、クリーミングパウダー、ステイックシュガーをコップに入れてお湯を注いでもらう。

出来上がったコーヒーは、一杯を屋台の親爺に進呈し、残る二杯を持って少女の待つ四阿あずまやに戻った。

「はい、これ。コーヒーって言う飲み物だけど、まだ熱いから気をつけて飲んでみて」

ニイロはそう言つて少女にコーヒーを渡すと、自分もベンチに腰掛けて久し振りのコーヒーを味わう。

そんなニイロと、自分が手に持った紙コップを、戸惑いながら交互に見ていた少女も、意を決して恐る恐る紙コップに口をつけた。

「苦い……でも、甘い……不思議な味……」
思わず口に出た感想に、ニイロも思わず笑顔になる。

コーヒーはブラック派なニイロが、以前どこかで聞いた「甘い物が嫌いな女の子はいない」という怪しげな言葉に賭けて、自分の分のスティックシュガーまで少女のコーヒーに注いでいたのが正解だったようだ。

そのまま彼女が飲み終わるまで、ゆつくりと待つことにする。

ふと、お湯を分けてもらった屋台の方を見ると、目が合った店の親爺が笑顔のサムズアップで返して来たので、親爺にもウケたらしい。

「少しは落ち着いた？」

コーヒーを飲み終わった少女に語りかける。

「はい……」

「こんな所で一人で落ち込んでたみたいだけど、良かったら話してみないか？ 俺みたいなおっさんが力になれるかは正直怪しいけど、一人で悩んでるよりは何か思いつくかも知れない。

話したくなければ無理には言わないけど……あ、そう
だ、もし男の俺に話にくいことなら、後でサクラコに相談してみるのも良いかも知れないな」

そう言われて、少女は不思議そうにニイロを見た。

「どうして？ 私なんかのことを、こんな……」

「どうして、かー。どうしてだろうなあ」

ニイロも少し考え、そして言った。

「俺のいた国では『袖振り合うも多生の縁』って諺があるんだ。偶然、道で袖が触れたくらいの人でも、何かしらの運命の出会いだから大事にしなさい、って意味なんだけどね。

それを思い出したって言うか、まあ、それでって訳じゃ無いけど……んー、何となくかなあ。俺にもわからん」

人が自分の行動に、いちいち明確な理由を用意してから動くことなど、実際は少ない。

大抵は『なんとなく』動いて、後から適当な理由が、さも最初から決めていたかのよう宛てられるものだ。

この場合も、ただ何となく困っている少女を励ましたいという気持ちでニイロを動かしただけで、特に深く考えての行動ではない。諺も後からの付け足しだ。

笑って首を傾げるニイロに、少女は意外なものを見る目で言う。

「もつと、恐い人だと思ってました……」

そう言われてニイロは思わず苦笑する。

ルードサレンへ招待された経緯を考えれば、ニイロがギガントライ討伐で示した武力が問題になっていくことは理解できるし、その出迎えに遣わされた彼女達にとって、得体の知れない恐ろしい人物像が形成されていても不思議ではなかった。

ただ、ニイロとしては武力を背景に何か事を起こすつもりなど今の所無いし、変な誤解は解いておきたい。

「まあ、そう思った理由は何となくわかるけど、実際は、偶然騒動に出くわして、運良く解決する手段を持つてたっただけさ」

「でも、ギガントライって、私は見たことはないけれど、凄く大きくて強いモンスターだって聞きました。1頭出ただけでも、普通はお城の兵隊さん達が百人くらい出て退治するんだって。」

それをニイロ様は、ダグ様とサクラコ様と3人で10頭以上退治されたとか。だから、伯爵様がお喜びになってお城に招待されたと

「だいたい合ってるけど、運が良かったし仲間に恵まれたのさ」

伯爵が喜んで云々の部分には、『それはどうかな?』と思わなくもなかったが、それは彼女に言っても仕方が無い。

「謙虚な方なのですね……」

少女が呟く。

ニイロは、ちよつと照れた様子で言った。

「そう言われると照れるな。君……あ、そう言えば、まだ名前を聞いてなかったね」

「あつ、ごめんなさい。私、南のセビエネ村の出で、サリアって言います」

少女、サリアは慌てて名乗る。

「サリアさんか。いや、謝ることはないさ……それで、まあ、もし悩みがあるのなら、今じゃなくてもいいし、俺にじゃなくてもいい。誰でもいいから誰かに相談してみなよ。少なくとも一人で悩むよりは良い方向に向くはずさ。おっさんからのアドバイス、な」

最後の部分は多少冗談めかして、笑いながらアドバイスを贈った。

「あ、有難う御座います……その……あつ、後で相談に伺ってもよろしいでしょうか。今は、もう戻らないと叱られてしまいますので……」

「宿だと、サクラコも一緒にいるかも知れないけど、それでもいいかな？ 彼女も相談に乗ってくれると思うし」

「はっ、はい！ それはむしろ一緒に聞いて頂けたら……」
「そうか。じゃあ、俺はもう少し街をブラブラしてから宿に戻るから、帰ったらなるべく部屋にいるようにするよ」

その言葉を聞いたサリアは、ベンチから立ち上がってニイロに向かう。

「あのっ、有難う御座いました！ チョコ？ と、コーヒー？ 美味しかったです！」

そう言っつてペコリと頭を下げると、振り返って宿の方へと走り去って行った。

幸いにも、今は雨は止んでいる。

何にしても少しは元気が出たようで良かったと、サリアの姿を見送りながら、ニイロも立ち上がって、ブラブラとお湯を分けてもらった屋台の方へ歩み寄った。

コーヒーの感想でも聞こうかと思ったのである。

ニイロが近づくと、屋台の親爺の方もニイロに気づいたようで、笑いながら声を掛けてきた。

「よう、ナンパは失敗かい？」

サイド・アリス
この世界にナンパという文化(?)があるのも驚きだが、どうやらサリアと話していたのを、ニイロがナンパしようとしていると思われるらしい。

「そんなんじゃないよ」

ニイロも笑いながら親爺に返す。

「そんなことより、さっきの飲み物、コーヒーって言うんだけど、飲んでみてどうだった？」

「ああ、あれかい？　ちよつと苦かったな。でも、香ばしい香りと、ありやミルクかな？　ミルクっぽい風味が良く合ってた。俺は好きな味だったぜ。欲を言えば、もうちよつと甘けりや大ウケだろうが、後は値段だなあ。石貨3枚ならバカ売れ、銅貨1枚でもいけるんじゃないか？」

流石は食い物屋の親爺と言うべきか、的確な感想を教えてくれる。

「そうか。美味しいと思ってくれたんなら良かったよ。でも、残念ながら商売にするほどの量は無いんだ」

「そりゃ残念だ」

その後は、意見を聞かせてもらったお礼代わりに串焼き（もちろんニガロではなくボルロン鳥の方だ）を1本買い、齧りながら広場から元の通りの方へと向かう。

初めて食べるボルロン鳥は、少々マトンのような牧草臭いクセはあるが、タレが上手くそのクセを抑えていて美味かった。もう少し香辛料を効かせられれば完璧だが、それは高望みというところか。

あつという間に1本食べ終えたところで、タイミングを計ったように上空のクラブ・ワンからの警告が鳴った。

しかし、レンズの内側に映し出されたマップには、ニイロの周囲には護衛の騎士がいるくらいで特に不審な光点は映し出されていない。

おや？　と思つて表示範囲を拡大してみると、先ほど別れて宿の方へ向かうサリアの姿と、その行く手に待ち伏せる不審者3人の姿があった。

不審者の内の1人は、ニイロをつけていたあの破落戸ゴロツキだ。

どうやら、サリアは時間を気にしてか、遠回りになる大通りを避け、宿への最短距離になる小路を帰路に選んだようで、チンピラの方はニイロを襲う為か、仲間2人と合流した後、男のニイロより、ニイロの知り合いらしき少女の方にターゲットを変更したというのが現状の

ようだ。

それを上空のクラブ・ワンがいち早く察知して、ニイロに警告をくれたらしい。本当に優秀なAMだ。

「クラブ、ファインプレーだ！」

ニイロは上空のクラブを褒めると共に駆け出した。

突然走り出したニイロに、護衛の騎士達が隠れていたことも忘れて飛び出して追って来るが、事情を説明する時間が惜しい。

時に人とぶつかりそうになりながら、路地から路地へと最短距離を走り抜けることで、意図的ではないが結果的に騎士達を撒く形になってしまった。

(悪いね)

任務に忠実な騎士達には気の毒だが、今はサリアの安全の方が大事だ。

マップでは、どうやら破落戸^{ゴロッキ}3人組とサリアが接触したらしい。

万一の場合は上空のクラブが破落戸^{ゴロッキ}を排除させる事も考えるが、今、クラブに装備されているのは旅の課程で郊外の大動物の排除を考慮した12・7mm機銃のままだ。

こんなもので人を狙撃すれば、スプラッタな惨劇になるのは自明の理で、目の前で目撃することになるであろうサリアの精神状態を考えたら、安全と引き換えとはいえ極力避けたい。

街に滞在中の装備は吟味しておくべきだったと後悔するが後の祭りだ。

(間に合えっ)

今走っている小路を抜け、次の角を右に曲がればキー口達のいる路地に達する。

腰のホルスターからワイヤレス弾のスタンガンを取り出し、叫ぶようにクラブに指示を出した。

「クラブ・ワン、ステルスモード解除！ 降下して破落戸^{ゴロッキ}共の注意を逸らしてくれ！」

最後の角を曲がって路地に飛び込むと、サリアの行く手を塞ぐように3人の男が並び、真ん中のリーダー格と思しき男がサリアの手を掴

んでいるが、彼等の背後に突然現れたクラブ・ワンの姿に振り返って驚きの声を上げているところだった。

クラブ・ワンは激しく上昇と降下を繰り返しながら、ビービーと大音量で威嚇音を鳴らしている。

男達の視線は、完全に背後から現れたクラブ・ワンの異形に注意を惹き付けられ、正面から路地に飛び込んできたニイロにはまだ気づいていない。

ニイロは一気に距離を詰めると、サリアの腕を掴んで拘束している真ん中のリーダー格の男の太腿を狙ってスタンガンを発射した。

彼我の距離は約3m。この距離ならば外さない。

「あがつ、あがががつー！」

「きやあつー！」

太腿に受けたスタンガンのシエルから電流が迸り、男の全身の筋肉を一瞬で硬直させ、うめき声を上げる。

同時にサリアの腕を掴む手にも力が入ったのか、彼女の苦痛の悲鳴が上がった。

ニイロは強引に左手でサリアを抱き寄せ、男から引き剥がすと同時に、男の腹に蹴りを入れて突き飛ばす。

続いて、突然の出来事にまだ茫然として、声も出せないでいる残りの男2人にも、問答無用で続けざまにスタンガンを撃ち込んで無力化すると、まだ抱き抱えられていたサリアに聞いた。

「怪我は無いか？」

声を掛けられたサリアは、まだ茫然自失の呈だったが、それでも何とかガクガクと頷いて返す。

ニイロはそれを確認すると、ホッと胸を撫で下ろした。

「間に合って良かった。もう大丈夫だ」

そう言つて、安心させるようにサリアの頭をポンポンと撫でると、サリアはしがみつくようにニイロの胸に顔を押し付けたまま小さく呟いた。

(勇者さままだ……)

その声は生憎ニイロには聞こえなかったが、少し力の抜けたサリア

の様子に、「すぐ済むから、ちよつと待ってて」と一言断ると、スタンガンを腰のホルスターに収め、まだ硬直して立ち直れない破落戸共を、一人づつ亜空間ポーチから取り出した結束ベルトで後手に拘束していった。

「うおっ!?!」

「おおっ!?!」

「何だ!?!」

ニイロが破落戸の2人目を拘束し終えた、丁度そのタイミングで、ニイロに撒かれた形になっていた護衛騎士達3人が追いつき、路地の入り口から、まだ上空で姿を見せえているクラブ・ワンの姿を発見して驚きの声を上げた。

その声に振り返ったニイロは、3人目に取り掛かりながら、渡りに船とばかりに騎士達に声を掛けて依頼することにする。

「こいつはクラブ・ワンと言って、俺の部下って言うか、仲間だから心配無いよ。それより、彼女を襲っていた破落戸を捕まえたんで、誰か1人、街の警備兵を呼んで来てくれ。それと、警備兵が来るまでは俺が見張っておくんで、2人は彼女を宿まで送ってあげてくれないか? 遅くなれば宿の方でも心配してるかも知れないし」

その頼みに護衛騎士の1人が、「わかった、じゃあ、俺が行って来る」と応えて警備兵の詰め所へ駆け出して行く。

「あれ? お前、サリアじゃないか。災難だったなあ」

護衛騎士の、残る2人の内の1人がサリアの素性に気づいて声を掛けたが、当のサリアは、まだ恐怖から完全には立ち直れていないのか、青い顔で震えている。

「大丈夫か?」

破落戸共を拘束し終えたニイロが、サリアの様子を心配して声を掛け歩み寄ると、サリアはまだ青い顔をしながらも、気丈に頷いて礼を言った。

「助けて頂いて、有難う御座いました……でも、何であの人達に絡まれてるってわかったんですか?」

その疑問に、ニイロは笑って答える。

「ああ、それならアイツ、クラブ・ワンのお手柄さ。サリアが危ないって教えてくれたんだよ。上手いこと連中の気を引いてくれたんで俺も助かった」

そう言っつて、まだ頭上に浮かぶクラブ・ワンを指し示した。

サリアはクラブ・ワンのを見上げると、丁寧にお辞儀をしてクラブ・ワンにも礼を述べた。

「お陰で助けて頂けました。有難う御座います」

「ピュイーピピッ！」

礼を言われたクラブ・ワンの方も、まるで頷くかのように機体を上下に揺らしつつ、『いいってことよ！』とでも言いたげにマニピュレーターを左右に振ってサリアに応えると、再び上空警護に当るべく上昇していった。

その姿を見送ったニイロは、『落ち着いたら後で食べるというよ』と、チョコバーとインスタントコーヒーのセット一式（作り方は説明して、ステイツクシユガーは1本多くサービスして2本だ）をサリアに渡し、後を護衛騎士に任せて、丁度やって来た警備兵と一緒に、事情を説明する為に詰め所へ向かった。

何とか一通りの事情聴取を終え、詰め所を出ると時刻も4時少し前と夕方に近く、街のブラ歩きは諦めて宿に戻ることにする。

騒動のせいで気にする余裕も無かったが、どうやら空は晴れてきているようで、この様子なら明日は出発できるかも知れない。

ニイロはゆっくりと宿に向けて歩き出した。

第13話 お悩み相談室

これまでの雨が嘘のように晴れ渡り、朝の陽光が宿の周囲に植えられた木々を透かして、木漏れ日が部屋の中に差し込んでいる。

聞こえてくる『チツチツ』という小鳥の声らしきBGMが、ここが異世界であることを忘れさせるようだ。

「あうう、ギモチワルイ・・・：サクラコ、水、水くれ・・・：」
そんな清々しい朝にも関わらず、寝起きは最悪だった。

絶え間無い頭痛と吐き気がニイロを襲う。

宿の部屋の寝台の上で、ニイロは二日酔いという酒飲み永遠の宿敵に強襲されて目が覚めた。

昨日は、ニイロが宿に戻るとすぐにメリーチェから呼び出され、当事者のサリア、捕縛を手伝ってくれた護衛騎士3名、護衛団長のスローンの立会いの下、改めてサリアの主人としてメリーチェから感謝された。

その後、夕食はテイングレルの代官から、メリーチェ達共々晩餐会に招待されて参加し、やっと終わって部屋に戻ろうとすると、今度は護衛騎士団から武勲を称える催しに強制参加させられた。

たかが破落戸ゴロツキを捕まえたくらいで大袈裟など、サリアが相談に来る可能性も考えて断ろうとしたのだが、スローンから、要は事にかこつけて護衛の騎士達の慰労をしたいのだと裏事情を聞かされれば、強く断ることもできず、サリアの対応はサクラコに任せて、ニイロだけ飲み会に参加することになったのだが、その結果が今の惨状であった。

寝台に突っ伏したままの姿勢で、「どうぞ」と差し出された陶器のコップを受け取り、水を零さないように寝台の縁に腰掛けると、一気に飲み干した。

「お代わり、如何ですか？」

その声に、まだよく回らない頭ながら違和感を感じて顔を上げると、そこで初めて、水を差し出してくれたのがサクラコではなかったことに気がついた。

「あ、あれ？ サリア？ 何でここに？ サクラコは？」

飲み干したコップを差し出して、もう一杯、水のお代わりを頼みながら、状況を把握すべくサリアに尋ねる。

「はい、今朝方、お嬢様から直々に、ニイロ様、サクラコ様のお世話をするようにと申し付けられました。ルードサレンまで、あと数日の短い間ではありますが、宜しくお願い致します」

そう言うってサリアは深々とお辞儀をする。

「そ、そうなんだ。こちらこそ宜しく頼むよ」

突然のことに戸惑いながら、ニイロもペコリと頭を下げる。

「それから、サクラコ様はつい先ほど、今日の出立の準備のお手伝いをしてくると言うって出て行かれました。終わったらすぐ戻られると」

「そうか、手伝いね．．．．．あ？　ね、姉様あ!？」

二日酔いも吹き飛びそうな衝撃の単語が脳を直撃した。危うくスルーするところだったが、いったい何がどうしてそうなった。

ニイロの愕然とした表情に、サリアは照れ臭そうに頬を染め、モジモジしながらも一応の説明をしてくれた。

「はい、その．．．．．昨夜ご相談に伺ったんですが、ニイロ様がおられなくて．．．．．」

「あ、ああ、スローンさんに捕まって戻れなかったんだ。それでまあ、その結果が今朝の二日酔いなんだけど。それでサクラコに、代わりに相談に乗ってあげてと頼んでたんだよ」

「はい。それでサクラコ様にご相談したら、親身になって聞いて下さって．．．．．後でニイロ様にも話しておくから、と。それで、自分の事は姉とも思っただけで頼りなさいと言って下さって、私、弟と妹はいるんですけど、兄姉はいなくて、嬉しくて．．．．．」

「そ、そうか．．．．．仲良くなれたんなら良いことだもんな、うん。まあ、それはそれとして、見ての通りまだサクラコには話が聞けてないんだ。ただ、出発の準備とか考えたら、今聞いている時間も無いから、出発してからゆっくり聞くってことでもいいかな？」

「はい、それは大丈夫です。それに、もう下に朝食の準備も出来てますし、すぐお湯をお持ちしますから、顔を洗って食事になさって下さい」

サリアは昨日の落ち込み様が嘘のような明るい笑顔でそう言うのと、

桶に湯を貰うべく部屋を後にした。

ニイロはその姿を寝台に座ったまま見送ると、まだ重い頭を何とか切り替えるべく、目頭を揉んだり、トントンと頭を叩く。

そんなことで二日酔いがどうこうなるはずもないのだが、それでも今の内に身支度を整え、サリアの言う通り食事をして、その後は出発までの間にクラブとファージの装備構成を、昨日の反省を踏まえて変更する作業があるのだ。けっこう忙しい。

それにしても……

(サクラコ、お前、どこ目指してんだよ……)

二日酔いの頭痛は止まないが、果たしてこれが本当に二日酔いによるものか、だんだん自信が無くなってきたニイロであった。

◇ ◇ ◇

ルードサレン城の一角にある練兵場の一画で、一人の老騎士が剣を振るう。

銀鼠色ぎんねずに鈍く光る鎧を着込み、刃渡り1mほどのロングソードを縦横に操って、目に見えない敵との攻防を、延々と半刻に渡って繰り広げていた。

「伯爵様」

初秋の午後の日差しは強くはなかったが、声を掛けられ動きを止めた老剣士——ログソン・ロウ・ダスターツ伯爵——の体軀からは、もうとうと湯気が立ち上がっている。

「……………」

伯爵は、声を掛けてきた配下の文官で、筆頭秘書のカウネル・ラツチをジロリと無言で一瞥した。

カウネルは今年36歳。癖のある金髪に碧眼。やや神経質そうな細面で口髭を蓄えている。

不機嫌そうな様子を隠そうともせず、伯爵は無言で続きを促す。

慣れない者なら怯んでしまいそうな鋭い視線だが、カウネルにしてみれば慣れたもので、澄ました顔で用件を告げた。

「ただ今、使いの者が参りまして、お嬢様の御一行は一昨日ディンクルの街を出立なされたとのことで御座います」

その言葉を聞いたログソンは、先程までの不機嫌は何処へやら、うって変わった様子で満面の笑みを浮かべた。

「おお、そうか！　すると明後日には戻るな？　雨で帰りが遅れると聞いた時は、迎えに行こうかと思っただが……」

「はい。お嬢様が戻られましたら、件の連中との対面も御座います。ですので、剣の鍛錬も重要かとは存じますが……　お嬢様がお出掛けになられて以来、決済頂くべき書類の方が山を成していますので、今からでも何卒、執務室の方へ……」

カウネルは、先程のログソンの視線にも負けない、文官にしておくのは勿体無いほどの鬼気迫る表情で訴えかけた。

その迫力には、孫可愛さの余りサボっていたという後ろめたさもあって、流石のログソンも逆らえない。

「そ、そうだな、うん……」　それだけ言うと、着替えて執務を取るべく、トボトボと練兵場を後にした。

そんな主あるじの後姿を見ながら、カウネルは「ふう」と息を一つ吐く。そんな心配なら、お嬢様を送り出さなければ良かったのにと思いつつも、それは言えることではない。

これまで主あるじの、ここ一番での判断に間違ったことは一度も無かつたし、最近、待望の第一子が生まれたばかりのカウネルにも、孫娘を溺愛する主あるじの気持ちは痛いほどよくわかった。

気を取り直して後を追おうとしたカウネルに、声を掛ける者があつた。

「カウネルー」

その呼びかけにカウネルが振り向くと、領軍のトップでもあるギータン・ポアルソンの姿があつた。

「ポアルソン殿。後で貴殿にもお知らせしようと思つてましたが、丁度良かった」

「ああ、珍しく練兵場に貴殿の姿が見えたので声を掛けたが、もしかして、お嬢様の御一行から連絡が？」

「ええ、一昨日ディンクレルを立ったようなので、こちらへの到着は明後日となるでしょう」

その情報に、先程のログソンとは対照的にギータンの表情は曇った。

「そうか、いよいよ謎の英雄殿とご対面か……気が重いな」

「そうですね。スコバヤ殿の話が本当なら、取り扱いを間違うと、取り返しのつかないことになります。いっそ、スコバヤ殿が信用の置けない人物であってくれたら、どんなに気が楽か」

「全くだ」ギータンは、そう同意した後、少しだけ考える素振りを見せてから続けた。

「これはまだ確証は無いんだが……どうもドマイセンの影が気になる。かなり嚴重に隠匿されているんだが、ドマイセンで何か秘密裏に武器を作っているという情報があつてな。スコバヤ殿から聞いた、件の英雄殿が扱う武器と、断片的に入ってくるドマイセンの秘密兵器、俺の勘でしかないんだが、何か繋がりがあるかも知れん」

その言葉にカウネルは青褪める。

「では、ポアルソン殿は件の連中の背後にドマイセンがいると？ それは伯爵様には？」

「勿論、お話したさ」

「では、それを存じておられながら、伯爵様はお嬢様を使者にしたのですか」

「うむ。伯爵様は俺とは違う判断らしいが、それでも不安はあられたのだろう。それで仕事を手につかなくて、連日の練兵場参りつて訳さ」

「なるほど。まあ、それを私が知ったところで、書類の山は減りませんからね。では、私もそろそろ失礼しますよ。伯爵様のお手伝いをしたいと」

そう宣言すると、カウネルは伯爵を追って練兵場を後にする。

ギータンは、その姿を見送りながら呟いた。

「勝負は明後日か……」

◇ ◇ ◇

昼過ぎ、一行は何事もなくディンクレルを出立し、一路ルードサレンへの道程を歩んでいた。

午後からの出発になったのは、前日までの雨でぬかるんだ街道が、多少でも乾くのを待っていた為だ。

その甲斐あつてか、今の所は順調に行程を消化している。

ニイロの乗る馬車には、傭兵のダグとコズノー、それにスローンと部下の騎士、世話係にサリアが乗り込んでいる。サクラコとメリーチェ、ニアーレイの女性陣は別の馬車だ。

そこでニイロは、同乗者達にも一言断つてから、サリアの話を聞くことにした。

「サリア、悪いんだけどサクラコに話したこと、もう一度俺にも聞かせてもらっていいかな？」

そう促されたサリアは、ずらりと顔を並べた男達に圧倒されながらも、おずおずと事情を話し始めた。一度サクラコに聞いてもらったことで、抵抗も多少和らいだのかも知れない。

「実は、今回の旅に出る前に、故郷の両親から手紙が届いたんです……」

そう言つて話始めた内容を纏めると、サリアの故郷であるセビエネ村の近隣では、以前から山賊が出没しており、サリアが受け取った手紙では、とうとうセビエネ村でも被害があり、サリアの父親が怪我をしたということらしくった。

幸いにも怪我の程度は大したこと無かったようだが、これで山賊の襲撃が終わる保証など何処にも無い。

さらに、それを知つても、伯爵家に仕えるとはいえ単なる侍女に過ぎないサリアに出来ることも無い。

それであればほど落ち込んでいたのだ。

サリアの話を聞いたスローンが、ニイロに領内の治安の状況を解説してくれた。

「あの辺りは今、複雑なのだ。ダスターツ領の南には、南西にビンガイ

ン、南東にドマイセンがあつて、この内ビンガインとは国境のリンデン砦を挟んで対峙しているのだが、こっちはまあ問題ない。

ビンガインにリンデン砦を抜く力は無いし、仮にドマイセンと共同歩調を取られたとしても、地形的にも難攻不落のリンデン砦を守りきるのは難しく無い。

一方、セビエネ村の辺りはドマイセンとの国境に近いのだが、国境地帯は大軍が行動するには不向きな地形ということもあつて、これまで特に目ぼしい要害の建設などがされておらん。

何かあつても少数ならば近郊の街の領軍で対応して、援軍到着までの時間を稼げたし、最近まではドマイセンも、無理をして少数で攻め込むまでの理由が無かつたからな。

ところが、このところ鉾山開発のゴタゴタでビンガインもだが、ドマイセンとの間が急速に悪くなっていて、今、下手にあの周辺に軍を派遣すれば、益々ドマイセンを刺激することになる。

これはダスターツ領だけの問題ではないのだ。下手をすれば戦争の引き金になりかねん」

「でも、それじゃあ村は見捨てると?」

大を生かすために小を殺すという理屈は、ニイ口にも理解できるが、気持ちとして割り切れるかは別だ。

そんな気持ち表に出たか、少し険のある声になつてしまったかも知れない。

「まさか。特にうちの御領主様は、そういったことを嫌われる御方だ。恐らく、あの地方の代官からも何か言つてきているだろうし、手を打たれるだろうことは間違いないが、ただ、今は時期が悪いのも事実だ」
それを聞いていたコズノーが口を挟んだ。

「そういった事情なら、恐らくは俺達みたいな傭兵に話が回ってくるだろう。もしくは……セビエネ村と言つたら、近くの街はコルエバンだったか? コルエバンの代官辺りから、もう、何処かの団に依頼が行つてるかも知れん」

「いんや、あんまり大きな声じゃ言えねえが、コルエバンの代官は、人はいいんだが、ちとトロイので有名な爺さんだ。そこまで気が回つて

るたあ思えねえなあ。まだ話は領都で止まってる俺は見るね」

ダグの辛口評価に、スローンも、部下の騎士も苦笑いしているところを見れば、概ね共通の認識らしかった。

「なるほど。だとすれば、隣国を刺激しないように軍は動かさず、代わりにダグ達傭兵を雇って山賊を退治できれば解決する問題、という認識で合ってるか？」

ニイロが確認を取る。

その問いに、スローンは頷いたが、ダグとコズノーからは異論が上った。

「いや、ちいと待ってくれや。俺達はもう他で雇われてるって言うか、リユドールの代官の依頼で、カジユ村の北の警戒業務に行くところだったんだぜ？ 伯爵様の招待ってんでここにいるけどよ。だから、そっちが終わるまでは他の仕事の契約はできねえよ。傭兵の仁義ってもんがある」

「うむ。なので俺達は無理だが、ルードサレンに着けば他の傭兵を雇うことは出来るだろう。今の時期ならルードサレンには傭兵が集まってるし、いれば腕利きを紹介するくらいのは出来るが……」

「そうか。いや、俺はほら、傭兵と言ってもダグ達しか知らないから言っただけど、信用の大切さはわかってるつもりだよ」

そんな男達の会話が交わされる馬車の中で、サリアが一人、自分の頭の上で進んでいく話に半ばパニックになりながらニイロに言った。

「お、お待ち下さい、そんな、傭兵さんを雇うお金なんて、私にも村にもありませんです！ 借金しようにも、そんなアテも……」

慌てふためくサリアを、ニイロは笑顔で安心させる。

「お金のことは心配しないでいいんじゃないかな？ でしょう？ スローンさん」

「うむ、領内の治安維持の為なのだから、恐らく傭兵の雇用代金は領の軍費から出るだろうが……」

スローンは語尾を濁した。

今は護衛団の長を仰せつかっているとはいえ、スローンはあくまで

も、一介の騎士に過ぎず、迂闊に断定して言質を取られたくはない。かと言って、あまりシビアな事を言つて、どうやらサリアに肩入れしているらしい、目の前の異邦人を怒らせたくもない。

そんな気持ちはニイロにも理解できる。

「ただ、いつになるかはわからない、つてことでしょうか？ まあ、その辺のお役所仕事は、古今東西変わらずか……」

と、そこで、これまで黙つて話を聞いているだけだったスローンの部下の若い騎士が、焦れたような様子でニイロに話しかけた。

「ニイロ殿はダグ殿と一緒に、あのギガントライを討伐された剛の者であると伺っております。であれば、ニイロ殿ご自身が山賊討伐を引き受けられれば宜しいのでは？ ギガントライに比べれば、山賊など物の数ではないでしょう」

しかし、これに反論したのは、ニイロではなくコズノーだった。

「それは違う。ええと……」 「フロネルです」 「どうも。フロネル殿、俺達は傭兵だから、条件が折り合えば契約して、金の為に命をかける。あんた達騎士は、名誉と忠誠で国の為に命をかける。でも、ニイロは違うだろ？ 彼は……何だっけ？ ああ、探検家？ 未知の物を見聞きする為にここまで来たそうだが、山賊退治は彼の仕事じゃない。動くべきなのは、この国の人間さ」

その言葉に、ダグだけでなく、スローンも頷く。

ニイロの気持ちとしては、そこまできつちり理屈立てて考えた上でのことではないが、概ねコズノーの言う通りで合っている。

恐らく、ニイロの運用する武力をもつてすれば、山賊の殲滅は難しくないだろう。

しかし、ニイロの持つ武力は、ニイロがこの世界に来た理由である、ガンマ・アースこの世界の調査を円滑に進める為のものだ。

決して、ニイロがガンマ・アースこの世界で英雄や勇者になる為のものではない。
(中高生の時分なら、俺ツエーの選択肢もあつたのかも知れないけど、流星に三十超えて勇者ゴツコは辛いもんがあるよ)

そんなことを考えながら、若い騎士に言った。

「俺は他所の国の人間だからね。カジユ村は自然災害に対する緊急事

態ってことでお手伝いしたけど、山賊という犯罪者に当るのは国が行うべきだよ」

ニイ口にもそう言われると、若い騎士フロネルは納得半分、不満半分といった面持ちで考え込んだ。

その気持ちはニイ口にも良く分かるが、今、この場では建前を前面に押し立てておく必要がある。

そして、サリアに向き直る。

「ということでサリア、この件はロードサレンに着いてから、情報を集めて状況を確認する必要がある。聞いての通り、少なくとも山賊をこのまま放置ということにはならないと思うから、今は不安だろうけど結論はもう少し待って欲しい」

そう言われてサリアに否の選択肢は無い。ただ頷いて「宜しくお願います」と、馬車の中の面々に頭を下げるだけだ。

(まあ、俺も放置する気は無いけどね)

ニイ口は思うが、それをこの場で言葉にするつもりはなかった。

第14話 ルードサレン城の会談 前編

ルードサレンの城下町を囲う城壁に幾つかある城門。

その内、ルードサレン城を正面に見る位置にある、最も大きな正門の前には、両側に儀仗兵が立ち並び、城主の孫娘一行が乗る馬車を迎える準備が整っていた。

この時期は、臨時の職にありつこうとする傭兵達や、それらを狙った行商人などで混雑する城下町だが、領軍総出で人波は整理され、主役の到着を今か今かと待っている。

「いったい何が始まるんです?」

正門から伸びる通り沿いに立ち並んだ商店の一軒で、偶々遠出に必要な消耗品の買出しに来ていた、まだ少年と言ってもいい若い傭兵の男が、店先に出した椅子に座って店番をしていた年配の女店員に尋ねた。

「さー? アタシもよく知らないよ。兵隊の話じゃ、どっかに出掛けてた伯爵様のお嬢様が、半月振りに戻るとか何とか言ってたねえ」

「たった半月? 半年とかじゃなくて?」

「あら、あんた知らないかね。伯爵様のお孫さんんだけどね、そりやもう目の中に入れても痛くないほど可愛がっておられてねえ。伯爵様の親馬鹿、じゃなくて孫馬鹿は、ルードサレンじゃ有名な話さ。お出掛けになったのは覚えてるから、それが確か半月くらい前だったよ」

そんな店先での会話を耳にした別の傭兵の男が横から話に加わった。

「なんだ、知らないのか? ほら、半月くらい前にギガントライの噂があったら。あれを討伐したって連中が来るらしいぜ」

「えーっ? あれってデマじゃなかったんですか? ギガントライ10頭以上相手にするとか、絶対人間じゃ無理でしょう」

「俺もそう思ってたんだけどなあ、ただ、ほら、リュドローのダグ、って名前くらい聞いたことあんたどろ?」

「ああ、ここらじや珍しいハイ・オークの傭兵ですね。会ったことは無いですけど、魔道士のニーアーレイと、石壁のコズノーの3人組は知らないとモグリだつて仲間が言つてましたよ」

「それそれ、そいつらが噛んでるらしくて、単なるデマとも思えなくてなあ」

「ホントですか．．．．でも、それにしたつてギガントライは荷が重すぎるし、いったいどんな化け物が．．．．」

「さあなあ、稀代の英雄か、はたまた大ペテン師か、ま、どっちにしても俺達庶民にや、あんまり関係無いかな？」

「それはそうですね」

傭兵達は、そう言つて笑い合いながら、それぞれ用事を済ませようと商品の品定めに戻つた、丁度その時、騒がしかつた往來の様子が一変した。

野次馬と通行人の醸し出す不協和音が止んだと同時に、かつぽかつぽガタゴトと、耳慣れた馬車の通る音と共に、何やら聞きなれないメロディーが流れてくる。

その様子に買い物の手を止め、店先から顔を出して表を見た若い傭兵の目に、今まで見たことも無い異形のシルエツトが飛び込んできた。

「何だあれ．．．．」

正門を潜つて入城してきた一行は、先導する4頭の騎馬に率いられて、中央の3台の馬車の前後を護衛する11騎と30名の歩兵からなる護衛団。

しかし、見守る群衆の目を奪つたのは、その護衛団の規模ではなく、先頭2台の馬車の左右を進む異形の物体だった。

それは、4機のファージ達。

識別用に、それぞれ赤、青、黄、緑で塗装されたサッカーボール大の丸い頭をユーモラスに揺らしながら、ビープ音で器用に某怪獣映画の自衛隊出動マーチを奏でていた。

沿道の住民達に向かってマニピュレーターを左右に振っているの

は挨拶のつもりだろうか。

(お前ら、浮かれすぎ……しかもどんな選曲だよ……いや、好きだけどさあ……)

そんな様子を馬車の窓から眺めながら、ニイロはガツクリと肩を落とすが、サクラコの方は御機嫌なようだ。

「汎用歩兵のビーブ音では、これが限界でしょうか。あ、そうだ、スピーカーから行進曲を中継させて流す手もありましたね！ 上にいるクラブ達にも連携させて、次はワンダバマ……」

などと呟いているので慌てて止めさせた。

ステルスモードで上空警戒させているのに、何もいない上空からワンダバと声が降り注いだ日には領都の住民がパニックになりかねない。

そんなニイロ達を乗せた馬車は正門から続く目抜き通りを過ぎると、右に折れ左に折れ、やがて二重になった城壁の内側、ルードサレン城の中心部へと向かった。

内堀に掛けられた跳ね橋を渡ると、護衛団の大部分と侍女達を乗せた馬車は別行動となり、4騎の騎士とニイロ達を乗せた馬車だけが、左右に2塔の尖塔を持つ、特徴的な造りの城館へと乗りつけることとなった。

一行が城館の玄関前で馬車を降りると、そこで待つていたらしい長身で白髪の年配男性が進み出て、優雅な一礼をすると口上を述べる。

「皆様、ようこそお越しくございました。私、当家にて家令を申し付かっております、テルナンと申します。長旅でお疲れでしょう。皆様にはお部屋をご用意しておりますので、まずはそちらでお寛ぎ下さい。後程、準備が出来ましたら、主が御挨拶したいと申しておりますのでお迎えに上がりたいと存じます……が……」

そこまで言って、最後に戸惑った様子でニイロの後ろに整列した4機のファージ達をチラチラと伺う。

初めて見るファージにどう対応していいか、流石の老練な家令も判断に困ったようだった。

「あ、彼等は気にしないで下さい」

ニイロはそう言うと、腰の亜空間ポーチから大型荷物用の展開式亜空間パネル（仮称）を取り出して展開し、フアージ達を順に収納する。テルナンは、その様子に文字通り目を丸くしていたが、すぐに気を取り直すとニイロ達を屋敷の中へと誘っていった。

◇ ◇ ◇

一言で言えば、アデッテイ・スコバヤは現状に戸惑っていた。

思えば約半月前、カジユ村での衝撃の体験の後、一旦はリユドーの街に戻ったものの、即、鳩便の知らせでルードサレンへと呼び出された。

取るものも取りあえずルードサレンへと馬を走らせ、ダスターツ伯爵への直接報告と、今後の対応に関する協議を行ったが、導き出された結論は、伯爵自身が件の人物の人となりくたんを、直に会って見極めた上で対処するということだった。

この方針に沿って、伯爵にとって掌中の珠である孫娘を使者に抜擢した判断には驚かされたが、兎に角穏便にという判断からは悪く無い手だとアデッテイも思う。

それだけ伯爵が、件の人物を重要視している証明であったし、アデッテイの報告の内容が、あれだけ荒唐無稽なものであったにも関わらず、信用してもらえた証拠でもあるのだから。

結局、リユドーの街の方はハズンとゾイーネの部下2人に任せたまま、アデッテイ自身は伯爵のアドバイザーとしてルードサレンに留められ、予想外の長期滞在となっていた。

そして今、アデッテイは伯爵の城館の一室で、城内の主だったメンバーと共に、件の人物が現れるのを待っていた。

室内には長テールブルが設えられており、上座の中央に当主のダスターツ伯が座り、その筆頭秘書のカウネル・ラッチが背後に控えている。

伯爵の左には領軍筆頭のギータン・ポアルソンと、副長で今回、出迎への護衛団長を務めたガラクト・スローンが座り、右には筆頭行政

官のラズム・トットレルが座る。アデッティはその隣だ。

アドバイザーとは言っても、ニイロ本人とは結局会うことはできなかったし、むしろ護衛団長として10日近くを一緒に過ごしたスローンがいれば、自分はいらないのでは？　とも思うのだが、同席するよう命じられたからには仕方が無いことだ。

対面の為に用意された部屋は、普段使う応接室では迎え入れる人数から手狭ということで、臨時に用意された会議室を急遽それらしく整えたものだった。

他の大貴族であれば、いくらでも華美な部屋を用意できるのだろうが、そういったものを好まない伯爵の趣味が、今回は裏目に出たかも知れない、などとアデッティは思う。

誰も何も喋らない部屋で、そんな益体やくたいも無いことを考えていると、ドアをノックする音が室内に響いた。

すかさず室内にいた残る一人、ドアの傍にいた侍女長のエルンが小さくドアを開けて廊下を伺う。

2〜3言、外と言葉を交わすと、振り向いてダスターツ伯に来訪者の名前を告げた。

「ニイロ様、ダグ様、サクラコ様、コズノー様、ニーアーレイ様、いらっしやいました」

「うむ、入ってもらえ」

エルンの言葉にダスターツ伯が答える。

その言葉にエルンは「はい」と答えて一礼してから、再びドアに向き直ると、扉を開けて来訪者を招き入れた。

ニイロを先頭にして入室した一行は、伯爵領の面々に対して中央にニイロ、その右にサクラコとニーアーレイの女性陣、左にダグとコズノーの男性陣という形で相對する。

ちなみに、ニイロは黒のスーツに白地に薄いグレーのストライプの入ったネクタイを締め、いつものゴーグルもメガネタイプに変えている。

サクラコも、いつもの大正ナース服モドキから、薄いブルーのフォーマルなワンピースにベージュのジャケットを羽織りついていた。

胸元に光るブローチは、シルバーの枝に（たぶん）ジルコニアで葉を表現し、ピンクの真珠と珊瑚で花びらを表現した、桜の花を象つた物だ。

そんなブローチも持ってたんだ、とニイロが聞くと、「こういった機会もあるだろうとシンシアさんが持たせてくれました」と言っていた。

武装は要人との会談ということで、ボディエッチェックもあることを踏まえて何も持っていないが、いつものウエストバッグ風亜空間ポーチのベルトを外し、普通のポーチ風にしてサクラコに持たせている。

ダグ達も、それぞれ一張羅らしき服に着替えていた。

「初めまして。カオル・ニイロと言います。カオルが名前でニイロが姓ですが、私の国では全員が姓持ちですので貴族ではありません。普通の平民です。この度は、お招き頂き有難う御座います」

そう言っって頭を下げるニイロの言葉に、アデッティは衝撃を受けた。

今、この場に居るダスターツ伯側の面々で、実際に戦闘のあつた現場を目にしたのはアデッティだけであるが、貴族ではない者、単なる平民が個人で、あれほどの武力を持つということになる。

そんなアデッティの内心をよそに、サクラコやダグ達も銘々自己紹介を済ませ、ダスターツ伯は笑顔でニイロ達に席を勧めた。

「そうか。ニイロ殿は平民にしては教養がおありのようだ。しかし、我が領民の難儀を救って頂いた英雄に身分など小さいこと。まあ、座つてくれ。すぐに茶を用意させよう」

流石のダスターツ伯も、ニイロが平民という言葉には内心動揺があるようで、言葉遣いにブレが見られる。

着席を促され、ニイロとサクラコは極自然に、ダグは微妙な表情で、自分達は何もしていないという自覚のあるコズノーとニーアーレイは躊躇いがちに、それぞれ席についていた。

全員が席に着いた所で、ダスターツ伯がニイロ達の背後、ドアの横にいたエルンに無言で頷くと、すかさずエルンが扉を開けて飲み物を菓子類を載せたワゴンを押した4人の侍女達を招き入れた。

「失礼いたします」

4人の侍女達は、室内の全員に完璧な所作で卒そつな無くお茶とお菓子を配膳し、一礼すると部屋から退出する。

しかし、退出するドアの横にいたエルンが、4人の一番後ろにいた侍女に声を掛けた。

「貴女はこちらに」

そう言っつて自分の横にいるように指示する。

声を掛けられた侍女——サリア——は、戸惑いながらも「はい」と返事をする、エルンの横に並んで立った。

そして、ダスターツ伯が、全員に飲み物が行き渡るのを見届けた上で、ニイロ達に向かつて言った。

「まずは紹介をしておこう。こちらにいるのが我が領軍を任せておるギータン・ポアルソン、それからラククト・スローンは知っているな？　そしてこっちが筆頭行政官のラズム・トットレルと、リュドーの街を任せているアデツテイ・スコバヤだ。」

まずは此度のギガントライ出現の件、こちらにいるスコバヤより報告を受けた。しかも、ギガントライ出現の直前には村を襲うコボルドの群れも対処してくれたと聞いた。もしも、ニイロ殿らがいなければ、その被害は甚大なものになっていただろう。救われた領民に代わり、このログソン・ロウ・ダスターツ、心から感謝の弁を述べたい。そう言っつてダスターツ伯は頭を下げた。

それを見て、ニイロとサクラコ以外の室内にいた全員が息を呑む。貴族が平民に頭を下げるなど、絶対に有り得ないことだった。

「は、伯爵様……」

思わず筆頭行政官のラズム・トットレルが何か言いかけるが、ダスターツ伯はそれを遮った。

「よいのだ。さつきも言っつたが、本心からの感謝の意を表すのに身分など小さい」

そんな主従の様子を見ていたニイロが、ふと思いついたようにダスターツ伯に問いかけた。

「伯爵様の軍は、きつと強いのでしょね」

「うん？ 強いかと言われれば、王国一を自負してはいるが……」
「私の国の、シンゲン・タケダという有名な昔の武将の言葉に、『人は城、人は城壁、情けは味方、仇は敵なり』という言葉があるのです。部下や領民を大事にして、その軍はすこぶる強かったと言われていますし、亡くなつて400年以上が経つ今でも、非常に人気のある武将です」

その言葉に、ダスターツ伯は我が意を得たりと破顔した。

実際は『人は城、人は石垣、人は堀、情けは味方、仇は敵なり』が正解だが、ニイロもそこまで正確に覚えてなかったし、石垣の所は城壁と、勝手にアレンジさせてもらった。

「ほうほう！ そのような！ まさしくそれは儂の目指す所だ！ 他には無いのか？」

単に思いつきの言葉だったが、ダスターツ伯の琴線に触れたのか、食いつきの良さに多少気圧されつつ、他に何か適当な名言が無いか考える。

しかし、生憎と咄嗟には思いつかないので正直に答えた。

「今の言葉は伯爵様の言葉でふと思いつ出したもので、すぐに他のものは思いつかないですね。サクラコ、何かある？」

「はい、私のデータベースにも特筆するような名言格言は無いようです。次のコンタクトの際にシンシアさんに頼めばダウンロード出来ると思いますが……」

申し訳無さそうにサクラコが言った。

「そうか。じゃあ、頼んでおいてもらつていい？ ……伯爵様、お望みでしたら、多少の時間は頂きますけど私の国の名言集みたいなものならお渡しできると思いますよ」

ニイロがそう言うと、ダスターツ伯も喜んだ様子で言った。

「それは楽しみなことだ。ちゃんと後で礼はしよう。どれくらいかかる？」

聞かれたニイロは頭の中で計算する。

次のコンタクトが約10日後の予定で、その後に当然、翻訳する時間が必要になる。

「そうですね、まだはつきりとした時間はわかりませんが、半月から一ヶ月くらいではないでしょうか」

「そうか、それは楽しみに待つことにしよう」

そう笑顔で話すダスターツ伯の後ろから、秘書官のゴホンという咳払いの音が聞こえる。

その音に気づいたダスターツ伯が、多少気まずそうな様子で話を続けた。

「ふむ……では、話を戻すが……宮廷における輩とは違って、儂は面倒な駆け引きは好かんで率直に言おう。メリーチェに聞いた貴殿の人柄や、今、ここで話した様子から、どうやら貴殿は信頼できる人柄のように思える。が、問題は貴殿の武力と目的だ。」

ギガントライが十数頭、実際に討伐されたことは、そちらのスコバヤから報告を受けておる。しかし、本来であればその討伐には1頭であつても百人単位の人員を必要とするのが普通なのだ。これは明らかに異常だ。故に、貴殿の持つ武力を実際にこの目で確かめたいと思いが足労願つた。

さらに、その武力が本物であるのなら、貴殿はこの地に来て、その武力で何をしようと言うのか、その目的が知りたい。そしてもし、その目的が我が王国に害をなすものであるならば、例えその武力が本物であつても、儂は覚悟を決めねばならん」

鬼気迫る表情で捲くし立てたダスターツ伯は、そこでやや冷めかけた茶の入ったカップを手にとると、一気に呷った。

ふう、と一息つきながら、空になったカップを戻し、真剣な表情でニイロを見つめ、平然としているサクラコを除いた室内の全員が、伯爵の気迫に圧されたように、やや青褪めた表情でニイロの様子を伺っている。

ニイロ自身からすれば、あのセントロサウルス類と思われる角竜を討伐したのは事実だし、この地に来た目的も調査であつて疚しいところは何一つ無い。

(そういや、就職試験の時の圧迫面接も、こんな雰囲気だったっけ)

なので、相手が説明を求めるならば、落ち着いて説明するだけだ。

「まず、武力の証明と言っても、あの角竜……ギガントライでしたっけ、ギガントライを倒した武力を見せろと言われても、人間相手にあんな武器を使うわけにはいきませんし、ゴボルド相手に使った武器も、手加減のできるようなものじゃありませんので、普通に相手を殺すか、良くて大怪我では模擬戦にもならないでしょう。実戦以外に証明する方法がありませんよ」

ニイロのその言葉に、ただ一人現場に立ち会ったダグが、うんうんと首を縦に振っている。

「しかし、ティンクレルで破落戸ゴロツキを無傷で捕らえたと聞いたが？」

それまで黙っていたスローンが口を挟んだ。彼は護衛団長としてティンクレルで直接現場に駆けつけた騎士から報告を受けている。

「ああ、あれは相手が破落戸ゴロツキだったからです。相手が強ければ強いほど、手加減は難しくなるものでしょう？」

「ふむ」

その答えに納得したのか、スローンは押し黙る。

すると、今度はサクラコが横から発言した。

「ニイロ、提案があるのですが、全て断つてもあちらは納得されないうし、模擬戦という形で私がお相手して差し上げてはどうでしょう？」

「え？　しかし、相手に怪我させるのはマズイよ。手足を狙ったって大怪我に違いはないんだし」

相手が大怪我することを前提で交わされる会話に、大怪我させられる陣営の武官2人は苦笑いしているが、それを気にすることもなく、サクラコは言った。

「そこは考えがありますから大丈夫でけど、代わりに装備を幾つか使わせて下さい」

幾つかの装備名を挙げてニイロに依頼する。

相手方からすれば初めて聞く単語ばかりで見当もつかないが、ニイロからすればサクラコがどうするつもりかすぐに見当がついた。

ニイロは少しだけ逡巡したが、すぐに決断してダスターツ伯に提案する。

「サクラコがこのように言ってますので、1対1の模擬戦でどうでしょうか。それと、もう一つ、人間を模した中身に壊してもいい鎧を着せたものを2〜3体、同じく壊れてもいい盾と一緒に用意して下さい。そちらの方は模擬戦の後で使います。あと、場所はなるべく広い場所を。他に被害が出るといけませんから」

「よかろう。見せてもらえるなら、こちらに否は無い、が、そちらのお嬢さんで大丈夫なのか？」

その提案に、ダスターツ伯も即座に答えるが、相手が華奢な娘にしか見えないサクラコと言うことで多少心配そうな表情を見せた。

「ええ、私は彼女を信頼してますし、実際、彼女は私の護衛でもありませんから、私より強いですよ」

心配顔の伯爵だったが、笑って太鼓判を押すニイロの言葉に、ダスターツ伯も渋々ながら納得した様子で背後に控える秘書官に指示を出す。

「あいわかった。カウネル、聞いていたな？ 場所と道具の準備をさせてくれ」

指示された秘書官は、「承知致しました」と答えると、準備をすべく、すぐに部屋を後にした。

第15話 ルードサレン城の会談 後編

「それから……」

秘書官が模擬戦の準備に退出した後、ニイロはそのまま話を続ける。

「私がここにいる理由ですが、私の目的は広く世界を旅して様々な見聞を拡げる為です。これは学問の為であって、王国と敵対する理由はありません。そしてもう一つ、数年前、私達の国に突然、ドラゴンが現れて大きな被害を齎しました。その原因を突き止めるのが最大の目的です。ですから、仮に王国が悪意を持って私達の国にドラゴンを送り込んだのであれば、私達が王国に敵対することは絶対ではありません」

正確には『私達の国』ではなく『アルファ・アース』なのだが、それをここで説明しても理解されないのは明白なので、とりあえず『私達の国』と置き換えておいた。

ニイロの言葉に、ダスターツ伯側の陣営からは、明らかに安堵の空気が流れる。

その言葉を全面的に信じるほど愚かではないが、取りあえず信頼できそうな人物の言葉は、即時の敵対とならなかつただけでも安堵に値した。

「一つだけ、確認させてもらってもいいだろうか？」

領軍の長であるギータン・ポアルソンが言った。

「なんででしょう？」

「ニイロ殿はドマイセンをご存知か」

そう尋ねると、ポアルソンはニイロの表情一つ見逃すまいと、真剣な眼差しで見つめた。

「ドマイセン？ 確か南にある国でしたね。王国とは敵対していると聞いています」

「行った事は？」

「ありません。その内に行くかも知れませんが、それも先程言った件の調査次第ですね」

「ふむ……」

ニイロの答えに何か考え込むポアルソンだが、視線は外さない。その様子にダスターツ伯が割り込んだ。

「そこからは儂が話そう。実はな、ドマイセンに関して、最近新しい武器を開発しとるといふ噂がある。あくまで噂なのだが、この所の連中の強気を見るに、たかが噂の一言で片付けることもできんのだ。」

そしてそこに、全く知られていない武器を操るといふ貴殿らが現れた。これを全く偶然として捨て置く訳にはいくまい？」

ポアルソンが何を言いたいのか、戸惑っていたニイロだったが、ダスターツ伯の説明で合点がいった。

「確かに。立場が違えば私でも疑うと思います。でも、そのドマイセンとやらは私とは無関係です。証明はできませんが」

「では、貴殿と同じ武器を手にする者が、ドマイセンに手を貸しているという可能性は？」

そう言われるとニイロも少し自信が無くなる。

ガンマ・アースに他の平行世界からの来訪者が他にいるという可能性は、完全にゼロではない。

サクラコを見ると、サクラコは首を横に振った。

「絶対に、ではありませんが、その可能性は限りなくゼロに近いと言っておきます」

「そうか、その言葉、信じよう」

ダスターツ伯が頷き、ポアルソンも多少、表情を和らげた。

「では、こちらからも一つだけ聞いてもいいでしょうか？」

今度はニイロの方から尋ねる。

ダスターツ伯が再び頷いたので、そのまま言葉を続けた。

「スローン殿はご存知ですが、ここまで来る途中、そこにいるサリアさんから、件のドマイセンに近いセビエネ村が山賊の被害に遭っていると聞きました。彼女のお父さんも負傷されたそうです。」

しかし、そのドマイセンとの関係から迂闊に兵の派遣も出来ないとか。その辺りを伯爵様はどうお考えでしょうか？」

その問いに、ダスターツ伯の表情が苦いものに変わった。

「あの件か……確かにコルエバンの代官から報告は上がっている。が、あそこには大軍を通すには不向きながら、商人達の利用する細い旧街道があつてな、そのような地に軍を派遣しては本格的な戦争の引き金になりかねんのだ」

「放つておくのですか?」

やや挑発するようにニイロが言った。聞いているポアルソンとスローンの武官2人の表情もやや険しいものになった。

「まさか、見縊みくびってもらつては困る。儂は国王陛下より、この地の民を任されているのだ」

不快気にダスターツ伯が言った。

「ノブレス・オブリージュですね」

「のぶれす……?」

初めて聞く単語に、ダスターツ伯は不思議そうな表情を浮かべる。

「ノブレス・オブリージュです。色々な解釈があるみたいですが、概ね『崇高なる義務』と解釈されるようで、為政者の心構えを説いているそうです。誇り高き貴族であれば、その領民を守るのはノブレス・オブリージュ……崇高な義務である、と言う風に」

ニイロの話に、ダスターツ伯は本日2度目の我が意を得たりといった破顔を見せて喜んだ。

「それだ! それが、儂が日頃から考えていたことだ! 何と言う日であろうな、儂が考えつつも上手く言葉に出来なんだものを、こうも端的に表してくれるとは! 貴族の誇りとあるべき姿、ノブレス・オブリージュか。これは早速陛下に書状を認めてお教えして差し上げねばならん!」

興奮気味に捲くし立てるダスターツ伯に、やや引きながらも、ニイロは話を本題に戻した。

「それで、山賊の件なのですが、何か手はあるのですか?」

その言葉に我に返つたらしいダスターツ伯が、多少の照れ隠しもあつてか重く頷いた。

「無論だ。ポアルソンの方で準備を進めているので、もう少ししたら解決に乗り出せるだろう。そうだな? ポアルソン」

話を振られたポアルソンも頷いて答える。

「はい。ドマイセンを刺激しないよう、騎士1人を指揮官にして6名の傭兵を付け、分散して現地に入ったら情報収集を行い、拠点が判明したら部隊を集合させて、山賊の規模によってはコルエバンの領軍も動員して一気呵成に山賊の拠点を叩き潰し、さつと引く計画です。大軍を長期に渡って展開するのはマズいですが、短期間で撤収するなら国内のこと、ドマイセンも文句はつけられないでしょう。

既に2つの分隊が現地に入っていますし、残りも時間を置いて順次送り出す予定になっています。ただ……何度か言うようにドマイセンを刺激したくないのと、信用できる傭兵を集めるというのがネックになっていて、後続の分隊の編成に手間取っているのも事実です」

傭兵云々と言うところから、ポアルソンの視線がチラチラとダグ達傭兵組に注がれる。

当然、ダグ達もそれに気づいており、何とも具合が悪そうだ。

「俺達は無理ですぜ。もう、そこにいるスコバヤ様とノレーゲンの麓の斥候で契約を済ませちまつてる。そっちの契約を破棄するってんなら別ですがね。しかし、毎年のことで慣れてるノレーゲンの斥候ならともかく、隠密行動つてのは、ちと俺らの得意分野から外れるし、信用はともかく、そっちの分野の得意な連中を探した方が無難だと思いませんぜ」

そう言われてポアルソンはスコバヤの方を見るが、スコバヤも契約の破棄には反対した。

「それは困ります。現に今年はギガントライが降りて来るという事態になってますし、ノレーゲンのあの地域の斥候は今年は特に重要です。ここでベテランの彼等を持って行かれるのは厳しい」

実際に現場を任されているスコバヤに反対されると、ポアルソンもこれ以上無理強いはできない。

「そうか……ではどうだろう、ニイ口殿、貴殿の力をアテにさせてもらうことは可能だろうか」

今度はニイ口にお鉢が回ってきた。

しかし、これについては既に結論が出ている。

「申し訳ありませんが、それはお断りします。王国の民は王国の力で守るべきです。余所者が出しやばるのはお門違いでしょう」

ニイロの言葉にポアルソンは肩を落とすが、続くニイロの言葉に顔を上げた。

「でも、私なりの支援はさせて頂くつもりです。人が困っていて、自分にそれを助ける手段があるのに何もしないと言うのも気分悪いですから」

「それはいつたい……」

「そちらはそちらの出来る範囲で対策に当って下さい。あくまでも主役は王国の方々に、私は裏方です。あ、でもーっだけ、後で現地にいる総指揮の責任者を教えて下さい。こつちが勝手に動くことで迷惑を掛けたら本末転倒ですから」

つまり、勝手にやるのだから礼もいらぬということだ。

王国の矜持も守れる。

「ニイロと私は、です」

サクラコが主張した。

「そうだな、もちろんアテにしてるよ。サクラコがいてくれなきゃ、プランが成り立たない」

ニイロもサクラコに笑って同意する。

それを潮時と判断したのか、ダスターツ伯が話を纏める。

「全て了解した。この件は、ポアルソン、既定の線で進めるように。それから、ニイロ殿の要望も叶えよう。何か必要なものはあるか？」

「そうですね、現地の指揮官の方と接触した時に、私とサクラコの身分を証明する書状なんかがあると助かります。それと……これは山賊の件とは別ですが、ドラゴンについての情報がありましたら教えて頂きたいですね」

「わかった。身分を証明する書状は書いて、数日中には渡そう。それからドラゴンだが、我が国に現れたのは百年以上前という話だ。他所の国の話でも、確か20年ほど前ではなかったかな？　ここから南の都市国家連合より、さらに南にある国で出たという話ならば、以前聞

いたことがある。後は、東の蛮族共が住む地域にいるという噂や、北のノレーゲン山脈に住むという噂もあったが、どれも噂でしかない。本当の所はわからんが、王都の学術研究院の連中なら、もう少しマシな話を聞けるかも知れん。これも良かったら紹介状くらい書こう」

その話に、ニイロとしては特に落胆は無かった。

こちらに来て約20日ほどで、いきなり真相に迫れるような情報がホイホイ転がっているなどとは最初から期待していない。

「そうですか、有難う御座います。それは助かります」

そう言つてニイロはダスターツ伯に頭を下げた。

「なに、このくらいではギガントライ討伐の礼にもならん。そうだな、ダグ、コズノー、ニーアーレイと言つたか、そなた等の我が領地に於ける貢献も、スコバヤより聞いている。報奨金は期待してくれていい」

ダスターツ伯は笑顔で言つたが、その言葉にコズノーが慌てて反応した。

「お、お待ち下さい。今回の件、ダグが少しばかりお手伝いしただけで、俺、私とニーアーレイは何もしてません。それなのに金を貰う訳には……」

「いいのだ。言つたろう？ そなた等の我が領地に於ける貢献は、スコバヤより聞いている、と。二度は言わんぞ？ ここは黙つて受け取つておけ。そしてこれからも、我が領民の為に力を貸してくれればそれで良い」

伯爵にそこまで念押しされれば、コズノーもこれ以上言い募ることは不可能だった。

微妙な表情で押し黙ると、タイミングを見計らつたようにドアの傍にいたエルンが呼びかけた。

「皆様、お茶のお代わりは如何ですか？」

「おう、頼もうか」

ダスターツ伯が応えると、エルンは自分の横に立つサリアに「お願いね」と指示を出す。

指示されたサリアは皆に一礼してドアを開けると、先程退出してい

た侍女達がワゴンを押して入室して来た。

「どうやら前もって指示されていたようだ。」

先程と同様に、サリアも含めた侍女4人が、テキパキと全員の前から先に出されていたカップを下げ、代わりに熱い茶の入った新しいカップを配って回る。

その様子を眺めながら、ダスターツ伯が何気ない調子でニイロに言った。

「そう言えば、メリーチェに聞いたのだが、ニイロ殿の国の飲み物と菓子はたいそう美味と言っていたな」

「がしやん！」

ニイロの背後で思わぬ音が響いた。

何事かと振り向くと、サリアが回収したカップをトレイの上でひっくり返したようだった。

「も、申し訳ありません」

顔を真っ赤にしたサリアが、慌てて後始末をしている。幸い、トレイの上だったので、周囲への被害は免れたようだ。

そこで先程のダスターツ伯の言葉を思い出す。

ニイロの国の飲み物と菓子というのは、恐らくコーヒーとチョコバーだろう。カジユ村や騎士団との宴会で提供したのは増酒だけだ。

しかし、この2つを渡したのはサリアであってメリーチェには渡したことはない。

以上から導き出される推論は1つだけだ。

「伯爵様の仰る飲み物と菓子とは、恐らくコーヒーとチョコバーでしょう」

ニイロはそう言うと、振り向いて後ろで侍女達を統率している長らしき妙齢の女性に向かって尋ねる。

「ええと……貴女、すいません、お名前を伺ってないので」

「はい、伯爵様の侍女長を賜っております、エルンと申します」柔らかな笑顔で答える姿は、流石に伯爵家の侍女長といった感じだ。

「有難う御座います。エルンさん、お手数ですが、沸騰させたお湯と、空のカップを人数分お願いしてもいいですか？」

「畏まりました。それから、私にはもつと砕けた口調でけっこうですよ」

そう言うと、エルンはにっこりと笑って、依頼されたものを用意すべく行動に移った。

ニイロは、それを見届けると、ダスターツ伯に向き直って言葉を続ける。

「ここまで来る途中で、そこにいるサリアさんが災難に遭ったことはお聞き及びと思いますが、その際に慰めにでもなればと思つて渡したもののなんです。多分、それをメリーチェ様も口にされたのかと」

「なるほど。しかし、侍女の物を取るなど、あつてはならん事だな……」

そう言つてダスターツ伯は渋い顔をするが、その様子にサリアが慌てて弁解した。

「いつ、いえ、お嬢様は何も悪くありません！ あれから部屋に戻つて、一人だったので、ニイロ様に頂いた物を食べて元氣出さないとつて思つて！ それで準備してたらお嬢様が心配してお見舞いに来て下さつて、それで嬉しくて、一人で食べるよりご一緒につて、私が言つたんです！」

「ふむ、そうかそうか、良く分かった。そなたも難儀な目に会つたな」
サリアに向かつてダスターツ伯は優しく微笑む。

孫娘が不埒な行為に及んだ疑惑が晴れた安堵の成分も含んでいるだろう。

メリーチェの疑惑が晴れて、ほつとしていいるサリアの様子に、室内の全員からほっこりした空気が漂つた。

それからは雑談の時間である。

エルンが用意してくれたお湯とカップに、サクラコに持たせていた亜空間ポーチからインスタントコーヒーを出して皆に振る舞い、一緒にチョコバーも提供する。

絶賛の嵐だったのは、多分にお世辞も含まれていたかも知れない。

コーヒーもチョコも、人によつては嫌いな人もいるのだから。

そして注目を集めたものが他に2つ。

一つは亜空間ポーチで、これは当たり前だろう。特に魔道具馬鹿マニアのニーアーレイが被りつきだった。

「これは凄い。これがあれば軍の兵站到革命が起こるぞ！ ニイロ殿、無理を承知で言うが、譲ってもらおう訳にはいかんだろうか」

領軍の長を担うギータン・ポアルソンが、普段の冷静さも何処へやら、興奮した様子でニイロに頼むが、当然ながらニイロは断った。

「それは無理というか無駄です。これは私の持つ装備の殆どが同じなんです。生体認証という機能が付いていて、登録された私以外の人間が使っても普通のポーチなんです。例えばサクラコが使っても普通のポーチと同じです。予備ありませんし」

その答えにポアルソンはガツクリ肩を落とすが、代わりにスローンが聞く。

「しかし、この品の価値は恐ろしいまでに大きい。中には他人では使えないと知らずに盗んだり奪い取ろうという輩もいるのでは？」

「ええ、例え盗まれても、どこにあるかは一目瞭然でわかる機能が付いています。盗んだり奪ったりという行為は敵対宣言と同じですから、こちらも容赦はしませんよ」

そう言つて笑うニイロを見て、ダスターツ伯側は勿論、ダグ、コズノー、ニーアーレイもゾツとしたように青褪める。

実は多少敵対されたからと言って、そこまで徹底的にやるつもりなど無いのだが、無駄な敵対を避ける意味で大袈裟に言っておいた。この場にいる人間は理解していても、部下や配下に不埒な考えを起こす人間がいけないとも限らない。

幸いにもこの場にいる人間は上位者ばかりなので、こう言っておけば影響は下の人間にも及ぶだろうという魂胆だ。

見ると互いに視線を交わして頷きあっているので、目論見はある程度効果があつたようだ。

そしてもう一つ、注目を集めたのは、意外にもサクラコの胸に飾られたブローチだった。

最初に気づいたのは、やはり女性のアデッテイで、何やら目を白黒させながらサクラコに切り出した。

「サ、サクラコ殿、もし良かったら、そのブローチを見せて欲しいのだが、宜しいだろうか？」

その申し出に、サクラコは快くブローチを外すとアデッティに差し出した。

差し出されたブローチを受け取ると、しばらく穴が開くほど一心不乱にブローチを見つめていたが、やがて顔を上げると震える声でサクラコに聞いた。

「サクラコ殿、これをいったい何処で手に入れられたのでしょうか……私も末端とはいえ貴族姓持ちの女です。宝飾品の目利きには自信があつたのですが、これは……」

「これは、こちらに旅立つ前に、私の大切な方から頂いた物です。サクラの花の意匠が私の名前に見合うからと」

「サクラの花？」

「はい、ニーロの国の花で、私の名前の由来でもあります」

「ほう、確かにこれは凄いな」

横からダスターツ伯が首を突っ込んできた。

武闘派とはいえ上級貴族、宝飾品の目利きは一般教養として身につけている。

「派手すぎず控え目な意匠も素晴らしい。銀は黒く燻くすむものだが光沢を維持しているのは手入れが良いからか？ 余程大事にしていると見える。それに、この散りばめられた宝石、一つ一つは小さいが、このカットイングは……」

「はい、この宝石のカットイングは見たことはありません。我が国に、この小さい宝石にこれほどのカットが出来る者がいるでしょうか」

「おるまいな。これほどの一品、妃殿下のお持ちの物でも並ぶ物があるかどうか……」

ダスターツ伯の絶賛に、アデッティが我が意を得たりとばかりに頷いている。

「枝と葉は単純なシルバーではなく、ロジウムコーティングをしたもので、散りばめられた宝石は、キュービクジルコニア、花びらはピンクコーラル、中央にあるのはピンクパールです」

ダスターツ伯とアデツテイは、聞き慣れない単語に目を白黒させている。

そんな話を聞きながら、ニイロはそつと小声でサクラコに聞いた。「なあ、サクラコ、俺、アクセサリーなんて全然なんだけど、そのブローチ、そんなに高価なものなの？ シンシアから貰ったんだよね？」

シンシアがそんなに高給取りとは聞いた覚えが無い。

「はい、アクセサリーショップでたまたま見つけたとか仰ってましたけど、高くても1万円前後、恐らくは数千円かと……でも、値段じゃありませんから」

そんな雑談が暫く続いたが、やがてドアをノックする音が響き、開けられたドアから秘書官のカウネルが顔を出した。

全員の視線を浴びながらも、何ら気にする様子もなく、カウネルは報告した。

「伯爵様、ニイロ殿、模擬戦の準備が整いました」

第16話 模擬戦

ルードサレン城の城館の一面にある、会談の為に用意された会議室には、ダスターツ伯爵領の幹部連だけが残っていた。

ニイロとサクラコは、筆頭秘書のカウネル・ラツチから模擬戦の舞台が整ったとの報告を受け、準備の為に先に退出しており、ダグ達傭兵3人も先に会場となる練兵場に案内されてここにはいない。

「率直な意見を聞こうか。会ってどう感じた？」

ダスターツ伯が全員に意見を求めると、それに呼応してギータン・ポアルソンが真っ先に意見を述べる。

「人となりは概ね信頼できると感じました。ドマイセンとの繋がりも、伯爵様の推測通り杞憂だったようです。ただ、我々に対する協力には、明らかに一線を引いていて、無条件に頼んでいい人物ではないようですね」

それについてアデツテイ・スコバヤが発言した。

「あの知識と物腰、それに、見たことの無い衣装やサクラコ殿が身につけていたアクセサリーからしても、本人は平民と言っていました。明らかにただの平民とは思えません。どこか遠国の大貴族、或いは王族という可能性が高いのではないのでしょうか。そうであれば、その身を守る武力を身につけていても不思議ではないと思考します」

それを聞いて、ダスターツ伯も頷く。

「うむ。スコバヤの論でいけば、我々への協力に一線を引くのも頷ける。身を守る武力にしては、話に聞くものは少々大きすぎる気はするがな」最後の部分は苦笑交じりだ。

続いて、今度はガラクト・スローンが口を開いた。

「カジユ村からここまでの道中で観察した感想ですが、こちらが礼をもって接すれば、きちんと礼を保って対応する、そんな人柄と見受けられました。道中での騎士達との宴会でも、誰とでも分け隔て無く酒を酌み交わしていましたし、傭兵達との付き合い方にしても、身分による忌避感は全く無い御仁のようです。

したがって、きちんと筋を通せば、少なくとも敵に回す事態を避け

ることは難しくないと思いますが。

さらに、どうやらかの御仁は侍女のサリアに思い入れがある様子。彼女を利用……という言葉は使いたくありませんが、彼女を架け橋にして友好を保つことも一考の価値があるのではないでしようか」

その提案にダスターツ伯は顎に手を当てて考える。

「女子供を利用すると言うのは好かんが、セビエネ村の件といい、友好の使者というのであれば悪く無いか……」

しばし考え込むダスターツ伯に、行政官のラズム・トットレルが聞いた。

「では、伯爵様は、あの男との関係を結ぶことをお望みなのですか？」
「うむ。出来れば王国の戦力として引き入れられれば最上だが、あの様子からして首を縦には振るまい。この地に来た目的を聞けば、いずれはこの地を去るつもりであろうが、それを引き止めるのも難しいと思える。」

ならば、せめてこの地における間は友好的に関係を結び、あわよくばあの男の方から快く協力させる体制を敷く。

それが叶わずとも、あの男がこの地を去った後、少なくとも我が国に敵対する事態を避けるだけの友情としがらみを育てるのは、損の無い話ではないかな？

なに、方策は簡単だ。真っ直ぐ向き合えば、あの男もこちらを真っ直ぐに見てくるだろう」

「それだけの価値があるか？」

「まあ、儂はもう疑っておらんが、これからの模擬戦を見れば、お前も納得するのではないか？」

そう言って笑った。

城館内での会談から凡そ30分ほど後、ニイロの姿はリードサレン城の一面にある練兵場にあった。

領軍側の準備が出来たとの連絡があつてから、ニイロ達も着替えており、ニイロもサクラコも、武器以外はいつもの装備に身を固めてい

る。

まずは領軍から選抜された騎士とサクラコが1対1で対戦し、その後、ニイロがデモンストレーションを見せるといふ段取りだ。

サツカーコートが2面くらい取れそうな広さの練兵場の、端に急遽設えられた観覧席には、ダスターツ伯を中央に伯爵領の幹部達が並び始まるのを待っている。

ダスターツ伯の隣には、サリア達侍女を侍らせたメリーチエの姿も見えるが、心配そうな彼女達の視線の先が領軍の騎士ではなく、サクラコに注がれているのは、道中での親睦を深めた甲斐であろうか。

ニイロとダグ達3人組にも、観覧席の一角に席が用意されていた。

また、観覧席の左右には、訓練中だった100人程の領軍の兵士達が並んで観戦しており、右手に立ち並んだ兵舎の周囲にも、20〜30人程だろうか、非番らしき兵士達が見物する姿が見受けられる。

観覧席の正面、30mほどの所には、既に準備万端の2人が10mほど離れて対峙しており、ダスターツ伯からの始めの合図を待っていた。

領軍から選抜された騎士は、肩と胴体を守るブレストプレートと呼ばれるタイプの鎧に、コリント式に似たデザインのヘルム、得物は1.5m程もある両手持ちの大剣に似せた木剣だ。

紹介された折に聞いた話では、領軍でもトップテンに入ろうかという期待の若手だそうで、その巨躯は他の領軍兵士と比べても一回り大きい。

「ああやって並ぶと大人と子供だな。どう見る?」

「そうねえ、サクラコちゃんの実力がよくわからないけど、見せてもらった武器とか見たら遠距離系よねえ。多分、接近されなきゃ勝てると思うんだけど、接近されたら流石に危ないと思うわ。あの騎士、相当やりそうよ?」

コズノーの問いかけにニイアレイが自分の予想を述べていた。

「ダグはどう見てるの? あなた、実際にサクラコちゃんが戦うの見てるでしょ?」

今度はニイアレイがダグに話を振ったが、その問い掛けに、ダグ

は面倒臭そうに答えた。

「んー？ 圧勝だろうよ……」

騎士と対するサクラコは、いつもの大正時代風ナース服モドキに、武装はニイロが破落戸共の捕縛にも使った四連装スタンガンと、伸縮式スタンロッドを腰の左右のホルスターに収め、両手には、回転弾倉式のグレネードランチャーに似たフォルムを持つ、動物捕獲用のネットガンと、10mm自動拳銃を持っている。

ネットガンは単発式で、本来両手で扱うものだが、サクラコの膂力なら片手でも運用可能だ。予備の弾は肩から纏掛けにした弾帯に5発ほど持ち込んでいた。

また、10mm自動拳銃には訓練用の非殺傷ペイント弾が装填されている。

(これ、どう考えてもズルいよなあ……)

ニイロは思う。

銃の存在を知らない相手の騎士にとって、今のサクラコに不気味に思いこすれ脅威を感じる要素があるとは思えないだろうが、仔細を知るニイロにすればサクラコの考えは一目瞭然だ。

恐らく、ペイント弾で牽制しつつ、接近する前にネットガンで絡め取り、スタンガンかスタンロッドで麻痺させて終わりだろう。

観客席にいるダスターツ伯が片手を挙げて開始の合図をすると、騎士がいきなり間合いを詰めるべく、サクラコに向かってダッシュした。

対するサクラコは横に移動しつつ、10mm自動拳銃を相手に向かって数発発射する。

「？」

ペチペチと音を立てて騎士の鎧に青く塗料の染みが花咲く。

実弾であればこれで騎士は死亡、良くて重傷なのだが、騎士にはその意味がわからない。

「これはこれは、避けてすら下さらないのは予想外でした。でも、ちよっと無用心すぎではないでしょうか」

サクラコは呟くと、10mm自動拳銃をホルスターに収め、ネットガンを両手で構えた。

相手の武器を見たことはなくても、その動きには細心の注意を払うべきだと思うのだが、生憎と相手は猪突猛進タイプだったらしい。

騎士の方は、剣の届く範囲に入れば勝てる、ひたすら間合いを詰めることに集中し、横に逃れたサクラコにさらに追い続ける。

サクラコは、ワントンボわざとステップを遅らせ、相手の騎士が自分を剣の間合いに捕らえる隙を作ってやった。

「捉えたっ！」

騎士はそう呟えて木剣を横薙ぎに振るう。

が、そのタイミングはサクラコによって誘導されたものだ。タイミングを合わせて避けるのは難しく無い。

振るわれた木剣がサクラコを捉えたかに見えた、その瞬間、サクラコは大きくバックステップを踏む。

人間以上のパワーを持つサクラコの脚力は、その小さな躰を5mほど跳躍させた。

おおっ！と観衆から感嘆の声が漏れる。

「大声で攻撃のタイミングを相手に知らせるのは、愚かな行為だと思いますよ？」

サクラコは、そう呟いて両手で構えたネットガンを発射した。

バズッ、と言う音と共に発射された弾は、銃口から飛び出ると同時に四散し、内蔵された合成繊維網が投網のように広がって騎士を捕らえた。

「ぬおっ！ くっ、なんだこれは！」

騎士がもがけばもがくほど、合成繊維の網は騎士の躰に絡まっていき、木剣では切ることもできない。

「くそっ！くそっ！」

それでも諦めずにもがく騎士に、サクラコは持っていたネットガンを地面に置くと、腰のホルスターからスタンガンを取り出して構えた。

「あ、それ、ちゃんとした刃物でないと切れませんから諦めて下さい。

ちやんと後で取ってもらえるように言っておきますから」

そう言つてにつこり笑うと、騎士の鎧で覆われていない太腿の部分に向かつてスタンガンを発射する。

「うぐ」がががっ！」

撃ち込まれたスタンガンによつて全身の筋肉が硬直し、騎士は全身に網を絡ませたまま地面に倒れ伏した。

それを見届けたサクラコは、スタンガンを元のホルスターに収めると、観客席にいるダスターツ伯爵領の面々に向かつて優雅に一礼し、続いてまだ硬直の解けない騎士を軽く診察する。

「意識はありますか？　今は電流で全身の筋肉が硬直しているだけです。数分もすれば、すぐ元通りになるし後遺症も無いので安心して下さい。念の為に今日だけは安静にしてもらえば、明日からは普段通りに訓練して下さいませよ。」

それから、未知の物に対する慎重さを身につけられた方がいいでしょう。今の貴方は勇敢ではなく無謀なだけです。

間合いを詰める突進力は素晴らしかったです。もしも最初のペイント弾の牽制に反応する程度の慎重さが貴方であれば、弾速の遅いネットガンは避けられやすいので、私ももつと慎重に戦う必要がありました。

あと、勝つたと思つた瞬間が一番危険です。今から攻撃するぞと宣言されれば、相手はそれに対処して当たり前ではないですか。よくよく考えられることをお勧めします」

そう諭すように騎士にアドバイスを送る。

送られた騎士の方は、まだ自由にならない躰でサクラコを口惜しそうに見つめるが、それでも微かに頷いた。

後は騎士の救護に來た医療班に現在の症状と対応、網の除去の仕方を教え、地面に置いていたネットガンを拾い上げると、ゆつくり観客席の方へ歩いていった。

「これほどとはな……」

ダスターツ伯爵が呻くように言った。

頭では強いのだろうと理解していたつもりだったが、練兵場に入つて、改めて対峙する両者の体格差を見た時は、正直、負けるとは思えなくなっていた。

実際、孫と言つてもいいくらいの年齢の娘の身を心配していたのだが、始まって5分もしない内に娘の圧勝だった。今、こちらに向かつて、てくてくと歩いてくる娘は傷一つ負っていない。

「ギータン、どう見た？」

ダスターツ伯の問い掛けに、領軍トップであるギータン・ポアルソンは表情を歪めて答える。

「正直、ここまで差があるとは思っていませんでした。しかし、言い訳をさせてもらえるならば、やつも我々もサクラコ殿の手の内を知りませんでしたので、それが明らかになつた上であれば、次は……」
「確かに言い訳だな。戦いで手の内を隠すのは当然。それに、聞けばサクラコ殿はニイロ殿の意を受けて、相手を極力傷つけない武器で挑んでいたのだぞ？　ならば手加減無しであれば、いったいどのような事態になつていたか」

そう言われるとポアルソンは返す言葉もなく恥ずかしそうに顔を伏せた。

そこに、ちようど観客席前まで戻つて来たサクラコが、にこやかな表情で声を掛ける。

「では、もう1戦お相手して致しましょうか？　今度は同じ武器でけっこうですが、如何でしょうか」

その誘いにはニイロが慌てた。サクラコにその気があつたかはわからないが、その言い方では挑発と取られても仕方が無い。

「駄目だよサクラコ。それは許可しないし、その言い方はポアルソンさんに失礼だ」

少しキツめに発せられたニイロの言葉に、それまでにこやかだったサクラコが目に見えてシユンとしてしまった。

例えばサクラコは優秀なA オートノマスマシン Mだが、ロールアウトして一ヶ月も経っていない。

知識としてのデータは人間を越える膨大なものを持つが、経験とい

う観点からは、まだ赤ん坊と一緒になのかも知れないとニイロは思う。「ご、ごめんなさい……」

その様子にポアルソンの方が慌ててサクラコを擁護した。

「いいや、伯爵様も言われたように、手の内を隠すのは常道。それを言い訳にした私が悪いのだ。サクラコ殿を責めないで頂きたい」

そこまで言われればニイロもこれ以上、とやかく言うつもりはない。

「わかりました。でもサクラコ、ちゃんとポアルソン様に謝って。そしてちゃんと反省してくれたら、それでこの話は終わりにしよう」

「はい、ポアルソン様、生意気なことを言って、申し訳ありませんでした」

そう言つてサクラコはポアルソンに頭を下げる。

それを見届けてから、ニイロがサクラコに笑顔を見せると、サクラコもホツとしたように笑顔になった。

ポアルソンの方も、サクラコに優しく笑いかけて言った。

「はい、その謝罪、確かに受け取りました。もう頭を上げて頂きたい。それに、あの戦いは素晴らしかった。あの跳躍、人間業とは思えない」
(すいません、人間じゃないんです)

ニイロは内心で苦笑しながらポアルソンに謝る。これは声には出せない。

「そうだな。あの跳躍は凄かった。その実力、一部ではあるのだろうが、確かに見せてもらった」

ダスターツ伯もサクラコに賛辞を送り、次にニイロに向き直ると、「して、更に何か見せてくれるとのことだが……」と、次なる演目を催促した。

「わかりました。では」

その催促にニイロは笑つて答えると、サクラコに「伯爵様から質問があつたら解説して差し上げて」と指示を出し、予め頼んであつたアシスタント役の騎士3人を引き連れて練兵場の中へと進む。

アシスタントの騎士達は、それぞれ1体づつ、鎧と兜を着せた案山子^{かかし}を担いでおり、ニイロの指示に従つて、まず1人がニイロから

100mほど離れた地点に案山子かかしを設置した。

「これから、ご提供頂いた鎧と兜を着せた案山子かかしを敵に見立てて、ニイロが攻撃します」

観客席で伯爵の傍に控えたサクラコが解説する。

「あれだけ離れているということは、あれも弓のようなものと思っ
てよいのかな？」

ダスターツ伯がサクラコに質問した。

「そうですね、弓の上位互換と思って頂ければよいかと思っ
ます。ただし、性能は間違いですが」

そう言っている間にニイロの準備が出来たのか、片手を上げて観客席の方に合図すると、標的に向き直ってトラッドC60自動小銃を構えた。

数拍の呼吸の後、ニイロの持つ銃が、ダン！ともガン！とも言い難い音響の射撃音と共に白煙を噴いた。そして、その射撃音の反響が鳴り止むかどうかのタイミングで、今度はダダダッ！とバースト射撃による連射音が練兵場に木霊こだまする。

その後も、2度、3度、射撃音が響くと共に、標的の案山子かかしがグラグラと揺れるが、その盛大な射撃音にも係わらず、肉眼では銃と標的の間の弾道が見えないので、観客には何が起きているのかわからない。

ただ、射撃音が重なる都度に小さな穴が開き、歪に形を変えていく案山子かかしに、誰もが言葉を失って見入っていた。

十数発の射撃の後、頃合と見たのかニイロは、傍らで耳を塞いでいたアシスタントの騎士3人に、一人は標的の案山子かかしを引き抜いて観客席に届けさせ、残る2人には新しい2体の案山子かかしを設置するよう指示する。

標的になっていた案山子かかしが観客席に届けられると、ダスターツ伯とポアルソン、スローンの3人が食い入るように検分する。

廃棄寸前だったとはいえ、まだ一応現役だった金属の鎧は、文字通り蜂の巣のごとく6mm弾によって撃ち抜かれ、かなりの数が背中まで貫通していた。

「これを見れば手加減しても大怪我という意味がわかるというもの。サクラコ殿、あの武器はいつたいどのくらいの距離を飛ぶのか」

眉間に皺を寄せながら発せられたダスターツ伯のその問いに、サクラコは答える。

「どこまで届くか、という意味でしたら、あの口径ですと2 kmほどでしょう。ただし、狙って当てられる距離ならば、約400〜500 m程度でしょうか」

「し、しごひやく……魔法はおろか、ロングボウ長弓でも無理だ……」
サクラコの解説を聞いたポアルソンが、呻くように言った。

「しかも、矢と違って放った瞬間は音でわかっても、目に見えんのでは避けられん。この様子では盾も役に立つまい。つまり、狙われたら四方を石壁にでも囲まれた部屋にでも籠るしか無いかの」

愉快そうにダスターツ伯は笑った。半ば自棄やけのようだ。

そうこうする内に、ニイロの準備が整ったようで、観客席に向かって片手を上げて合図する。

今度の案山子かかしは練兵場の端に近い位置に設置されており、ニイロも反対側の端まで下がっている。双方の距離は200 mほど。

ニイロの肩に担がれているのは携帯用60 m対戦車ロケットランチャーだ。

「あれは？」

ダスターツ伯がサクラコに聞く。

「あれは携帯用60 m対戦車ロケットランチャーと言います。セントロサウルスセントロサウルス

角 竜……ここではギガントライでしたね、ギガントライ戦の折には使わなかったのですが……」

そうサクラコが言い掛けた言葉を遮るように、ニイロの担いだロケットランチャーが文字通り火を噴いた。

バスン！という腹に響く発射音と同時に、火炎と煙のバックブラストをたなびかせながら、シウルシウルと飛翔したロケットの弾頭は、狙い変わらず5 mほどの間隔を置いて設置された案山子かかしの片方に着弾し、爆煙と共に標的を跡形なく消し飛ばしてしまっただけでなく、爆風と破片でもう片方の案山子かかしも吹き飛ばしてしまった。

その轟音の余韻に、しばし、誰もが呆然と見守る中、爆発によってもうもうと舞い上がった土煙が晴れるのを待って、ニイロに促されたアシスタントの騎士達が標的の回収に走り出し、ニイロも騎士達を手伝うべく標的のあった場所へと向かっている。

観客席では、ポアルソンがサクラコに問うた。

「あ、あれでギガントライを屠ったと言うのか。確かにあればらば……」

「いえ、ですから、ギガントライの時は使わなかったのです。あの時使ったものは、生憎とこの場所では狭すぎて周囲に被害が及ぶといけませんので」

「すると……あれより強力なものが他にもある、と？　ちなみに威力は？　あれはどのくらい飛ぶのだ？」　恐る恐るといった感じ
でポアルソンが尋ねる。

「二応、ギガントライに使った90m対戦車ミサイルは、あれよりも強力ですが、その他に何かがあるかは私の権限を越えますのでニイロに聞いて下さい。あと、今、ニイロが使ったロケットランチャーの有効射程は約600mほどで、標的との距離にもよりますが、だいたい10cmほどの鉄の板であれば貫通できると思います」

それを聞いたダスターツ伯は、呆れたように呟く。

「10cmの鉄……つまり、石壁程度では四方を囲っても無駄ということか……」

その呟きを聞きつけたサクラコが、ダスターツ伯に向かって同意した。

「厚さにもよりますが、そうですね。でも、変な気さえ起こさなければ無用の心配ですよ」

そう言ってニッコリと微笑む。

その笑顔は、果たして天使の微笑みなのか、悪魔の微笑みなのか、伯爵には判断できなかった。

第17話 戦争と平和

南の四方国連合の一つであるビンガインとの国境線となっているヨードファイル渓谷。

ホロゲノン山地の北側に位置する、大地の亀裂のようなその渓谷の断崖の中ほどに、中洲のように屹立した塔状の岩盤の上に、リドリスファール王国が守備するリンデン砦と呼ばれる砦があった。

砦の前後には、幅10mほどの断崖が口を開けていて、そこに馬車が2台、やつとすれ違う程度の幅の木製の橋が掛けられている。

万一の場合は、この前後の二つの橋を落とすことで敵の侵攻を遅らせることができる。二段構えの仕掛けだ。

砦の近隣には、他に橋を掛けられるような場所も無く、50人ほどの兵士が詰める、この縦横30mほどしかない小さな砦は、文字通り難攻不落の拠点となっていた。

「来やがったぞ。門閉めさせる。鐘鳴らせ。敵は500、物見の報告通り……いや、もう少し多いな。600はいるぞ！ 隊長に伝令急げ！」

うんざりしたように、しかしながら真剣な表情で見張り台の兵士が仲間に指示する。

それを受けて兵士の一人が見張り台の屋根から下げられた銅鑼のような鐘を叩き、別の兵士が弾かれたように伝令に走る。

ここ最近、嫌がらせのようにビンガインの軍がリンデン砦にちよっかいを掛けに来ていた。

ビンガインからすれば、ドマイセンの圧力に対する『働いてますよ』というポーズなのだが、いずれも多くて100人ほどの一団で、兵数を見ても端から砦を落とせるとは考えていない。

数日置きにやって来ては弓矢や投石を浴びせて帰っていく様を、砦の兵士達は『定期便』と称して^{からか}揶揄っていたが、今回の襲撃はいつもと違った。

伝令を受けて見張り台に登って来たリンデン砦守備隊長、ファルク・ラバナウが、険しい表情で見張りの兵士に声を掛けた。

「どうだ、様子は」

「確かに数も多いし『定期便』じゃないみたいです。いつもなら、一気に近づいて、こっちの反撃を食らう前に弓を放って逃げ出すのに、今回はほら、あそこに留まったまま動きません」

「そう言われて敵の集団を観察すると、500mほど先に黒々とした兵の塊があり、確かに動く様子が無い。」

「どうしますか？ 落としますか？」

兵士がファレクに確認する。

橋を落とす作業は2〜3人で30分程度かかる。

落とすのであれば、その時間も考慮する必要があった。

敵がいつもの『定期便』では無い様子から、念の為に橋を落として防御を固めるかという確認だが、この橋は事実上南北の交易街道の一部でもあるので、あまり簡単に落とすという判断も難しい。

一旦落としてしまえば再架橋には一月以上かかるだろう。

敵の数は多いが、一度に攻め寄せる兵の数は橋の幅もあって十数人が限界だ。伊達に難攻不落を誇ってはいない。

ファレクは右手を顎に当ててしばし思索するが、首を横に振って否定した。

「いや、まだその必要はあるまい。いざとなれば後ろの橋を落とす手もあるしな」

「そうやって会話しながらも、ファレクの目は敵の集団に注がれていたが、その時、敵に動きが見られた。」

敵兵600の内、約200が、亀甲陣形テレストッドと言われる3つの集団を形成し、かなり大型の盾で前方と側面、そして頭上を防御した格好のまま、先陣、中衛、後詰の三段構えで、ゆっくりと歩くような速度で砦に近づいて来る。

「いったい、なんのつもりだ？ ……中に何か隠してる？」

突撃するでなく、喚声すら上げず、整然と陣形を保ったまま近づいて来る敵に、ファレクは相手の意図がわからず戸惑いを隠せない。

その時、後方に残った相手の指揮官おぼと思しき少数の集団が、それまで掲げられていなかった旗幟きしをサツと掲げるのが見えた。

「違う！ やつらビンガインじゃない、ドマイセンだ！ やつら、今回は本気だ。橋を落とせ！」

今まで、何の疑いもなく、相手はビンガインだと思い込んでいたが、その旗幟に描かれた紋章はドマイセンの物であった。

「無茶ですよ！ もう、無理です！」

ファレクは叫ぶが、時既に遅し、もう先鋒の集団が橋の目前まで迫っていた。

これから門を開いて前方の橋を落とす兵を出すのは、敵を呼び込むようなものだ。

「くそっ、後手を踏んだかつ」

ファレクは口惜しがるが、それでもまだ余裕はある。

前方の橋があつたとしても、その幅は狭く大人数での攻めは不可能だ。

「矢はケチるな！ 投石も準備しとけ。それから煮えた油を用意しろ。門の前まで来たら頭の上から浴びせかけてやれ。それから火矢を放てば、あわよくば橋も燃え落ちる」

ファレクは矢継ぎ早に指示を出した。

その指示に応じて、50の守備兵が柵の各所に設けられた矢狭間アロースリットや櫓の上から、投石や矢の雨を降らせる。

しかし、敵の先鋒は橋の手前で止まったまま、まさに亀の甲羅のように盾で防御を固め、投石と矢は盾で防がれて思ったように効果を上げていなかった。

しかも、一方的に攻撃を受けていながら、一向に反撃すらしてこない。

その様子に、ファレクの苛立ちと不安は募る。

「やはり中央に何か隠しているな」

大盾で遮られてはいるが、盾と盾の間から何やら黒いものが見え隠れしている。

一方的に攻撃させて疲れるのを待っている？ こちらは砦の中にいるのだ。攻撃してこないなら、交代で休ませることはできる。

矢玉の在庫切れを狙っている？ 在庫はたっぷり用意してあるし、

砦の構造上、背後に回りこまれる心配は無いので幾らでも補給が受けられる。

あの固く盾で囲んだ集団の中で、何か工作を？ 無意味だ。連中と砦の間には深い断崖がある。何が出来るとも思えない。

では、何を隠している？ 何を？

ファレクの脳裏に、ルードサレンにいるポアルソンからの書状にあった言葉が浮かび上がる。

ドマイセンが、何か画期的な新しい武器を開発しているという噂がある、と。

嫌な予感がした。

「急いでリーシエを呼んでくれ。大至急だ」

傍にいた兵士に使いを頼む。

リーシエは、今年の春に配属された、砦で最も若い女性兵士だ。

何故、今リーシエを呼ぶ気になったのか、自分でも説明が難しいが、長年、この砦で指揮を執ってきた勘だ。

今まで、この勘に従って間違ったことは一度も無かった。

「お呼びでしょうか、隊長！」

たいして待つ間も無く、リーシエがファレクのいる見張り台——臨時の指揮所になっていた——にやってくる。

「何か任務でしょうか」

リーシエが不安そうにファレクに尋ねるが、尋ねられたファレクの方が言葉に詰まってしまった。

ただ、勘に従って衝動的に呼び寄せはしたものの、実際に具体的な用があつて呼んだわけではなかったからだ。

「あー、そうだな……」

何とか言葉を取り繕おうとファレクが口を開いた、その時、ドーン！という突然の轟音と、大地を揺るがすような衝撃が彼等を襲った。

「何だっ!？」

「ぎゃあっー!」

見張り台の手摺に掴まって、なんとか転倒を免れた2人は、その轟音の響いてきた方を見る。

すると、今まで頑なに防御陣形を取っていたドマイセンの100人の先鋒部隊が散開しており、その中央に見たことの無い物体を見つめることが出来た。

もし、ニイロがこの場にいれば、すぐに気づいただろう。それは特製の荷車の上に積まれた大砲だ。

実は、この世界でも、火薬はとくに発明されていた。

しかし、魔法の存在する世界で、火薬を使って弾を飛ばすという発想は昇華されることなく、火薬の性能向上も錬金術の遅れから未だに化学への進化に至っていない。

いわゆる『てつはう』のような、壺に詰めて爆弾のように使われるくらいで、停滞していたのが現実だった。

今回、ドマイセンの開発した大砲は、外見は、ベータ・アースで中世に使われていた物と瓜二つ。

全長は2m近くあり、口径は15〜20cm弱ほど。よく映画などで海賊船に積んである前装式の大砲が出てくるが、ほぼそれと似たフォルムだ。

石を削って加工した砲弾を撃ち出す滑腔砲で、射撃と共に排出された大量の黒煙と、爆風に巻き上げられた砂埃が、未だに周囲に漂っている。

「やっきの轟音はあれか！」

ファレクが叫ぶ。

門を見れば、木製の分厚い門扉に、火矢と火魔法を防ぐ薄い鉄板を貼り付けた特製の門扉には大穴が開いていた。

そんな中、射撃を終えた100人の敵兵の一団は、荷車を押して大急ぎで後退しつつある。

そして、先鋒が退いた門の前には、後ろから来た中衛の100人が、先鋒と同じようにゆっくりと門前に陣を敷きつつあった。

「そうか。あれがそうか……」

間違いなく、あれがドマイセンが開発しているという秘密兵器だ。

「リーシエ、お前達に重要な任務を与える！」

ファレクが、先程の衝撃でまだ青ざめているリーシエに向かって

言った。

「お前は、まず、ここからあの敵の攻撃をよく観察しろ。特にあの黒い筒だ。そしてルードサレンに走れ。見たことを細大漏らさず伯爵様に報告するのが、お前の任務だ。抗命は許さん！　くだぐだ言い合う時間も無い！　一刻の遅滞も無く行動するんだ！　いいな！」

そうやってリーシエの反論を無理矢理封じ込める。

ファレクの迫力に圧倒されたリーシエは、直立不動で返答を返すしか無かった。

「はいっ！」

指示を終えたファレクは、青褪めて引き攣った表情のままのリーシエを残し、門の近くで現場指揮を執る守備隊の副隊長の元へと駆けつけた。

「ギエンツ、被害はどうだ」

「さっきの爆撃？　攻撃で、門の陰にいたエバンが……即死です。それにロトックとハレンが重傷。軽傷多数といったところですか
ありやあ、いったい何なのですか」

被害状況を尋ねられた副隊長のギエンツが、険しい表情で報告した。

「わからんが、敵はビンガインじゃない。ドマイセンだ。そして、あれが噂のあつた新兵器らしい」

「新兵器……」

「ああ、こうなると、あれは防げん。恐らくあと2〜3撃で門は破られるだろうが、前の橋を落とし損なつた状態では兵数の差から勝ち目は無い。今更打って出ても無駄死にだ。」

これは完全に俺のミスだ。敵の数を確認した時点で橋を落とすべきだった。どこかいつもの『定期便』と同じ感覚で油断があつた」

「これからどうされるおつもりで？」

「なに、まだ負けちゃいない。今のうちに全員を撤退させて、橋を落としたり対岸に陣を敷く。それで再架橋を阻めば、勝てずとも負けは無い」

そう言つてギエンツを安心させると、撤退に伴う指示を矢継ぎ早に

発した。

その命令を受けて、兵達は大慌てて行動に移すが、残ったフアレクは一人思案に沈む。

(ここまではドマイセンも考えただろうが、こっちに渡れなきや意味が無いのは向こうだって考えたはず。まだ何かあるのか、それとも……)

◇ ◇ ◇

ダスターレ伯との会談から、既に10日が過ぎていた。

あれから、ニイロは城館内に部屋を用意すると言うダスターツ伯爵の申し出を固辞し、ルードサレン城の城下に宿を取って滞在していた。

ダグ達傭兵3人は、会談の翌日には代官のアデッティ・スコバヤを護衛してリュドーに向かって旅立っている。

過ぎた日数を考えると、もうカジユ村に到着していてもおかしくない。

ニイロは今、ルードサレンの領都から2kmほど、街道からも離れた郊外の平原の一面で臨時のキャンプを張っていた。

色鮮やかなオレンジ色の、アウトドア用ワンタッチテントの横で、折り畳みのデッキチェアに腰掛けて、約束の時間が来るのを待っている。

あと1時間ほどで、ベータ・アースからの補給品の転送が行われるのだ。

数日前の事前のコンタクトで、採取済みの分析データと行動予定、要望などがベータ・アース側に伝えられ、代わりに指定の時刻と座標が送られて来ている。

指定ポイントから半径500mほどの範囲が転送エリアになっており、その範囲内に物資が転送されてくる予定だ。

ニイロ達は、そのエリアの外周ギリギリの地点でキャンプを張って待っていた。

「平和だねえ……」

ニイロは呟いた。

既に晩秋と言つていい季節で風には冬の気配を感じるが、日は中天に近く、意外に強い日差しもあつて適度に暖かい。

周囲はただの草原で、姿は見えないが、チュンチュン、ピチピチと小鳥の囀る声さえずりが聞こえる。

左手には遠くルードサレンの領都が見える。ここからは見えないが、背後にはルードサレンから王都方面へと続く街道があるはずだ。草原の奥に見える森の上空には、比較的大型の灰色の鳥がトンビのように円を描いて舞っている姿も見えた。

「けっこう大きいなあ。大鷲くらい？ もうちよつとある……ん？ あれ？」

よく見ると、どうも鳥と言うには違和感がある。

ゴーグルの拡大機能を使つて見ると、驚くべきものが目に飛び込んできた。

「サ、サクラコ……」

名前を呼ばれて傍らかたわのテントからサクラコが顔を出す。

「あれってさ……翼竜、だよな？」

そう言つて遠くで宙を舞う、空飛ぶトカゲモドキを指差した。

サクラコは平然とした表情でそれを見ると、やはり平然とした声でニイロに答える。

「そうですね。あの形状からランフォオリックス口竜亜目、もしくはダルウイノプテルスから進化したものでしょうか。4日前にサリアさんと一緒にメリーチエさんのお供をした時に教えてもらいましたが、ガンマ・アースこちらでは小飛竜と呼ばれているようです」

「ワイバーン？ あれがワイバーンなの!？」

「はい。この周辺だと小型のレッサー・ワイバーンが生息しているのだとか。そこまで珍しくはないそうです。レッサー種は主に小動物や虫を餌にしている、人を襲うことは無いそうですが、尻尾の先の棘には麻痺毒があるそうです。卵から孵せば人にも慣れるそうですから、機会があれば捕獲して調べてみたいですね」

「え？ 人にも慣れるの？ だとしたら定番の竜騎兵とかも……」

「いえ、それは無いようです。巨体のヒューズ種でも見た目より軽いそうで、人を乗せるほどの飛翔能力は無いのだとか。飼いや慣らし、鷹狩りの鷹のように狩猟に用いられているようですね」

「そうなんだ。残念……」

サクラコは一通り解説を終えると、またテントに顔を引っ込めてしまった。

テントの中に設置した分析機器を使って、この草原で採取した植物や、昆虫類などの分析に忙しいのだ。

それからしばらく、ニイロは森の上を遊弋する翼竜を眺めていたが、ふと、唐突にコーヒーでも飲もうかと思いついて仕度を始める。要するに暇だった。

亜空間ポシエットからカセットコンロ（ベータ・アースなら、その辺のホームセンターで売ってるやつだ）とアウトドア用ポット、ペットボトルのミネラルウォーターを取り出し、準備して火をつける。

お湯が沸くのを待ちながら、ほぼ無意識に『あんなこと』や『こんなこと』が出来たらいいなあ、と鼻歌まで飛び出していた。いい歳こいたおっさんなのに。

「いい天気だなあ……」

ススキに似た植物が風にそよぐのを眺めながら呟くと、コンロのお湯が沸騰を始めた様子だったので火を止め、亜空間ポシエットから少々格好をつけてインスタントコーヒーセットを取り出した。

「テレレツテレ〜♪ いんすたんとこ〜ひい〜」

やや甲高いダミ声で、高々とインスタントコーヒーセットを掲げる三十路のおっさん。意味不明なドヤ顔であった。

手際よくカップに材料を入れ、いぎポットのお湯を注ぎようとした時、ニイロがふと視線を感じてテントの方を見ると、テントの入り口から顔だけを出してニイロを見つめるサクラコと目が合う。

「え、ええつと……サクラコさん？ い、いつから見てたのかな？」

サクラコはそれに答えず、「ニイロ、それ、ポケットじゃありませんよ?」と、優しくニイロを諭す。

「わ、わかってるよ! いいだろ少しくらい気を抜いても! 見て育った世代なんだし……」

後半は消え入るような声だ。

しどろもどろに抗議するニイロに、サクラコは「そうですか」とだけ答えて、可哀想な子を見る目で微笑ほほえみかけると、さつさとテントに引っ込んでしまった。

抗議も虚しく残されたニイロは、仕方なく気を取り直してコーヒを淹いれ、ちびちびと味わうように飲んで時間を潰す。

セントロサウルス ワイバーン (角 竜に翼竜だろ? てことは雷 フロントサウルス 竜とか暴君も……あ、でも魔法もあるしなあ……)

時間はゆっくりと流れた。

『ピュイツ』

突然、上空で哨戒するクラブからの、注意喚起の警告音が発せられる。

ゴーグルに投影される映像を確認すると、ルードサレンから続く街道を、3騎の騎馬がこちらに向かって駆けて来るのがわかった。

「何かあったのかな?」

とりあえず時間を確認すると、約束の時間まで30分弱ある。

草原の中にいるニイロ達を探して、誤って転送予定区域に入り込んで事故があっても困るので、ステルス・モードを解除したクラブに騎士を迎えに行かせることにした。

やがて、クラブに先導された騎士達が姿を現す。

「スローンさん、貴方が来たということは何かあったみたいですね」
やって来たのは領軍副団長のガラクト・スローンと部下達だった。
単なる使い走りくわで寄越される人材ではない。

「ニイロ殿、お寛くわぎのところ申し訳ないが、至急、伯爵様の元にご一緒して頂けまいか」

スローンが声を掛ける。

「デツキチエアに座り、コーヒーを飲む姿に、『寛いでいる』と判断したのは当然か。」

渋い表情で申し出るスローンに、ニイロは少し困った様子で言った。

「行くのは構いませんけど、あと1時間ほど待ってくれませんか。もうすぐ始まりますから」

「始まる？」

訝しげに聞き返すスローンには答えず、冷えてしまったポットにミネラルウォーターを追加して湯を沸かし、コーヒーを淹れて3人に振舞う。

「何があつたかお聞きしても？」

ニイロがスローンに紙コップを渡しながら尋ねると、スローンは言い難そうにしながらも答える。

「詳しくは伯爵様から説明があるとは思いますが……ドマイセンが動いた」

「それは……」

今度はニイロが渋い顔をする。

「国同士の争いに首を突っ込む気はさらさら無いのだから。」

「既にリンデン砦が落ちたという報告もある。しかも、ドマイセンはニイロ殿の言う『火器』を使用したらしいのだ」

「火器……ですか……」

（サクラコが言うにはベータ・アースから俺以外の人間が来てる可能性はゼロだつて言うし、火薬自体はこの世界にもあるそうだから、発明されたつてことか？ うーん……）

ニイロは思案するが、とにかく情報が足りない。

（しかし、俺が火器を使つてみせたタイミングで相手が火器を使ったとなれば、王国からすりやあ当然俺も疑うよなあ……）

考え込んだニイロを、スローンは注意深く観察している。

一応、前回の会談でスパイ疑惑を否定はしているが、証拠があつてのことではない。

そんな空気を一切気にしない風で、いつの間にかテントから出てきていたサクラコがニイロに声を掛けた。

「ニイロ、そろそろ時間です」

ニイロはサクラコに、「わかった」と答えると、スローン達に危険だからその場を動かないよう注意してから、ゴーグルに付属するマイクに語りかけた。

「ハロー、ハロー、感度どうか？　こちらガンマ・アースのニイロだ」
『はいっ！　こちらベータ・アース、シンシアです！　ニイロさん、元気にしてましたか?!』

息せき切ったようなシンシアの声が鼓膜に響く。

まだ、たった一月とはいえ、その変わらない元気な声に、ニイロは懐かしさすら感じて自然と笑みが溢れた。

「ああ、元気だよ。シンシアも変わらないようで何よりだ。声が聞けて嬉しいよ」

お世辞拔きの正直な気持ちだ。

サクラコが小声で、「ニイロ、それジゴロの台詞です」とか言ってる。失礼な。

『あうう、すぐに転送が始まります。こちらでもモニターしていただけます。周囲は大丈夫ですか？』

「ああ、クラブに警戒させてる。俺とサクラコの傍の3人はこつちの人だけど、危険は無いので無視していい」

『了解しました。転送開始です！』

宣言と共に、指定エリアのほぼ中央、転送ポイントから少しだけズレた地点に、音も無く眩い光球が一瞬だけ辺りを照らし、その輝きが消えた時には、代わりに物資の入った1m四方ほどのコンテナユニットが幾つも出現していた。

「おい、ありやあ一体……」

「転送魔法か？　実在してたのか……」

ニイロの後ろでは、騎士達が青褪めた顔で会話しているが、今は無視だ。

『補給物資の転送終了！　それから、今回のボーナス！　転送開始し

ます！』

「ボーナズ？」

不思議そうなニイロの眩きが終わらない内に、再び光球が出現し、消えた後には一台の車両が出現した。

「これは……………」

ニイロの目の前に出現したのは、小型のマイクロバスほどの大きさの車両だ。

車体後部1／3ほどが露天の荷台になっており、そこにもシート^の掛かった積荷が見える。

全体的にはダブルキャビンのトラックに似ているが、四輪の太いやイヤとカーキ色の車体が軍用であることを主張していた。

『ふふーん、どうです？ びつくりしたでしょう。この前のデータ転送で移動手段の要望が上がってたんで、中古ですけどオーティス課長が頑張つて調達してくれたんですよ』

「ああ、こりや確かに驚いた。要望は上げてたけど、こんなに早く叶うとは思ってなかったよ」

『でしよー。実は、この前のデータ、こちらが思ってた以上に反響が凄くて、特に映像のインパクトが半端じゃ無いんですよ！ 言葉が通じて意思疎通できる猪^{ハイ・オーク}人とか、実際に魔法使ってる、すごい美人の女の人とか……………そうそう、特に恐竜が生きてるって！ お陰でアルファじゃ色んな学会やら企業からの援助申し込みが凄いことになつてるんです』

「あー、あれかあ」

すごい美人《……………》に謎のアクセントがあつたが、それは無視する。

『だから、データ転送の時に依頼のあつた追加物資も、間に合った分は入ってます。車の荷台に電動バイクとかも積んでありますから活用して下さい。その他の物資とか車両の詳細は、携帯情報端末^{タブレット}の方にリスト送りました』

「あの車両なら、訓練の時に何度か扱ってるから大丈夫だよ」

『はい。軍曹さん、ロンタイラーさんが仰ってました。一応、これで今回の転送は全て終了です。次は一カ月後、手順は今回と一緒です』
「わかった。じゃあ、それまで元気だな、シンシア」

『……あつ、ニーロさんも。次、話せるの楽しみにしてます』
その声を機に通信が切れる。

取りあえず急ぎ物資の回収を考え、サクラコにも手伝ってもらおうと見ると、何か言いた気にニイロを見ているサクラコの視線に気がついた。

「なに？」

不思議に思つてサクラコに尋ねると、サクラコは呆れた様子でニイロに言った。

「ニーロはもう少し、シンシアさんの気持ちを汲んであげるべきです」
「は？」

なんだか責められているようだが、ニイロには心当たりが無い。

シンシアとは普通に会話していたはずだ。

戸惑うニイロをよそに、サクラコは転送されてきた物資を回収すべく、スタスタと歩き出した。

ニイロは頭上に大きな『？』マークを出したままサクラコを追いかけて、気を取り直してサクラコに手伝わせながら急いで物資の回収を終えると、待たせていたスローンに声を掛けた。

「お待たせしましたスローンさん。お城に行きましょうか」

そう声を掛けると、送られてきた車両に乗り、初めて見る馬無し馬車に戸惑う騎士達と一緒にロードサレン城へと向かうのだった。

第18話 決断と潜入

「状況はわかりました。でも、それで私達にどうしろと仰るのでしようか」

現在の状況の説明が終わっても、厳しい表情で黙考したまま口を開こうとしないニイロに代わって、サクラコが尋ねる。

緊急の召還を受けてルードサレンの城館に赴いたニイロとサクラコは、ダスターレ伯爵の執務室で伯爵と高官達に囲まれて相対していた。

現在判明しているのは、リュドーの街から南に下がった場所に位置する、四カ国連合の一角をなすビングインと接したリンデン砦が、これまた四カ国連合の一つであるドマイセンの兵500以上に襲われて半落状態と言っている状況にあると言うことだ。

しかも、この剣と魔法の世界であるガンマ・アースに於いて、ドマイセンは何らかの火器おぼと思しき兵器を投入しているらしいとあって、同じく火器類をメインウエポンとするニイロにも、ドマイセンとの関係が疑われている状況にある。

「本来であれば……」

執務机の向こうで椅子に腰掛け、腕を組んだダスターレ伯爵が重い口を開く。

「本来であるならば、我々は貴殿を拘束して取り調べる必要がある……」

伯爵はそこで言葉を止め、迷いを断ち切るように再び言葉を続けた。

「しかし、だ。我々の持つ力では、貴殿らを拘束するのは不可能。いや、これまでの貴殿らの立ち居振る舞いを見るに、証拠もなく『疑わしい』というだけで貴殿らとの関係を断ち切るのは、我が王国にとつて恐ろしいまでの損失に繋がると儂個人は考えている」

(どうやら、ここでの荒事は回避できそうかな)

ニイロは考える。

だとしたら、サクラコに勧められて模擬戦までやった甲斐があった

というものだ。

いざとなれば、多少力づくでも拘束を逃れて他国へと避難するつもりだったが、そういった事態は避けられそうだ。

ニイロとしては、今後の調査のこともあり、王国との友好的な関係は出来る限り保っておきたい思惑もある。

「故に、だ。ここは一つ、貴殿の潔白を晴らす為にも、リンデン砦の回復に手を貸してもらいたいのだ。」

国同士の諍いから距離を置きたい貴殿の立場もわかるが、事は貴殿自身の立場にも係わる。今後の国内での活動にも支障が出よう。

必要な物資や人員は可能な限り手配するし、もちろん報酬も出そう。どうだな？」

要するに誤解を解きたくば協力しろということだが、ダスターレ伯爵が最大限の譲歩をしていることも理解できる。

むしろ、状況証拠からすれば黒に近いグレーと言っているニイロの立場を考えれば、強硬手段に出ない伯爵の理性的な対応を褒め称えたいほどだ。

ニイロとしては、今後の調査活動を円滑に進める為にも、出来ることならドマイセンという国とも友好的に接触したいという欲がある。

しかし、断ればスパイ疑惑は晴れることなく、伯爵の言う通り、せつかく順調な王国内での調査活動に支障を来たすことは間違いない。

（八方美人は、結局全員に嫌われるもんだしな……）
「降りかかった火の粉。自ら振り払うべきなのでしょうね」

やっと口を開いたニイロが答えると、ダスターレ領の高官達の間にも、明らかにほっとした空気が流れた。

「そうか！ 感謝する。敵は500以上という話だが、現地の駐屯兵50にリュドーから150、ここからも兵200を既に向かわせてある。」

さらに追加で300を手配中だが、ニイロ殿には、この300と一緒に現地に向かって頂こうと考えている。ニイロ殿さえ良ければ明日には出発できるだろう。

既に王都から陛下直属の兵が1000、砦に向かつて発ったという

連絡もあつた。全て合わせれば1700。これにニイロ殿の力が加われば砦の奪還は間違いなからう」

(いや、伯爵様、最後のそれフラグだから……)

ダスターレ伯爵は、肩の荷が下りたとても言うように、安堵の表情で皮算用をしているが、ニイロからすれば初めての『戦争』だ。不安材料はいくらでもある。

「さらに、だ。砦の奪還が順調に進めば、今回はさらに追加の兵を送つて四力国連合への逆侵攻を行うことになる。こちらとしては、これまでに戦争の回避に気を使つてきたにも係わらずの、今回の件は膺懲ようちやうの軍を催もよほすに足る暴挙であるとの陛下のご判断だ」

そう力強く宣言する伯爵に、ニイロは慌てて口を挟む。

「ちよつと待つて下さい。私達が手を貸すのは砦の奪還までです。相手の火器とやらも調べましょう。しかし、その後は国同士の問題ですから、それに巻き込まれるのは御免です」

その言葉に、それまで意気軒昂として語っていた伯爵は一旦言葉を途切るが、慌てて続けた。

「あ、ああ、勿論だとも！ そこから先は儂等の領分。ニイロ殿には砦の奪還を支援してもらえれば十分だ」

幾分、微妙な空気が流れたが、それからいくつかの打ち合わせをした後、ニイロも準備をするということで一旦宿に引き上げることにした。

城館を辞し、送るといふ馬車を断つて、徒歩で宿へと戻る間、ニイロは考え込んだまま何も語らず、サクラコも黙つて付き従つた。

やがて、城下の宿の部屋に着くと、疲れた表情でベッドに腰掛けたニイロはサクラコに問いかける。

「戦争かあ……なあ、サクラコ、これで良かったのかな」

「はい。今後の任務の遂行を考えると、ニイロの判断は間違つてないと思います。

この世界に於いて、私達の持つ武力は一国を凌駕しているようですし、一連のやり取りを『外交』と捉えるならば、王国と四力国連合という2つの勢力に対して、『ニイロ国』はどちらに組するかを迫られた

ということではないでしょうか。

どちらに対しても中立という選択肢もありますが、ここでの中立は、『味方ではない』という面がクローズアップされる可能性があります。

そうすると、将来、王国も含めた五カ国連合が私達の障害にならないとは言えないのですから、その火種を出来る限り小さくする為にも、ここで片方を選択するのは仕方ありません」

滔々とうとうとサクラコは語る。

そうやって論理立って語ることで、ニイロの不安を少しでも和らげるように。

ただ、ニイロの不安の根本は、『戦争』という得体の知れない化け物に対する曖昧あいまい模稜もろうとしたものだ。

戦争の無い時代に生まれた日本人として、TVの向こうの出来事だった戦争に自分が参加するという現実が、まだ具体的なものとして受け入れられない自分がいるのだ。

そういつた理屈によるものではない気持ちに答えなど無いのだが、それでもサクラコが一生懸命にニイロの気持ちを軽くしようと言ってくれているのはわかる。

「それに、ニイロは、いえ、私達わたしはもう、ガンマ・アースの住人です。ニイロの思うまま生きればいいのです。王国に肩入れする必要はありませんが、もつと積極的に係わっていくことも考えていいのではないのでしょうか」

今のところ、ニイロがベータ・アースに戻る手段は無い。将来はわからないが、何の確証も無いことをアテにはできない。

それならば、この世界に根を下ろす覚悟は必要だ。

黙ってサクラコの話聞き終えたニイロは、ぽつりと言った。

「ありがとな、サクラコ」

「私はいつだってニイロと一緒にですから」

はにかんだ表情でサクラコは笑った。

その表情を見て、ニイロの心に変化が生まれる。

「そうだな……腹くあ、括くるか」

◇ ◇ ◇

新兵器を使用しての襲撃によりドマイセン軍の手に落ちたりンデン砦には、今、高々とドマイセンの紋章を記した旗幟きしが立ち並んでいた。

ビンガイン方面の門は破壊されたが、砦の占拠から5日が経った今日、その門も既に修復されていた。

それ以外の損傷は皆無に等しく、砦内は後詰の兵によって占拠されている。

「どうですか、將軍。王国兵の様子は」

砦攻撃の総指揮を執ったドマイセン軍の將軍、オルフ・ヤノスが尋ねた。

ヤノスは42歳。グレーの髪を短く刈り込み、代わりに顎髭あごひげを長く伸ばしている。

大柄な体躯は鍛え抜かれており、ドマイセン軍の中では『髭の將軍』として有名だった。

「どうもこうもありません。落とされた橋の再架橋だけは絶対に阻止するつもりでしょう。兵が姿を見せただけで雨のように矢が降ってくる。」

後方の兵にも手筈てはず通り仮設の橋を造らせていますが、こちらもなかなか……それに、向こうに伏せさせていた斥候からの連絡が途絶えているのも気になります」

オルフ・ヤノスに『將軍』と呼ばかけられ、辟易した様子で答えたのはトール・ハルマイン。ビンガイン軍の指揮官である。

金髪の貴公子然とした風貌の青年で、周囲の評価は若いながら将来を嘱望されているが、実のところ他国からの評価は『優柔不断』『指揮官としては優しすぎる』『臆病者』と、決して芳かんばしくない。

ビンガインでは名門の、ハルマイン家の出であることからの乖離かいりであつた。

実は、リンデン砦攻略軍600の内、攻撃に参加したのはドマイセ

ン軍の300であったが、後方にあつた残りの300はビンガイン軍の兵士である。

ハルマインは、その300の兵の指揮官だ。

現在、主力であつたドマイセン軍は砦に入らず、ビンガイン方面の橋の手前に陣を張つて滞在しており、ビンガイン軍は250をドマイセン軍の陣地と並んで滞陣させ、残り50は砦内に詰めている。

今、2人がいるのは、砦内の兵舎の一画だ。

テーブルの上には周辺地域の地図が描かれた羊皮紙が広げられ、周りには2人の他にもそれぞれの副官2人づつの姿がある。

愚痴とも取れるハルマインの言葉に、ヤノスの副官が噛み付いた。

「何を弱気なことを！ 我々^{ドマイセン}は予定通り事を進めたのだ。少しは働いてもらわねば、同盟の意味がなからう！」

いきり立つ副官を手で制して、ヤノスもハルマインを急^せき立てた。

「取りあえず、ここまでは事前の作戦通りでもある。ビンガイン軍にも予定通り働いてもらわねば、そちらのメンツにも係わろう」

「ええ、わかっているのです……いるのですが、どうも兵達からすれば士気が上がらないのも事実です。わかつてはいるのですが……」

苦渋の表情でハルマインが訴える。

「何を寝ぼけたことを！ この勝ち戦で士気が上がらないなどと、ビンガイン兵の弱卒ぶりには呆れ果てたものですか」

ヤノスの副官が非難する。

建前の立場から言えば同盟軍の指揮官に対する言葉として非常に礼を欠く行為なのだが、ハルマインには返す言葉が無い。

ハルマインの副官2人も、口惜しそうではあるが反論する材料が無かつた。

問題は砦に翻^{ひるがえ}る旗幟^{きし}だ。

ドマイセンの物だけで、ビンガインの物は1本も無い。

これが、連合軍であるにも係わらず、完全に裏方に回されているビンガイン軍の兵士達の士気を著^{いちじる}しく殺^そいでいた。

しかし、だからと言って殆ど何もしていないビンガイン軍が、『自分

達の旗幟も掲げさせてくれ』とは言い難い。

ドマイセン側からすれば、秘密兵器である鉄火砲を用いて砦を落としたのは自分たちだという自負がある。

実際に3門の鉄火砲を300のドマイセン兵で運用し、ドマイセン兵のみで砦を落としたのだから、砦に自分達の旗幟を掲げるのは当たり前だ、という訳だ。

ハルマインもそれを理解している。それに、この作戦の肝は今ここにドマイセン軍がいると王国にアピールすることだ。

その意味で砦にドマイセンの旗幟を派手に掲げることは目的にも適っている。

ビンガイン軍は単なる数合わせであり、囮であり、雑用係でしかないし、それ以上の事を成す力も無い。

「ヤノス殿、無理を承知でお願いしますが、あの鉄火砲をお借りすることとは出来まいか。あれを浴びせれば、間違いなく敵は怯むでしょう。さすれば、その隙に造らせている仮設橋を一気に掛けることも……」

駄目元で申し出たハルマインの言葉を、ヤノスは皆まで聞くことなく押し止めた。

「それはお断りする。あれは我が軍の至宝とも言うべきもの。同盟とはいえ、他国に軽々と渡せるものではない。それに、ここで貴殿の兵に貸し与えたところで、あれの運用は専門の訓練を受けた我が軍の兵でなければ扱えぬだろう」

「では部隊ごと……」「それで良いのか？」

貸してくれと言うハルマインの言葉に被せるように、ヤノスが念を押した。

ヤノスの言葉に、ハルマインは顔を赤くして伏せる。

武器を貸してくれ、兵も貸してくれでは、何の為にビンガイン兵がいるのかわからなくなる。

もちろん、秘密兵器である鉄火砲の運用を、ビンガインに委ねるなど論外なことは、ハルマインも理解している。

思わず苦し紛れに言い出したに過ぎないことだったが、意外にもヤ

ノスの口からは別の申し出が飛び出した。

「しかし、だ。同盟の軍が困っているのに手を差し出ささないのも何だ。鉄火砲は無理だが、代わりに大盾を貸し出そうではないか。あれも今回の作戦に合わせて特別に作らせたものだが、あれを押し立てて敵に矢合戦を挑まれるといい。」

大きい上に重すぎて野戦にはとても使えんが、この場合は問題なからう。あれを抜ける弓矢など、この世に存在しないからな。数は50もあれば宜しいか?」

大盾とは、たたみいちじょう 畳一畳ほどもある分厚い板に薄い鉄板を貼り付けた、鉄火砲の周囲を囲んでいた盾のことだ。

その申し出にハルマインは思わず顔を上げてヤノスを見るが、その表情から真意は読み取れない。

「よ、宜しいのですか?」

「なあに、それで貴殿の軍にも存分に戦ってもらえれば良い」

ヤノスはそう言って、盾の貸し出しの用意の為に副官を一人残し、兵舎を後にした。

「全く、ビンガインの弱兵は聞いておりましたが、これほどまで酷いとは思っておりませんでした。よくもまあ、あれで国が守れるものと、逆に感心しますな」

残らなかつた方の副官が、ドマイセン兵の野営する陣に戻るヤノスに付き従いながら愚痴を零している。

「なに、あんな貧乏ピンガイン国など、取つても重荷になるだけで価値も無いから放置されておるだけのこと。所詮、数合わせに過ぎん。元々戦力としての計算には入っておらんよ。」

ここを落とした時点で我々の作戦は成なつたも同然。後は時間を稼ぐだけなのだし、彼等が架橋に成功するも失敗するも大勢に影響はなからう。まあ、これだけお膳立てしてやったのだ、喜んで我等の矢除けくらいにはなつてくれるのではないか?」

ドマイセンの野営陣地の中で、一際大きな幕舎に向かって歩きながら、ヤノスの方も、気心の知れた副官相手に表情を緩ませてホンネを

漏らす。

「せつかく怪我人が出た程度で死者もなく砦を落とせたことです。これで將軍の名声は一段と輝くでしょうし、後の被害は彼等の担当という訳ですか」

みえみえの追従を、ヤノスは苦笑して否定した。

「おいおい、それでは俺が彼等をハメたようではないか。俺は本国の指示通りに動いているだけだぞ？ 見せ場の無い彼等に舞台を整えてやっただけだ。」

後はせいぜい派手に撃ち合ってもらえばいい。恐らく数日中にも到着するだろう王国の援軍が多ければ多いほど、ジーマールの方は手薄になるだろうからな」

「後はジーマール將軍のお手並み拝見ということですか」

2人は話しながら幕舎に到着すると、入り口の両脇に立つ歩哨の敬礼に身振りで返しながら中へと入った。

幕舎の中には四輪の荷車を改造した台車に載せられた鉄火砲が3台、舳先を揃えて置かれており、脇には大きな木箱が多数積まれている。

「これがあれば王国など恐るるに足りん」

そう言うヤノスの視線の先は、既に初陣を飾った鉄火砲ではなく、脇に置かれた木箱だ。

木箱の中には同盟国にも知らせていない、さらなる秘密兵器が収められていた。

「これを使う日が待ち遠しいですなあ」

ニヤニヤと笑いながら副官も追従する。

「どうかな？ 作戦が上手くいけば、これを使う前に王国軍は撤退するかも知れんぞ？」

抑揄うような口調でヤノスが副官に言った、ちょうどその時、幕舎の外か騒がしくなると、「失礼します！」という大声と共に、2人の立つ背後にある入り口から一人の兵士が飛び込んできた。

慌てた様子の兵士は、一瞬、何もない場所で何かにぶつかったかのように体勢を崩すが、すぐに立て直し、直立不動で用件を伝える。

「ヤノス將軍！ ビンガインのハルマイン將軍から緊急の伝令です。対岸に王国兵多数。敵の援軍が到着したものと思われるのでこのことです」

「ようやく来たか。予定通りだが、こうまで思惑通りに事が運ぶと逆に恐ろしくなるな」

伝言を受けたヤノスは、余裕の表情で副官と伝令の兵士を伴って幕舎を後にした。

人が去り、誰もいないはずの幕舎の中で、小さく「パチツ」と静電気のような音が響くと、うずたか堆く積まれた木箱の脇に、全身を灰色一色の、ポンチョのような衣装に足元まで身を包んだ人物が姿を現した。

その人物は、ほとんど聞き取れないような小声で一言二言、独り言を発した後、顔を覆っていたヴェール付きのフードを外す。

そこに現れたのは、ピンク色の髪の少女、サクラコだった。

サクラコは、ゆっくりと鉄火砲の周囲を一周しながら、時折小声でここにいない人物、ニイロと言葉を交わす。

「はい、ぎようふかく仰俯角も人力のようです……はい、前装式ですね。博物館モノです……発射は……ああ、そうかも知れません。確かにその点はこの世界ならではかも……」

呟くように通信しながら、積み上げてある木箱の元に戻る。

「予想だと、アレだと思うのですが、さてさて、何が出てくるのでしょうか」

そう呟いて木箱の一つに手を掛け、蓋を開けて中身を確認する。

「ああ、やっぱり……予想が当たったのはいいですけど、意外性という点からはガツカリです」

サクラコが木箱から取り出したそれは、1mほどの木製の棒の先に、口径1.5cm、長さ1.5mほどの鉄の筒が付いた物で、ベータ・アースでは『マドファ』と言われた物に近い。

いわゆる火槍、要するに銃のご先祖様だ。

ドマイセン軍は、鉄火砲と共にこの火槍を開発し、鉄火棒と名付けて配備していた。

「見たところ50本くらいありますね。お土産に何本か頂いて行きたいところですけど、隠せないですし、こういう時、ニーロのポシェットが羨ましいです。今度、シンシアさんをお願いしてみようかしら……」

眩きながら木箱を元通りにする。

「さて、後は脱出ですが……まだ時間もあるし気長に待ちましよう。待つのは苦になりませんし」

再びフードを被り、ステルス機能をonにして姿を消した。

第19話 砲艦外交

窓の外には夜の帳が降りたルードサレン城館の伯爵執務室。

部屋の中には4人の男達の姿があった。

中央に設置された6人掛けの応接セットには、人数分のハーブ茶の淹れられたカップが置かれてはいるが、誰も口を付けようとはしない。

上座の中央にダスターツ伯爵が座り、一心に手元を見つめていた。

その背後には、背もたれ越しに秘書のカウネル・ラッチが立ち、マナー違反ながら伯爵の背後から身を乗り出して伯爵の手元を覗き込んでいる。

そして、これもマナー的には拙い^{ます}のだが、伯爵の右隣に騎士団副団長のガラクト・スローンが座って、やはり伯爵の手元を覗き込む。

左隣にはニイロの姿があった。

「これが砦ですね。そしてこっちは敵の駐留軍。砦に入りきれないんでここに駐留してるんでしょう。大きく二つに分かれてますが、サクラコの話だと、この大きな天幕のある方がドマイセン軍で、もう片方、こっちはビンガイン軍だそうです」

「これが砦だと、後ろの橋は落としてあるな。こっちが味方か。まだ王都からの援軍は到着しとらんようだが」

サクラコと共に派遣したクラブ達が、リンデン砦の上空から撮影したりリアルタイム映像を、伯爵の手元に差し出した10インチ携帯端末^{タブレット}に表示しながら解説するニイロに、伯爵が口を挟む。

「この部屋にいる全員が、その映像に釘付けになっていた。」

「夜なのに、こんなにはつきり……こんなものがあつたら、伏兵や夜襲など意味がありませんね……」

無意識にスローンが呟いた。

現在の時刻は夜の9時近く。

既に暗くなっており、本来ならば篝火の周囲程度しか見えないはずなのだが、送られてくる映像はデジタル処理され、ほぼ昼間と変わらない程度に細部まで見ることが出来る。

「援軍はまだですね。サクラコの話だと、明け方には到着するくらいの位置まで来てるようですが。それから……この大きな天幕の中にあつたのが、これです」

ニイロが横から手を伸ばし、伯爵の手元の携帯端末タブレットを操作して、録画済の映像を表示する。

「サクラコが潜入して撮ってくれたものです。3台の大砲……彼等は『鉄火砲』と呼んでるみたいですが……大砲が置かれてます」

「これは、名前からすると鉄製だろうが、やはりニイロ殿の使う武器と同じものと考えて良いのだろうか？」

ダスターツ伯爵が尋ねる。

「ええ、系統からすると同じものですが、私の常識からすると、かなり古い形式です。そうですね……ご存知かもしれませんが、吹き矢という武器があります……ありますよね？」

スローンの方に視線をやって問い掛けると、スローンも頷く。

ニイロはそれを確認して説明を続けた。

「要するに、吹き矢は息を吹き込んで弾を飛ばしますけど、その息を火薬の爆発力に置き換えたものと考えて下さい。基本的な構造は単純なんです。爆発力の強い火薬の調合と発火装置、爆発力に耐え切れるだけの強度を持った『筒』を作るのが難しい。それに、筒の口径に合った弾の大量生産もですね。今回、ドマイセンは、それらの開発に成功したということでしょう」

「しかし、ニイロ殿の使う物よりは遅れているということか。どのくらいの差があるのだ？」

差と聞かれても、ニイロも銃器の歴史に詳しい訳ではない。ガンマ・アースこちらに来る前の訓練時に、座学で少し学んだ程度だ。

少しだけ考えてから答える。

「差ですか……石を削って作った原始的なナイフと、最新の鉄製ナイフ？　くらいでしょうか。ただし、どちらも刺せば人を殺せます。その点は勘違いしないで下さい。古い形式だからといって脅威が無い訳じゃない」

ニイロの説明を聞いたダスターツ伯爵が、苦々しげに深い溜息を吐く。

「なるほど……これを同じような武器の使用者であるニイロ殿に聞くのは間違いかも知れませんが、対策はあるのだろうか」

「うーん、威力に負けないくらい頑丈な盾……と言うのは現実的じゃないですね。今回、門を吹き飛ばされてるそうですし、使われる前にケリをつける、くらいでしようか。

あの大砲の構造ですと連続しての射撃は難しいでしょうから、位置について最初に撃つまでと、1発撃つて次の発射まで、それなりの時間を要すると思います。

後は……今回、あれを撃つのに門の直前まで寄ってきたという話でしたから、命中率の問題があるのかも知れません。つまり、遠くからだと外す可能性が上がるということですよ」

「なるほど……」

「それから、これはサクラコのお手柄ですけど……」

ニイロがそう言いかけた時、慌しく執務室の扉がノックされた。

その音に、秘書官のカウネル・ラッチが素早く反応して扉に歩み寄る。

その場で一言二言、言葉を交わしてから、すぐに扉を大きく開いて一人の騎士を招き入れた。

「何事か」

ダスターツ伯爵が尋ねると、騎士は青い顔を引き攣らせながら報告した。

「はっ！ コルエバンより緊急の鳩便です！ 現在、コルエバンに軍勢が近づきつつあり。旗幟からドマイセン・ビンガインの連合軍。その数5000！」

その報告に、部屋にいた全員に衝撃が走った。

ダスターツ伯爵が思わず立ち上がった拍子に、ニイロが持つ携帯端末タブレットを引っ掛けてしまい、取り落としそうになった携帯端末を慌ててニイロが受け止める。

「5000だど!? それほどの数どこから！ 国境の監視は何をして

いたのだ！」

思わず口にしたダスターツ伯爵の怒声に、報告に来た騎士は青褪めた顔で首をすくめるが、彼の責任ではない。

ダスターツ伯爵は大声を出したことで少し落ち着きを取り戻すと、スローンに向かつて指示を飛ばした。

「王都に緊急連絡を。それから大至急兵を用意させろ。どのくらい集まる？」

「領軍は既にリンデン砦に700を向かわせてますので、ここを守りに300を割くとして、1000が限界です。これに傭兵を加えて2000、それ以上は時間が必要です」

スローンが素早く計算して答えた。

敵の軍勢は5000だ。2000では少なすぎる。

コルエバンの街には1000の兵が常駐しているが、それを合わせても3000。地の利があるとはいえ不利なことに変わりない。

「儂がその2000を率いて出る。お前は追加の軍を大至急編成して後から来るのだ。領都は最低限治安維持に必要な兵を残せばよい。王都からの援軍も来よう。それまで儂が食い止めてみせる」

「お待ち下さい！ 団長が砦に出陣されて不在の今、伯爵様が領都を空けるのは賛同しかねます。ここは私が！」

騎士団長のギータン・ポアルソンは、援軍を率いてリンデン砦に向かつてしまっている。

ダスターツ伯爵の指示にスローンが異を唱え、互いに『自分が行く』と言い張って、言い合いが始まってしまった。

その様子に、蚊帳の外で困惑した表情のカウネル・ラッチが、救いを求めるように、しきりにニイロへ視線を送ってる。

「一つ、宜しいでしょうか？」

別にラッチの意を汲んだ訳ではなかったが、ニイロが2人の言い争いに口を挟んだ。

ニイロの発言に、ダスターツ伯爵もスローンも言い合いを止めて注目する。

「実は、これもお話ししようと思ってたんですが、実はサクラコの報告か

ら、砦の襲撃が陽動である可能性は予想していました。

ただ、王国の地理には疎^{うと}いんで、さすがに場所まではわかりませんでしたし、このタイミングも予想してませんでしたけど。

さらに、敵の切り札は、あの大砲だけじゃありません」

「ドマイセンめ、まだ何か隠していると言うのか!?!」

ダスターツ伯爵が頭を抱えて呻く。

「はい。それで提案なんですけど……ええと、コルエバンと言ったら、確かセビエネ村の近くですよね？ サリアさんの故郷の」

「そうだが、敵は既にコルエバンに迫っている。国境監視の不手際だが、敵の進軍ルートが不明な今、村の状況も不明だ」

ダスターツ伯爵の答えに、ニイロは少しだけ考えてから提案した。「どうでしょうか、もし信用してもらえらるなら、コルエバンの方は私が行く手もあります。セビエネ村の様子も気になりますし」

実は、ニイロが今、ルードサレンに残っているのは人質の意味もある。

仮にニイロ達がドマイセンの間者^{スパイ}だったとして、その疑いが晴れない内にリンデン砦に向かわせ、結果、逃亡となれば、ダスターツ伯爵としては『間抜け』の謗^{そし}りを免れない。

そこで、リンデン砦にはサクラコだけを向かわせ、ニイロはルードサレンに残ったのである。

「それは……儂等からすれば願ったりの申し出だが……何度も言うが、儂個人は貴殿を疑ってはおらん。しかし、良いのか？

儂はてつきり、貴殿は国同士の争い事には係わりたがらないものと思っておったのだが」

「はい。それは間違いありません。だから、今回限りです。乗りかかった船、毒を食らわば皿まで、一度手を出したなら最後までやり遂げろという意味ですが、今回だけお手伝いしましょう。このまま『私には関係無いので知りません』では、さすがに目覚めが悪い」

そう言い切ったニイロに、スローンが思わず小声で呟く。「なんだかドマイセンが気の毒になって来たな……」

そんな呟きを無視して、ダスターツ伯爵は今後の方針をニイロに尋

ねた。

「貴殿に出てもらえるならば是非も無い。儂に出来る限りの配慮もしよう」

「許可して頂けるなら、準備が整い次第、すぐに出発します。ここからコルエバンまでの地図と、出来ればどなたか、コルエバンまでのルートと周辺の地理に明るい方を手配して下さい。案内役として一緒に来てもらいたいんです」

事は急を要する。

道に迷って間に合いませんでしたでは笑い話にすらならない。

「わかった。スローン、コルエバン周辺に詳しい者、すぐに手配できるか？」

「そうですね、残っている騎士ですと、あの周辺の出身者は残念ながらいません。メルゼルと、あとコイレスが確かコルエバンの出なのですが、生憎二人共リンデン砦の方に……一般兵に出身者がいなか確認してみます。ニイロ殿、何人欲しい？」

「あー、本当は1人でいいんですけど、そうもいかないでしょうね。かと言って連携も取れないし、出来れば3人程度でお願いします」

ニイロとしては案内役が欲しいだけだ。大勢連れていっても意味が無い。

しかし、伯爵個人の信頼は得られているようだが、ニイロの立場を考えると数人の監視役を付けることになるのも、これまた仕方が無い。

スローンはニイロの答えを確認すると、片手を上げて了解の合図を示しながら、手配の為に部屋を出て行った。

すると、残る3人の内、それまで存在感の薄かった秘書官のカウネル・ラッチが、少し遠慮気味に口を開いた。

「その、これは単なる思い付きなのですが、あの周辺に詳しい者というならば、サリアはどうでしょうか。彼女ならセビエネの出身ですし」「いや、それは駄目ですよ。これから行く場所は戦場なんですから、侍女でしかない彼女を危険に晒すことは出来ません。少なくとも戦える方ではないと困ります」

その提案をニイロは慌てて断った。

一応、それらしい理由は告げたが、本音としてはサビエネ村の状況が不明な以上、万が一、ドマイセン・ビンガイン連合軍に村が蹂躪されでもしていたら、という恐れから、連れて行くことは拒否したかったのだ。

仮にサリアの家族に被害が及んでいた場合、それを今、彼女に直接見せるのは忍びない。

提案したラツチにしたところで、本当に単なる思い付きだったらしく「そうですか」と答えるだけで、特に拘りは無いようだった。

ただ、そう答えながらラツチとダスターツ伯爵が、ちよつと不思議そうな、怪訝けげんな表情で顔を見合わせていたのは気になったが。

「して、貴殿が出立した後の儂等はどう動く？」

ダスターツ伯爵が話を元に戻し、今後の方針について尋ねた。

しかし、聞かれたところでニイロにとっても初めての戦場である。行って見なければわからないことだらけであり、ここから先は出たとこ勝負だ。

そこで、取りあえずはコルエバンの代官及び領軍の指揮官宛の書状と、ニイロの身分を証明する書状を用意してもらい、援軍については本職である伯爵の判断で差し向けてもらおうよう頼んだ。

誰が率いて行くかについては、そこまでニイロが口出しする気はない。

一通りの打ち合わせが済むと、部屋にいた全員が、それぞれの準備の為に部屋を出て持ち場へ向かう。

ニイロも移動の為の車両の置いてある、馬場の一画に向かいながら、ニイロはサクラコに通信を送った。

「サクラコ、聞いてた？」

『はい。ニイロが行かれるのですね』

「うん、行ってくるよ。この世界に不釣り合いな力を持つてる以上、逃げてもいつかはこうなるだろうし、時には開き直ることも大事だろ？」

『大丈夫ですか？』

通信越しにもサクラコの心配そうな声が尋ねる。

「大丈夫。ファージもクラブもいるしね。サクラコにばかり働かせるから俺も働かないとね。そちらも予定通り動いてくれるかい？ タイミングは任せるよ」

少し冗談めかしてニイロは言った。

『そんなこと……わかりました。では、予定通りに』

「うん、くれぐれも気をつけてな」

『はい、ニイロも。帰るまでが遠足ですからね』

◇ ◇ ◇

ニイロとの通信を切った後、サクラコは後ろを振り返る。

サクラコの背後には、ここまで援軍を率いて来たダスターツ伯爵領軍騎士団長のギータン・ポアルソン、リンデン砦守備隊長フレクラバナウの姿があった。

落とされた砦から、矢の届かない位置に急遽仮設された陣地にある指揮所の天幕の中だ。

単身での潜入偵察の後、見張りの隙について気付かれないまま無事の脱出に成功していた。

「それでは、またちよつと行ってきますので、予定通り架橋の準備、お願いしますね」

「ああ、仮設橋の準備はさせているが……本当に1人で行くのか？」

ポアルソンが心配そうに問いかけてくるが、それにサクラコは事も無げに答える。

「はい。ニイロと約束していますから」

話が微妙に噛み合っていないが、サクラコは、まるで近所にお使いでも行ってくるかのような様子で微笑むと天幕を後にした。

サクラコが去った天幕の中では、ポアルソンとラバナウが顔を見合わせる。

「団長、これは前にも聞きましたが、あの娘はいったい何者なんです？」

呆れたような表情でラバナウがポアルソンに問いかけた。

「だから前にも言ったろう、ニイロ殿の仲間……相棒^{パートナー}? だと。それ以上は何もわからん。わからんが伯爵様は信頼しておられるし、俺も信用していいと思ひ始めてる。少なくとも今は味方だ

それにな、実際、彼女は強い。模擬戦でウエズレンのやつが、ハンデを貰っても、ものの数分しかもたなかったよ。しかも、ご丁寧に指導までされて、ウエズレンのやつ、今や彼女の信者^{ファン}だ。

俺も剣で後^{おく}れを取るとは思いたくないが、あの模擬戦での動きを見た今は自信を持って勝てるとは言ひ難い。ましてや彼女本来の武器を使われたら、俺とて何秒立っていられるか……」

「そんな娘を仲間に行っているニイロ殿とは……」

「さあな。正確にはカオル・ニイロ。苗字持ちだが本人は平民だと言ひ張ってたよ。

スコバヤ殿の予想では、その教養や知識、国宝級の所持品から、どこかの国の貴族、或いは王族の可能性もあって言っていたが、俺もその線は大いに有り得ると思うし、むしろそうであつてもらいたい。

本当にただの平民だとしたら……ただの平民が、あれほどの武力を持つなど、そんな出鱈目な国があるなど考えられん。

まあ、実際はまだ謎の人物としか言えんが、今の我々は、その2人の人物に頼るしか無いのも事実さ」

「コルエバンの方は大丈夫なんでしょうか……」

心配そうにラバナウは言うが、ポアルソンは何やら色々と諦めた表情で答えた。

「あつちはニイロ殿が言ってくれるそうだし大丈夫だろう。第一、お前も見ただろ? 今、外にいるゴーレム達を。敵は5000と言うが人間だ。俺には心配するだけ損な気がするよ」

天幕の外には、ニイロがつけてくれた赤い頭のファージ・ワンと、クラブ・ワン、ツー、スリーの3機が控えていた。

ファージの武装は対地ミサイル、クラブはワンが12.7mm機銃、ツーが40mmグレネード、スリーは非武装となっている。

サクラコは、いつものクラシカルなナース服の上から、灰色のステルス迷彩機能付きポンチヨを被ると、ファージ達に語りかけた。

「さあ、みんな、頑張つて後でニーロに褒めてもらいましょう!」

「二」ピポツー!」

ファージ達が一齐に電子音^{ビープ}で応えた。

サクラコは、その反応に満足したように頷くと、ポンチヨのフードを目深に被り、面前にはヴェールを下ろす。

同時に浮上したファージ・スリーに掴まると、ステルス機能をオンにして姿を消した。

クラブ・ワンとツーも飛び上がると、橋の落ちた溪谷を渡れないファージを残して、それぞれ姿を消して飛び去っていく。

1機だけ残されたファージ・ワンは、無限軌道とマニピュレーターを器用に使いつつ、カチャカチャキュルキュルと傍目^{はため}にはユーモラスな動きで、砦のある方向とは逆の陣地の外に移動していった。

やがて、周囲が開け、少しだけ高台になった位置に到着すると、その場で静止する。

辺りは晩秋の夜の冷気が降り、耳を澄ませば数の減った秋の虫達^{ロンド}が、終わりの近づいた輪舞曲^{ロンド}を奏でている。

もし、この場に人がいれば、虫の声でない曲が流れていることに気づいただろう。

演奏者はファージ・ワン。

ごく微かな電子音^{ビープ}で曲を奏でている。

曲名は『ワルキューレの騎行』

某映画で有名なアレである。

もし、今ここにニーロがいれば、きつとこう言っただろう。

「いやいやいや、虐殺しに行くんじゃないからね!」と。

◇ ◇ ◇

最初に異変に気づいたのは、ビンガイン軍の兵士だった。

ドマイセン軍から借り受けた大盾を、夜の内に砦の王国側、断崖と

柵との狭いスペースに等間隔に設置して、その陰で仮眠を取っていたが、夜半過ぎ、偶々もよおして目が覚めると、同時にどこからともなく「シューツ」という聞き慣れない音が聞こえるのに気づいたのだ。反射的にその音のする方を見ると、前方の上空に炎を吹き出しながら飛来する物体を目撃した。

仲間の兵に声を掛ける時間も無かった。

その物体が彼の頭の上、遙か上空を越えて飛び去ったのは、ほんの一瞬の出来事。

「な……」

何だあれは、と言葉を発する時間すら無かった。

彼からすれば砦の後方、恐らくドマイセン軍の陣取る場所辺りで、ドーン！ という爆発音が響き、その音に振り返ってみると、砦の柵の隙間越しに炎が吹き上がるのが見える。

「た……」

大変だ、という言葉も出ない。

彼の頭上を二つ目の物体——ファージ・ワンの放った地对地ミサイル——が、最初の物と同じく炎を吐いて飛び越えていくと、再び同じ方向で爆発音と炎が吹き上がった。

しかも、今度は鉄火砲の弾薬に引火したのか、爆発音は一つに留まらない。

その衝撃と音で、ドマイセン・ビンガイン連合軍は大混乱に陥っていった。

「ヤノス殿ご無事でしたか！」

砦内の指揮所として使われている兵舎の一室に、混乱の中ドマイセン軍の指揮官であるオルフ・ヤノスが、副官1人と共に姿を見せると、指揮所で混乱の収拾に当たっていたトール・ハルマインが声を上げた。

部屋の中ではハルマインと2人の副官が、集まった情報の検討をしている最中だったが、現れたヤノスに視線が集中する。

「いったい何がおこったのですか!? 鉄火砲の天幕のようですが、敵に動きは見えません。まさか事故ということでしょうか」

その問い掛けに、ヤノスは苦虫を噛み潰したかのように表情を歪ませた。

「心配を掛けた。今、こちらでも混乱の收拾に当たらせているが……：：：事故は考えられん。これだけの騒ぎだ。この距離で敵が気づいてないとは思えん。逆に動きが無いことが、敵が知っていた証拠とも考えられる。間者が紛れ込んでいる可能性が高い」

「では、敵の破壊活動の線が濃いと」

ハルマインの確認にヤノスは頷いた。

「おう、鉄火砲の置いてあった天幕と、弾薬を置いていた天幕のみ、見事に狙って潰しおった。あれはもう使えん」

実際にはビンガインにもまだ詳細を知らせていなかった秘密兵器も一緒に潰されているだけに、ヤノスの怒りは大きい。

苦々しげに毒づくヤノスに、ヤノスの副官が阿るおもねように言った。

「しかし、我等の役目は敵を誘き寄せることですから、大勢に影響は無いでしよう。後は敵を釘付けにして時間を稼げばよいのですから、我々にトラブルがあつたと敵に知られるのは、むしろ好都合というもの。好機とばかりに食いついてくれるのではありますまいか。鉄火砲は痛いですが、砦は我々の手中にあるのです。まだ將軍の手柄は動きませんぞ」

「ふむ……」

「後はジーマール將軍次第。予定通りなら、もうコルエバンの攻略に取り掛かっているかも知れません。いや、もう落としていても……」

「ああ、それは無理かと思われませう」

突然投げかけられた少女の声に、その場にいた全員が一斉に声のした方向を振り返った。

部屋の入り口とは逆の、中央に据えられたテーブルを囲むように立っていた男達と、外に面した窓との間に、いつの間にか灰色のポンチョを着たサクラコが立っていた。

「何者!？」

一番近い位置にいたヤノスの副官が、いち早く腰に佩いた剣を抜き

放って突きつけたが、突きつけられたサクラコは、それを軽く往いなして言葉が続ける。

「コルエバン、でしたか。あちらにはニーロが向かいますから、すぐ片付くんじやないでしょうか」

今や副官達のみならず、ヤノスとハルマインにも剣を向けられながら、それを一向に意に介すことなく言葉が続けるサクラコに、不気味なものを感じつつヤノスが聞いた。

「どこから入った、とは聞くまい。見事な腕だ。王国の魔道士の娘よ、今の騒ぎは貴様の仕業だな？」

魔道士と判断したのは、突然現れたことを魔法によるものと見当をつけたせいだ。

「ええ。正確にはファージ……と言ってもわからないでしょう、私の仲間のお仕事です。あと、私は王国の人間ではありませんし、魔道士でもありません」

「王国の人間でも魔道士でもない？ では何者だ。何が目的で、なぜ姿を見せた」

矢継ぎ早の質問に、サクラコは落ち着いた様子で答えた。

「まず、私と私のパートナーのニーロは、王国の方々に、あなた方の仲間ではないかと疑われていましたので、その疑いを払拭する為に、一時的に王国と協力体制を布しいています。

あなた方を全滅させることは簡単ですが、私のパートナーは優しいので、それを良しとしません。よって、あなた方の撤退をお勧めしにやって参りました」

ドマイセン側からすれば身勝手な、馬鹿にした要求だった。

実際、優位に事を進めている彼等に、お前達は弱いから尻尾を巻いて帰れと言うのだ。飲めるはずがない。

それを聞いたヤノスの副官が、激昂して剣を振るった。

「小娘が黙って聞いておれば好き勝手なことを！ この痴おろれ者が！」

サクラコは袈裟懸けに振り下ろされた副官の剣に対して素早く踏み込むと、振り下ろされる剣を持った腕を左手で受け止め、いつの間にか手に握られていた10mmオートマチック小型自動拳銃を突き出した。

『パン！』という乾いた音と同時に、副官が取り落とした剣を、そのまま左手でキャッチする。

「ぐあああつ」

副官は悲鳴をあげながら太腿を押さえ、床を転げまわった。

見ると副官の太腿は血で赤く染まっている。

一瞬の出来事に固まっている人間達に向かって、サクラコが相変わらず落ち着いた口調で話す。

「うーん、どうも話し合いは苦手です。ライラ姉さんやシンシアさんなら、もつと上手く話せるのでしょうか……あ、皆さん動かないようお願いしますね。今回は仕方なく撃ちましたけど、これ以上の犠牲は私も望んでおりませんので。」

そちらの方は、見たところ弾は抜けていますし、すぐ手当てすれば大事には至らないでしょう。ああ、そのあなた」

側で固まっているハルマインの副官の1人にサクラコが指示する。

「まず、その方の傷口を縛って止血を。それから別の部屋に連れて行って、すぐに手当てしてあげてください。出来ませよね？」

サクラコに指図されたハルマインの副官は、従っていいものかハルマインの顔色を伺う。

ハルマインの方も拒否するわけにもいかず、無言で頷いた。

それを見て、もう一人の副官にも手伝わせると、まだ唸っているヤノスの副官を担いで部屋を出て行く。

見ると部屋の入り口には騒ぎを聞きつけて駆けつけた兵達が入り込んで作っているが、指揮官を人質に取られた格好で、部屋に突入しているものか、判断がつかないようだった。

「さあ、もう動かれて結構ですよ。話し合いを続けましょう……そうですね、その前にお座りになられたら如何でしょうか。せっかくテーブルも椅子もあることですし」

そう言うと、副官の剣をテーブルに置き、自分はさっさと椅子に腰掛けてしまった。

その様子に毒気を抜かれたように、ヤノスもハルマインも剣を収め、諾々と椅子に座る。

「さっきの……それは……鉄火棒なのか？」

ヤノスがポツリと言う。

視線はサクラコの持つ10mmオートマチック小型自動拳銃に注がれていた。

「鉄火棒？ ああ、木箱に入っていたあれですね。そうですねえ、あれの数百年後の姿、と言えはいいのでしょうか」

「数百年？」

ヤノスには意味がわからない。

「まあ、細かいことは気にされなくて結構です。私達は、あなた方の言う鉄火棒や鉄火砲より高性能な武器を持っている、と理解して頂ければ……」

そう言いながら銃を持った手を上に上げると、おもむろに2発発射する。

乾いた銃声と共に銃口から二条のマズルフラッシュほとぼしが迸り、同時に板葺きの屋根の上から悲鳴と、何かがぶつかるような重い音が響いた。

「威力の方は御覧になった通りです。あ、屋根の上にいるお二人は、ちゃんと手当してあげて下さいね。急所は外してありますから、出血と感染症に気をつけて頂ければ命に別状は無いはずですよ。

それから、このまま撤退して頂けるのであれば、私達はこれで手を引きます。王国は追撃の兵を送るかも知れませんが、私たちがそれに手を貸すことはありません。

でも、撤退して頂けないのであれば、私達は全力でこの砦からあなた方を排除しなければなりません。どうか賢明なご判断をお願いします」

「連続で……み、見えてなくても当るのか……」

鉄火棒の性能と威力を知るヤノスの目は、驚愕に見開かれていた。

実は上空のクラブ・スリーから送られて来るデータとリンクしての離れ業なのだが、ヤノスにはわからない。

「て、撤退すれば手を引くと？」

「はい。砦の奪還まで、というお約束ですから」

「傭兵か」

ヤノスが蔑むような口調で吐き捨てた。

「違いますよ？ 報酬をくれるとは言ってましたけど、別にいりませんし」

「では何故王国に肩入れする！ そもそも……」

思わず激昂したヤノスが自分達の正当性を主張し始めるのを抑えて、サクラコが言葉を被せた。

「あなた方の事情はどうでもいいのです。それは改めて王国の方々とお話し合いでも戦争でもやって頂ければ。」

ただ、今回は二ーロが迷惑してますから撤退して頂きます。聞いて頂けないのであれば、不本意ですけど排除するしかありません」

仲間が迷惑してるから撤退しろと、あまりに無茶苦茶で一方的な言い分に、ヤノスは顔を真っ赤にして声も出ない。

代わりにハルマインが言った。

「しかし、一口に撤退と言っても、我々も国を背負って出てきているのです。そう簡単に……」

「ええ、準備もあるでしょうから、今日のお昼、太陽が中天に昇るまではお待ちします。それまでに撤退の様子が無ければ攻撃を開始しますので、宜しく願います」

サクラコは、そう言っただけで悪びれる様子もなく、ペこりと頭を下げた。

あまりに素直なお辞儀に、思わず閉口してしまったハルマインに代わって、またヤノスが口を開く。

「このまま無事に帰れると思うのか。いくらその鉄火棒が凄かろうと所詮一人。大勢で押し包めば……」

怒りの視線で脅し文句を口にしたヤノスに、サクラコはにつこりと微笑んで言った。

「あら、1人だなんて言っただけじゃないよ？」

その言葉と同時に、サクラコの背後の窓の外で微かな『ブーン』という音が響く。

そこにはステルスモードを解除したクラブ・ワンが浮かんでおり、装備されている12.7mm機銃の砲身が、室内の明かりを受けて鈍

く光っていた。

「何だありやあ!？」

部屋の入り口で固唾を呑んで様子を伺っていた兵達の誰かが、窓外のクラブ・ワンに気づいて声を上げたのと同時、その声を合図にしたかのように、クラブ・ワンの12・7mm機銃が火を噴いた。

50口径の破壊の化身が、ダダダツと重い咆哮を上げる度に、窓は割れ壁は削られ、部屋の中に銃弾の嵐が巻き起こる。

入り口に屯たむろしていた兵達は悲鳴をあげて、倒これつ転まろびつ逃げ出し、ヤノスとハルマインは素早く床に伏せたはいいが身動きすらできないでいた。

やがて恐怖の暴風は、始まった時と同じように突然終わりを告げる。

真つ青な顔で身を起こした2人の目に入って来たのは、見るも無残な部屋の惨状だった。

先ほどまで目の前にいた少女の姿はどこにも無い。

「な、何だったのだ……あれはいつたい……あれでは鉄火棒など玩具ではないか……」

「……」

震える声で漏らしたヤノスの言葉に、ハルマインは青褪めた顔で言葉も出ない。

そして、さらに2人を打ちのめしたのは、その後、あれ程部屋を破壊し尽した攻撃にも係わらず、1人として死者も、怪我人すらもないという報告だった。

第20話 コルエバン救援

ルードサレンの城館を中心とした内壁の一面にある馬場。

その馬場の隅に一時的に停めてあった車両の横で、ニイロは出発の準備をしていた。

ファージ・ワンとクラブ・ワン、ツー、スリーの4機はサクラコに付けてリンデン砦に向かわせている為、ニイロの元にはファージ・ツー、スリー、フォー、それにクラブ・フォーが残されている。

現地に到着してからの様々な事態を想定し、それぞれの装備を取り付けてセッティングしていく。

判明しているだけで5000という敵の数には不安も大きいが、万一の場合はアウトレンジからの対処を徹底することで、なんとかなるだろうと自分に言い聞かせた。

「この馬無しの箱馬車で行くのか？」

その声に振り返ると、ダスターツ伯爵が護衛も付けず、1人、興味津々といった表情でニイロの横に停めてある車両を眺めていた。

ちなみに、車両に積んであった小型電動バイクは、サクラコがリンデン砦に向かうのに使用してここには無い。

「はい、こいつは特殊輸送車^sって言うんですけど、色々便利なんですよ。我々は単にバス^vって呼んでますけど。そして何より、馬より速い^v」

特殊輸送車^sは兵員輸送用の軽装甲車両で、モーター駆動により最高時速は80キロ。小銃弾や破片からの防御が可能な装甲を持っている。

マイクロバスの後ろ1/3ほどが、露天の荷台になったような見た目をしていて、荷台に荷物を積まない場合は、代わりにファージ1機が陣取って簡易の戦闘車両としても運用が可能だ。

よくピックアップ・トラックの荷台に機関銃などの軽武装を施した『テクニカル』と呼ばれる車両があるが、あれのマイクロバス版だと思ってもらえば遠くない。

車両内部には、歩兵一個分隊12名+aが座れるベンチシートが用

意され、シートアレンジ機能によって少人数なら体を伸ばしての車中泊もできるようになっている。

そして、何よりの特徴が、ファージやクラブに搭載されているAIの簡易版が搭載されていて、簡単な自律行動が可能になっている点だ。

自動運転中は最高速度が40キロ以下に制限されるが、これによって運転手がいない場合でも走り続けることができる。

「ほう、馬より早いと！ いや、ニイロ殿の使うものなら、さもありなんという話だが」

「馬で長距離だと休息や替え馬が必要ですけど、これならノンストップで走れます。コルエバンまで10日って聞きましたから、これで急げば1日か2日と踏んでます。道の状態もわかりませんし、大雑把な計算ですけど」

「そんなにか！ こんなもののう……。こんな事態でなければ僕も一度乗せてもらいたいとこだが。今は仕方が無いか」

ニイロの話を聞くと、ダスターツ伯爵はさらに興味津々といった体で、特殊輸送車の車体を叩いてみたり擦ってみたりしている。

「それより、何か話があられたのではないのですか？」

たった1人で現れたことからの推測だが、どうやら当りだったらしい。

少しバツが悪そうに顔を顰めながら、どう切り出そうか迷っていたようだが、やがて観念したように話し出した。

「実はのう……。随行者の件でちょっと頼みがあるのだ。いや、頼みといってもややこしい話ではなくてな、恥ずかしい話なのだが、メ……」

「お爺様！」

突然の声に振り向くと、数人の共を引き連れて駆け寄ってくるダスターツ伯爵の孫娘、メリーチェの姿があった。

ただ、その姿はいつものドレス姿ではなく、鎧こそ身につけていないものの、なぜか兵士の着るようなチュニツクにズボン姿。

後ろにいる共の姿も似たようなもので、なぜかスローンの姿もあ

る。

この時点でニイロにはダスターツ伯爵の『頼み』とやらに何となく予想はついた。

(あー、そういうことかー)

そんなニイロの考えはさて置き、メリーチェと一向はニイロ達の側まで来ると、挙動不審なダスターツ伯爵に花の咲くような笑顔で語りかけた。

「お爺様、ちゃんとニイロ様にお話して下さったんですね」

「あ、いやその、それはこれから……」

益々挙動不審なダスターツ伯爵は、しどろもどろに弁解を始めようとするが、メリーチェはそれを遮さへぎってニイロの方に向かう。

「でしたら私から直接お願いしますわ！ ニイロ様はコルエバンへの案内役を希望されているとか。3人と仰おっしやつてたそうですから、それでしたら私達をご一緒させて頂きたいのです。全員、領都からの道は存じてますし、サリアはコルエバン近くのサビエネの出。フィーゼもコルエバンの出ですから、ご要望にもピッタリですし、私だつて向こうに着いてからの代官との連絡に、きつと役に立つはずですよ！」

そう言つてメリーチェと共にニイロの前に立ったのは、栗毛と赤毛の女性兵士……と思つたら栗毛の方はサリアだ。フィーゼとというのが赤毛の方だろう。

メリーチェは、思い切り前のめりにアピールしてくるが、その後ろではダスターツ伯爵が無言のまま目線だけで『断つてくれ！』とアピールしている。

さらにスローンも、申し訳なきような表情で、片手を刀の形にして必死に押んでいる。

その姿に、世界は違つてもボデイーランゲージは同じかーなどと、どうでもいい考えが頭に浮かぶが、今はそんな場合じゃ無い。

「駄目ですよ。遊びに行くんじゃない。これから行くのは戦場なんですから」

「もちろんですわ。遊びではないから行くのです。私とて貴族の娘として一通りの武術は教わっていますし、戦場ではありませんが、害獣

の駆除に同行したことだってあります。こう見えて水と土系を得意にする魔道士です。きつとお役に立ちます！」

外堀が埋められた。

以前、ニーアーレイに聞いたが、魔道士を名乗るということは単に魔法が使えるというだけじゃない。戦力になる魔法使いだという証だ。

深窓の令嬢だと思っていたが、意外に御転婆らしい。

領都に数人いるとは聞いていたが、その内の1人がこのお嬢様だったというわけだ。

「し、しかしですね、サリアは侍女でしょう。兵士でもない女性を戦場に連れてはいけませんよ」

なんとか断ろうと理由を説明するが、メリーチエは逆に不思議そうな顔でニイロに聞く。

「えっ？ 戦争であれば国民が戦場に向かうのは普通のことではないですか。女だから行かなくていいなんて、聞いたことが無いのですけど」

内堀も埋まった。

これは価値観の違いだ。

戦争は軍隊の軍人同士で行われるもの、というのがニイロの常識だが、この世界に於いては国民皆兵が普通であり、人口が少ないこともあってか、そこに平時に於ける職業や男女の差は考慮されない。

されるのは個人の資質と年齢くらいのもので、それさえも国によって大きな開きがある。

さすがに膂力に乏しい女性に剣を持たせて最前線に送ることは無いが、力があれば別だし、力が無くても最前線近くでの仕事が無いわけじゃない。

「で、でも、戦場では何があるかわかりませんし、私も守れるとは限りませんし……」

「大丈夫ですわ。私の魔法は攻撃よりも防御が得意ですし、フィーゼもまだ叙爵こそしていませんので兵士扱いですが、防御術では騎士にだって一目置かれるくらいです。サリア1人くらい守れます。サ

リアだって、如何に戦場と言っても雑事はありますから、それを彼女に任せれば、ニイロ様もお仕事に集中できるでしょう?」

本丸炎上中。

見ると、ダスターツ伯爵は俯うつむいて何やら呪詛じゆその言葉をブツブツ呟つぶやいているし、スローンは青くなってしよげている。恐らく後で伯爵に叱られるのだろう。

(お、俺は悪くないし……)

あえなく本丸も陥落。

「……わかりました。伯爵様の許可が得られるなら同行を認めましょう……」
もう断る材料が無い。

強権を発動して何が何でも駄目だと言い張ることはできるが、ここまで理詰めで断ろうとした挙句の強権発動は、こちらが悪者になってしまう。

彼女達の安全を考えるなら、自分が悪者になるのも構わないが、いざとなればファージを護衛に付ければ何とかなるだろうという算段もあつて、ダスターツ伯爵には申し訳ないがメリーチエ達の同行を認めることにした。

気掛かりはサビエネ村の状況だが、それは後で考えることにする。
伯爵の許可云々は、せめてもの抵抗だ。伯爵本人には恨まれそうだが。

「ありがとうございます! お爺様には先にお話して、ニイロ様が許可して下さいましたら行っても良いと許可を得ておりますわ!」

喜ぶメリーチエ達の背後では、ダスターツ伯爵が顔に『絶望』の二文字を浮かべているが、ニイロはあえて無視。

スローンは半分魂が抜けているようなので、安らかな成仏を願っておいた。

「それじゃあ、こちらの準備は後30分ほどで終わりますから、終わったらすぐに出発します」

「えっ、朝明るくなってからではないのですか? もう真つ暗で、今日は月も出てませんから道が見えませんか?」

「特殊輸送車なら夜中でも関係なく走れますから大丈夫ですよ。同行されるのでしたら、すぐに準備して下さい。今は時間が惜しい」

ニイロがそう言うと、メリーチェ達は表情を引き締めて頷いた。

「すぐに仕度して参りますー」

そう言い残すと、まだ抜け殻になっている伯爵とスローンを残し、3人は準備の為に駆け出していった。

◇ ◇ ◇

コルエバンの街は、ホロゲノン山地を源流としたテン川が流れ込むテン湖の辺に、地形を利用した代官館を囲むように発展した街である。

街の西側を南北に流れ、天然の堀となつているテン川を除く三方は石造りの城壁が張り巡らされ、周囲には農地が広がっている。

今、西側を除く3ヶ所の城門の前にはドマイセン・ビンガイン連合軍の軍勢が陣取り、夜明けと共に活動を再開した敵軍は、農地を踏み荒らしながら、それぞれの城門に向かって間断なく攻撃を繰り返していた。

秋の刈り入れが終わったばかりなのが不幸中の幸いである。

今回、ドマイセン・ビンガイン連合軍は、城門に対して新兵器である鉄火砲での砲撃を繰り返している。

幸いなことにリンデン砦に比べれば倍以上の厚みを持つ城門の扉と、城壁の上から繰り出される弩砲や投石機による妨害、それに鉄火砲の命中率の低さによつて、今のところは何とか持ちこたえていた。

「不可能じゃ……」

コルエバン防衛の指揮所となつている代官館の一室で、受け取った連絡書を握り潰しながら、代官のビオネス・エザクトは呻いた。

普段は好々爺然とした柔和な表情が、今は忌々しげに歪んでいる。

齢は当年72歳。その慎重すぎる性格と巨軀から優柔不断、時に鈍牛との謗りを受けることもあったが、堅実に着実に実務をこなし、先代の時分からダスターツ伯爵家に長く仕えてきた。

街の南方のドマイセンとの国境には、昨今の山賊の出没もあって、監視の目を強めてきたつもりであったが、この侵攻に気づくことが出来なかったのは、ビオネス一世一代の不覚である。

何より、街が見渡せる位置まで接近されながら、警報の一つも届かなかったのは謎としか言いようがない。

実際は、複数編成された鉄火棒装備のドマイセン軍の特殊部隊が、先行して侵入し、その新兵器を駆使して、要所に設けられた見張り台を一つづつ潰していった成果だった。

「親爺殿、領都からは何と？」

コルエバン領軍を指揮するサイス・エザカート——ビオネスの息子でもある——が、不安げな表情で父に尋ねる。

「援軍を出したそうじゃ。数は2000。それで王都からの援軍が来るまでもたせろという話じゃよ」

「2000……即日発ったとしても到着は早くて5日、実際は一週間といったところでしようか」

暗い表情で答えた父の返答に、息子もまた暗い顔で呟いた。

通常の敵なら一週間が一ヶ月でも、援軍の到着まで耐え切ってみせる自信はあるが、今回は事情が違う。

敵の新兵器である鉄火砲による攻撃は、命中率の低さからまだ城門を破られるまでには至っていないが、それも後一日が限界と判断している。

さらに、一旦突破されてしまえば、敵の歩兵が持つ小型の新兵器、鉄火棒によって齎もたらされる被害は、城壁を隔てた現在の比ではないだろう。

最初の援軍が最短で到着する一週間ですら、もたせるビジョンが2人には浮かばなかった。

しばしの沈黙が部屋を支配する。

部屋の外からは、兵達の怒声とドーン、ドーンと鉄火砲の砲撃音が木霊こだましていた。

「とにかく……あの敵の新兵器を何とかせにやならん。大きい方はもちろん、小さい方も盾を抜きおる。あれを放置しておけば、援

軍が間に合ったところで同じことじゃ」

「あれは盾を2枚重ねれば止められます。どうやら撃ちだす礫つぶての方が碎けるようです。ただ、小さな盾じゃ隠れてない部分を狙われるし、大きな2枚重ねの盾など持ち運べたもんじゃない。時間があれば対策も練れるでしょうけど、今は時間が無い」

要するにお手上げだ。

敵を打ち破る策もなく、援軍が届く時間すら稼げないとなれば、後は全滅か降伏かの選択しか残っていない。

再び部屋を沈黙が支配するが、その沈黙は長く続くことなく、部屋に駆け込んできた兵士によって破られた。

「失礼しますー。王都より鳩使ですー」

入って来た兵士は挨拶もそこそこに、サイスに小さく丸められた1枚の羊皮紙を渡すと、敬礼して部屋から出て行った。

サイスは渡された羊皮紙を、中身を改めることなく代官の父、ビオネスに渡す。

受け取ったビオネスは素早く書かれた文章を読むが、その顔からは明らかな落胆が読み取れた。

「王都からは何と？」

恐る恐る尋ねるサイスに、ビオネスは黙って羊皮紙を差し出す。

差し出された羊皮紙を受け取って読んで見ると、そこには、ビネール・ドウ・リドリスファール第二王子に対し兵15000をもってダスターレ伯爵領コルエバンへの援軍命令が即時発令されたことが書かれていた。

サイスにもビオネスの落胆が伝染する。

本来であれば、コルエバンの兵1000と領都からの2000に合わせ、王都からの15000が加われば、如何に新兵器を装備した敵兵であっても勝利することが出来るだろう。

しかし、王都からの援軍となれば、距離的に二週間は掛かる。

援軍の任務はコルエバン防衛ではなく、コルエバン奪回、そしてエザクト親子の弔い合戦になるだろう。

「仕方あるまいて。お館様も陛下も、こうやって援軍を送って下さっ

ておるのじゃから。敵の攻撃力が異常なのじゃ。なぜこうなったかは生き残った者の仕事よ。我等としては、兵には悪いが、せめて街の領民には被害が及ばぬよう打って出ること考えねばなるまいなあ」

「親爺殿……」

達観したかのようなビオネスの言葉に、サイスはそれ以上の言葉が出てこなかった。

「なに、まだ負けとは決まっとらんぞ？ 援軍が来るのは間違いないのだから。最後の瞬間まで何が起こるかかわからんのが戦争じゃよ。突然やつらの新兵器が使えなくなるかも知れんし、敵の将が死ぬかも知れん。ドラゴンが現れて敵を一掃するかも知れん」

ビオネスは先ほどまでとはうって変わって声を張り上げると、サイスの背中をドンドンと叩きながら、冗談まで交えて励ました。

「お前がしよげていてどうする！ 軍の指揮はお前の仕事じやろうが。指揮官が暗い顔をしたら勝てる戦も勝てんわ！」

「そ、そうですね。とにかく今は門の守りを固めさせましょう」

父の励ましに、無理矢理元氣を取り戻したサイスは、そう言って指揮の為に部屋を出ようと出口に向かうが、それを遮るようにまたも伝令の兵が部屋に飛び込んできた。

「失礼します！ 領都より鳩便です！」

その報告に、サイスはまた間に合わない援軍の追加かと訝しみながらも、兵士から羊皮紙を受け取ると、そのままビオネスに渡す。

受け取ったビオネスも、特に期待も無い様子で羊皮紙に目を通していたが、次第に表情が驚きから困惑したものへと変わっていった。

そんなビオネスの様子に、サイスが心配そうに声を掛けた。

「親爺殿？」

「伯爵様がの、援軍を送って下さるそうなんじゃが……」

困惑した表情のままビオネスが答える。

「追加の？ 間に合わないのは一緒でしょう」

「それがのう、援軍はメリーチエ様を含めて4人だそうなの」

「は？ なんですかそれは。4人？ それにメリーチエ様？ 優秀な魔道士であることは聞き及んでますが、何かの間違い……」

や、その書状は本物なんですか？」

疑問は当然だ。

5000の敵を相手にしている所に、たった4人の援軍など、何の意味があるというのか。

「確かに、お館様の直筆じゃ。印章も間違いはない。第一、お館様の字を儂が見間違えるものか」

「いやしかし、あの伯爵様が、たった3人の共連れでメリーチェ様を戦場に送り出すなんて、絶対に有り得ませんって」

「じゃが、書状によれば、むしろメリーチェ様の方が案内役で別の人物、『カオル・ニイロ』という人物が本命らしい。お館様によれば、くれぐれも丁重にお迎えしろとある」

「そんな人物、聞いたことがありませんな……まあ、言いたいことは色々ありますが、言っても詮^{せん}無いことです。どの道その『カオル・ニイロ』とやらが到着する頃には、我々はこの世におりますまい。今は門の防御を固めるのが先決。私はこれで……」

「どうやらサイスは『何かの間違い』と判断して、無視することにしたようだった。」

ビオネスに背を向けて、現場での直接指揮の為に部屋を出て行くとするが、その背中にビオネスの声が掛けられた。

「じゃがのう、お館様が書いておられる。この人物1人を万の兵と思え、と。そして、この書状が正しいならば……信じられんが、この人物は、早ければ今日中にも到着するらしい」

あまりに馬鹿げた話に、部屋を出て行くつもりでいたサイスは思わず立ち止まって振り返った。

「伯爵様は……いったい何を援軍に送られたのです？ ドラゴンでも寄越したというのですか！……ん？」

絞り出すような声でサイスが言ったその時、たまたま目線の先にあった窓の外で、奇怪なものが視界の隅を横切ったのに気づいた。

サイスはすぐにビオネスにも注意を促^{うなが}し、よく確認しようと窓に駆け寄る。

それは、ちょうど南に位置する城門の上空で、四角いテーブルくら

いの大きさの何かが飛び周り、城門の外側、敵の群がる方へ、何か黒いものをバラバラと振り撒まいている。

そしてすぐに、城門の外側で朦々もうちもちと煙幕が立ち上がるのが見えた。煙は主に城門の向こう側、城門攻めの敵の軍勢の只中で上がっているようだが、風に乗って流れてきた煙から逃れようとする友軍の兵士の姿も見える。

「なんじゃあれは……あの煙、敵が火を掛けた訳ではないな？色が付いとる……何の意味があるんじゃ」

見れば確かに、ただの煙ではなく、ピオネスの言うように黄色や緑、ピンクの色の付いた煙が上がっていた。

「と、とにかく私は現場で確認して来ます！」

そう叫ぶと、サイスは部屋を飛び出していった。

街中を駆け抜け、必死の思いで南門近くまで到達すると、現場で指揮を執っていた騎士の一人を捕まえて詰問する。

「ノツコール、どうなってる。あの煙はいつたい」

ノツコールと呼ばれた騎士は、狼狽しながらも報告した。

「それが、突然、門の向こうから煙が……あの煙に巻かれると、ああなるようです」

ノツコールに促されて周囲を見ると、顔面を涙と鼻水でぐしゃぐしゃにしながら、咳やくしゃみを繰り返す兵士達の姿があった。

確かに、冷静になってみると、あちこちから咳とくしゃみの音が聞こえる。

「ああなったら戦闘には使えません。城壁の上にいる連中なんか酷いもんです。目撃証言ですと煙は攻めてる敵のど真ん中で発生したらしくって、敵もパニックだそうです。自爆なんでしょうか」

「わからん。わからんが、お前は見なかったか？ 空に、こう、空飛ぶテールみたいなの……」

そう言って自分の目撃した奇怪な物体を説明しようとしたサイスの言葉に被せるように、突然、大音量の音が鳴り響いた。

『両軍の指揮官に警告します。即刻、戦闘を停止して下さい。繰り返します。即時に戦闘を停止して下さい。これは警告です』

サイスは知らないが、それはニイロの声だった。

突然の声に、サイスが思わず、声のした方を振り返ると、視界に飛び込んできたのは例の空飛ぶテーブルだ。

それは、ちようど街の中心部辺りの上空に浮かんで、停戦しろと繰り返している。

サイスは理解した。

あれが伯爵の送り込んできたモノだ、と。

「伯爵様………いったい何を寄越したというのですか………」
その眩きは、側にいたノツコールにも聞き取れないほど小さいものだった。

第21話 直談判

「ただ今戻りました！」

時刻は間もなく正午近く、リンデン砦の王国側、臨時に設けられた王国軍リンデン砦派遣部隊の指揮所の天幕に、偵察から戻った騎士の聲が響いた。

その声を受け、指揮所内で王都から派遣されてきた援軍の指揮官と打ち合わせをしていたギータン・ポアルソンが、報告に戻った騎士に声を掛ける。

「おう、どうだった？ 向こうの様子は。報告を聞こうか」

報告を求められた騎士は、敬礼と共に答えた。

「はっ、それが、ビンガイン・ドマイセン両軍の撤退は確認しました。ただ、砦内にて両軍の兵士4名を発見しまして、尋問した所、自分達はビンガインのトール・ハルマイン、及び、ドマイセンのオルフ・ヤノス、それに従卒2名であると……」

「何っ!？」

その報告に驚きの声を上げたのは、王都から派遣された援軍の指揮官である、エレネス・ラウ・ホルストーン子爵だった。

面長の神経質そうな目をした四十代の男で、兵の統率には一定の評価がある。

「オルフ・ヤノスと言えば王国にも聞こえた将ではないか。見事な髭が特徴と聞いたことがあるが？」

ホルストーン子爵の問いに、騎士が答える。

「はい、確かにオルフ・ヤノスと答えた兵は、見事な口髭を蓄えています」

その答えに、ポアルソンとホルストーン子爵は顔を見合わせる。

「本物……なのでしょうね。替え玉を残す意味も無い。しかし、本物なら尚のこと、なぜ残ったのでしょうか」

ポアルソンが見解と疑問を呈すると、ホルストーン子爵は首を横に振った。

「わからんが、とにかく会って話を聞いてみないと始まらない。架橋の

方は？」

「あと一時間もすれば、取りあえず渡れるでしょう。まあ、それからですな」

「ふむ……王都から、やっと着いたと思えば、圧倒的に有利だったはずの敵は撤退しているし、しかも、お膳立ては何処どこの誰とも知れぬ異邦人の娘が、全て一人でやったとか。そうかと思えば敵の指揮官が残って待っている……俺も長いこと軍にいるが、こんな訳のわからん戦は初めてだよ」

ホルストーン子爵の愚痴に、ポアルソンはただ苦笑することと答える。自分も同じ気持ちだと。

「そういえば、件の少女は？」

今更思い出したように尋ねる子爵に、ポアルソンは気も無く答えた。

「ラバナウと一緒に架橋の指揮をしてくれていますよ。あの空飛ぶゴレムがいなくちゃ、仮設とはいえ、こんなに早く架橋なんて無理でしたから」

そして一時間後、リンデン砦内の兵舎の一室に、テーブルを囲んで居並ぶ面々の姿があった。

窓を背にした側にホルストーン子爵とギータン・ポアルソンが座り、その横にはリンデン砦の守備隊長であるファレク・ラバナウ、そしてサクラコが澄ました顔で座っていた。

実は、サクラコの会合への出席については、ポアルソンから要望があったものの、最初サクラコは出席を拒否していた。

自分の役目はビングイン・ドマイセン軍の撤退までであり、サービスで架橋の手伝いまではしたが、撤退が成った以上、その他の事はうちが埒外である、という理由だ。

それをポアルソンとラバナウの両人で、『敵の指揮官が残っている以上、まだ敵の撤退という条件は満たしていない』と説得し、なんとか出席の同意を取り付けていた。

部屋の四隅と出入り口には護衛の兵が立ち、戸口を背にした側に

は、オルフ・ヤノスとトール・ハルマインが座り、それぞれの従卒は彼等の後ろに立っている。

椅子に座ったヤノスとハルマインの視線が、チラチラとサクラコと、その背後の窓の外に移るのは、昨夜のことがトラウマになっているのかも知れない。

「それで？　話があるということでしたが……」

全員が席に着いたところで、さっそくポアルソンが端緒を開く。

仮設の橋が完成し、兵士達を率いて砦に乗り込んだラバナウに對し、兵に囲まれながらも堂々とした態度でヤノスが言い放ったのは、「話が見たい。あの娘を連れて来い」ということだった。

砦の守備隊長でも、ダスターツ伯領軍の団長でもなく、ましてや王都からの派遣軍を率いる子爵すらスルーしての、前代未聞の要求だったが、後から来たホルストーン子爵を除けばサクラコの規格外の働きは身に染みて感じている。

たいして議論するまでもなく、この会合が開かれる結果となった。「お前の要求通り、軍は撤退させた。こちらは要求を飲んだのだ。次はこちらの要求を飲んでもらいたい」

ヤノスのその言葉は、ただサクラコにだけ向けた言葉だ。

他の出席者など目にも入らない様子で、ただサクラコだけを睨み、ハルマインも同様に真剣な眼差しをサクラコに注いでいる。

そんな2人の様子に、ホルストーン子爵は気分を害したように眉を顰め、ポアルソンとラバナウは、サクラコ絡みじゃ仕方がないといった諦めの表情で肩を竦めた。

「それは些か失礼な話では……」

完全に無視された形のホルストーン子爵が抗議の声を上げかけるが、すぐにヤノスが一喝する。

「外野は黙っている！　俺はその娘と話をしているのだ！」

「なっ……」

あまりの言い様にホルストーン子爵は顔を真っ赤にして憤慨するが、すかさずポアルソンが宥めに入った。

「まあ、ホルストーン卿、お気持ちはわかりますが、ここは冷静に。ヤ

ノス殿も、もう少しご自分の立場を考えられては如何か」
ヤノスとハルマイン、それに2人の従卒は、王国軍の支配する砦の中にいる。

言わば生殺与奪の権は王国側にあるのだ。

しかし、ヤノスは言い放った。

「立場なんぞ理解しとる。話が済めば、俺とハルマイン殿の身柄は首を刎ねるなり好きにしろ。刎ねた首は後ろの2人に持たせてくれればいい。その為に残したのだ」

そう嘯くヤノスに、ハルマインはやや困ったような表情ながらも頷き、後ろに立つ従卒達は痛ましげに顔を伏せた。

ポアルソンとしても、そう言われると言葉が続かない。

救いを求めるようにサクラコの方を見るが、相変わらず澄まし顔で何を考えているのかわからない。

「どうなのだ!」

何を考えているのかわからないのはヤノスも同じだったようで、苛ついた声でサクラコに発言を促した。

それでようやくサクラコが声を発する。

「要求を飲めと仰いますけど、なぜ要求を飲まなくてはならないのでしょうか」

「昨夜、貴様は関係無いと聞くことすら拒んだが、ここは是が非でも聞いてもらおう。」

そも、この戦の発端は、王国が新たに開発した銀山によって、ポノ川の下流となる我が国の一部地域に重大な害が齎されておることに発するのだ。我が国は何度も抗議したが、王国は一顧だにせん。

よって、一戦して王国に打撃を与え、引き換えに銀山の廃坑を要求する為のものだった。正義は我等にある!」

その主張に、王国側の面々は、ややバツの悪そうな表情を浮かべている。

しかし、サクラコは相変わらず澄ました表情を崩さない。

「はあ、それは昨夜も言いましたけど、あなた方の事情など別にどうでも……二ーロが迷惑してたから受けただけのことですし、何

か要求されてもメリットもありません」

冷たく言い放ったサクラコに、それまで黙っていたハルマインが突然横から口を挟んだ。

「ニーロ？ その、ニーロという人はどうなのですか!? その方も、この事情を聞いて関係無いと言われる方なのですか？ それに、メリットだって提供できるかも知れない。その方と話すことは出来ないのですか？」

ハルマインとしても首と胸が離れるかも知れない瀬戸際だ。

立场上、もう命は捨てているが、何の成果もなく敗軍の将として断罪されるより、せめて何かを残したいし、出来ることなら助かりたい。

思いつく限りの言葉で説得を試み、そしてその試みは成功した。

「ニーロなら……そうですね。ニーロなら聞くかも知れませんね……」

サクラコの表情が初めて変わった。

思案顔でブツブツと呟くと、ヤノスに向かって尋ねる。

「では一応お聞きしますが、そちらの要求とは？」

「まずボノ川上流の銀山の破棄、それから貴様の持つ技術の提供だ」

堂々と言い放った要求に、ホルストーン子爵が気色ばむ。

「何を馬鹿な！」

そう叫んで立ち上がりとするホルストーン子爵をポアルソンが押し止め、代わりにサクラコが尋ねる。

「そのような要求が通ると？」

聞かれたヤノスはニヤリと笑い、しやあしやあと嘯いた。

「まさか。思わんよ。しかし、冗談のつもりも無い。こちらとて命を掛けての談判なのだ」

「つまり、こちらで落とし所を見つけてるということですね」

「話が早くて助かるな」

ヤノスは愉快そうに笑う。

ハルマインは気が気でない様子だ。

「まず、銀山の破棄についてですが、これは私達にそれを決定する権限がありませんし、王国としても拒否されるでしょう。ですよね？」

最後の念押しはホルストーン子爵に対してのものだ。

「当たり前だ」

ホルストーン子爵も憤懣顔で頷いた。

「そこで提案ですが、事の要因は銀山から出される精錬後の廃棄物です。この廃棄物を処理する浄化施設の建設に対する助言をする、という線で手を打ちませんか？

私共から提供する技術については、流石にプラントを作るのは無理ですから、汚泥の沈殿施設と排水のペーハー調整施設くらいでしよけれど、これまでの垂れ流しよりは良くなるはずです。

この技術についてはオーブンにすることで、技術の提供という件もクリアしますし。如何ですか？」

にこりと笑うサクラコに、ヤノスは腕組みをして唸った。

「うむむ、浄化施設か……欲を言えば、あの鉄火棒の技術が欲しいが……それは良からう。しかし、建設には費用が必要だ。それはどうする？」

「そうですね、費用については王国側で負担してもらいましょう」

まるで何でもないので、さらりと答えたサクラコだったが、流石にこれにはホルストーン子爵が食いついた。

「何を勝手な！ 鉱山は我が国の領土内にある！ その運営についてドマイセンが口を出すことが筋違い。そんな取り決めを陛下に奏上など出来るものか！」

王国側の国益を守るべき立場の人間としては当然の主張だ。

これまでの度重なる抗議に対して、王国は同じ理由で突っぱねてきたのだから。

しかし、今回は相手が悪かった。

「そうですか。王国も労せずして技術の供与を受けられるのですから、悪い話ではないと思つたのですが、拒否するとあれば、残る方策は問題となつている鉱山を消し去ることくらいでしようか……戦術核では周囲への影響が……要は使えなくなればいいのですから、ファージに行つてもらつて要所にC4を……」

何やら物騒なことをブツブツと呟き始めた様子に、ポアルソンが慌

てて口を挟んだ。

流石に『戦術核』や『C4』という単語のは意味がわからないが、『消し去る』という単語に、放っておけば大変なことになる予感しかなかったのだ。

「ちよつと、ちよつと待つて欲しい、サクラコ殿。この件については、ここで我々だけで決めるのは不可能だ。伯爵様にも報告して、陛下のご裁断を頂かなくては決められん。それまで待つて頂きたい」

「ポアルソン、横から何を！」

子爵が抗議の声を上げるが、ポアルソンはすぐにそれを制すると、「ちよつと失礼」と全員に声を掛けてからホルストーン子爵を部屋の隅に連れ出し、小声で密談を始める。

「ホルストーン卿、お気持ちわかりますが堪えて下さい」「し、しかしだな……」

「卿はご存知無いかも知れませんが、あの娘は、あの娘と仲間の男の2人は、たったの一晩でギガントライ10頭以上を、無傷で1度に討伐しています。卿なら、この意味を理解して頂けますね？」

「それは……現実のことなのか？」

「はい。リユドーの代官が現場を確認していますし、確かな証人もいます。そもそも、彼女達はその功績でルドサレンに招待されていたのです。その実力も、一端ではありますが見せてもらいました。伯爵様も認めておられます。そして、絶対に敵対するな、と。私も同じ気持ちです」

鬼気迫る表情で念押しするポアルソンに若干押されながらも、ホルストーン子爵は疑問を呈する。

「わ、わかった。ダスターツ伯がそう言われるのなら納得しよう。しかし、いったい何者なのだ？」

この質問は何度目だろう。そう思いつつポアルソンは答えた。

「わかりません。本人達はただの平民だと言っていますが、あの出で立ち、教養、武力から、恐らくどこかの王族ではないかと予想されています」

2人は密談を終え、途中で席を立った非礼を詫びつつ席に戻ると、

ホルストーン子爵が先程とは変わって落ち着いた様子で口を開いた。「わかった。この件については、先程の彼女の案に沿う形で陛下のご裁断を仰ぎたいと思うが、それで良いか？」

「それは、どのくらいの時間を要するのでしょうか？ 期限を切って頂かないと、私も二ー口も暇を持て余している訳ではありませんし、あまり遅くなるようでしたら、いっそ原因を元から断った方が……」

恐ろしいことを平然と口にし始めたサクラコを、慌ててホルストーン子爵が押し止める。

「い、いや、それには及ばん。すぐに書状を用意して、明日にでも使者を出そう。使者の往復と評議の時間を考えても、一ヶ月も見れば間違い無いだろう」

そこにすかさずポアルソンも口添えする。

「私の方からも伯爵様に報告して、一緒に奏上して頂けるよう手配しよう」

「そうですか。一ヶ月ですね」

ホルストーン子爵に念を押すと、今度はヤノスに向かって語りかけた。

「と、言うことですが宜しいですね？」

念を押されたヤノスも、多少不満げながら頷いた。

「不満はあるが、現実的な線としては妥当なところか。本当にあの鋤山を消し去れるものなら、俺としてはその方がいいのだが……よし！ それではこの首、好きにしてもらおうか。王を説得する材料にでもしてくれれば有難い。ハルマイン殿には悪いが、一緒に残ると言い張ったは貴殿の方だ。運が無かったと諦めてくれ」

不敵な笑みを浮かべて言い放つヤノスに、ハルマインは半ば諦めの表情で呟いた。

「別に戦場に出た時から諦めてはいますけどね。後はドマイセンが、ちゃんと食料援助の件を通してくれれば、国にも多少は顔向けできますし……」

「おう、ちゃんと書状を持たせて話を通すように言い含めてある。動

いてくれるだろう」

そう言つて励ますようにハルマインの背をドンドンと叩くヤノスに、サクラコの平然とした声が冷水を浴びせかける。

「あら、まだお話は終わっていませんよ?」

これには王国側の間人もげんなりした表情だ。

訳のわからない話し合いに付き合わされ、なぜか譲歩を引き出されて、取りあえず国王の裁可を得るという線で一応の決着を見たと思つたのに、まだ続きがあると言う。

「まだ何か……これで終わりではないのか?」

恐る恐るといった感じでホルストーン子爵がサクラコの真意を質す。

これ以上、何かを吹っ掛けられては堪らない。

「はい。そちらの」と言つてヤノスを見ながら、「要求を通すわけですから、ちゃんとメリットを提示して頂かないと」

「なっ、だから軍勢を引き上げさせたではないか!」

予想していなかった要求に、ヤノスも声を張り上げる。

しかし、サクラコは憤慨するヤノスを齒牙にもかけずに淡々と主張を口にした。

「それは関係ありません。確かに撤退をお勧めしましたが、決断したのはそちらの意思です。強制的に排除しても良かったのですが、なるべく無駄な死傷者を出さないように、と言うのがニーロの希望でしたので。」

伯爵様との約束は、この砦からあなた方を排除し、私達とは無関係であることを証明する、それだけです。

ですから、私達にはあなたの要求に応える義務もありませんので、ちゃんとメリットを提示して頂けないというのであれば、先程の話も履行する義務は無いのです」

信に身勝手な理屈だが、サクラコはそこまで語ると「ご理解頂けましたか?」と、小首を傾^{かし}げて見せる。

それに対し、ヤノスは「ぐう」と唸^{うな}ったまま、顔を赤くしたり青くしたりで言葉が出てこない。

「それに、あなた、先程おつしやいましたよね？ 何かメリットを提示できるかも知れない、と。如何ですか？」

今度はハルマインに向かって問い質す。

「王国は、王国はいつたい何を提示したのです？ 我々の排除と引き換えに、金ですか？ 爵位？ 領地？ いったい何を……」
「ああ、それでしたら『王国内での自由』でしょうか。私達は、この世界の色々なものを調査する目的がありますから、その活動に便宜を図って頂く。

別に調査と言つても、各地の動植物の生態や生活文化、風俗などが目的で、軍事機密ですとか王宮スキャンダルなんて興味ありませんが、現在紛争のある、あなた方のお国と繋がっていると疑われては何かと不便ですから。

爵位や領地など、頂いても各地を巡るには邪魔なだけですし、お金にも今のところ特に困ってませんし」

「そんなもので……」

それを聞いたハルマインは、呆れ顔で呟いた。

ヤノスも、それどころか、それを初めて聞いたホルストーン子爵も同じ気持ちのようだ。

「そつ、それでしたら、ビンガインでも同じく活動の自由を認めるといふ条件でどうでしょう……」

ハルマインがヤノスの表情を伺い、それに慌ててヤノスも頷く。

「ドマイセンでも同じく活動の自由を認めるということ。どうですか？」

藁にも縋る思いの提案だ。

そんなもので釣り合いが取れるとは思えないのだが、実際、他に思いつかない。

「内容はそれで構わないと思うのですが、何方に保証して頂けるのでしょうか？」

「それは本国にいる知人に手を回して書類として引き渡そう。何通か書状を出させてもらえれば、難しくない。ハルマイン殿も、本国では名門の出、そう難しい話ではないはずだ」

ヤノスの言葉にハルマインも同意するが、その言葉にはホルストーン子爵が異を唱えた。

「ちよつと待つてくれ。今やお二人は我々の捕虜の立場。書状を出すなどと勝手な行動は許可できない」

毅然として子爵は断言するが、すぐにサクラコにやり込められる。

「あら、それでしたら許可して頂けば済む話ですね。許可して頂けますよね？」

さも許可されて当然のように念を押すサクラコに、子爵も思わず「ああ」と許可してしまう。

「では、後は王様の許可と、お二人のお国からの許可待ちということ。どちらも一ヶ月あれば十分でしょう。それでは、私は急いで二口のところに行かなければいけませんので、後はお願ひしますね」

そう言うと、サクラコはすたすたと部屋を後にした。

勝者のいない部屋に残された男達は、疲れた表情で敵味方なく顔を見合わせる。

「なんか………こう………疲れた………」

そう呟くホルストーン子爵の声と、誰の物だかわからない溜息だけが響いた。

第22話 コルエバン解放戦

コルエバンの街には、現在、謎の平穩が訪れていた。

これまで東と南北の三ヶ所の城門を激しく攻めていたドマイセン軍は、それぞれの城門から600〜700mほど下がった位置まで退き、コルエバンの街の中心部辺りの上空に浮かぶ、謎の物体の様子を伺っている。

「どうでした?」

コルエバンの南門から1kmほどの、周囲よりもやや小高い位置に設えた本陣で、ソットス・ジーマールは報告に来た部下に声を掛ける。

ドマイセンの、コルエバン攻略部隊の指揮官ではあるが、軍人というよりは学者か研究者と言った方が相応しく思える長身瘦躯の壮年の男だ。

容貌に似合って、部下に対しても丁寧な口調を崩さないが、それがかえって冷たい印象を与えている。

「はっ、それが、捕虜を再尋問しましたが、誰もあんなものは知らない、初めて見ると。商人達にも聞いて見ましたが、やはり答えは同じです」

「そうですか……」

ジーマールはそれだけを呟くと、身振りで報告を終えた部下を下がらせる。

「確かにアレは『両軍の指揮官』と告げていましたし、一方的に向こうの味方という訳ではなさそうですね。

しかし、アレはいったい何なんでしょうね……王国には魔道具好きの魔女がいるという話は聞いたことがあります、雇われた傭兵にしては向こうの味方でないというのも変ですし……第三者に雇われている?」

「どうされますか? 一旦退かせたら動きは止みましたが、このままという訳にも……」

危うく思考の澱に埋没しそうになっている指揮官を、すかさず側にいた副官が、今後の方針を尋ねることで呼び戻した。

長く仕えている副官だけに、上司の操縦については熟知している。「もちろん、このままでもいいはずがありません。ヤノス殿が敵の初動を霍乱かくらんして、厄介なダスターツ伯を引きつけてくれているとはいえ、王都からの援軍も来るでしょう。それには時間があるとはいえども、援軍の迎撃準備を考えれば、コルエバンこくは早く落とすに越したことはありませんからね」

そう言うと、少しだけ思案してから再び口を開く。

「ユセルネバを呼んで下さい。彼等にもう一働きしてもらうかも知れません。それと、恐らくそろそろ動きがあるとは思いますが、1時間何も動きが無ければ城門への攻撃を再開させます。そのつもりで指示を徹底しておくように」

「はっー！」

副官は敬礼と共に返事をする、踵かかとを返して本陣を後にした。

残ったジーマールは、従卒の淹れた茶を飲みながら思案する。

(あの煙に捲かれた兵は、一時的に戦闘不能にはなりましたが回復に向かっているそうですし、実際に死者も出ていない。つまり、今のところ明確に敵対する意思は無い？ だとすれば目的は？ 援軍が来るまでの時間稼ぎ？ いや、援軍が来るには時間がありすぎて現実的ではありませんね。それに明確に王国側とも考えにくい。空を飛べるのなら、直接ここを襲うことだって簡単なはず。敵であればそうしたでしょう……)

色々と思いを重ねるが、明らかに情報が不足しすぎていて上手く纏まらない。

そんな中、ジーマールの思考を遮さえぎって、本陣の外から来訪を告げる声がある。

従卒じゆうそに誘いざなわれて本陣に入って来たのは、身長150cmそこそこの小柄な男だった。

浅黒い肌、ごま塩頭を短く刈り込み、鎧は着用せずにチュニツクとズボンという出で立ちだが、服の上からでも両腕の筋肉が見事に盛り上がっているのがわかる。

「失礼、お呼びでしょうかジーマール將軍」

「ユセルネバですか、丁度良かった。実は、あなた方の仕事は終わったと思っていたのですが、もしかすると出番があるかも知れないと思いましてね」

そう言われたユセルネバは、面白そうに片眉を上げて唇を歪ませる。

「ほう、もしかしてアレですか？ 撃ち落せと？」

「ははは、まさか。あの位置にいたんじゃ、街に潜入しないと届かないでしょう。あなた方なら出来るでしょうけれど、あなた方は切り札。特にメリットも無い博打ばくちで損耗させられませんよ」

ユセルネバ率いる11人の部隊は、ドマイセン軍の中でも新兵器の鉄火棒の運用に特化した、いわば狙撃手部隊であった。

今回の侵攻作戦に先立って、ドマイセン全軍中、射撃成績の良い兵の中から選抜された彼等は、同じ鉄火棒でも特に精度の高い物を厳選して支給されている。

また、今回の任務用に特別に用意された魔道具を装備していた。

5000ものドマイセン軍が王国側に気付かれずにコルエバンに接近できたのも、先行した彼等が、飛び道具と認識されていない武器で王国側の警戒網を潰したからだだった。

「では、いったい我々に何を？」

「言ったでしょう、『もしかすると出番があるかも知れない』と。だから準備だけはしておいてもらおうと思いましたがね」

さつき、アレは両軍の指揮官に停戦を呼びかけましたから、次に考えられる可能性として、両軍の指揮官を呼び出すんじゃないかと考えたんですよ。

あくまで私の勘なんで、外れる可能性もありますが、準備だけはしておいてもいいかと思いましたがね。アレが現れて、もう30分以上経ちますし、そろそろ何か動きがあるんじゃないかと」

「なるほど。では、一応準備を……」

そう言って退出しようとするユセルネバだったが、その言葉は終わらない内に、何やら外が騒がしくなる。

何があったのかと顔を見合わせるジーマールとユセルネバの元に、

大慌てで副官が戻ってきた。

「ジーマール將軍、動きがありました！ 至急、お越しく下さい！」

そう叫ぶ副官に、ジーマールはユセルネバと共に取るものも取りあえず本陣から飛び出し、前方の様子が直に見渡せる場所に駆けつける。

目の前には攻めていた南門から下がった兵達が陣形を敷いており、その頭越しに南門が見える。その距離は約900mほど。

そして、門から700mほど下がった兵達と南門の間、城門寄りに、初めて見る形の箱馬車——ただし、それを引く馬は見当たらない——が止まっているのが見えた。

「あれはどこから？」

ジーマールが側にいた副官に聞く。

「はっ、目撃した兵によりますと、北西から現れてあの場所に止まった、と。それから、あの箱馬車は最初からあだったとも」

「北西？ するとルードサレン方面の街道……援軍にしてはいくらなんでも早すぎますね。最初からとは？」

「それが、引く馬もおらず動いていたと言うのです」

「ふむ。すると、空を飛んでいるアレと同じ……飛んでいたアレはどこに？」

見ると、コルエバンの街の上空を飛んでいたクラブの姿が無い。

副官も驚いて探すが、空のどこにも見当たらなかった。

そんな彼等の戸惑いをよそに、今度は箱馬車の扉が開き、一人の男が中から出てくるのが見えた。

見慣れぬ風体のその男は、ドマイセン軍の本陣に向かって大声を張り上げる。

「ドマイセン軍の指揮官に申し上げる！ 話し合いがしたい！」

その言葉を聞いたジーマールの口角が僅かに上がった。

「第三者であるなら、双方の指揮官を呼び出すと予想していましたが、こちらだけに呼び掛ける……やはりあれは敵です。

しかも人数は僅か。魔道具を使つての、援軍が来るまでの時間稼ぎでしょうが、小細工に過ぎません。

ユセルネバ、呼んでおいて悪いのですが、残念ながらあなた方に出張ってもらっても必要も無いようです。今回は正攻法で十分でしょう。ワーズ、北のクロトレルと東のチェセルに、合図があり次第攻撃を再開するよう伝達を。南も攻撃を再開させ、一気に片付けます」

ジーマールは前方でこちらを睨む男を嘲笑いながら、側にいたユセルネバと副官にそう告げた。

(やっぱり無理があるよな……)

辺りに響く鐘の音と共に隊列を整えだしたドマイセンの軍勢を見ながら、ニイロは失望していた。

と言っても他に打つ手があった訳でもない。5000の軍勢に対して打てる手など、そう簡単に思いつくわけが無いのだ。

しかも、なるべく犠牲を出さずに、という、聞く者が聞けば鼻で笑うような自分縛りまでつけて。

もちろん、事ここに至っては綺麗事だと言う自覚はニイロにもある。

戦争というのは正義と正義の衝突だ。それは独裁国家でも民主主義国家でも変わらない。

宗教や経済など理由は様々であれど、例え犠牲を出してでも引けない大義があつて、国は初めて戦争に踏み切る。多少の犠牲など最初から織り込み済みだ。

それを『なるべく犠牲を出さずに止めよう』などとは傲慢もいいところだ。

しかし、それでも、出来るならば犠牲者を出したくないと考えるのは、ベータ・アース人共通のメンタリティーではなからうか。

だから、まずは暴動の鎮圧などにも使われる催涙弾を使って戦闘行為を中止させたまでは良かった。

そして次に、敵軍の将に対して話し合いを持ちかけたのだが、その返答は、どうやら問答無用ということらしくかった。

ならば、乱暴なようでも、相手を交渉の場に引きずり出すには威力を見せつけるしか無い。

「残念ですが一戦交えるしか無いようです！　メリーチエ様達は絶対外に出ないで下さい！」

傍らの特殊輸送車両かたわの中にいる3人に呼びかける。

防弾・防破片が可能な軽装甲を持つ特殊輸送車両Tの中ならば、余程の至近距離からでない限り、ドマイセン軍の銃器、鉄火棒の攻撃にも耐えられるはずだ。

いざとなれば自動運転でルードサレンへ逃がすこともできる。

ちらりと見ると、窓越しに引き攣つった顔でコクコクと頷うなずく3人娘の姿があつた。

ニイロは3人を安心させるように笑顔を見せると、腰のポーチから取り出した大型用の亜空間パネルを使って3枚の防弾盾とトラッドC60自動小銃、それに予備弾薬を取り出す。

盾付属の二脚を引き出して自分の周囲に3枚の防弾盾を並べ、即席の射撃陣地の完成だ。

「クラブ、北と東は任せる。ドマイセン軍が攻撃を開始したら妨害を。全滅させる必要は無いけど手加減も無用。門前に催涙弾を撒いて足止めしつつ榴弾も使用していい。出来ればあの大砲を優先して潰してくれ。一機で大変だろうけど、頼むよ」

姿を隠していたクラブだが、単にステルス・モードに移行していただけで、依然としてコルエバンの中心部上空に滞空していた。

催涙弾は一度見せているし、残弾も無限ではない。催涙ガスで死傷者は出ないと気付いていれば、今度は強行してくる可能性が高い。

今度は殺す覚悟を見せる必要がある。

ニイロのヘッドセットに、クラブ・フォーからは『ピポピポツ』という了解を示す返事が送られてきた。

なんとなくだが『任せとけ！』とでも言うような、そんな頼もしさまで感じられる。

次にファージ達に指示を出す。

「ファージ全機ステルス・モード解除。ツートスリーは敵が前進してきたら迎撃する。フォーはまず敵の前方に催涙弾をばら撒いて足止めしたら、後は大砲を榴弾で潰してくれ。それが終わったらクラブの

援軍に回って。俺が撃つのと同時に攻撃開始だ」

そうニイロが指示すると、「「ピポツ」」をいう了解の返事と共に、ニイロの左右に30mほどの距離を置いてファージ・ツーツとスリーが姿を現す。ファージ・フォーは後方、コルエバンの南門と特殊輸送車両の中間辺りにいた。

こちらもステルス・モードで姿を隠していたのは、ガンマ・アース人には異様と思えるらしい姿を見せて、不要な警戒心を持たせたくないというニイロなりの気遣いのつもりだったのだが、あまり意味は無かったようだ。

ファージ・ツーツとスリーは7.7mm機銃装備、フォーは40mmグレネードランチャー装備である。

ニイロが最初に撃つと言ったのは拘りだ。やらなければいけないのなら、まず自分が殺す。

防弾盾から半身を乗り出し、立膝の射撃姿勢で銃を構え、前方を見据えた。

（くそっ、問答無用かよ！ 話くらい聞いてくれたっていいじゃないか）

そんなニイロの思いも虚しく、隊列を整えたドマイセン軍は、いよいよ前進に移ろうとしていた。

南門を攻めるのはドマイセン軍5000の内2000人。

その内の半分は予備兵力として本陣前に残り、半分の1000人が一斉に攻め寄せる手筈になっていた。

横長の方陣を組んだ隊列は、本陣で打ち鳴らされる太鼓のリズムに乗って足を踏み鳴らし、ニイロに圧力を掛ける。

（俺一人相手に光栄なことだ）

実際はニイロではなく、後方のコルエバンに対する圧力だ。

そして、太鼓の音は突然止み、代わって狂ったように鐘が打ち鳴らされる。

ドマイセン軍の総攻撃が開始された。

鬨の声を上げて前進に移った1000の軍勢が、その前方に立ち昇

る色とりどりの煙の帯を突破した。

煙を浴びた彼等は、咳せきと嚏くしゃみの発作に襲われ、顔面を涙と鼻水でグシャグシャにしつつも、兵士としての義務感からか前進することを止めない。

前進を始めた当初の、統制の取れた動きは見る影もなかったが、彼等の不幸はそれで終わらなかつた。

彼我の距離が約300mという地点で、ニイロは射撃を開始した。トラッドC60自動小銃と、ファージ・ツーとスリーの7.7mm機銃がマズルフラッシュを煌きらめかせ、タタタツ、バババツ、と乾いた銃撃音が鳴る度に、こちらの方へ向かってくるドマイセンの兵士達が、数人づつ纏まとめて血反吐を吐きながら倒れていく。

彼等の着る鎧や兜など、近代兵器から放たれる銃弾の前には何の意味も無かつた。

それだけではない。

後方にあつて異様な——ベータ・アース人のニイロからすれば博物館から拝借してきたような——姿を見せていたドマイセンの新兵器、鉄火砲も、早々にファージ・フォーの40mmグレネードの榴弾による砲撃で破壊され、戦場に無残な姿を晒さらしていた。

分厚い鉄製の筒も、それが載せられた木製の台車を破壊されれば、単なる鉄の塊にすぎない。

散発的に鉄火棒による反撃もあるが、苦し紛れに発射された弾は、ニイロの周囲に遮蔽物として立てられた防弾盾に当ることすら稀だ。

ほとんどの敵兵は、ニイロの左右に展開したファージ・ツーとスリーによる十字射撃の弾幕の前に、距離を詰めることなく萎れた草のように倒れていく。

その様子を特殊輸送車S両の中Vで窓越しに目撃したサリアは、心配そうに、誰にともなく震える声で呟いた。

「ニイロ様……大丈夫でしょうか……」

その呟きに、赤毛が印象的なファイゼが答える。

「あ、圧倒的です……こちらはたったの1人……いや、

4人？ 人？ なのに」

フアージ達をどうカウントするかで引つ掛かったようだ。

ちなみに、無残に倒されていく敵兵を見て、残酷だとか可哀想という感情は彼女達には無かった。

ああなりたくはないという意味での嫌悪感はあるが、戦争は殺し合うものだし、戦場に於いては敵兵は殺されるものだからだ。

目の前で起こっている出来事は一方的な虐殺とも言えることだが、戦争ならば仕方がない。

彼女達の中で、その線引きははつきりしている。ニイロは味方であり、殺されているのは敵だ。

別に彼女が薄情だったり冷酷だったりする訳ではなく、そう考えるのがガンマ・アース人の一般的な常識であり、彼女達はガンマ・アース人だ。

これが平時における一般的な犯罪の加害者と被害者であれば、彼女達の脳裏には、加害者には怒りの、被害者には憐憫の情が湧いただろう。

「お爺様は、絶対に敵にしてはいけなないと仰ってましたけど、私も同意見ですわ。ニイロ様が味方で……きやつー！」

フイーゼの横で外を覗きながら話していたメリーチエが、突然小さく悲鳴を上げて仰け反った。

見ると特殊輸送車両の窓の防弾ガラスに、小さく白い傷跡が残されている。

ドマイセンの兵士が持つ鉄火棒の石を成形した流れ弾が、窓の防弾ガラスに当って砕けたのだ。

狙ったものでは無く、咳と嚏に悩まされながら、闇雲に放った流れ弾だった。

「お嬢様、もう少し低くされた方が」

フイーゼとサリアに横からサポートされながら、メリーチエが身を屈めて低い姿勢をとると、反対側の窓の向こうにはコルエバンの街の城壁が見える。

その城壁の上には、鈴なりになったコルエバンの常駐兵達はこちら

に注目していた。

兵士達の中には、怪我の手当てなのか、頭や体に布を巻いている者も多数見受けられる。

「だ、大丈夫です。ちよつと驚いただけですから」

そう言い訳しつつも、敵の弾の当たった場所を見る。

表面に少し傷がついただけで何の影響も無さそうだった。

ニイロの持つ、全ての所持品がメリーチエには未知の物だ。

敵を容易く屠る武器、そして敵の攻撃にビクともしない乗り物。

「少しだけ、ドマイセンの人達が気の毒になりますね……」

そんなメリーチエの呟きは、窓の外の光景に集中しているサリアとファイゼに届くことは無かった。

一時的に中断させていた攻撃を再開させる為、進軍の合図を出すよう指示したジーマールの顔色が、冷静な白から赤く、そして青へと変化を遂げるのに、そう時間は掛からなかった。

5000の兵を北と東の城門攻撃に1500づつ、部将のクロトルとチエセルに任せ、自分は南門に2000の兵をもって当る作戦に変わりは無い。

3ヶ所の攻撃には各4門づつの鉄火砲と、300丁づつの鉄火棒も配備させていた。

負けるはずの無い戦いであり、実際に邪魔が入るまではコルエバンの守備兵を圧倒していたのだ。

あの厄介な煙の攻撃も、一度受けたことで、その性質もある程度分解できた。

あの煙を吸うと、確かに咳せきと嚏くしゃみで戦闘に支障は出るものの、その効果は30分程度で、それが過ぎれば全快するし命にも別条は無い。

ならば、強行を続ければ、あの攻撃も無制限に続く訳では無いだろうと考えた。

自分達も銃火器を使うだけに、弾薬にも限りがあることくらい容易に想像できる。

そして予想通りに、敵はあの煙による攻撃を仕掛けてきたし、軍勢

は多少の混乱はあったものの、煙を無視して前進を続けた。しかし、そこからジーマールの想定を覆す出来事が起こる。

中央正面に位置する男の周囲に突然出現した謎の物体^{オブジェ}3体が、自軍の鉄火棒など玩具^{おもちゃ}にも思えるような激烈な攻撃を開始したのだ。

煙幕帯を突破した自軍の兵士達が、先頭からまるでヤスリで削られるようにゴリゴリと撃ち減らされていく。

中央の集団の両脇から突破して、横合いからの攻撃を試みた騎兵も、あつという間に血達磨となって馬から転がり落ちた。

あまりの光景に唾然としているジーマールを、現実に引き戻すかのような爆音が響く。

歩兵の後方から前進を続けていた4台の鉄火砲が、次々にその台車を破壊され、転がり落ちる砲身が周囲の兵を巻き込んでいるのが見えた。

「じつ、ジーマール將軍！」

ジーマールの横で同じ光景を目撃した副官が、堪らずジーマールに呼び掛けた。

その声で我に返ったジーマールは、弁解するかのようの説明する。

「あ、あのような攻撃が続くはずがありません。もう少し、あと少して押し切れるはずですよ！」

「し、しかし、あれでは例えコルエバンを落とせても、王国の援軍が来たら……」

そうなのだ。

当初の予定では5000でコルエバンを早期に攻略した後は、このまま街に籠って籠城することになっていた。

そうして王国の援軍を迎え撃つ。

今までならば無謀極まりない作戦だが、鉄火砲と鉄火棒の新兵器を装備したドマイセン軍でなら可能と見積もられていた。

もちろん、ドマイセン本国では追加の派遣軍の編成が急がれ、籠城が長引くようであれば、コルエバンを攻める王国軍を背後から襲う第二作戦も用意されている。

しかし、12門用意された鉄火砲は既に4門が目の前で破壊されて

いる。

鉄火棒を装備した兵も、相当数が撃ち減らされているだろう。

このままでは籠城して王国軍を迎撃するなど覚束ないのは明白だった。

「伝令！ チェセル將軍より伝令です！」

決断を迷うジーマールの元に、一人の兵士が駆けつけてくる。

嫌な予感しかない。チェセルは東門攻略に向かわせている部将である。

「報告を！」

「はっ！ チェセル將軍より伝令！ 東門に敵の援軍！ 当方、死傷者多数！ 既に鉄火砲4門を破壊さる。至急救援を乞う！ 以上です！」

絶望的な知らせだった。

まだあのような援軍が来るのなら、敵の弾切れを望んでも可能性は小さい。

しかも、東でも死傷者が続出しているのなら、ますます勝っても籠城は不可能だ。

実は敵の、この場合はニイロ達に援軍があったという報告は正確ではなく、誤解に基づくものだった。

南門前で鉄火砲の破壊を済ませたファージ・フォーが、ニイロの命令に従って北門と東門を1機で受け持つクラブ・フォーの援軍に回つたもので、ファージの姿を初めて見る東門の攻将が誤解したに過ぎない。

しかし、それを確認する術はドマイセン軍には無かった。

報告を受けたジーマールは、蒼白な表情で傍らの副官に告げた。

「ワーズ、攻撃中止の引き鐘を。チェセルと、北のクロトレルにも伝令を出して下さい。それから、あの男に使者を。話し合いに応じる、と」

「ジーマール將軍……」

副官はそれ以上の声が出ない。

「それから……至急ユセルネバを呼んで下さい」

そう言い残すと、ゆつくりと踵かかひすを返して本陣の天幕に向かう。

「まだ……まだ負けていません……」
その弦音が誰かの耳に届くことはなかった。

第23話 使者

カーン、カーンと、一定のリズムを繰り返す引き鐘が鳴らされる。それと共に後退に移ったドマイセン軍を見て、ニイロはフアージ達に射撃を止めさせた。

ゴートルに送られて来るクラブからの情報では、北と東の門を攻めていたドマイセン軍も後退したようだった。

辺りには、まだ硝煙の匂いが立ち込め、前方を見れば置き去りにされた数百の死体が折り重なっている。

『殺したやつのは考えるな。殺したことで守った命を考えるといい』

ガンマ・アリス この世界に来る前に受けた戦闘訓練で、ニイロにそんなことを言っていたのは、見た目インテリヤクザなワット教官だったか。

あの見た目でそんなことを言われても、何か裏があるんじゃないかとは思えなかったが……。

まだ数ヶ月しか経っていないが、随分と昔のように思われた。

教官の教えに習い、訓練通りに目の前の死体については、頭の中で『単なるオブジェ』へと認識を切り替える。

まだ終わった訳ではないのだ。悩むのは後でいい。

ニイロは今後の段取りを少し考えようと、かたわ傍らの特殊輸送車ス両の中にいるメリーチェに向かって呼び掛けた。

「メリーチェ様、一旦、バスを門前につけますから、街に入って代官の方と連絡を取って頂けますか。状況の説明と、街の現状の情報を集めてもらえると助かります。フィーゼさんはメリーチェ様の護衛を」

そう言うと、メリーチェとフィーゼからは、それぞれ了解した旨の返事が返ってきたが、名前を呼ばれなかったサリアが慌てた様子でニイロに尋ねる。

「あのっ、私は何を」

「サリアはまだ何か頼むかも知れないから、バスに残って」

ニイロがそう言うと、コクコクと頷く。

実際のところ、3人で行ってもらうことも考えたが、戦闘力皆無の

サリアの場合、護衛のファイゼの負担を考えると、防弾仕様の特殊輸送車両バスに残した方が双方共に安全という配慮によるものだった。

取りあえず3人の了解を得たことで、自動運転によりメリーチェとファイゼを南門前まで送り届け、特殊輸送車両バスはサリアだけを残して再びニイロの横まで戻しておく。

そろそろ動きがあるかと、前方のドマイセン軍本陣に目をやるが、まだ目立った動きは見えない。

さて、どうするかと思案しようとした、そのタイミングでサクラコからの通信が入った。

ニイロはこちらの状況を説明し、サクラコからも無事にリンデン砦を奪い返したと、その際に、条件付ながらビンガイン・ドマイセン両国内での行動の自由を取り付けたことの報告を受ける。

しかし、ビンガインはともかく、ドマイセンについてはこちらでは既に戦端を開いてしまっている。

「さすがサクラコ、上手くやったね。条件についてもそれでいいと思う。こちらガンマ・アースの技術水準に合わせた指導については、シンシアに相談したらいいんじゃないかな。でも、せっかくサクラコが死者を出さずに解決してくれたのに……なんだか申し訳ない」

ニイロが謝ると、サクラコは慌てた様子でフォローしてくれる。

『そんな！リンデン砦 コルエバンこちらとそちらでは条件が違いすぎます！ ニーロが悪いわけではありません！』

「ありがとう。とりあえず、そちらは一旦ルードサレンに寄って、伯爵様に事情を説明してくれるかい？ メリーチェ様も無事だし元気だと伝えてあげて。後は、こちらも何とか上手くやってみるから」

『ピポツ、ピツ、ピツ、ピツ、ピツ、ピツ、ピツ、ピツ、ピツ、ピツ、ピツ、ピツ、ピツ』

そんなやり取りの途中で、上空で哨戒中のクラブから注意を促す警報うながが届く。

いつもと様子の違う警告音には一瞬戸惑ったが、ゴーグルに映し出される映像を見て納得した。

ドマイセン本陣のある方向を見ると、一騎の白馬に乗った男が、ゆつくりと近づいてくるのが見える。

「おっと、悪い。こっちは動きがあった。また連絡するよ」
そうサクラコに告げる。

『わかりました。ルードサレンに到着したら連絡を入れますから、こちららのご心配なく』

それで通信を切り、ニイロは目の前に集中しなおす。

余計なことを考えて集中を乱し、後悔だけはしたくない。

「ファージ・ツィ、スリーは一応準備。俺に合わせて。ファージ・フォーとクラブは待機」

念の為に指示を送りながら、ニイロは慎重に相手の出方を見守ることにした。

時は少しだけ遡^{さかのぼ}る。

ノルコ・ガーフェンロがコルエバン攻略軍の本陣に呼び出されたのは、攻勢に出ていた第一陣に後退を指示する鐘の音が鳴り止んだ頃だった。

自分が呼び出されたことに心当たりは無い。

彼の所属する第三騎馬隊は、元々オルフ・ヤノス將軍麾下^{きか}の部隊で、今回の作戦には第五騎馬隊と共に臨時に抽出されて、騎馬団を持たないソツトス・ジーマール將軍の指揮下に入っていたもので、その幕下^{ばっか}にも特に知己はいない。

ガーフェンロが本陣に到着すると、ちょうど入れ替わるように一人の小男が本陣から出ていくところだった。

ちらりと横目で確認すると、ユセルネバだとわかったが、その時は何も思うことはなかった。

本陣の前で用件を告げ、中へと誘われると、本陣には主將のジーマールの他、副官のワーズ、部將のクロトレル、チェットなど、コルエバン攻略軍の幹部が勢揃いしている。

「よく来てくれましたガーフェンロ」

早速、ジーマールが声を掛ける。

「はっ、お呼びということでご参上しましたが、私に何か」

「実は、貴方に使者の役目を果たしてもらいたいと思ひましたね。あの南門の前に陣取る厄介な男は、話し合いたいと言つていました。ですから、それに応じようということです。」

あの男は王国の味方をしてはいますが、私の見立てでは、その言動から完全に王国の人間という訳でもなさそうです。そこで、丁重にご来陣願つて、お互いに有益な話ができればと思ひまして」

それを聞いたガーフェンロの心に、「今更か」という思いが過ぎる。

第三騎馬隊と共に抽出されて同行した第五騎馬隊は、第一陣の攻撃に参加して半壊と言つていい被害を出していた。

「なぜ私なのですか？」

「第五騎馬隊はご存知の通りですし、ここは第三騎馬隊に出張つてもらう番でしょう。貴方の愛馬は白馬で見栄えもいいですからね。それに、貴方の人柄は聞いていますので、使者にうつつけかと」

「応じるでしょうか」

相手の呼び掛けを無視して仕掛けたのはこちらだ。

それを散々に打ち破られて、今更話し合いと言われても、ガーフェンロならば絶対に応じない。

「それを上手く纏めるのが使者の役目でしょう。自信が無いというのなら、他の誰かに代えますが？」

そこまで言われればガーフェンロに断る選択肢は無かった。

断れば、騎馬隊を送り出したヤノス將軍の顔に泥を塗ることにもなる。

「いえ、謹んで拜命致します」

右手の拳を胸にあて、深く辞儀をする。

「そうですね、それは良かったです。では、こちらの準備は整っていますから、すぐ準備をして向かつて下さい。それから、皆さんも打ち合わせ通り準備を」

「はっー」

そのジーマールの言葉を切つ掛けに、ガーフェンロだけでなくクロトレル等部将達も敬礼を返し、それぞれの準備の為に本陣を後にし

た。

幹部達が去った本陣に残ったのは、ジーマールと副官のワーズの人。

この指揮官には珍しく、やや疲れた表情のジーマールにワーズが声を掛ける。

「ガーフェンロには少々気の毒な役を押し付けることになりましたね」

「仕方ありませんよ。別に彼自身に思うところはありませんが、誰かにやってもらわなくてはならないのですからね」

「上手くいけばいいのですが……」

「後はユセルネバが上手くやってくれるでしょう。あの男が使っていた鉄火棒のような武器も出来れば入手したいですし」

不安げなワーズに、ジーマールは決意を込めた顔で語った。

「ところで、貴方は、ボノ川の下流域に行かれたことは？」

「えっ？ いえ、ありませんが」

唐突な質問にワーズは戸惑う。

「私は行きましたが、酷いものですよ。体調を崩す住民も多く、木々は枯死しているものが多く見られます。農作物にも影響が見られ、中には全滅に近い場所もある。」

だからこそ、今回の作戦は絶対に成功させて、あの忌々しい鉱山を止めなければなりません

その為なら、私個人が多少恨みを買ったとて何だと言うのです。あのヤノス將軍すら、囀の役目を自ら買って出ておいでなのですから。それに、ユセルネバ隊の連中も、あの流域の出身者なんですよ」

「それは……噂には聞いていましたが、それほどは」

ドマイセン人であれば、ボノ川流域の被害について知らない者はいない。

しかし、TVニュースも無い世界で、実際に目にした者でなければ実感に乏しいのも確かだった。

「ですから、手は打ちました。後はユセルネバが吉報を持ち帰るのを待ちましょう。それでガーフェンロが無事なら、彼にはお詫びに秘蔵

の酒でも贈りますよ」

そう言つてジーマールは薄く笑つた。

「そこで止まって下さい」

ニイロが油断なく銃を向けると、男は敵意が無いことを誇示するかのように片手を上げ、大音声で「使者である！」と宣言する。

鎧も兜も身につけず、武器も所持しているようには見えない平服姿の男は、転がる味方の遺体を巧に避けながら30mほどの距離まで来ると、ニイロに向かって口上を述べた。

「ドマイセン軍第三騎馬隊所属のノルコ・ガーフェンロ！ 貴公に提案があつて参つた！ 武器は持つていない！ 願わくば聞き入れて頂きたい！」

声を張り上げるガーフェンロに対して、ニイロは穏やかな声で応えた。

「提案とは？」

「貴公は、我が軍の総指揮官であるソツトス・ジーマールとの会談を希望されていた由。場を設けるゆえに、一度我が軍の本陣までお越し頂きたいとのことである」

それを聞いたニイロの表情が一瞬歪む。

ガーフェンロの背後に転がる遺体の山が目に入った。

こちらは警告もしたし、話し合う機会も設けた。

それを無視された結果が目のある前にある。

「ガーフェンロさんと言つたね。一つ聞きたいけどいいかな？」

「私に答えられることならば」

「ここへは一人で？」

聞かれたガーフェンロは意味がわからず戸惑いの表情を見せながら聞き返した。

「二人とは？ 戦時の使者は武装せず、一人で向かうが作法。見ての通り……」

そう言い掛けて何かに気付いたのか、ガーフェンロはハッと表情を強張らせ、キョロキョロと周りを見回した。

「その様子だと知らされてなかったようです。残念だけど貴方のごの指揮官には話し合う気など無さそうだ」

そう言うと、おもむろに構えた銃の一連射でガーフェン口の横合いを薙ぎ払った。

同時にニイ口の両脇にいたファージ達も、それぞれ誰もいない空間に向かって射撃を始める。

すると、誰もいないはずの空間から次々に悲鳴と呻き声が聞こえたかと思うと、自らの血で朱に染めた、白いローブを頭から被った人間がその場にその場に崩れ落ちた。

時間にすれば十秒すら経たない内に、ガーフェン口の周囲に11個の死体が追加されたことになる。

「これは……」

ガーフェン口の顔が痛ましげに歪む。

「使者である貴方にも知らせず、姿を消して近づく。武装もしていますし、暗殺部隊と判断しました。彼等の素性は貴方の方が詳しいでしょう。俺一人を片付けたらいいとでも思ったのかな」

見ると、全員が同じローブを着ていることから、そのローブが姿を消す魔道具であることが予想できる。

魔道具マニアのニーアーレイから、そういう魔道具が実在するという情報を仕入れていたのが役に立った。

魔道具の効果が、いわゆる可視光線を阻害するものだったことが幸いした。

そのお陰で上空のクラブ・フォーの赤外線探知に引っ掛かり、事前に警告してくれたのだ。

それとわかっていれば、ニイ口にも多機能ゴーグルを通して肉眼で確認できる。

リンデン砦に向かわせたサクラコも、アルファ・アース製のステルスコートを持たせてあるが、これは魔道具の実物が入手できたら比較してみようと、前回の物資転送時に送られてきたものだ。

死体が手にした鉄火捧も、兵士達が持つていたものとは作りが違いうことも見て取れ、持ち易く加工された銃把しゅうはの形状などは火縄銃に近い

デザインになっている。

最もニイロに近い所で倒れているのは、ニイロは知らないがユセルネバと呼ばれていた男だった。

「知らされていなかった……信じてくれとは言えんが……見えていたのか……」

「俺には優秀な仲間がいるからね」ちらりと上空のクラブに視線を送りながらニイロは言う。

「いずれにしても、こちらは警告し、話し合いの意思も見せた。その結果がこれです。何か仰りたいことは？」

「そ、それは申し訳なかつたと思う。心から謝罪したい。しかし、しかし……」

ガーフェンロにしてみれば最悪だ。

使者として出向いておいて、蓋を開けてみれば自分は暗殺の囚役でしかなかったのだが、知らなかつたは通用しない。

顔を真っ赤に染め、滝のような汗を噴出させながら、しどろもどろに弁解する姿には、流石にニイロも気の毒になる気持ちになる。

「すいません、これは俺の言い方も意地悪でした。しかし、事實は変わらない。貴方にはご足労ですが、帰って指揮官に伝えて下さい。

これより1時間後に、俺の持つ全火力をもつて総攻撃に移り、あなた方を殲滅します、と。

ただし、それまでに大人しく撤退するなら、国境を越えるまで追撃はしませんが、途中で略奪行為や遅滞行動が見られた場合は即座に攻撃を開始します。もう、小細工も許しません」

「しかしそれでは交渉の意味が……」

「これは交渉じゃありませんよ。暗殺部隊を送っておいて交渉とは虫が良すぎる。拒否したのはそつちじゃないですか」

そう言われてしまうとガーフェンロには反論する材料が無い。

「しかし、5000を相手にコルエバンの2000で殲滅できると!?

それよりも大人しく街を明け渡してくれた方が……」

「いえ、コルエバンの人達は関係ありません。俺と仲間達だけでも、あ

なた方5000程度なら30分もあれば殲滅できますし」

「何を馬鹿な……」

確かに、普通なら頭がおかしいと判断されてもいい発言だ。ガーフェン口の反応は正しい。

ただし、それは『普通なら』だ。

「別に信じなくても構いませんけど、警告はしました。最初の警告を無視した結果がどうなったか、思い出してみるといいでしょう。さっきの戦闘は応戦しただけですが、最初から殲滅するつもりなら、別のやり方がありますから」

過分にハツタリを含めてのことではあるが、ここは過大に見てくれた方が有利に事を運べると判断してのものだ。

普通なら容易くハツタリと見破られそうだが、ファージやクラブ、それに近代火器を見せられた後なら効果もあると踏んでのことだった。

これでビビッて撤退してくれるなら、ニイロとしてはそれが一番いい。

他に問答無用には問答無用で返す意味から、直接ドマイセン軍の本陣にミサイルを撃ち込んで首脳陣を一掃することも考えたが、指揮官を失った軍が散り散りになって賊となるなど、別の脅威へと変わることを考えると採用できなかった。

「でっ、ではせめて、戦友達の亡骸なきがらを收容する時間をくれまいか！」

その懇願にはニイロも一瞬揺れる。

心情としては、せめて一刻も早く回収してもらって、丁重に吊つてもらいたい。

しかし、相手の指揮官は暗殺部隊を送ってくるような男だ。遺体の回収にかこつけて、何をしてくるかわからないという危険性もあった。

ニイロは、少しだけ逡巡した後、遺体の收容には同意することにする。

甘いかも知れないが、ファージとクラブ達がいれば何とかなるだろうという信頼の方が上回った。

「いいでしょう。戻られたら、すぐに遺体の収容をする人員を送って下さい。ただし、許可するのは遺体の収容だけです。全員非武装で、魔道具を使った小細工も無しです。」

少しでも怪しい動きが見られたら、例えそれが意図しないものであったとしても死体が増えることになるかと徹底して下さい」

「わかった。それについては、このノルコ・ガーフェンロの名誉に賭けてお約束する」

要求が受け入れられて、ガーフェンロは心から安堵した様子を見せた。

「それと、耳寄りな情報をお教えしましょう。リンデン砦は既に王国側に奪回されて、あなた方の軍は撤退しました。そちらの兵に死者はいませんが、指揮官が2人、捕虜となられたそうです」

「まさか!?! そんな……それに、そんな情報をどうやって!? 信じられん……」

「信じるかはお任せしますが、本当のことです。あなた方にもわかりやすく言うと、そういう情報をやり取りする魔道具がある、と思つて下さい。奪回に動いた本人から、さつき報告を受けたばかりですから。」

ただ、あなた方の軍の指揮官、ヤノスさんと言つたかな? ヤノスさんが交渉して、問題になつてゐる鉾山の害について、王国の負担で改善策を取るのに協力するよう約束したそうです。

さて! それでは遺体の収容を急いで下さい。1時間と言いましたけど、遺体の収容も含めて2時間にしましょう。カウントを開始しますから、早く戻つて指揮官に伝えた方がいい。賢明な判断が下されることを祈ってますよ」

そう言つて一方的に話を打ち切つた。

ガーフェンロはまだ未練の残る顔で、少しだけ思案を巡らせていたようだが、やがて諦めると一礼して去つていった。

第24話 戦場のお茶会

「ニイロ殿ー」

ニイロが自分を呼ぶ声に振り向くと、背後のコルエバンの街の南門から、赤毛の女兵士が駆けて来るところだった。

予め事情の説明と情報収集の為にコルエバンの街に遣わせていたフイーゼである。

「フイーゼさん、メリーチエ様は？」

「お嬢様は代官のエザクート様の所においでです。私はお嬢様から、ニイロ殿のお手伝いをするようにと申し付けられました」

そう申し出るフイーゼに、メリーチエの護衛は大丈夫なのかと一瞬思うが、考えてみればコルエバンはダスターツ伯領なので、代官と共にいるなら心配は無用かと思ひ直す。

「街の様子は？」

「はい、まだ門が落とされる前だったので、街中には大きな被害も無いようでした。ただ、ドマイセンの新兵器で兵士に負傷者が多いようです。エザクート殿も、あと2日以上はもたせる自信が無かったと仰ってました」

「そうですね、わかりました。ただ、俺が今やってる作業は、俺かサクラコにしか出来ない作業なんで、とりあえず特殊輸送車両バスの中で休んで待機してて下さい」

ニイロがそう言うと、フイーゼは「わかりました」と、少しだけ残念そうな表情で特殊輸送車両バスに乗り込んでいく。

サリアが嬉しそうな顔でフイーゼを迎えていたのは、1人で心細かったのかも知れない。

今、ニイロはコルエバンの南門前に陣取って、ファージ・フォーに手伝わせながらクラブの装備を変更する作業を行っていた。

前方を見れば、戦友達の遺体を回収してまわるドマイセン軍の兵士達が、忙しく立ち回っている。

時折、作業の手を止めて、恐る恐るこちらの様子を伺うかがう兵士の視線を感じるが、甘んじて受け止めた。

敵前での整備補給は、その危険性も多少考えたが、むしろ堂々とやった方が何をしているかまでは理解できないだろうという判断だった。

そして、今のところその思惑は成功しているようだ。

ニイロの両脇では、手早く銃身の交換と弾薬の補給を済ませた7.7mm機銃装備のファージ・ツーツーとスリーが、油断無く警戒に当たっている。

クラブ・フォーに装着していた40mmグレネードランチャーユニットを取り外し、代わりに19発入りの70mmロケット弾ポッドを2門装着する。

ベータ・アースではマイティ・マウスやハイドラ70に当る系譜のもので、よく対戦車ヘリの短スタグ・ウイング翼に、円筒形で蜂の巣のような穴の開いたロケット弾ポッドが装着されているが、アレを思い浮かべると遠くない。

弾頭は対人特化のフレッシュット弾で、目標の上空で爆発して1千個以上のダーツのような矢弾を100m以上の範囲に撒き散らす広範囲殲滅兵器だ。

38発のこれが5000の集団を襲えば、どのような惨事を引き起こすか想像に難くない。

出来れば使わずに済ませたいが、かと言って使うべき時は躊躇ためらうつもりもなかった。

手際よくクラブの装備変更を終え、ドマイセン軍監視の為に上空に送り出すと、最後に残ったファージ・フォーの40mmグレネードランチャーユニットに弾薬を補給する。

それらの作業を全て終わると、ドマイセン軍の方も遺体の収容作業をあらかた終えたようで、恐らく最後と思われる遺体を載せた荷車が、本陣の方へと去っていく姿が見えた。

その他の兵は、今は遠く本陣の周辺で待機しているように見える。

ドマイセンの兵士によって片付けられた南門前には、兵士によって踏み荒らされ、また所々にグレネードの榴弾によって土を吹き飛ばされた農地が広がっていた。

事が済めば、ニイロの心情的にも何らかの形で、補償なり復旧なりに手を貸すことになるだろう。

偽善とか、誰の責任とか、そんな面倒な話ではない。

ただ、そうする手段を持っていて、単純にそうしたいと思うからする。それだけのことだ。

装着している多機能ゴーグルの角に透過表示されている時刻を見ると、使者との会談を終えて約1時間を少し越えた程度。

このまま撤退してくれなければ実力行使に出ることになる。

(頼むよ、このまま撤退してくれ……)

そう思いながらドマイセン軍の方を見つめるニイロの目に、遺体の回収を終えた荷車がドマイセン本陣に到着するのと入れ替わるように、2騎の騎馬がこちらに向かって来るのが見えた。

ゴーグルの拡大機能を介してみると、1人は先程使者として来ていたガーフェンロだ。先程と同じ白馬に乗っており、武装もしていないように見える。

もう1人は、ニイロと同じか多少年上に見える男で、ニイロがガンマ・アースこの世界に来る前の訓練で集団戦闘を担当し、見た目が大学の教授か研究者のようだった丸眼鏡のリプリース教官に、どことなく雰囲気似ている。リプリース教官が眼鏡を外すとそっくりかも知れない。

ただ、特筆すべきはそこではなく、その男の乗る乗騎だ。

(チョ○……ボ……じゃないよな?)

体高2mはありそうな、巨大な頭と太い首、ワシ鷲のような嘴くちばしを持つ、かなり頭でつちなダチョウ、といった風貌の生物だ。

体全体は枯草色の羽毛に覆われているが、首の途中から頭部は白頭鷲のように白い。

ニイロは知らなかったが、サクラコがいれば強鳥類の一種かも知れないという推測を教えてくれただろう。ニイロがいた世界では恐竜が絶滅した後の新生代(6500万年前)から登場し、ディアトリマやフォルスラコスが有名だ。

「ドマイセン軍第三騎馬隊所属のノルコ・ガーフェンロ! 貴公に話があつて参った! 武器は持っていない! 願わくば聞き入れて頂

きたい！」

ガーフェンロが最初に来た時と同じような口上を述べる。一種の定型文のようだ。

ニイ口は無言のまま油断無く銃を構え、もう一人の男に視線を送る。

「ドマイセン軍コルエバン攻略部隊の総指揮を拝命しています、ソツトス・ジーマールです。武器は持っていません」

ジーマールはそう言うのと、乗騎を降りて敵対の意思が無いことを告げた。ガーフェンロも同様に降馬する。

総指揮官がわざわざ出向いてきたことにニイ口は驚くが、同時に問答無用で攻撃を仕掛け、さらには暗殺部隊まで差し向けた相手だということにも思い当たって、より慎重に出方を伺ううかがことにした。

「それで、ご用件は？」

少々冷たい言い回しだが、命を狙われた相手だ。愛想よく接するには無理があった。

嫌味の一つも言つてやろうかとすら考えたが、さすがにそれは自重した。

「二つです。二つだけ、どうしても確認したい。その為に伺いました」
ジーマールはそう言つて、右手の指を二本立てて突き出して見せた。

その仕草を見てニイ口の内心では、世界線は違っても、そんな仕草は一緒かなどと、別のところで感心していたりするが、それはジーマールにはわからない。

続けて言い募ろうとするジーマールを横から制して、ガーフェンロが口を開いた。

「ちよつと待つて下さい。先程は私も冷静でいられなくて失念していましたが、宜しければ貴殿の所属と名を先に伺いたいのだが……」
そう言われてみると、ニイ口はまだ一度も彼等に名乗っていない。

最初と二度目の訪問の際に、ガーフェンロが所属と姓名を同じように繰り返していたが、それが戦時における交渉事の決まりなのかも知れなかった。

そんなことを考えていると、敵の総指揮官を目の前にして多少頭に昇っていた血も下がってくる。

「そうですね……」

少し思案しながら視線を逸らすと、偶然だが特殊輸送車両の窓から顔を半分だけ覗かせて、こちらを伺うサリアとフィーゼが目に入る。

そこでふと思い立ったニイロは、ちよつと待つて下さいとジーマールとガーフェンロに声を掛け、特殊輸送車両の車内にいるサリアとフィーゼの元に歩み寄つて、窓越しに何事かを告げた。

告げられた2人はコクコクと頷くと、すぐにフィーゼにも手伝わせて車内で何かの作業を始める。

ニイロはそれを見届けると、今度はおもむろに亜空間ポーチ（大型用）から、キャンプ用の簡易テーブルセットを取り出して特殊輸送車両の横に設えた。

テーブルセットは、普通のホームセンターなどでも売っている、プラスチックとアルミで出来た、数千円で買える折り畳みのヤツだ。

「えっ？　今、どこから……」

「そのテーブル？　素材はいい……」

ニイロのすることを見ていたガーフェンロとジーマールが、思わず声を上げた。

「まあ、別に秘密にするわけじゃないけど説明する時間も惜しいんで、取りあえず掛けて下さい」

そう言つてニイロは腰掛け、2人にも正面の席を勧める。

戸惑いながらも恐る恐る2人が腰掛けた、そのタイミングで今度は特殊輸送車両の扉が開き、中からプラスチック製のマグカップを載せたトレイを恭しく掲げたサリアと、ケトルを手に持ったフィーゼが登場した。

2人は手際よく手分けして、ジーマールとガーフェンロ、そしてニイロの前に紅茶を淹れていく。

実は特殊輸送車両の内部には簡易湯沸かし器が設置されており、プラスチック製の食器セットも乗員定数分用意されている。

軍用車両としては珍しいかも知れないが、元がアルファ・アースの

イギリス製と言えど納得して頂けるだろうか。戦車にすら湯沸かし器を用意する国だ。

紅茶の香ばしい香りが辺りに立ち込めた。

「これは？」

ジーマールが尋ねる。

「紅茶という、俺の国で一般的に飲まれている飲み物です。チャノキという葉っぱを加工したもので、俺の国では全く発酵させない緑茶が好まれますが、ダスターツ伯の所で頂いたお茶からすると、発酵させた紅茶の方が好まれるんじゃないかと思ってチョイスしてみました。こうやって好みでクリーミングパウダーと砂糖を入れて調整して下さい」

ニイロは、そう言つて自分の紅茶にステックに入つたクリーミングパウダーと砂糖を実際に入れて見せた。

本来、ニイロはコーヒー派なのだが、別に紅茶も嫌いではない。

ダスターツ伯の所で飲んだお茶は、どちらかというとハーブティーのようで、ローズヒップに似た香りと、ほうじ茶に少し酸味を足したような味だった。

それでも不安そうにカップの液体を覗むにらガーフェンロに、ニイロは笑つて言つた。

「大丈夫。暗殺は俺のシユミじゃない」

そんなニイロの嫌味に、ガーフェンロは苦笑いで返す。

かたやジーマールは平然とした表情で、さつそく見様見真似みようみまねで自分のカップに砂糖を入れて飲んでいた。

「この粉はミルクですか？ ミルクを粉状に加工する技術……この小さい袋は紙製？ 加工技術も凄いが、表面に書いてある模様……文字ですかね……」

紅茶の味よりも、細かい所が気になるようだ。そんな言動が研究者を思わせる雰囲気ふんいきに拍車をかけていた。

そんなジーマールを見て、やっとガーフェンロも同じように口をつける。

「……甘い。コクがありますね……悪く無い」

そんな感想を口にした。

少しだけ、場の緊張が和らぐが、そこでニイロが改めて口を開いたことで再び緊張感が辺りに漂った。

ニイロ的には訪れた客に対して、取りあえず礼は尽くした。ここからが本番ということだ。

「さて、まずはガーフェンロさんに応えて名乗っておきましょう。俺はニイロ・カオル。カオルが名前でニイロが姓です。苗字持ちだけど貴族じゃありません。一般人。こちら風に言うとな平民です。」

あなた方の知らない国、ニホンから、この世界の様々なものを見る為に来ました。つまり、王国でもありません」

「ニホン……確かに聞いたことがありませんが、その出で立ち、そして、これらの物を見せられると本当なのでしょう」

ジーマールはプラスチック製のマグカップやテーブルなどを見ながら言う。

「しかし、だったらなぜ王国に肩入れするのですか！ 関係の無い他所者が、我が国と王国の争いに余計な……」

そう言い募るジーマールに、ニイロはすかさず言葉を被せて止めた。

「おっと、それは今は関係ありません。もう、そんな話をする意味も無い。そもそも、話し合いの申し出を蹴ったのはそっちですよ？」

あるのは撤退か、徹底的にやるかの二択。貴方はそれを決断すればいい。

そんなことより、二つ聞きたいと言いましたよね？ もう、あまり時間も無いことだし、それを聞いたらどうです？」

そう言われるとジーマールも思わず言葉に詰まる。
自分の決断に後悔は無いが、反論する材料も無い。

「……わかりました。では聞きましょう。まず一つ、貴方はガーフェンロに『リンデン砦は既に奪回されて、ヤノス將軍は捕虜になった』と言ったそうですが、その真偽は？」

「本当ですよ。リンデン砦には、俺がこの世界で最も信頼する相棒が向かった、と言えば納得してもらえるかな？」

「他にも仲間がいるのか……」

小声でガーフェンロが呟く。その表情は心底うんざりした者の顔だ。

「こちらは速やかな全軍撤退をお願いしたんですけど、指揮官の方は軍勢を撤退させた後、自らは残^{みずか}って捕虜になったそうです。

詳しいことまではわからないけど、通信機……あなた方に合わせて言うと、離れた場所同士で会話ができる魔道具の一種でもって連絡を受けました。全て事実ですよ。

ただ、あなた方を一瞬で向こうに連れて行ける魔法でもない限り、証明はできませんから、信じるかはお任せします」

ニイロは淡々とした口調で説明し、それを聞くジーマールは真実を見極めようと鋭くニイロを睨む。

少しの間後、ジーマールは2つ目の要望を口にした。

「わかりました。では、二つ目です。我がドマイセンと王国との間の懸案である鉱山について、貴方は王国の負担で改善されると言ったそうですね？ その事をもう少し詳しくお聞きしたい」

「それだったら、残られたあなた方ドマイセンの指揮官、ヤノスさんでしたか。ヤノスさんと俺の相棒^{パートナー}との交渉で決めたそうですよ。

ビンガインとドマイセンの両国で俺達が自由に活動できるように、本国と渡りをつける引き換えに、鉱害を改善する知識と手段を提供して、その費用については王国が負担する、ってことらしい。

立ち会ったのは王国のホルストーン子爵と、ダスターツ伯爵のところのポアルソン騎士団長だそうです。詳しい内容までは、まだ俺も聞いてないんで、細かいことは聞かれても答えようが無いけど」

「ヤノス将軍が……それは……あなたは……あなた方に改善の手段がある、ということなのですか？」

「まあ、今始めてすぐに結果が出るものじゃなく数年のスパンで考えるべきことだけど、以前、ダスターツ伯のところで聞いた話じゃ現状は未処理で汚染水を流してるって聞いたから、少なくとも今よりは改善できると思いますよ」

ジーマールには、相変わらず淡々と語るニイロの口調が、逆に自信

を感じさせるように思えた。

ボノ川流域の現状が改善するのであれば、王国と事を構える理由は格段に小さくなる。

しかし、全ては目の前の男の言葉だけの情報だ。

「ヤノス將軍と連絡を取ることは出来るだろうか」

せめてヤノスがどういった交渉をしたのか、その詳細が知りたい。

「どうだろうか？」一応、王国側の捕虜つて立場らしいし……あ、でもサククラコ、俺の相棒パートナーの話だと、本国との連絡は制限ゆる緩いみたいだから、大丈夫なんじゃないかな

保証はできないけど、ダスターツ伯爵に頼んでみるくらいのことなら出来ると思う」

「そうですか……」

その答えにジーマールは目を伏せて黙考する。

ニイロの視界の角には、多機能ゴーグルに表示されるカウン트가、残り20分を切っていた。

(そろそろ……)

決断を迫ろうかとニイロが考えた、その矢先、ジーマールは閉じていた目を開くと宣言する。

「軍を撤退させます。ガーフェンロ、悪いのですが先に戻ってワーズに伝えて下さい。我が軍は速やかに当地を離脱し、本国に帰還すると」

「將軍……」

指示されたガーフェンロは言葉に詰まる。

ホツとしている反面、本国に許可を取らないままの撤退は、後で問題になる可能性も残っている。

「構いません。一度戦場に出た以上、行動の決定権は私にあります。これ以上の被害を出さずに現状の改善が望めるなら、私の進退を賭ける価値もあるでしょう。政治屋にも少しは働いてもらわなければなりません」

ジーマールの答えに、ファーフエンロは頷くと席を立ち、ニイロにも一礼すると愛馬を駆って本陣の方向へと駆け出していった。

その後姿を見送りながら、ジーマールも席を立つと、ニイロに向かつて声を掛ける。

「では、私も戻りますが、今度は嘘偽りなしに撤退するので安心して下さい。ああ、そうだ……戻ったらガーフェンロに秘蔵の酒を進呈しなくては……ちゃんとして使者の役目を果たしてくれたのですから……」

半分は独り言にも似た呟きだったが、それを聞いたニイロには閃くものがあった。

そそくさと亜空間ポーチから酒の瓶を取り出してテーブルに置く。

「お土産です。持ってって下さい」

俗にポケット瓶やベビーボトルと言われる180ml入りの小さいウイスキーの瓶だった。

物資の補給の際に、有力者との接触到に当って贈答用に活用するように送られてきたものだ。

他にも通常の720ml入りの瓶や、一升瓶の日本酒なんかもあるが、色々と考えて今回はこれをチョイスした。

元の世界では特に高価な物ではなく、それこそコンビニでも入手できるような代物だが、この世界では貴重品であることに間違いはない。

「これは？」

琥珀色の液体の入った瓶に、ジーマールは怪訝な顔でニイロに訪ねる。

「ただの酒ですよ。けっこう強いので水で割るか、あれば氷を入れてチビチビ味わいながら飲むのがお勧めです。3本あるから1本はガーフェンロさんに、残りはご自由に」

瓶の表面には趣向を凝らしたデザインのラベルが張ってあった。

ラベルに表示された英文の文字は、ニイロが異国から来たことを証明するものになるだろう。そしてそれは、ジーマールが撤退した判断に、実在する異国の人間が関与した証拠にもなる。

「なるほど、ありがたく受け取っておきましょう。」

そう言っ席を立ちながら小瓶をポケットに入れる。

「そうだ、今後、貴殿と連絡を取りたい場合はどうすれば？」

「うーん、難しいな。一旦、ルードサレンには戻るけど、そこから先は……ただ、今後鉱害の回復に係わるとすれば、現地の状況も確認することになるだろうから、近い内にドマイセンにも行く可能性はあります。今後の話し合い次第ですけどね」

「そうですか。出来れば王国抜きで話がしたいんですがね」

あらかし「予め言うておくけど、国同士のいざこぎに首を突っ込むのは今回限りというのが、ダスターツ伯爵との約束です。」

あなた方がこのまま撤退してくれば、その後は俺達の行動の邪魔さえしなければ手を出しません。どこかの国に取り込まれる気も無いですよ」

そう言うて釘を刺しておく。

ジーマールの狙いが、ニイロをドマイセンに取り込むことなのは明白だが、応じる気は一切無い。

「そちらの国に行くとしても、目的は鉱害対策です。それ以外のややこしいお話はお断りします」

「そうですか、わかりました。ただ、私はどうも諦めが悪くてですねえ。とにかく、また会える日を楽しみにしていますよ」

ジーマールはそう言うてニヤリと笑う。しかし、すぐに表情を引き締めると、ニイロに向かって一礼し、乗騎に乗ると自陣の方へと去っていった。

その後姿を見ながらニイロは呟く。

「俺はあんまり会いたくないなあ……」

第25話 誘（いざな）い

途切れていた意識に、ピリリリ……というアラームの音が覚醒の針を差し込む。

ほぼ無意識に左腕に巻いた腕時計のスイッチを押してアラームを止めると、思い出したかのように冬の冷気が、分厚い毛布が僅かに口を開けた肩口からニイロの身を震わせた。

真冬と言える季節は過ぎたようだが、それでもまだ朝は底冷えのする時期に変わりはない。

「うう、やぶつ……」

部屋の中には火鉢が置いてあるが、寝る前に消していたので火の気は無かった。

気を利かせて付けておいてくれる者も今はいない。

しばらくの間、まだ覚醒しきっていない意識に身を任せ、体温で暖まった毛布の温もりに身を委ねていたが、それも長くは続かない。

目覚ましアラームが鳴ったということは起きる時間だ。そして、そう遠くない時間に迎えがやってくるだろう。

「じやーない、起きるか……」

ニイロはそう呟くと、手早く身支度を済ませて宿の二階にある部屋から階下の食堂に移動する。

受付にいた主人に挨拶を済ませ、奥から出てきたかっぶく恰幅のいい女将に朝食を頼んだ。

「おはよう、おばちゃん、今日の朝飯は何？」

「おはようさん。今朝はトロローネの肉入り野菜スープだよ。トロローネは焼いたやつも付けられるけど、どうすんだい？」

トロローネは体長50cmほどの、リスとカピバラと兎を足して割ったような外見の動物だ。

リュドール周辺の草原に穴を掘って暮らしており、畑の害獣でもある為によく捕獲される。

初めて食べた時は羊肉マトンに似た臭みを感じたが、それも微かなことで直じきに気にならなくなった。

「あー、朝からがつつり肉！って気分でもないし、焼いたのはいいわ」「そうかい、んじゃ、ちよつと待ってな」

女将は太った体を揺すりながら、一旦奥へと引っ込んでいく。

ニイロは適当な席に座って朝食が出てくるのを待った。

やがて、さほど待つ間でもなく、幾つかの皿とパンを盛った籠バスケットを両の腕に器用に持った女将が、ニイロの席に朝食を運んでくれた。

「はい、お待たせ」

スライスされたパンを盛った籠バスケットに、スープの入った深めの皿、スライスしたチーズとぎっくり潰したベリー類の盛られた小皿に柑橘系のジュースのカップ。

テーブルの上に、朝食が次々に並べられていく。

「あれ？、これ頼んでないけど？」

チーズとベリー類の盛られた小皿はパンのつけ合わせとして基本メニューだが、ジュースは頼んでいない。

「サービスだよ、サービス。何たってカジユの勇者でコルエバンの英雄様が、うちみたいな普通の宿屋に泊まって下さってるんだ。たまにサービスくらいしたって罰バチは当たらないさね」

女将はそう笑って手をひらひらさせる。「明日は無いよ」と言いながら。

周囲を見渡すと、他のテーブルで食事をする客にも同じジュースが振舞われている。

どうやら言葉とは別にニイロだけが特別という訳でもなく、単に日持ちのしない余った食材を振舞っているだけのようだ。

「そ、そっか、有難く頂くよ」

初めて聞く恥ずかしい二つ名に動揺しつつも、ニイロはそう言つて、早速食事に取り掛かる。

自分がそんな風に言われているとは知らなかった。

コルエバンからドマイセン軍が撤退した後は、合流したサクラコと一緒に、援軍を率いてコルエバンにやって来たスローンと、さらに王都から援軍を率いて来たナルセン・ドウ・リドリスファール第五王子と、参謀のフォルドン伯爵を迎え入れ、戦後の後始末に追われること

になった。

ここで王都派遣軍の一行と、どこの馬の骨とも知れないニイロ達の扱いについて一悶着あったが、困惑する第五王子を相手にメリーチェが、ニイロとサクラコの功績を雄弁に語り、戦いを実際に目撃していた代官のエザクト親子によって、新兵器の脅威と、圧倒的に有利だったドマイセン軍が為す術なく撤退していった事実が証言され、さらにサクラコの発案でコルエバン郊外の空き地を使った公開演習が決定打となり、雑音は見事なまでに封じられた。

派手な演出の方が後々やりやすいだろうと踏んだニイロが指示した、フアージ4機によるグレネードの曳火砲撃と、クラブ4機による焼夷弾による爆撃を披露した作戦勝ちである。

ニイロの武力を見た派遣軍の中からは、このまま撤退するドマイセン軍を追って逆侵攻をかけるべしという意見も出たが、ニイロ達は一切協力しない約束であること、さらに、ドマイセンの持つ新兵器への対策が無いままでは返り討ちに会う可能性が高いことを意見した結果、今回は見合わせることに決定した。

サクラコによる情報収集によれば、力づくでもニイロ達を従わせよという意見も派遣軍内部では出たようだ。

もし、その主張が通るようなら、速やかに王国から退去することも考えたが、フォルドン伯爵の『このようなことで敵対していい相手ではない』という具申を第五王子が受け入れて却下されたのは幸いだっ

た。
これまでの情報収集によって、もはや王国に拘る必要性は正直薄いと言っている。

一番の目的であるアルファ・アースへのドラゴンその他の出現の謎については、王国はある意味ハズレであると判断できるし、その他の調査収集についてもどこかで切り上げる必要がある。

ただ、せっかく築いたダスターレ伯爵との関係を捨てるのは少し惜しいので、出来れば適度な距離で関係を繋げておきたかったのだ。

サクラコは、『やはり一度敵対して差し上げて、痛い目を見て頂いた方が良いでしょうか』などと不穏なことを言っていたが、ニイロ自

身はホツとしている反面、どうもリンデン砦に派遣した後辺りから、サクラコの言動が過激な方向に向いてるような気がするのが、少々不安材料であったりする。

また、ニイロが一番気にしていた、サリアの故郷であるセビエネ村については、ドマイセン軍の進軍ルートから外れていたことから大した被害も無く、それどころか問題になっていた山賊の集団が、ドマイセン軍の進軍に先立って特殊部隊による露払いの巻き添えを食らった形で半壊状態に追い込まれていたことも判明した。

山賊の残党についても、クラブによる上空からの索敵と、コルエバン領軍による地上部隊の連携によって、一網打尽となって決着した。その後は舞台を王都に移し、国王との謁見や褒賞の下賜、戦勝を祝つての晩餐会などのイベントを消化しつつ、今回の戦争の原因となった鉱山の鉱害問題について、王国の関係、者及びドマイセン・ビングインの外交官等と協議を行った。

概ねサクラコがヤノス等に提案した通り、鉱山に処理施設を建設し、その技術と知識については無条件で三カ国に公開するという線で協議は決着したが、費用の負担については王国だけでなく、ドマイセンとビングインもそれぞれ応分を負担することになったようだ。

それについては、三者が納得したのであれば、ニイロには口出しする意思は無い。

以後は決定した方針に従い、極力ガンマ・アースの世界で既知きちの技術を使つての、現行処理施設の建設に対する指導・助言を行う日々が続いた。

いきなりアルファやベータのオーバーテクノロジーを投入すれば、当面は劇的な改善が望めても、ニイロ達が去つて以降の健全な技術発展に支障を来たす可能性が高いという判断だった。

拠点も王都から、問題の鉱山により近いリユドールの街に移し、宿を取って生活している。

とは言つても、ニイロ個人はあくまで素人だ。

ガンマ・アース人よりは幅広い科学知識を持つとはいえ、所詮は学校の授業で習った程度。専門的な知識など皆無と言つていい。

よって、実際の活動はベータ・アースのシンシア達スタッフによって作成されたプランに沿って、ほとんどサクラコに任せきりになってしまった。

ニイロとしては忸怩たるものもあるが、下手に手を出しても口くな結果にならないことは目に見えている。邪魔するくらいなら距離を置いた方が、結果的には建設的だ。

なんとなく、『あれ？　もしかして、あの男より娘の方が優秀なんじゃね？』的な空気を感じつつも、今後の活動に支障を来たさないよう、伝を求めてやって来る、王国の貴族や他国の外交官、商人、その他の人々との交流に時間を割き過ぎているが、既に鉦山の浄化施設は物資の運搬にファージやクラブを用いた突貫工事の甲斐もあつて稼働状態にあり、こうした日々もあと僅かだ。

結果、気になる情報もいくつか得られたので結果オーライと言つていいだろう。

「そういや、サクラコちゃんはどうしたんだい？　なんだか顔見ない気がするんだけどさ」

食事続けるニイロに、他に朝食に降りてくる客もおらず、手持ち無沙汰なのか女将が思い出したように聞いてきた。

「ん？　サクラコならメリーチエ様達と一緒に、三日前からドマイセンに視察に行ってるよ。王国の使節団乗せるのに特殊輸送車両使ってるから、多分、あと一週間くらいで戻るんじゃないかな」

スライスしたチーズを乗せたパンを口に運びながら、何の気なしに答えたニイロに、女将は大袈裟に溜息をついて見せる。

「はーあ、ドマイセンって言ったら、行って帰るだけで一ヶ月は掛かるってのに……あたしらの常識で考えちゃいけないだろうけど、流石はリンデン砦の戦女神様ってことなんだろうねえ」

そう言つて呆れた表情を見せる女将だが、ニイロには初めて聞くサクラコの恥ずかしい二つ名の方が衝撃が大きい。

「戦女神で……サクラコ、そんな風に言われてるんだ……」
「そうだよ？　知らなかったのかい。それにしても、メリーチエ様も、

このところずっとリュドーにいらっしやるけど、伯爵様は寂しがっておいででないのかね」

そう言われるとニイロも返答に困ってしまう。

コルエバンの一件以来、王国内ではいつの間にもやらメリーチェが、ニイロのマネージャーのような立場として周囲に認識されてしまっていた。

困ったことに本人も乗り気らしく、王都に滞在した時も当然、リュドーに移ってからでもニイロ達に同行し、嬉々として来客との面談などの予定を取り仕切っている。

お陰で助かってもある反面、孫娘大好き伯爵からのお手紙攻勢も凄まじく、酷い時には一日に数通も届いてニイロを辟易させていた。

なにしろ、表現は色々工夫されていても、内容は全て『メリーチェ返して』なのだから、これではニイロがメリーチェの意思に反して拉致でもしているようで始末が悪い。

一度、『たまにはルドサレンに戻って伯爵様に顔を見せておあげになつては?』と、それとなくメリーチェ本人に勧めたこともあったが、『お爺様も、王国の為に頑張つてニイロ様のお役に立ちなさいって仰ってましたから、この大事な時に帰ったりしたら、逆に怒られてしまいますわ』と涼しい顔で却下されてしまった。

それ以来、ダスターツ伯爵からのメリーチェ返してコールは放置することになっている。自分で孫娘にカツコつけておきながら、ニイロに返してと言われても困るといふものだ。

「あー、伯爵様は大丈夫じゃないかな? メリーチェ様にも、お仕事頑張れって励ましてみたいだし」

取りあえず惚けておく。

そんな他愛ない会話をしながら食事を済ますと、タイミングを計つたかのように宿の表に馬車の止まる音が聞こえてきた。

どうやら出掛ける時間のようだ。

リュドーの街の中心から、やや西側に寄った位置にある代官館やかたに登庁したニイロは、午前中、代官のアデッテイ・スコバヤとスタツフ

達と共に、鉱山の浄化施設に関する報告書をなんとか処理し終え、ビンガインの使者との昼食会に臨んでいた。

代官のスコバヤと共に報告書の処理に当たっていたのは、ニイロ達がこの地を去った後、鉱山の処理施設に関する業務が、当面彼女達に委託されることになるからで、必要な知識はベータ・アースのシンシア達スタッフが現地語に翻訳して纏めてくれた手引書を元に、ニイロとサクラコが徹底的に指導した。

纏められた手引書の内容は、そう高度なものではなく、中学・高校の科学の教科書程度の内容で、この程度ならばニイロでもなんとか教えることくらいはできる。

「うん、いつも思うのですが、王国の料理は我がビンガインと比べても美味ですねえ。本当に羨ましい」

ニイロの向かいに座るビンガインの男が、スープを一口啜った後で唸るように感嘆する。

見た目は三十台後半から四十代前半くらいか、焦げ茶色の髪をきつちり七三に分けた、ビジネススーツを着せたら似合いそうに思える風体の男だ。

名前はフェルノアンと名乗った、ビンガインの9人から成る評議会議員の1人で、元が王国侵攻には慎重派だったということもあって、使節団に抜擢され、来訪しているということだった。

「アルネアで出汁を取ったスープは、他では滅多に食べられませんからね。デインクレルではバレの根と一緒に煮込んだものが名物ですが、ここリユドーではバレは使わずに用いるのが基本です」

スコバヤが自慢げに料理の蘊蓄を語るが、ニイロの脳裏には件のデインクレルで食べた料理の素材が思い浮かぶ。

(アルネアって、確か蜘蛛……考えちゃいけない。うん)

慌てて脳裏に浮かんだ素材を追い払い、何事も無かったかのように食事を続けた。

「例の浄化施設も無事に稼動し始めたことですし、そうになるとニイロ殿は今後どうなさるおつもりで？」

フェルノアンは何気ない風で尋ねるが、ニイロの今後の動向は、会

う者全てが聞いてくることだ。

明け透けに誘う者はまだいい方で、親切を装いながら、あわよくば自分の利益になるよう誘導しようという下心の見える誘いも多い。

「そうですねえ、このところ忙しかったですから、サクラコともゆつくり相談できてませんし、まだ具体的には考えてませんよ」

そう言うってはぐらかす。

「ニイロ殿には、まだ教わることが多いのです。今出ていかれては困ります」

すかさずスコバヤが割って入った。

スコバヤは恐らくダスターツ伯あたりにニイロを引きとめるよう言われているのだろう。

いちいち聞いていれば、ずるずると先延ばしにかかるであろうことは疑いようも無いが、ここはフェルノアンの手前もあるので、あえて反論はせずに濁しておくことにした。

「まあ、サクラコが帰ったら相談して、それからですよ」

「そうですね。参考になるかはわかりませんが、聞くところによればニイロ殿は魔法関係に興味がおありとか。魔法といえば、西のバネストリア帝国には魔道士も多く、古い時代の魔道具なども残されているそうですよ」

フェルノアンは悪戯っぽく笑みを浮かべながらニイロに教えるが、それにスコバヤが口を出す。

「帝国は現在内乱状態にあつて治安も怪しいと聞きます。みすみす危険な場所へ行くこともないでしょう」

「ああ、そのことですか。でも、ニイロ殿の力があれば、少々の治安の不安など問題にもならないのでは？」

そう言われるとスコバヤも反論のしようがない。

5000の軍を相手にして退けたニイロに、治安がどうのと言つても説得力が無かった。

「ご存知かわかりませんが、ニイロ殿の為に説明すると、彼の帝国では5年前に先帝が崩御した後、嫡子だった皇太子が継いだのです。

ところが、この新皇帝がとんでもない人物でして、先帝の存命中は

目立たない、大人しい人物との評判だったのですが、いざ即位すると同時に正体を現したと言いましようか……。

口に出すのも憚はばかるような行為に耽ふける有様だったそうです。

それで反皇帝派が反乱を起こして、あつという間に新皇帝は暗殺されて、今度は誰が皇帝の座につくかでモメまして、庶子だった長男を担ぐ派、皇帝の次の弟である三男を担ぐ派、それに先帝の弟である皇弟を担ぐ派で分裂して、ここ数年、中立派も含めて4つの派閥が内乱状態にあったわけです。

しかし、それも最近になって三男派が皇弟派に下つたという噂で、それが本当なら皇弟派が一步抜け出した感じでした。こうなると、後では中立派の動向次第ではありませんが、仮に中立派が長男派についても皇弟派が若干有利なものですから、決着も早いような気がしますよ」「ほう、それは初めて聞きました。その噂はどこから?」

スコバヤがその話に食いついた。

帝国と王国は特に争ってはいないと言うことだったが、それでも隣接する国の話ともなれば、代官としても放置は出来ないのだろう。

「スコバヤ殿はご存知でしょうが、私の家は貿易を営んでおりますので、出入りする商人から伺いました。地元の商人ですので身許みもとも確かです。」

ビンガインからですと、エズレン回廊を通って帝国に抜けられますからね。

まあ、ニイロ殿が帝国に興味がおありになればの話ですが、この王国から帝国に行こうとすれば、真つ直ぐ西に向かうと満足に道も無いヨーネス大森林を抜けなければなりません。

多少遠回りにはなりますが、一度南に下って我がビンガインを経由するのであれば、商人達が使うエズレン峡谷を縫って帝国までの回廊がありますから、ヨーネス大森林を抜けるよりは安全確実に帝国にたどり着けるでしょう。少なくともヨーネス大森林を抜けるよりは結果的に早い。

もし、ご希望ならば私個人としても帝国に友人がおりますので、色々と便宜も図れると思いますよ」

要するに、その代わり自分にも便宜を図って欲しいという申し出だ。

確かに帝国で得られるかも知れない情報には興味があるが、すぐに飛びつくような真似はしない。

王国の人間が言う、東方の蛮族が割拠するという土地にも興味はあるし、ビンガインにもドマイセンにもニイロ個人はまだ行ったことが無いわけで、四カ国連合の残り2つ、ソータルとカーレムという国にも興味がある。

現時点で選択肢を狭める必要など無かった。

「まあ、その時になればお願いすることもあるかも知れませんが、全てはまだ白紙……」

ニイロがそう言いかけた時、突然左腕の腕時計からアラームが鳴った。

通信機能付きのゴーグルなどをつけられない環境にある場合に備えて身につけているものだ。

いわゆる林檎時計的なものと思ってもらえば遠くない。

「あ、ちよつと失礼」

ニイロはそう言って席を外すと、そそくさと会食の行われている食堂から外に出て、常に身につけている異次元ポーチから通信機能付きの多機能ゴーグルを取り出す。

アラームはサクラコからの通信のコール音だったが、定時の連絡にしては時間帯が半端だ。

少し不思議に思いながらも、慣れた手つきでゴーグルを装着して呼びかけた。

「サクラコ？ 何かあった？」

『ニイロ！ 申し訳ありません！ サリアが！ サリアが何者かに拉致されたようなのです！』

いつになく慌てて取り乱した様子の子のサクラコの声が、ニイロの耳に飛び込んでくる。

全く予想していなかった知らせに、ニイロは思わず間の抜けた声で聞き返した。

「は？　なんでサリア？」

※第二章の登場人物※

○サリア

メリーチェ付きの侍女で14歳。

肩の辺りで綺麗に切り揃えられた栗色の髪をした美少女。

コルエバンの街から南にあるセビエネ村の出身で、ティングレルの街で破落戸ゴロッキに襲われたところをニイロに助けられたりと、何かと縁がある。

第二章の終わりでは、どうやら誘拐された模様で、けっこう不幸体質かも。

○コズノー

石壁の二つ名を持つ、赤毛を短く刈り込んだ戦士風の男で、歳はニイロよりも少し上くらい。

普段はダグ、ニアアレイとコンビを組む傭兵。

赤銅色に焼けた皮膚と、いかつい体躯には歴戦の風格が漂うが、見た目よりは物腰も柔らかい常識人。

得物は長さ1mほどの大盾と、やや長めの片手剣スクラマサクス

○ニアアレイ

腰まで届く栗色のストレートヘアに切れ長のブラウンの瞳、腿の辺りまでスリットの入った黒いタイトなイブニングドレスと、『お色気担当』といった風体の女性。

挨拶もそこそこに、ニイロの持つ装備やファージ達について被りつきで質問攻めをしていた。

ダグ曰く魔道具馬鹿マニアで、見た目はともかく、中身は残念美女。

普段はダグ、コズノーとコンビを組む傭兵。

○ガラクト・スローン

ダスターツ領軍副長で、カジユ村までニイロ達を迎えに来た護衛騎士団の団長を勤めた。

部下の面倒見も良く気配りの人。

○ギータン・ポアルソン

細身の男で身長は180cm強、瞳は明るめのブラウンで、軽く

ウエーブの掛かった赤毛は、軍人にしてはやや長め。年齢は今年42歳になる。

ダスターツ伯領の騎士団長。

軍事面におけるダスターツ伯爵の片腕で、リンデン砦奪還戦では領都からの援軍を率いた。

○カウネル・ラッチ

ダスターツ伯爵の筆頭秘書。

36歳。癖のある金髪に碧眼。やや神経質そうな細面で口髭を蓄えている。

○ウエズレン

ダスターツ領軍所属の若手騎士。

模擬戦でサクラコと対戦して惨敗したが、サクラコに欠点を指摘されて以来、ポアルソン曰く、彼女の信者ファンになった模様。

○ファレク・ラバナウ

リンデン砦守備隊長。

○ホルストーン子爵

王都から派遣されたリンデン砦救援軍指揮官。

サクラコの言動に翻弄される。

○ビオネス・エザカート

コルエバンの代官。

72歳。

堅実に着実に実務をこなし、先代の時分からダスターツ伯爵家に長く仕つかえてきた宿老。

慎重すぎる性格と巨軀から優柔不断、時に鈍牛どんぎゅうとの謗そしりを受けることもある。

○サイス・エザカート

ビオネスの息子でコルエバンの街の領軍指揮官。

○オルフ・ヤノス

ドマイセン軍リンデン砦攻略部隊の將軍で42歳。

グレーの髪を短く刈り込み、代わりに顎髭あごひげを長く伸ばしている。

大柄な体軀は鍛え抜かれており、ドマイセン軍の中では『髭の將軍』

として有名。

味方を撤退させた後、ハルマインと共にサクラコに挑む。

○トール・ハルマイン

ビンガイン軍のリンデン砦攻略部隊指揮官。

ビンガインでは名門の、ハルマイン家の出身。

金髪の貴公子然とした風貌の青年で、若いながら将来を嘱望されてはいる。

しかし、実際の他国からの評価は『優柔不断』『指揮官としては優しすぎる』『臆病者』と、あまり芳かんばしくない。

○ソットス・ジーマール

ドマイセン軍コルエバン侵攻部隊指揮官。

軍人というよりは学者が研究者と言った方が相応ふさわしく思える長身瘦そうく軀そうねんの壮年の男。

容貌ようぼうに似合って、部下に対しても丁寧な口調を崩さないが、それがかえって冷たい印象を与えている。

しかし、実際はボノ川流域の公害の原因である鉱山を取り除こうと執念を燃やす、熱い一面を持つ。

○ワーズ

ジーマールの副官

○チエセル

ジーマール麾下の部将。

○クロトレル

ジーマール麾下の部将。

○ユセルネバ

ドマイセン軍の特殊部隊長。

身長150cmそこそこの小柄な男で、浅黒い肌くに、ごま塩頭しほを短く刈り込み、服の上からでも両腕の筋肉が見事に盛り上がっているのがわかる。

公害に苦しむボノ川流域の出身。

10人の部下と共に、姿を消す魔道具と、特別あつらえの武器を持って、5000のドマイセン軍を秘密裏にコルエバンの街近くまで

導いた立役者。

○ノルコ・ガーフェンロ

ドマイセン軍第三騎馬隊所属。

普段はヤノス將軍麾下の部隊だが、同じく第五騎馬隊と共にジーマールのコルエバン攻略部隊に編入されていた。

ジーマールの命令でニイロへの使者となるが、実は囷だった。

○フェルノアン

ビンガイン国評議会議員。

四十歳前後の、焦げ茶の髪を七三に分けたビジネスマンタイプ。

9人いる評議会議員の内の一人で、王国侵攻には慎重な立場であったが故に戦後、王国への使節として派遣された。

○イレーツ

フェルノアンの友人兼秘書。

○ナルセン・ドウ・リドリスファアレ

リドリスファアレ王国第五王子で22歳。

コルエバン救援の為に王都より派遣されるが、到着した時は既に戦闘は終了していた。

王位継承権の順位は低い為、軍に身を置いている。

取り立てて優秀ではないが暗愚でもない、ごく普通の青年。

○フォルドン伯爵

コルエバン救援軍の参謀。

名目上の総指揮官は第五王子だが、実質的な指揮官はこちら。

ニイロの意見を受け入れて、ドマイセン軍の追撃を断念する決定ができるくらいには人の意見を聞ける人。

第三章 バネストリア帝国 第26話 待ち伏せ

「あつ、おはようございます！」

サクラコが迎賓館の一階にある食堂に降りると、サリアの元気な声が彼女を出迎えた。

「おはよう、サリア。今日も早いんですね」

時刻はまだ早朝である。

窓の外はまだ暗く、冬の遅い日の出にもまだ少しの余裕がある。

ダスターツ伯爵の孫娘であるメリーチェ付きの侍女であるサリアは、主人の起きる時間よりも先に起きて仕度を整え、朝食も先に済ませておく必要があつた。

「はい、もう慣れっこですし」

「そうですか。ああ、一応確認しておきますけど、今日の予定はどうなってますか？」

バイキング形式の朝食をトレーに盛りながらサクラコはサリアに尋ねる。

オートノマス・マシン
A Mであるサクラコは、本来食事を必要としないが、ガンマ・アースの人々との出会い以降、特に秘密にしていた訳ではないが、なんとなく『人間ではない』という事実をニイロが言い出しそびれてしまい、そのままな崩し的に人間として振舞うことになってしまった。

特に深い理由があるわけでもないが、今更事実を告げたところで余計な混乱を招くよりは、ということだ。

一応そういった、擬似的に食事をする行動にも対応はできるので、今のところ問題も無い。

「ええつと、お嬢様は午前中ナルセン王子やホルストーン子爵とご一緒に市場とか市内を見学してから、市外の操練所？ 訓練所？ よくわかんないですけど、そこで観閲式に出席。それから午後は市内に戻って議会に出席なさって……後は色々？ 夕刻には戻られ

るそうです。護衛は王都の騎士団の方々がされるそうで、私とか
フィーゼさんとか、伯爵様の騎士の方々はお留守番です」

今回の王国使節団は、ナルセン第五王子を団長に、50名の規模で
構成されていた。

ナルセン第五王子たつての希望で、役員5名と30名の護衛騎士団
が王都から馬車で出発し、騎士団がドマイセン入りする時期を見計
らった上で、それに合わせるようにルードサレンから特殊輸送車両に
乗車したサクラコとメリーチエ、フィーゼ、サリア含む侍女3名、ダ
スターツ伯領軍騎士3名、王都の近衛騎士5名、その他1名の15人
がドマイセン入りしている。

ちなみに、最後のその他1名はナルセン王子本人であり、メリー
チエを使節団に推薦したのも王子だったりする。

コルエバンに於いて、戦後の会議でニイロについて熱弁を奮ったメ
リーチエを気に入ったらしいが、それについてのメリーチエの心情は
不明である。

「そう。私も食事を済ませたら、積んできた電動二輪車で鈹害の被害
地域を視察してきます。王子やメリーチエ様には伝えてありますけ
ど、夜には戻りますので心配しないで下さいね」

サリアにも、そう伝えておく。

被害の大きいボノ川の下流域は、馬車なら片道1日かかるが、
電動二輪車であればほんの1〜2時間あれば到着できる距離だ。

ベータ・アースからは2台が送られてきており、ピンクに塗装され
た1台をサクラコ専用としている。

浄化施設が稼動してまだ僅かな期間であり、数値的にたいした進展
は望めないが、調査ポイントの設定と通達も事前に済ませてあり、ド
マイセン側でも調査を行っていて、そのデータは報告も上がっている
ので、今回はサクラコが正確なデータを拾うことで、言わば答え合わ
せを行うことが出来る。これでドマイセン側の人員の教育にもメド
が立つだろう。

実は王子やメリーチエ達に同行して行事に出席するように求めら
れたのだが、それでは1日が無駄になるからと素気無く断っている。

それから2人は他愛の無い雑談を続けながら食事を済ませると、同時に席を立った。

「それじゃあ、行つてきますね」

そう挨拶するサクラコに、サリアが少し頬を染めて返した。

「いつてらっしやい。お気をつけて……姉様」

最後は消え入るような言葉だったが、サクラコは優しい微笑みを返すことでその言葉に応えた。

◇ ◇ ◇

銃声が聞こえた。

もつとも、それが銃声であることに気付いた人間は少ない。

この世界の人類史上、初めて銃火器を戦争に用いたドマイセンであつても、生産数の都合上、普及しているとは言い難く、まだ聞き慣れないそれを銃声であると気付けた人間は僅かだった。

「今の音は……鉄火捧銃声の音ではなかつたですかね？」

ソツトス・ジーマールは兵舎の一面にある自分の執務室で、目を通していた補給物資の関係書類から顔を上げると、正面に控える副官のワーズに尋ねた。

コルエバン攻略作戦の総指揮官であつた彼は、失敗の責任を取る形で、現在は補給部門の輜重部隊編成部署へと事実上左遷されていた。当初は正面部隊を外されることに忸怩じくじたる思いもあつたが、実働部隊を率いた経験上、補給の重要性は身に染みている。

元々見栄を気にするような性格でもなかつたことから、最近は与えられた仕事に遣り甲斐やりがを感じ始めているところだった。

「えっ？ いえ、私は気付きませんでした……あつ、聞こえました！ 確かに！」

ワーズがそう答える間にも、またもパーン！という銃声が遠くで響く。

明らかに異常事態だった。

「今日は市内で鉄火捧を使う部隊の訓練は聞いていません。ワーズ、

すみませんが急いで誰か様子を見に行かせて下さい」

ジーマールは、そう言つてワーズを送り出した後、言い知れぬ不安に書類が手に付かず、窓の外の景色に目を向けた。

そこに見えるのは隣の兵舎の古ぼけた壁だけだが、目は壁を見つめたまま、頭の中では様々なケースに思いを巡^{めぐ}らせる。

鉄火捧は正式採用されたとはいえ、まだ数も少なく一部の部隊だけに配備されている兵器だ。

そして、その訓練は基本的に機密保持の観点から市内ではなく、市外に設けられた施設で行われていた。

最近になって、配備数が一定数に達したことから、一部が市内の壁で囲った施設内でも行われるようにはなったが、それも今日は予定になかったはずだ。

では、真つ先に考えられるのは事故だが、一発だけならともかく、二発目——今、三発目が聞こえた——こうなると事故は考えにくい。

すると、次に考えられるのは兵の反乱、いわゆるクーデターだが、少なくともジーマールが知る限り、ドマイセン軍内部にそのような兆候は無かつたはずだ。

そして最後に思いつくのは、第三者による襲撃に対しての発砲である。

現在、市内には王国の使節団が滞在している。

団長であるナルセン王子の都合とやらで、まず先乗りの護衛騎士団が3日前にドマイセン入りし、その後、昨日になって、コルエバンで見た馬無しの箱馬車に乗った王子達メインゲスト十数名が到着して、昨晩は大々的な歓迎レセプションが行われたと聞く。

ジーマールも出席して、あのニイロと名乗る男の仲間とやらを見てみたかったが、さすがについ数ヶ月前にコルエバンに侵攻した軍の指揮官が、のこのこと出席できるはずもなく、これは諦めざるを得なかつた。

考えられるのは、この使節団に関連したトラブルだ。

もしも、何者かが何らかの思惑で使節団を襲つたとしたら——ドマイセンとしても警備には嚴重な体制をとっている。襲撃者の規模に

もよるが、すぐに鎮圧されるだろうし、ジーマールの出番などあろうはずもない。

しかし、そこでふと思った。

有り得ない話ではあるが、襲撃者が使節団そのものだったとしたら？

王国の使節団は総勢でも50名ほどだ。いかに精強な部隊であっても、たったの50人で落とせるほどドマイセン軍は弱くない。

追加の軍が侵攻してくるにしても、コルエバンへの侵攻に使ったルートは逆侵攻に備えて潰してあるし、ビンガイン経由にしても国境からの連絡にその気配は感じられない。

だが、あのニイロという名の男の顔が浮かぶ。

話をした限りでは、あの男が暴拳に出る可能性は低いと思う。

だが、あの男の持つ武力が脅威であることは事実だ。

騎士が50でも恐れはしないが、もし、あの男であれば、ドマイセンは一日で落ちるかも知れない。

そして、今、市内にはあの男の仲間とやらが滞在しているのだ。

ジーマールの背筋にゾクリとした不安が走る。

（何にせよ、最悪を考えた準備だけはしておくべきでしょう。空振りでも今より閑職に飛ばされるだけでしょうし……）

そこに、ちようど使いを出し終えたワーズが戻ってきた。

「ワーズ、戻ってすぐですが、今出られる兵を集めておいて下さい。私はベルテン部長の所に市内警備の加勢の許可を貰いに行ってください。」

そう言つて椅子に掛けていた上着を掴むと、ワーズと入れ替わるようにジーマールは部屋を後にした。

◇ ◇ ◇

早朝に宿となっている迎賓館を出たサクラコは、電動二輪車を駆つて、地形に沿つて右に左にと曲がる街道を、そのピンク色の髪を風に靡かせてひた走っていた。

ベータアースであればノーヘルでアウトだが、この世界に道交法は無いのでお構いなしだ。

服装はいつもの大正時代風ナース服モドキではなく、電動二輪車に乗るといふことで、上が薄いピンクで下がグレーの、キャンプ用品店で売っていきそうな防寒スーツに、茶色のトレッキングシューズ。背中には茶色のリュックを背負っている。

これがベータアースであれば、(少々ダサイが)あまり違和感の無い格好なのだが、ここはガンマアース。

時折すれ違う旅人には驚愕と奇異の目を向けられるが、一向に気にすることは無い。

やがて、両側からせり出した森の間を通る、見通しの悪い場所に差し掛かると、サクラコは一旦、電動二輪車を止めて前方を見やった。

そこには倒木——明らかに切り倒したばかりで枝葉の茂ったまま——が行く手を塞いでおり、手前にはいかにもな連中が屯していた。

前方の男達は8人。

ニヤニヤ笑いを顔に張り付かせて、品定めでもするかのようサクラコを眺めている。

「いよう、お嬢ちゃん、御覧の通りこの先には行けねえよ。大人しく言うこと聞いてくれりゃあ、お互い手間が無くて助かるんだけどなあ」

頭目らしき髭面の男がサクラコに呼び掛けたが、サクラコはその呼び掛けには応えず、落ち着いた様子で電動二輪車を降りると、背中のリュックも下ろして足元に置きながら逆に男に聞き返した。

「私のことをご存知なんですね？」

その問いに、男は意味がわからなかったのか、「ああん？」と怪訝な表情を見せる。

「いえ、私の格好、そしてこの電動二輪車、普通なら驚かれたり不思議がられます。それなのにあなた方は全く驚く様子も無い。つまり、私が誰かを承知の上で待ち伏せされたのでしょうか？」

大勢の男達に行く手を塞がれているにも係わらず、全く動揺する様子もなく受け答えするサクラコの態度に、髭面の男は明らかに狼狽した様子を見せた。

「そつ、それがどうしたって言うんでえ！」

「別にどうもしません。見たところ、盗賊を装っておられるようですが、それらしく見せても皆さん剣には拘りが有りの御様子。どこかの国の騎士さん？ いえ、統一感も無いですし傭兵さんでしょうか。」

大人しく道をあけて下されば、特に追求する気はありませんし、何の問題もありません。

でも、どうしても敵対なさると言うのであれば、私も容赦はできませんが、それで宜しいですか？」

「この人数に勝てるってのか！」

見抜かれた髭面の男が、左手を上げて周囲の男達に合図を送ると、配下らしき男達はサクラコを包囲するように散らばった。

サクラコの背後の左右の森からも、新たに2人の男たちが姿を現し逃げ道を塞ぐ。

「むしろ私のことをご存知の様子なのに、負けると思われることの方が驚きです」

「ふん！ 小娘が何をほざきやがる！ おい、構わねえからさつさと捕らえろ！」

その合図と共に禿頭の大男が前に出て、サクラコを捕らえようと腕を伸ばすが、それを素早く半身になることで避けると、逆に突き出した男の手首を取って捻り上げると、

「ぐぬっ」

捻り上げられた腕の痛みを耐えかね、呻き声を上げながら思わず片膝を着いて下がった大男の顔を、サクラコはカウンター気味に蹴り上げた。

見た目は華奢な少女でしかないサクラコの蹴りは、その見た目からは思いもよらぬほど重い一撃となって、大男の顔面にヒットする。

ゴツリという鈍い嫌な音と共に、大男は声もなく顔面を血塗れにして崩れ落ちた。

「警告はしましたよ？」

「くっ、おい！ 相手は小娘一匹、囲って一斉に押し潰してしまえ！生きてりや腕の一本くらい構わねえ！」

髭面の男に喉^{けしか}けられた男達が、めいめい悪態を吐^つきながら剣を抜いてサクラコを包囲する。

「それでは」

サクラコは、一瞬だけ自分の体をかき抱くように身を屈めたかと思うと、次の瞬間にはまるで舞台役者のごとく両腕を左右に広げる。

その手にはいつの間にか10mmオートマチック小型自動拳銃が握られていた。

そのまま流れるような仕草で、まるでフラメンコのダンサーのごとく、くるりと体を回転させながら、包囲する男達に正確に2発づつ、銃弾が叩き込まれる。

ある者は呻き声を上げ、またある者は無言のまま、しかし一人の例外も無く男達が血塗れとなってサクラコの周囲に転がった。

「これで残るは……どうされますか？」

左手の銃は横に向けたまま、森の中の藪に突きつけられている。

右手の銃を正面の髭面の男に向け、サクラコは先程までと全く変わらない調子で男に尋ねた。

追い詰められた男は、顔を真っ赤にしながら一瞬だけ、サクラコが銃を向けた藪の方へ視線を投げる。

「き、気付いてたって言うのか……」

「ええ、まあ、最初から。弓を構えた方を伏せてますよね。もうお一人もそちらの方かと思っただけですが……どうやら違っただけで、撃たなくて正解でした」

サクラコの言葉に呼ばれたかのように、藪を掻^かき分けて一人の女が姿を現した。

20代半ばくらいの、黒に近い茶色の髪に、意志の強そうな太い眉が印象的だ。

茶色皮鎧とズボンの上下に緑の葉を散らした即席のギリースーツ。腰にはショートソードを吊り下げ、背には小型の弓を背負っている。

「お手伝い頂いたようで、有難う御座います」

サクラコが弓の伏兵を片付けてくれたことに礼を言うと、藪から出てきた女は申し訳無さそうにそれを遮^{おさ}った。

「いいえ、むしろ私達の事情に巻き込んでしまったことをお詫びしな

ければなりません。ですが、その前に」

そう言つて、おもむろに髭面の男に向かつて声を掛ける。

「破碎の牙のオルナド！ あんた達には生死を問わずの回状が回つて
る。ドマイセンまで流れてきてたとは驚いたけど、もう諦めな！」

喝破された髭面の男——オルナドは、無言のまま女が出てきた方と
逆側の藪に飛び込んで逃げ出そうとするが、それよりも一瞬早く、女
の放った捧手裏剣の一撃がオルナドの背中を襲う。

そのまま藪の手前に倒れ込んだオルナドは、捧手裏剣に毒でも塗ら
れていたのか、ひとしきり苦しそうに体を痙攣させると、そのまま動
かなくなつた。

女は倒れたオルナドに歩み寄ると、完全に死んでいることを確認し
てから、サクラコの方に向き直つて頭を下げる。

「ご迷惑をお掛けしました。死体の後始末はこちらで引き受けます。
それで……言い訳にはなりますが、事情を説明させて頂いて
宜しいでしょうか」

「そうですね。一応、夜には戻らないといけませんから手短に」

「有難う御座います。私はバネストリア帝国第二王女、ティリザ・エル
ノ・バネストリア様に仕えるチエク・ファノと申します。

帝国の現状をご存知かわかりませんが、お恥ずかしい話、現在、帝
位を巡つて争いが続いており、劣勢となつた派閥があなた方を巻き込
む算段をしているとの情報を聞きつけたティリザ様が、配下の私共に
それを阻止せよとご下命なされたのです。

残念ながら今回は一步遅かつたのですが……」

チエクは忌々しげに周囲に倒れ伏す傭兵達を見渡した。

「なるほど。それで私を人質にしてニール口を脅そうとでも考えたので
しょうか……ちなみに、今も王国のメリーチエ様の周囲に3
0名ほど不審な人物が見られますが、これはチエクさんのお仲間で
しょうか？ それとも劣勢になつていふという派閥の方々でしょ
うか？」

そう問われたチエクは、きよとんとした顔で聞き返した。

「え？ 今？ ですか？」

今、サクラコ達がいる場所とメリーチエ達がいるドマイセン市では、直線距離にして20km以上離れている。

「そう。今です。今、メリーチエ様達はちょうどドマイセン市の南門を出て、側の練兵場に向かうところですが、その前方に多数の人間がいます。」

残念ながら、私が護衛に付けているクラブからの情報では、個々の人達の敵味方の識別までは出来ませんから、行動に移る前に排除するわけにもいきません。偶然この場にいる無関係の一般人もいるでしょうし。

まあ、護衛の騎士や兵士さん達も100人近くいますから、敵であつてもおいそれと手出しできないでしょうけど」

「わ、わかるのですか……」

「ええ、メリーチエ様の方には念の為、護衛にクラブを残してありますから。クラブの知っている情報は、私にもわかるようになっていきます。魔法のようなもの、とでも思つて頂ければいいかと」

「クラブ……それは確か、空を飛ぶという噂のゴーレムですか。実在するのですね……。話には聞いていましたが、私の目では確認できなかった。」

それはいいとして、私達の手の数は、そんなに多くありません。特に今はドマイセン市を出た貴女あなたを追うのに出払つてしまつて、ドマイセン市の方には監視と連絡に2人残っているだけです。

それに、伯爵の孫娘は王国の要人でもありますから、そのような立場の人間を狙うことは無いでしょう。いくら劣勢でも王国を引き込むのはリスクが大きすぎると考えるはずです。

敵の戦力も、雇つた傭兵崩れが殆どほとんどで、ここで壊滅した『破碎の牙』と、後、判明しているのが『紅蓮竜』『無尽黄金』で、合わせて約30名。これに地元の破落戸ごらくきを加えても50には届かないでしょう。護衛の騎士達がいれば手を出せる戦力じゃありません」

「なるほど。では、敵の狙いは私個人と見ていいようですね……。ところで、今、こちらに向かつて来ている方はお仲間ですか？」

そう言つてサクラコは左手の藪の方へと視線を向けるが、チエクに

は何も異常は感じられない。

「えっ?」

戸惑うチエクを他所に、サクラコは10mmオートマチック小型自動拳銃を藪の方に向けたまま、何でもないことのようにチエクに語りかける。

「すぐにわかると思いますが」

そう言われてチエクも藪の方へと注意を向けると、暫くの間の後、藪を掻き分けて一人の男(?)が姿を現した。

「お嬢!」

「ロツチャか」

チエクは安心したように肩の力を抜いた。

ロツチャと呼ばれた男(?)は、サクラコの存在に気付くと、慌ててサクラコに会釈する。

男(?)としたのは他でもない。外見からは区別がつかないからだ。

「紹介します。私の仲間です」

そう言ってサクラコにロツチャを紹介する。

「見ての通り、人間じゃなく森蜥蜴人ヒューマン フォレスト・リザードマンで、優秀な男です」

その姿は、一般的にリザードマンとして描かれる、二本足で歩くコモドドラゴンのようなファンタジーアートとは、かなり趣おもむきを異にしていた。

半裸ではなく、普通の人間のように露出の少ない皮鎧を着込み、顔は蜥蜴トカゲというよりは宇宙人グレイか、或いは河童ある、少し知識のある者なら恐竜人間が思い浮かぶだろう。

もしも恐竜が絶滅せずに進化し続けたら、という思考遊戯の末に生まれた想像図で、あくまでお遊びの域を出ないものだったが、実際にサクラコの目の前にいる森蜥蜴人フォレスト・リザードマンは、あの想像図にそっくりだ。

服を着ているので定かではないが、おそらく尻尾も生えているようには見えない。

紹介されたロツチャは、周囲に転がる『破碎の牙』の死体を一瞥いちべつすると、申し訳無さそうにサクラコに謝った。

「どうやら一足遅かったようで、ご迷惑をお掛けして申し訳ない。しかし、ご無事で何よりでした。出来れば、これで帝国に悪い印象を持

たないで頂けると嬉しい。テイリザ様も、何よりそのことに心を痛めておいででした。

それからお嬢、つい今しがた連絡を受けたんだが、向こうの雇った連中のことで、気になることが……」

そう言つてチェクとサクラコの様子を伺う。この場で報告してサクラコに聞かれてもいいか、ということだ。

それに対してチェクは躊躇ためらうことなく頷いた。

「そうか。じゃあ報告するが、身元のわかつてなかった連中の中で、8人の身許が判明した。内2人は『二重星ふたえぼし』のローギルとチェルカ。けっこうな大物だが、こいつらが何やら大きな荷物を載せた馬車でピンガイン方面に向かうのを、残つてたバッシルが目撃したらしい。

しかも、遅れてドマイセン兵が追いかけて行つたらしいが、その先は不明だ。残る6人はソロでやつてる連中だが、腕の方は中の上から中の下つてところか。

それから、王国の騎士が何人か負傷したつて噂があるらしいが、詳しくはわからん。迎賓館の方で何やら動きが慌あわしいそうだ」

それを聞いたサクラコの顔色が変わつた。

すぐにクラブからの映像を確認するが、メリーチェ達を護衛する王国の騎士達に異常は無い。

そうなると、ドマイセン内にいる王国騎士は、宿舎である迎賓館に居残つたダスターツ領軍の騎士しかいないはずだ。

しかし、迎賓館の方へクラブを向かわせれば、今度はメリーチェ達の方に不安が残る。練兵場周囲に散らばる不審者の情報には特に動きは無く、こちらも決して油断できないのだ。

ドマイセンへの出発前、ニイロからクラブとファージを何機連れて行くか聞かれた時、それよりもニイロ本人の安全を凶うろたつて欲しいとクラブ機だけで断つたことが裏目に出てしまった。

「その話はいつ伝わつたのですか!」

「つ、ついさっきだ。まだ十分くらいしか経つてない」

人が変わったように迫るサクラコに、ロツチャは狼狽うろたえながらも何とか答えた。

「どうやって!? 市内とここでは離れすぎています! 話が伝わるには早すぎます!」

「そつ、それはこれで……」

ロツチャはそう言つて、腰に下げた袋からボックスステイッシュほどの大きさの木製の箱を取り出した。

箱の表面には幾つかのボタンと、小指の爪ほどの宝石が取り付けられている。

「遠くからでも信号を受けられることができる魔道具だ。光の点滅の具合で文章を受け取ることができる。送る方の魔道具は大きくて持ち運ぶことは難しいが、今回はドマイセンの市内に1台持ち込んだ。受ける方も距離としてはこの辺りまでが限界だ」

要するにモールス符号のような文字コードの送受信機だ。携帯電話信機、あるいはポケベルの親戚と言つてもいい。携帯ポータブルというには少々大きい、持ち運べないほどでもない。

サクラコはすぐに決断した。

「ドマイセン市に戻ります」

そう一言だけ言い捨てると、すぐに電動二輪車を駆つて疾風のごとく来た道を引き返していく。

残された2人もすぐに動いた。

「ロツチャ、この死体を片付けたら私達も追うよ。あの娘は確かに強かった。『破碎の牙』の連中だつて、決して雑魚じゃないのに……やっぱリテイリザ様の言うことは正しかった。絶対に敵に回しちゃいけない」

そう呟きながら、既に見えないサクラコの消えた方向に、チエクは視線を送った。

第27話 怒り

サクラコは、電動二輪車を飛ばしてドマイセン市に戻ると、王国使節団の宿舎になっている迎賓館へと駆け込んだ。

そんなサクラコの姿に、ダスターツ伯領から同行している領軍騎士3名の内の1人、アザルークが気付いて横合いから声を掛ける。

「サクラコ殿、こつちだー!」

そう言つて、コの字型になっている迎賓館の東棟の方へとサクラコを誘導した。

「アザルークさん、現在の状況を。襲われた騎士の方が負傷したという話を聞いて戻ってきました」

サクラコの求めに応じ、アザルークは事の顛末をかいつまんで説明する。

「それが、お嬢様からの使いという者が来て、サリアにお嬢様の上着一着届けて欲しいと連絡があつたらしいのだ。

それでサリアに荷物を持たせて、護衛にはエルナントとフィーゼを付けて送り出したんだが……南門に行く途中のファルエネス通りの路地裏で、倒れているエルナントとフィーゼが発見された。

2人共、ドマイセンの、あの『鉄火捧』とやらで撃たれたらしく、エルナントは頭に食らつて恐らく即死。フィーゼの方は腹に2発食らつて、今、医者が見てるが……」

アザルークは『ヤバいかも知れない』という言葉を飲み込んだ。

しかし、その思いはサクラコにも伝わる。

東棟の通用口の扉を、やや乱暴に開けて中に入ると、『まずはフィーゼさんのところに』と、アザルークに案内させた。

二人して迎賓館の長い廊下を足早に歩きながら、先導するアザルークが情報を口にする。

「王子の方にも伝令は走らせたので、お嬢様も間もなく戻られると思う」

「それでサリアは?」

「わからん。行方不明だ。目撃証言から、馬車で市外に連れ去られた

可能性がある。犯人は2人組の男女で、手駒に使われていたチンピラが5名、この5人は既にドマイセン軍の方で身柄を確保したそう。主犯の2人については、今、ドマイセン軍の兵士が追っていると、ジーマールとかいう指揮官が報告に来てくれた。サクラコ殿に会いたいと言って待つてるよ」

「後にもしてもらって下さい。まずはフィーゼさんの治療が先です」

「え？ いやしかし、今、医者が……」

アザルークとしては、サクラコが武力や浄化設備の建設に係わる知識に長けていることは承知していた。

しかし、サクラコの本質は医療用 A M である。メデイカル・オートノマス・マシン

「この地域の医療水準は理解していません。もし、内蔵にまで傷が達していれば、まず助からないでしょう。でも、本来私の得意分野は医療です。特殊輸送車両に一応の医療器具は備わってますから、私が見ます。フィーゼさんは死なせません。」

ドマイセンの指揮官の方には、容疑者の情報を提供しますので、まずはそちらの捕縛とサリアの無事な救出に全力を上げて欲しいと伝えて下さい。

犯人は恐らく『二重星』のローギルとザラという男女の2人組で、帝国ではそれなりに有名な傭兵だそうです。他にも仲間がいる可能性もあります。

彼等に指示したのは帝国の人間ですが、一部が暴走した結果と思われます。恐らく帝国方面に逃走を図る可能性が高いでしょう。

目的からするとサリアに即、命に係わるような危害を加えられるとは考えにくいですが、それでもサリアの無事を最優先に……たかが侍女の身と軽く見れば後悔させて差し上げます、と」

「わ、わかった。フィーゼはその奥の突き当たり右の部屋だ。ドマイセンの指揮官には俺の方から嚴重に伝えておく」

そうやってアザルークはサクラコと別れ、ジーマールに伝えるべく、彼の待つ部屋の方へと向かった。

後悔させられるのがドマイセンだけなら、まだいい。しかし、王国まで巻き添えにされたら堪ったものではない。

ガンマ・アース
この世界では人間の価値に大きな差が存在する。

もちろん、ベータ・アースでも建前はともかく、現実にはそれが無いわけではないが、ガンマ・アースでは建前に於いても明確な身分差があるのだ。

貴族家に仕えるとはいえ、単なる平民であるサリアの身は、自国内で外国の賓客に対するテロを起こされ、面子を潰されたというドマイセンの立場からすれば、犯人に対する報復よりも一段下がった所にあるのが現実だ。

アザルーク自身、そのことは『当たり前のこと』理解していたが、サクラコはそんなことは関係無いとばかりに『サリアの無事を最優先』と、条件をつけてきた。

もちろん、サリアとは言葉を交わしたこともあるし、良い印象を持ってはいる。無事であつて欲しいとも思う。

しかし、それをドマイセン側に徹底させることが、どんなに難しいか………。

(なんで俺が………伯爵様、恨みますよ………)

ダスターツ伯爵領軍から派遣された騎士達には、『出来る限りサクラコ殿の意向を優先しよう』伯爵直々に言い含められている。

ジーマールの待つ部屋に到着すると、アザルークはやや乱暴に扉を開け放った。

◇ ◇ ◇

それからのドマイセン国軍の動きは目を見張る物があった。

各方面への働き掛けを率先して行ったジーマールが、ニイロとその仲間が、やると言ったことは必ずやると身をもって体験していたことが大きい。

未だ王国から身柄が解放されていないオルフ・ヤノスの支持者達も、交渉の為にヤノスから送られてきた書状によって事情を理解する者が多く、その事も有利に働いた。

まず、速《すみ》やかに各地に早馬を送り、人質を抱えて移動速度

に限界がある誘拐犯に先回りして、他国への逃走ルートに嚴重な検問を敷くと、さらに3000の兵を追加動員して人海戦術で誘拐犯の炙り出しにかかった。

その結果、事件の翌日には、最も可能性の高いと思われたビンガインに向かう街道から、少し離れた場所で怪しい馬車の一団が網に掛かったが、これは誘拐犯が用意した罠であることも判明した。

そして、そのさらに2日後、本命が意外な場所で網に掛かることになる。

「ニイロです。宜しくお願いします」

ニイロは握手の為に手を差し出しながら、目の前の日に焼けた銀髪の大男に挨拶する。

場所は臨時に設けられた幕舎の中。

差し出されたニイロの手を、やや不思議そうな顔で見つめながら、オンド・チエセルは尋ねた。

「それは？」

「え？ ああ、これは握手と違って、俺の国では一般的な挨拶です。ガシマ・アースこの辺じゃ、やんないのかな？ 互いに手を握る。

理屈っぽく言えば、手に武器なんか持ってませんよ、敵意はありませんよ、という、友好の証しですね」

そう教えられて納得したのか、チエセルは『なるほど』と感心した様子で頷くと手を握り返した。

「オンド・チエセルだ。そしてこつちが検問でやつらを発見した小隊長のクーセット」

そう言つて傍らに立つ細身の男を紹介され、同じように握手を交わした。

「実は、コルエバンで貴殿の姿は拝見している。あの戦の後で、この北東区の軍区長に移動になったが、その前はジーマール將軍の下で、あの戦場にいたのだ。あ、いや、勝ち負けは戦場の習いであるし、貴殿に含むところは無いので安心して欲しい。ジーマール殿も貴殿を恨んではいなかった」

「そうですね。ジーマールさんは今回の件で色々動いて下さったとサクラコから聞いてます。戦場では色々あったけど……それはともかく、今は現状を教えてください。サリアの様子は？」

ニイロの催促にチェセルは緊張を強くした。

ここまで柔らかかったニイロの表情が急に引き締まり、怒りを堪えているように見える。

チェセルは「わかった」と頷くと、中央に据えられたテーブルの上に周辺の見取り図を拡げて状況を説明した。

「ここが今いる場所で、この先2kmほどの、ここがネウロン村だ。この村の裏手からネウロン間道が伸びていて、王国のコルエバンの南に出られる。」

ビンガイン経由で帝国に逃げると見せかけて、囷を使ってそちらに注目を集め、その隙にネウロン間道を徒歩で王国側に逃げるつもりだったんだろう。そこからルートを西に取ってヨーンネス大森林を抜けて帝国に向かう算段だったのではないかと思われる。

ネウロン間道は、コルエバンに進軍した際に突貫工事で馬車も通れる程度に整備されたんだが、戦後の処理で潰してあるから馬車で来れるのはこの村で終点だ。

それでこの先の検問で引っ掛かったんだが……クーセット、実際の状況を」

チェセルはそこから先の話を、実際に現場に立ち会った人間であるクーセットに振る。

彼はニイロを前に緊張した面持ちのまま、直立不動の体制で答えた。

「はっ、はい！ 例の2人組は、こうも早くここまで手配が回っているとは考えていなかったようで、この検問で見つかると思われれば馬車を捨ててネウロン村に逃げ込みました。」

中々の手練で、その際に兵士2人が軽傷、1人が重傷を負っています。さらに、予め村に潜伏していたと思われる仲間が合流して、元からの人質に加えて村長の13歳になる娘も人質にして、そのまま村長宅に立て籠まりました。その他の村民については、村長をはじめ全員

を別の場所に避難させてあります。

合流した仲間は6人。今は村長宅はもちろん、増援も得られませんでしたので村の周囲にも見張りを立てて、万が一にも逃がさない体制を取ってはいますが、人質に万が一があつてはならないとの厳命でしたので、どうも勝手が……正直、膠着状態です」

そこからは、またチェセルが言葉を継いだ。

「こんな所に仲間がいたのは予想外だったが、ヨース大森林を抜ける為に用意していたんだろう。あれを2人で、しかも人質を抱えて踏破するのは無理があるだろうからな。

それで今は、事態を打開するのに本営に連絡を取って、コルエバンでも使われた、あの姿を消す魔道具と、扱える人員を寄越してもらえないかと頼んだのだ。

貴重品だが、あれなら相手に気付かれることなく不意打ちでケリがつけられる。もっとも、貴殿には通用しなかったし、あの2人組が貴殿と同等以上の手練だった場合は別だが……それで代わりに来たのが貴殿だった、というわけだ」

「なるほど、よくわかりました……」

チェセルの依頼はジーマールの計らいでサクラコの知るところとなり、フィーゼの治療で動けないサクラコから連絡を受けたニイロが、サリア誘拐の一報を受けて急ぎドマイセンに電動二輪車を飛ばしていた進路を途中で変更して駆けつけたということだ。

「それで、後は任せてもらえますか？ 人質は必ず無事に取り返しませし、犯人は捕らえて引き渡します」

「ああ、それは構わない、と言うか、上のほうからもそうするよう命令が来ている。ただ……1つ聞いてもいいだろうか。

いや、単なる好奇心なので答えなくても結構だが、人質になっている娘はどういった人物なのだ？ 本部からは使節団の随員の侍女という説明だったが……」

チェセルとしては、いかに腕利きの傭兵とはいえ犯人は2人だ。通常の人質事件ならば現時点で捕らえている自信があつた。

それなのに、人質の安全を最優先し、絶対に傷つけてはならないと

いう本部からの通達で思うように動けなかったという不満があったのだ。

これが王国使節団の主要人物ならば、まだ納得できるのだが、これがたかが侍女では、人間の価値に格差のある世界の住人としては不満の方が大きくなってしまふのは仕方ないことだった。

「サリアはサリアですよ。犯罪の被害者です。身分なんか関係無い。だから、新たに人質になったっていう村長の娘さんも一緒だ。2人共、絶対に無事に取り戻す」

ニイロは、チエセルに答えるのではなく、まるで自分に言い聞かせるように言った。

サクラコの話によれば、犯人の狙いはニイロの持つ武力であり、ニイロを操るための餌としてサリアが狙われた。

サリアがどう思っているかは置いて、ニイロからすれば、サリアは単に知り合いの女の子にしか過ぎないのだが、犯人はそうは判断せず、その結果が今回の事件に繋がってしまった。

ニイロ自身を狙ってくるならばまだいい。しかし、サリアには何の落ち度もなく、彼女を守るために騎士の1人が命を落とし、フイーゼも重傷を負った。

(実行犯だけじゃない。後ろにいる黒幕も……)

ニイロは極力、国同士の事情には首を突っ込まないつもりでいた。それでも成り行きで巻き込まれはしたが、その基本スタンスは変えないつもりだった。

しかし、ニイロの持つ武力が知れ渡った以上、いくら拒否してもちよつかいを出してくる連中は存在し、それに巻き込まれる第三者がいる。

ならば……

「このままでは済ませない」

ニイロは断言した。

ネウロン村のほぼ中心に位置する村長の家。

時に小規模の集会などにも使われる、比較的広い10m四方ほどの

部屋に9人の人間、2人の人質と7人の誘拐犯一味がいた。

南向きの壁面には大きな窓があり、その横には直接外に通じる扉があるが、今は窓には布が掛けられ、扉は中から鍵と、さらに家具を積み上げたバリケードで塞がれている。

残りの三方にも他の部屋に通じる扉があるが、北と東の扉は同様に塞がれ、台所と廁に通じる廊下に面した西側の扉だけが開け放たれている。誘拐犯の残り1人は、そちらの方で見張りについていた。

室内は天井の明り取りの窓と、布を通して入る光だけでは薄暗く、昼間だというのに四方の壁に掛けられた灯明も点されている。

床には人質を盾に差し入れさせた食べ物残り滓が乱雑に打ち捨てられていた。

「くそっ！ これじゃ罫むちが明かねえぞ」

窓に掛けられた布の隙間から外を伺っていた男が鋭く声を上げた。

この家に立て籠もってから、もう何度目かの同じセリフだ。

「だーかーらー、もう少しだから大人しく見張ってるっての。無事に逃げたかったらチエルカの邪魔すんじゃねーよ」

椅子にだらしなく腰掛けたまま、眠そうな目を半眼にして男を窺たしなめたのは、二連星ふたつらぼしとして悪名高い、傭兵のローギル。

ウエーブの掛かった長目の金髪的美男子だった。

同じく二連星ふたつらぼしのチエルカはやはり金髪的美女で、今は部屋の片隅で床に直接座り込み、祈るように目を閉じたまま、目の前に置いたギターケースほどの大きさの箱に手を当てて微動だにしない。

額には玉の汗が浮かび、一種妖艶な雰囲気を漂わせている。

「しかしよお、ありゃ本当に使いもんになんのかあ？ テネツセラ男爵の寄越したって言うが、あの業突ごうつく張りばがそんな高価なもん寄越すかね？」

今度は別の男が、床に座り込んで自分の得物である短槍を、ボロ切れで手入れしながらローギルに聞く。

「まあ、俺もあの腐れ男爵は信用なんかこれっぽっちもしてねえよ？

ただな……確かに男爵は小者だよ。後ろにいるのさ、でっかいのが。」

そうじゃなきや、こんな博打バクチみたいな依頼、いくら金額が良くても受けねえよ」

「でっかいのって……確かテネツセラ男爵の親分はウォルムズ子爵だったっけか？ その親分は誰だっけ？ どっちにしてもザルーク派だろ？」

「ふふん。そう思うだろ？ ところが……おっと。まあ、色々あんだよ。まあ、俺たちや金さえきっちり取ればそれでいいじゃないか。それに、チエルカが本物だって言うんだから本物なんだって」
ローギルの返答に、聞いた張本人は「ふーん」と気の無い返事をするだけで、興味を無くしたように武器の手入れを続ける。

その様子にローギルは、拍子抜けしたかのように溜息をついた。
「まあ、いいけどね。それと、そこ！ 2人でボソボソ喋ってんじゃねえよ！」

そう言つて部屋の角の人質に鋭く釘を刺した。

そこにはサリアと、同じ歳か、やや下くらいに見える村長の娘が、両手を後手に縛られ、床に直接転がされている。

別の男が面倒臭そうに「猿轡さるくつわ噛ませとくか？」と聞くが、それには「飯食わせる時面倒だからいいや」とローギルは否定した。

「あ、あなた達なんか、ニイロ様が来ればすぐ捕まります！」

サリアが勇ましくも震える声でローギルに食つて掛る。

しかし、ローギルは余裕の表情でサリアに言い返した。

「ニイロ様ねえ。お嬢ちゃんドラゴンの竜を駆る勇者様ってところか？ そういやコルエバンの魔王とか言ってる噂も聞いたぜ？ 火を噴く悪魔を手下にしているとか、空飛ぶ悪魔を操ってたとか。もう話が盛られすぎてて訳わかんねえわ。」

ま、テネツセラ男爵ご自慢の魔人形が起動したら外の連中なんぞ目じゃねえし、おつかねえやつが来る前に、俺たちやさつさと帝国に戻つて、依頼主にあんたを引き渡したら貰うもん貰つてサヨナラするさ。

都合よくドマイセンの新兵器銃も手に入ったし、こいつも売ればしばらくは遊んで暮らせらあ」

ローギルはサリア達人質の側に無造作に転がしてある布で巻いた荷物に目を向ける。

そこには裏の伝つてから入手し、護衛騎士のエルナントを殺し、フィーズを負傷させたドマイセン軍の新兵器、鉄火棒三本が入っていた。

「だからよお、その起動には、いったいいつまで掛かるんだ？つて話なんだよ」

窓のところで外の様子を伺っている男が横から再びローギルに絡む。

「あん？ そんなの俺にわかるわけねえだろ。今、チエルカが頑張つてんだから待ってっの！ だいたい、ここまで恐いくらい順調に来たんだし、少しくらい苦労したつていいじゃねえか。

ダメだったら夜になって暗い内に人質を盾にして強行突破すりゃいいだけだろ？

「だいたい、これでも伯爵の令嬢の方とか、あのピンクの髪の得体の知れねえ娘狙ってるやつらに比べりゃまだいい方だぞ？ 後は逃げ切るだけなんだからよ。」

まったく馬鹿な連中だよ。いくら報酬が五倍だったって、王国とドマイセンの両方の護衛相手とか絶対割に合わないし、あのピンク髪は本気でヤベえ。こういう勘は当るんだよ」

若干堂々巡りになりかけている話に、ローギルも少々苛立ちの籠つた声で男に答える。

そしてそれを合図にしたかのように、これまで箱に手を当てた姿勢で微動だにしなかったチエルカが動いた。

気怠けだるげに「ふう」と溜息を一つ吐くと、眉間に皺しわを寄せて呟く。
「変ね……」

そう言うと、形の良い唇に手を当てて考え込む。

「おいチエルカ、何が変なんだ？」

「なんでえ、やっぱり偽物かい」

「やっぱりあの男爵やろ、ガラクタ掴ませてやがったのか」

「おいおい、今更勘弁しろよ……」

チエルカの不穏な様子に、これまで待たされていただけに、男達の

表情も陰しくなる。

しかし、そんなことは全く意に介さない様子でチエルカは言った。「そうじゃないわ。これがあの有名なヴェールサルク作の魔道具『魔人形』シリーズの内の1体、『首狩姫』なのは間違い無いのよ。この魔道士チエルカの名に賭けたっていいわ。」

ただ、この魔道具は、魔道士がこの器ケースを媒介にして魔力を注入することで起動して、魔道士の意のままに操れるはず。それなのに、どれだけ魔力を注いでも起動する気配がないのよ」

「おいおい、それじゃやっぱりニセ」「そうじゃないのよ」

疑念を呈する男に、すかさずチエルカは言葉を被せた。

「そうじゃなくて、ううん………感覚的なものだから、何て言ったらいいの………ニセモノだから起動しないんじゃないの。ちゃんと魔力は通ってるし、言うなれば、もう起動して………」

そう言いかけたチエルカの言葉を遮さへぎるように、突然、間の抜けたノックの音が室内に響いた。

コンコンという乾いた音に、室内にいた誘拐犯9人の目が一斉に西側の開け放たれた戸口に向けられ、そこに佇む1人男の姿を捕らえる。

一瞬、誰もがそちらで1人見張りについているはずの仲間かと思っただが、そうではなかった。

明らかに異質な格好の男、ニイ口は穏やかに言った。

「どうも。魔王です」

第28話 救出

時は少しだけ遡る。^{さかのぼ}

チエセルから説明を受けた後、クーセツトを伴って徒歩でネウロン村までやってきたニイロは、現場の兵士達と打ち合わせを済ませると、ネウロン村の中心に位置する村長宅へと向かった。

随伴するのはステルス・モードで姿を隠したファージとクラブの各スリーとフォーだ。

ファージとクラブの各ワンとツーは、手術の終わったファイゼの看護で動けないサクラコの元に残している。

ニイロは村長の家から直接見えない位置に潜むと、まずファージとクラブに指示して犯人の逃走経路に網を張らせ、各種センサーを動員して内部の様子を探った。

すると、南に面した比較的大きな部屋に1人を除く全員が集まっており、残り1人は北西の角にあたる調理場らしき場所にいることが判明する。

(侵入するなら、この調理場の勝手口か。サリアは……この隅の2人がサリアともう一人の人質かな？ 内部の映像が欲しいな……)

武装を確認し、腰の亜空間ポーチからステルスコートを取り出して羽織る。

以前、リンデン砦に向かったサクラコに持たせたものと同じもので、ニイロの身長に合わせて丈が長くなっていた。

フードを目深に被り、面前にも薄いベールを下ろして、裏地にあるセンサーを手順通り操作して起動させると、傍目からはニイロの姿が忽然とかき消える。

音は遮断できないし、昼間の日光の下では激しい動きをすると陽炎のようなモアレが発生してしまうが、ゆっくり動いたり、室内のように光源が限定される場所であれば問題なく隠密行動が可能だ。

そのまま音を立てないように注意しながら、ゆっくりと調理場の勝手口に近づくと、外の物置らしき小屋の陰に潜んで様子を伺う。

勝手口の扉は開け放たれていて、人が1人通れる程度のスペースを開けて家材道具を使った簡易のバリケードが設けられ、その陰に見張りらしき男の姿が見えた。

この位置なら銃による狙撃は可能だが、それでは奥の別室にいる犯人一味にもすぐ知れてしまうだろう。

(消音器なんて持ってないしなあ……さて、どうするか)

しばし考えつつ様子を伺っていると、奥の部屋から一味の1人が顔を出して、見張りの男と何やら短く言葉を交わすと見張りの男は奥へと引っ込んでいった。

どうやら交代の時間だったようだ。

(あつぶねえ。突っ込んでたら鉢合わせだよ。でも、これでしばらくは交代も無い……よな?)

ニイロが胸を撫で下ろしていると、交代で見張りにつくはずの男が、なぜかそのままスタスタと勝手口を出てニイロの潜む小屋の前まで歩いて来る。

(え? まさかバレた!?)

しかし、男の様子からはニイロの存在がバレている気配はなく、そのまま身を固くしたニイロの目の前を素通りして小屋の扉を開けて中へと入っていった。

しばらくゴソゴソと音がしたかと思うと、続けてバチャバチャと水が弾けるような音が聞こえてくる。

ニイロは小屋を物置と自然に認識してしまっていたが、村長宅は母屋とトイレが別になっている構造だった。

現代の日本でこそ珍しくなったが、昔は日本でもこういった構造はよくあった。今でも田舎では残っていることがある。

(小便かよ! てか、この小屋トイレか! 脅かしやがって……) 用を済ませて出てきた男の首筋に、背後からスタンロッドで電撃を浴びせて無力化する。

念を入れて、気持ち電圧高目でサービスしておいた。決して八つ当たりではない。多分。

麻痺して動けなくなった男の両手両足を、素早く結束ベルトで拘束

し、声も出せないよう猿轡を噛ませてから転がしておく。

まだ自由の利かない男の顔を強引に上空に向け、一瞬だけステルスモードを解除させたクラブの姿を目撃させてから、耳元で囁いた。

「コルエバンの噂を聞いたことは？」

ニイ口の質問に、男は首をガクガクと縦に振る。

「そうか、なら話が早い。俺が誰かもわかるよな？ この後、あんたの身柄はドマイセンに引き渡す。ここで大人しく兵が迎えに来るのを待つんだ。

もちろん、あんたは嫌だろう。だから、逃げ出そうと足掻くならばそれは自由だ。でも、あんたが逃げ出そうと妙な真似をしたら、上で監視しているアレが即座にあんたを殺す。逃がすくらいなら殺してもいいって言われてるしな。見えなくてもちやんといるから安心してくれ。

もしも、大人しくドマイセンの兵が来るのをここで待つならば、代わりに俺も、なるべく穏便にすませるよう口を利くくらいのこととしてもいい。どっちを選ぶかはあんた次第だ」

ニイ口はそれだけ伝えると、男を放置して見張りのいなくなった調理場の勝手口から村長宅内部へと侵入した。

調理場の横手から他の部屋へと続く、短く薄暗い廊下へと慎重に進むと、突き当たりが部屋になっていた。

扉の開け放たれた入り口からは、元からあったのだろうテーブルがバリケード代わりに、ニイ口から見て正面、東側の扉を塞ぐ形で立っかけられ、比較的広いがらんとした部屋の中には7人の誘拐犯と、サリアともう1人の人質の姿が見える。

人質の2人はニイ口がいる西側の入り口から、部屋を対角線に横切った南東側の角に縛られて転がされている状態だ。手だけを拘束されているように見える。

時折頭が動くことから、2人共に意識もあるようだ。

(やいて、どうするか)

いきなり踏み込んで誘拐犯全員を問答無用で射殺する手はあるが、出来ればその手は取りたくない。

(この配置なら使えるな。やっぱり、この手でいくか)

ニイロはまず、腰の亜空間ポーチから、ステルスローブの内側で小さなラツパのようなアイテムを取り出した。

鉱山精錬所の浄化設備建設の際に、作業員への指示をするのに使っていた小型の拡声器だ。

大勢の技術者を集めた講習会などでも重宝したアイテムである。

この拡声器には面白い機能があった。

ニイロは部屋の入り口からサリアが見えるギリギリの位置まで下がると、メガホンをサリアの顔付近に狙いを定めて小声で囁く。

『サリア、ニイロだ。絶対に声を立てないように。聞こえてたら、1度だけゆつくりと首を横に振るんだ』

ニイロが見ていると、1度びくりと動いたサリアの頭が、次いでゆつくりと横に振られる。

拡声器には通常の拡声器としての機能の他に、超指向性超音波スピーカーとしての機能があり、狙った極狭い範囲にのみ声を届けることができた。

この機能を持つスピーカーは、ベータ・アースでも既に実用化されており、京都の有名観光地などで実際に体験することもできる。

『よし、誘拐犯に気付かれたくない。じっとして、もう少しだけ我慢して。こつちからは見えてるから安心していい。それから、目を瞑って耳を塞いでおくように。出来たらもう一人の人質の子にも伝えて』

そう伝えると、またゆつくりと首を横に振る様子が見える。

きちんと伝わったようだ。

ニイロは意識を切り替えて、今度は誘拐犯達に注意を向けた。

「まあ、俺もあの腐れ男爵は信用なんかこれっぽっちもしてねえよ？

ただな……確かに男爵は小者だよ。後ろにいるのさ、でっかいのが」

「でっかいのって……確かテネツセラ男爵の親分はウォルムズ子爵だったっけか？ その親分は誰だっけ？ どっちにしてもザルーク派だろ？」

「ふふん。そう思うだろ？ ところが……おっと。まあ、色々

あんだよ」

主犯らしき金髪の男と、別の男との会話が聞こえてくる。内容からすると、今回の犯行の黒幕に関することらしく、金髪の男は黒幕を知っているように思えた。

(生かして捕らえて情報を吐き出させて、根っ子から絶つ。そうしないとまた狙われる人が出る、か)

やや不毛にも思えるが、ニイロとしても後戻りはできない。

人知れず孤独に隠遁生活でもしない限り、このガンマ・アースで生きていく以上は降りかかる火の粉を払わねばならないのだから。

元はと言えばギガントライを討伐し、この世界に不釣り合いな武力を行使したことが事の発端だが、あの時点では村を救える武力を持ちながら見捨てる選択肢などニイロには無かった。

「あ、あなた達なんか、ニイロ様が来ればすぐ捕まります！」

ふと気付くと、サリアの勇ましくも震える声が聞こえた。

どうやら少し自分の考えに没頭していたらしい。

(いかにいかに。それにしてもサリア、誘拐犯刺激しちや駄目だつて！)

ニイロが助けに来たことを知ったことで、少々気が大きくなったのかも知れない。

幸いにも誘拐犯側は単なる強がりと取ってくれたようだ。

「ニイロ様ねえ。お嬢ちゃんドラゴンの竜を駆る勇者様つてところか？ そういやコルエバンの魔王とか言ってる噂も聞いたぜ？ 火を噴く悪魔を手下にしてるとか、空飛ぶ悪魔を操ってたとか。もう話が盛られすぎてて訳わかんねえわ」

(わかんねえのはこっちだよ！ また何か二つ名増えてるし！ 魔王？ 勘弁してよ……)

聞いているとなぜかニイロのMPメンタルがガリガリ削られる。

中高生ならいざ知らず、三十路過ぎのおっさんが勇者だの魔王だの、これ以上は耐えられない。

ニイロは意を決すると開け放たれた入り口を塞ぐように立ち、いきなりステルスローブの機能を解除した。

そして、わざと自分に注目を集めて人質から気を逸らすよう、やや芝居がかった仕草で入り口の壁を『コンコン』とノックする。

それまで誰もいなかった部屋の入り口に、突然降って湧いたかのように現れた異形の人影に、誘拐犯達の視線が一斉に集まった。

「どうも。魔王です」

半ばヤケだ。開き直ったとも言う。

ニイロはそう言うと、両手に1個づつ持っていたスタングレネードを足元に転がした。

ニイロに集まっていた誘拐犯達の視線は、無意識に床に転がるスタングレネードを追う形になる。

部屋の中に響き渡る、バン!! という大音響と、猛烈な閃光を伴って破裂したスタングレネードは、思惑通り、見事誘拐犯達を行動不能に追いやった。

実はスタングレネードの効果はある程度『慣れる』そうで、その効果が知れ渡っているベータ・アースに於いてはある程度対策を採ってくる犯人もいたりするそう。

しかし、その存在自体が知られていないガンマ・アース人に対する効果は^{てきめん}覲面だった。

「ぐわっ！ おい！ 目が！ 目が見えねえ！」

「なんだっ!? 何が！ 耳が！ 誰か返事しろ！」

「おい！ 魔王が来たのか！ 何が起こってるんだ！」

「きゃああっ!!」

「今のは何だおい！ 聞こえねえ！ 見えねえぞっ！」

「何だっつてんだちくしょう！ 目がっ！」

「目があゝ 目があゝ」

どこかの王の末裔とか言う、某大佐みたいなことを言ってるやつま

でいる。
ニイロはスタングレネードの効果が続いている内にと、素早く腰のホルダーからスタンロットを引き抜いて電撃で麻痺させ、^{ハンド}結束バンド^{カブ}を使って全員の手足を拘束していった。

「ひくひよう、おめえが魔王か！ ろうしてこんな早く……」

最後の1人を拘束し終える頃には、最初に拘束した金髪の男、ローギルが大分回復したようだ。

だが、回復したとは言っても、まだ呂律ろれつが回っていない。

ニイ口は魔王呼ばわりに苦笑いしながら、ローギルに答えた。

「俺は普通の人間だよ。俺のせいでサリアが誘拐された。だから必死で取り返した。それだけだ」

そう言うと、今度はサリアと村長の娘の元に歩み寄って2人の拘束を解いた。

「二人共大丈夫か？ 目と耳は？ どこか怪我とかしてないか？」

介抱しながらそう尋ねると、村長の娘はよほど恐かったのだろう、堰せきを切ったように涙と鼻水で顔をグシャグシャにしながら泣き出してしまった。

「えっ、えぐっ……ええええええええ!! こっ、恐かったよおおおう、お父さああああん!!」

これにはニイ口としては困ってしまう。

オロオロと狼狽しつつ、「大丈夫、もう大丈夫だから」「お父さんともすぐ会えるから」などと声を掛ける以上のことが出来ない。

が、そこはサリアが気丈な様子で横からフォローしてくれた。

村長の娘の肩を抱いて、「ニイ口様が来て下さったから、もう大丈夫だよ」などと声を掛けながら慰めている。

「わっ、私の方は平気です！ まだ少し耳がキーンってなってますけど」

スタングレネードは非致死性の兵器だが、破裂した位置が近すぎたりすると、その大音量と閃光は稀に目や耳に障害を残す場合がある。それを心配して目と耳を塞ぐよう、事前に指示したのだが、どうやら大丈夫だったようだ。

「そうか。それは少し時間を置けば元通りになるから心配しなくていいはずだよ。後始末してくるから、ちよつと待っていてくれ」

そうサリアに告げると、覆いの掛けられた窓に歩み寄り、布を引き剥がしてガタつく窓を開け、大声でドマイセンの兵士達を呼ぶ。

そんなニイ口の背後から、女の声が聞いた。

「あたし達をドマイセンに引き渡すの？」

振り返ると、拘束された状態で転がされている誘拐犯一味の1人、チエルカとか言う女だ。

ニイロは「ああ」とだけ答えてドマイセンの兵士達が来るのを待った。

「そんなことしても、あんたに何の得も無いでしょう。どう？ あたし達と一緒にバネストリアに来てくれれば、あなたに損はさせないわ！」

チエルカは必死に言い募るが、ニイロの心には何も響かない。

別に損得で動いているわけでもないし、いずれ調査の為にバネストリア帝国に行くことがあったとしても、それは別に利益を求めてのことじゃない。

「そうだな……近々帝国には行くことになるだろうな」

ニイロがそう言うと、チエルカは顔を輝かせてニイロを見つめる。

「だったらー！」

「だからと言って、あんた達を見逃すわけにはいかないよ。

これが直接俺に手を出したんだったら、また話も違ったかも知れない。でも、あんた達は護衛のエルナントさんを殺し、フィーゼさんを傷つけ、サリアを攫った。たまたま俺と親しかったからという理由でね。

だから帝国には行くけど、それは別に金を稼ぎに行くわけじゃないよ。こんなことを企てた人に、きっちりご挨拶すべきだろう？

その為にも、あんた達には色々教えてもらいたい。特にそちの金髪のお兄さんは、色々黒幕のこと知ってそうな話もしてたし、念入りに背後の話を聞かせてもらいたいね」

我ながらちよつと悪役っぽいセリフかな、などと思いつつも、ふと窓の外を見ると、チエセルを先頭にドマイセンの兵士達がやってくるのが見えた。

ニイロは窓越しに一言声を掛けてから、塞がれていた外に通じる扉のバリケードを撤去する。

なんとか人が通れるスペースを確保すると、サリア達に声を掛けて

外へと連れ出した。

「人質は無事か、見事なもんだな。一応、医務兵を連れて来たので見せるといい。今、クーセツトには村長を呼びに行かせた。娘が無事と知ったら喜ぶだろう。それで犯人達は？」

ニイロの元に歩み寄ってきたチェセルが声を掛けた。

チェセルに同行してきた女性の医務兵に、診察の為にサリア達を引き渡してから、ニイロはちらりと後ろを振り返る。

「まだ部屋の中です。拘束して転がしてますから連行して下さい。あ、そっちのトイレ小屋の陰にも1人拘束してあるんでお願いします」

「生かして捕らえたのか。連中の身柄は引き取っても？」

「ええ、生きてますよ。ここはドマイセンで、連中はドマイセンの法を破った。だからドマイセンの法で処罰されるべきだ。そのことに俺が口を挟む権利なんてないでしょう。」

被害者は王国人だけど、そこは王国の人と折衝せつしょうして下さい。

ただ、連中は単なる実行犯だ。その後ろで今回の件を画策した黒幕についてもきっちり調べてもらって、後で出来る限り情報を教えてもらえると助かります」

「そうか。配慮を感謝する。そちらの要望にも出来る限り応えられるように努力しよう。しかし……なんだな……」

チェセルは付き従う兵士達に誘拐犯を連行するよう、身振りで指示しながらも、なぜか口籠る。

ニイロが不思議そうな顔でチェセルを見ると、ややバツの悪そうな顔で口にした。

「いやなに、失礼だが、正直な話『コルエバンの魔王』のイメージとのギャップがな……誘拐犯も生かして捕らえるとは思わなかったし、こちらに配慮までされるとも……いや、ジーマール殿の話では、話せば通じる人間だと聞いてはいたんだが……」

正直なのはいいが、確かに失礼な話だ。

ニイロも思わず苦笑してしまったが、その表情は一瞬の内に凍りついた。

「ぐわっ!!」

「何っ!?!」

「きゃああああああっ! ローギル! ローギルっ!!」

誘拐犯達を連行するために兵士達が向かったはずの部屋の中から、複数の悲鳴が響く。

ほとんど条件反射のように、ニイロとチエセルは我先にと無言で部屋に駆け込んだ。

その目に飛び込んできたのは、喉笛を掻き切られて噴水のような血を撒き散らす、二連星ふたつらぼしのローギルと、後手に拘束されたまま、半狂乱で彼に寄り添うチエルカ。それを取り巻くドマイセンの兵士達と、周囲を威嚇するように宙に浮かぶ小さな人影——魔人形の姿だった。

第29話 首狩り姫

バナストリア帝国には都みやこと呼べる都市が3つある。

一つは皇帝の住居でもある皇城を擁し、政治を司る帝都アイ・クナード。

名目上の首都でもある。

そして2つ目は、帝都アイ・クナードと、大河ナースチア川を挟んで対岸に位置する、別名魔道士の国とも言われるバナストリア帝国を象徴する学都アイ・ベルニス。

最後に3つ目は、ナースチア川下流の穀倉地帯にあり、帝国の富と食を支え、最大の人口を誇る商都アイ・ノワイスである。

今、帝国の帝位は空位になっている。

父帝クロドネック・ミアサ・バナストリアの崩御後、嫡男である次男のコノヴァン・アマルース・バナストリアが継いだだが、近衛の反乱によって謀殺されてしまった。

これによつて空いた帝位に名乗りを上げたのが、先帝の庶子で長男でもあるザルーク・シール・バナストリアと、謀殺されたコノヴァン帝の同母弟であり、先帝の三男のオルグス・アマルース・バナストリア、それに先帝の弟である皇弟、ゼールス・ビアノース・バナストリアであった。

3人は、それぞれ長男ザルーク派が帝都、三男オルグス派と皇弟ゼールス派が商都アイ・ノワイスを本拠として勢力拡大の為の暗闘を繰り広げていたが、ここに來て皇弟ゼールス派が三男オルグス派を下したことで商都アイ・ノワイスの全権を掌握し、富と食料の供給を掌握したことで一気に抜け出した感があった。

長男ザルーク派が拠よる帝都は守るに易い堅城で、籠城すれば数年は持ち堪こたえるだろう。だが、それだけだ。

趨勢すうせいは決まったと見るのが大方の見解であった。

そして今、政争の舞台となっている帝都や商都と比べると、今ひとつ影の薄い学都アイ・ベルニスにある、とある館に、夜分、数人の男達が訪れていた。

館の主人が女性であることも鑑みれば、少々礼を失する時刻ではあるが、客の来訪を告げられた女主人は快く来訪者を受け入れた。

「お久し振りです、ザルーク兄様。ようこそいらつしやいました。メイサーラお義姉さまはお元気ですか？」

うら若き女主人、テイリザ・エルノ・バネストリアは、そう言つて夜分の客、ザルーク・シール・バネストリアを迎え入れた。

テイリザは現在16歳。腰まで届く赤味がかつた金髪、俗にストロベリーブロンドと呼ばれる髪を持った少女だ。

決して絶世の美人などではない。歳のわりにはやや低い身長と童顔から、可愛らしいという評価が一般的だが、本人と相對すると、長らく学都の住人として過ごした結果、様々な学識を蓄えた知性を宿す、黒い瞳が深く印象を残す。

かたや、ザルークは現在27歳。180cmほど身長で痩せ型の体型。

母親が平民の庶子ということもあつて、あまり表舞台に登場することとは無かつたが、庶民からは帝室の一員ながらも身近な存在として一定の人氣があつた。

そのザルークは、通された応接室で歳の離れた妹と相對しながら、やや余裕の無い面持ちで急な訪問を詫びる。

「こんな夜分にすまないな。あれも元気だよ、まあ、一応は、な。それにしても本当に久し振りだ」

「ええ、陛下の……コノヴァン兄様の葬儀以来ですから、もう4年になりますわね」

「そうだな。互いの立場を考えれば致し方ないこととはいえ、こんな近くに住んでいながら、兄妹が普通に会うことすらままならないとは……皇家と言つても情けないことだ」

ザルークは首を振りながら嘆息する。

これまで、長男ザルーク派と三男オルグス派、皇弟ゼールス派が三つ巴の権力争いを繰り広げる中、第二王女であるテイリザは、ここ学都アイ・ベルニスに籠り、あえて権力闘争から距離を置いていたのだが、様々な事情から同じように三者の争いと距離を置く他の帝国貴族

達が自然発生的にテイリザの元に集結する形となって、この学都で中立派と呼べる派閥を結成する事態となっていた。

このため、ナースチア川という大河を挟んで指呼の距離にありながら、ここ数年双方の交流はほとんど無いに等しい。

挨拶を済ませ、互いに向かい合つて席に着くと、テイリザの侍女達がテキパキと茶を用意し、それが済むと速やかに部屋から退出する。

ザルークもテイリザも護衛は別室に待機させており、兄妹2人だけが部屋に残った。

「それで、今宵の訪問の用向きをお伺いしても宜しいですか？」

テイリザが兄に問う。

「わかっているだろう」

「中立派を自分達の味方につけたい、と。無駄ですわ。今更ザルーク兄様と中立派の皆様が一緒になったところで、もう叔父上の有利は動きません。」

せめてザルーク兄様がオルグス兄様と手を結んで下さっているだけで違つたのでしようけど……」

そう痛まじげな表情で言うテイリザに、ザルークも表情を曇らせた。

「確かに、あれがもう少し分別のつく男であつてくれれば、俺はやつの下についても良かった。ただ、ギスタエス公爵の操り人形でしかなかったやつでは……」

確かに三男オルグスの評判は最悪に近かった。

コノヴァンに次いで帝位継承権第2位の皇子として、我侂放題に育てられた結果、人望は皆無に等しく、それでも派閥を形成できたのは舅しゅうとであるギスタエス公爵の力であり、事実、今年になってギスタエス公爵が病没すると、オルグス派はお湯に投じられた角砂糖のごとく、あれよという間に崩壊してしまった。

ギスタエス公家を継いだ息子の新当主は、さつきとゼールス派に鞍替えし、現在、オルグス本人は行方不明となっている始末である。

「ザルーク兄様……このようなことを言えばお怒りになるかも知れませんが……もう諦めになつては如何でしょう……」

確かに、叔父上が帝位につけばザルーク兄様を生かしておくとは思えません。しかし、今ならば他国へと逃れる隙もありましょうし、私も精一杯力添えをさせて頂きます。どうか………考えては頂けませんか？」

思いがけない妹からの勧告に、ザルークは顔を赤くして捲くし立てた。

「なにを馬鹿な！ あの男が帝位につけば、お前の身とて危ういのだぞ？ やつは自分の地位を固める為に、お前を我が物とするだろう。そのようなこと、俺には絶対に我慢できん！」

俺が庶子でありながらこの争いの場に立ったのも、帝国の行く末を考えたのは勿論ながら、お前にもいずれば好いた男と添い遂げてもらいたいという気持ちがあつてのこと。少なくとも、あの男だけは帝位に就かせてはならん！」

「それは………私はよいのです。私の身一つで争いが避けられるのであれば、それも皇家に生まれた者の運命でしょう。」

私が今、まがりなりにも中立派と呼ばれる方々の旗頭となつているのも、そうすることで大きな争いになり、帝国の民が内輪の争いに動員され、戦場に駆り出されるのを防ぐためでした。

全て思惑通りなどと自惚れたことは言えませんが、現にこれまで何年も権力者同士の暗闘はありましたが、幸いにも大きな戦い^{いくさ}にだけはならず済んでいます。ですから、もう………」

テイリザは懇願とも言える呈でザルークに願うが、ザルークは首を横に振った。

「駄目だ。戦を避けたいお前の気持ちはわかるが、やつが帝位に就けば同じこと。恐らく、父上が存命の折りより公言していた王国への侵攻を画策するのは目に見えている。」

これまで民を動員してまでの大きな戦にならなかったのは、お前の努力もあつただろうが、実際は自分が帝位に就いてから起こす王国侵攻に必要な兵の損失を嫌つてのことだ。そうなれば、王国だけじゃない、四力国連合も巻き込んだ大戦^{おほいくさ}となる。

だからこそ、あの男だけは絶対に帝位を渡すわけにはいかないの

だ」

「だから……先に王国を巻き込むのですか？」

テイリザが硬い声で問う。

しかし、その問いにザルークは戸惑いの表情を見せた。

「先に王国を巻き込む？ すまないが、意味がわからない。どういう意味だ？」

問い返されてテイリザは眉を顰めた。

惚けているのか、それとも本当に知らないのか。

「ザルーク兄様の派閥に、テネツセラ男爵がおられますよね？」

「テネツセラ男爵……ああ、思い出した。確かウォルムズ子爵の紹介だったと思うが」

ザルークには意味がわからない。

下級貴族と王国と、何の関係があるのか。

実際、帝国の貴族は下級の男爵以上で300を越える。ザルークにしても、一応味方とはいえ下級貴族である男爵位の人物まで詳細に覚えてはいなかった。

「二月ほど前、テネツセラ男爵は傭兵を雇い入れてドマイセンに送り込んでいます。その数は100近く。

男爵個人の企てでこれほどの数を集めるのは不自然ですし、後ろにもっと力を持つ人物がいるものと推定できます。

ウォルムズ子爵は……あの方にそのような甲斐性は無いでしょうね。

そして今、ドマイセンには王国の使節団が訪れていて、その使節団には、正体不明の人物……ザルーク兄様は近頃王国に現れたという、コルエバンの勇者？ 魔王ですか？ ご存知でしょうか」

「ファノ家の調べか？ 王国に現れたという人物の話は、噂だけなら聞いた。しかし、あれは王国が小規模の傭兵団を英雄に仕立て上げたものだろう。コルエバンまでみすみす攻め込まれたのを誤魔化すために、国民向けに景気のいい話を流すことはよくある……違うのか？」

「はい。件の人物は実在しますし、噂は概ね真実を伝えているようで

す。今回、四力国連合は1万近い兵を動員したようですが、ニイロとサクラコという、たった1組の男女、と、彼らが操る魔道具に撃退されたそうです。

そして王国では、特にダスターツ伯爵が友誼を結んでいるとか。

ファノ家の調べでは、テネツセラ男爵に雇われた傭兵は、今回、ニイロという男と親しい人物を拉致して、ニイロという男を操ろうと画策している節がある、と。

もしもダスターツ家縁ゆかりの者に出せば、これは王国への宣戦布告と取られかねません。何としても阻止するようにと、私の独断でファノ家の者達を遣つかわせたが……」

テイリザの話聞くザルークの表情が、赤く青く目まぐるしく変わる。

テネツセラ男爵は確かに自分の陣営の者だが、そんな話は全く聞いていなかった。これはどういうことなのか。

ザルークの頭の中で様々な考えが交錯する。

「テイリザ、濟まないが今宵はこれで失礼する！ 必ず近い内に再訪するので、今宵の続きはその時に話そう。今は急ぎ帰ってテネツセラに確認せねば取り返しのつかないことになるやも知れん」

そう言うが早い、ザルークは席を立つと慌しく部屋を後にした。

◇ ◇ ◇

只ならぬ悲鳴を聞きつけて部屋に飛び込んだニイロの面前には、信じられない光景が出現していた。

帝国ではある程度名の通った傭兵であった『ふたつらぼし二連星』のローギルが、その首から噴水のように血を迸ほとぼしらせ、半狂乱になった相棒のザラが身悶えするように体を寄せている。

両手が自由であるならば、溢れ出る血を押さえないのだろうか、後手に拘束され自由のならない身では、ただ虚しく愛する者の血を浴びるだけだった。

そしてその頭上には、赤黒いドレスに身を包んだ少女——ただし、

その身長は60cmほど——明らかに生身の人間ではない物体が、まるで宙に糸で吊られたかのように、ふわふわと浮かんでいた。

その姿はベータ・アースで言うならビスク・ドール、現代日本では球体関節人形であろうか。

白磁のような肌に長くウェーブのかかった銀の髪、硝子の碧眼^{ガラス}。柔らかな微笑を湛^{たた}えた唇は、血を吸ったかのように赤い。小さな両手には、刃渡り30cmほどのサーベルに似た片刃の直刀を持ち、体の前でハサミのように交差させていた。

均整の取れた顔立ちは愛らしく、それが余計に異様さを際立たせている。

誘拐犯達を連行するため部屋にいたドマイセンの兵士達は、事の展開に思考が追いついていないのか、その殆どが呆然と眺めるだけで、その兵士達の足元を、拘束されたままの誘拐犯達が芋虫のように這いずって脅威から逃れようとしていた。

その奇怪な人形は、悲鳴を聞いて飛び込んできたニイロとチェセルに気付くと、威嚇するかのように両手のサーベルを拵げ、全身を振るわせるようにケタケタと笑う。

磨^すりガラスを引っ掻くような、人を不快にさせる甲高い笑い声が室内に響いた。

「にん．．．．ぎょう?」

ニイロは思わず呻いた。

宙に浮いたまま、狂気を感じさせる笑い声を発し続ける人形。しかし、その顔の表情は全く動くことはなく、けっこうホラーだ。

ニイロの声を聞きつけたのか、人形はスイツチでも切り替えたかのように突然笑い声を止めると、虚ろな目玉にニイロの姿を捉え、今度は幼女のような甲高い声でニイロに語りかける。

「あなたがニイロ? でも、あなたの首は切つちや駄目って言われているのよねえ。つまんなーい」

邪気の無さそうな声^{こわね}音で物騒なことを言う。

そういえば、サリア達の救出に忍び込んだ際に、誘拐犯の女の方が魔人形がどのと言っていたことを思い出した。確か．．．．

「首狩り姫……」

記憶を手繰ってそう呟いたニイロの言葉に、横に並ぶチエセルがギョツとした顔で振り向いた。

「あれが首狩り姫!？」

その瞬間、宙に浮く人形はチエセルの隙を見逃すことなく、するすると空中を滑るようにチエセルに迫った。

「っ!!」

それを見たニイロが、素早く腰のホルダーからスタンロッドを引き抜くと、チエセルの首を掻き切ろうと迫る人形に向けて思い切り突き出した。

ガチン! とスタンロッドが人形を叩くが、焦ったせいで電撃を浴びせるタイミングは逃してしまった。

「なによ、邪魔しないでよう」

甘えるような、嘲あざけるような声で人形が抗議する。

「すまん、助かった!」

チエセルはそうニイロに声を掛けると、同時に腰に佩はいた剣を抜き、そのまま人形に向かって踏み込んで中段からの斬撃を放つ。

しかし、その一閃は人形の持つサーベルによって弾かれた。

「くっ、意外に重い!」

チエセルの口から声が漏れる。

逆に空中を自在に浮遊する人形は、上下左右からトリツキーな動きでチエセルを翻弄した。

横薙ぎの一撃をストンと落ちるような動きでかわすと、そのままチエセルの足元に潜り込み、脹脛ふくろひざぎの辺りを双剣で切りつけつつ、今度は上昇に転じて顔面を狙う。

そうかと思えば、今度は右に左にと自在に回りこんでは、隙を見つけて突っ込んでくる。

チエセルも何とか反撃に出ようとするが、的てが小さく人間とは勝手の違う異質の相手に、かなり梃子てこ摺ずっているようだ。

絶え間なく続く人形の嘲笑が神経を逆撫でする。

浅手ではあるが、いくつか傷を受けていた。

ニイロもなんとか加勢したいが、部屋の中ということもあってチェセルの邪魔になつてはと迂闊うかつに手が出せない。

それに、部屋の中を縦横に飛び交う人形相手では、銃で撃とうにも誤射の恐れがあった。

ニイロは、そこでまず、部屋の中にいる兵士達に誘拐犯達を外に出すようお願いした。兵士達はニイロの部下ではないので、命令ではなくお願いだ。

呆然としていた兵士達は、取りあえず指示が出たことで慌ててそれに従い、拘束されて自由の利かない誘拐犯達を引きずるように部屋の外へと引つ張り出した。

ローギルは既に事切れており、茫然自失の呈で動かないチエルカも、同様に無理矢理引きずり出された。

万が一にも巻き添えを食う人間がいなくなったことで、ニイロにも少し余裕が出る。後はチェセルの動きにだけ注意すればいい。

スタンロットをホルダーに収め、亜空間ポーチから代わりの武器を取り出した。

室内での人質救出作戦用に用意していたが、結局使わなかったものだ。

「ぬんっ!!」

チェセルが裂帛れっぽくの気合を込めて人形の突進を弾く。

それによつて互いの距離が少し開いた。

「なあに、それ？ 今度はあなたがお相手？ でも、あなたの首は切つちや駄目なのよねえ」

人形が小首を傾げるような仕草——表情は全く動かないが——でニイロに聞く。

チェセルと剣を交えながら、ニイロの動きにも注意を払っていたようだが、ガンマ・アースでは本邦初公開となる見慣れない武器に興味を引かれたようだ。

しかし、ニイロはあえてその問いに答えず、今の内にとチェセルには下がるよう身振りで指示しながら、逆に聞き返した。

「なんであの男を殺した！ 味方じゃなかったのか」

「味方？ 知らない。あたしはご主人様から、あの連中が失敗しうになつたら、捕まる前に首をちよん切っちゃいなさいって言われてただけなもの。」

ご主人様のこと、ペチャクチャ喋られる前に、喋れなくしちゃわな
いと駄目よつて、ご主人様言つてたわ。

それが済んだら、ご褒美にあなた以外の連中の首もちよん切つちやつていいわよつて、ご主人様は仰おっしゃつたの」

人形はそう言つて、またケタケタと身を震わせて笑い出す。

その姿は、どう見ても悪魔憑き人形だ。聖水でもあれば効果がありそうだが、生憎とそんな物は持つていないし、当然、十字架も持つてない。

しかし、人形の言葉の中で、ニイロはふと気付く。

「ふーん、なるほどね。つまり、お前は失敗した時の後始末に使われただけの、単なる使い捨て人形つて訳だ」

ニイロの挑発に、人形の周囲の空気が禍々まがまがしく歪ゆがむ。

空気が見えるわけではないが、明らかに部屋の中の温度が急激に下がっている。僅わずかだが、吐く息が白い。

「言つたわね……」

「ああ、言つたさ。だつてそうだろ？ どうやら不意打ちは得意そうだけど、それだけだし、第一、おつむの方の出来も残念そうだしな

そこの男の口は封じても、自分でペラペラ喋つてくれるんだから笑つちまうよ。こんなガラクタ人形じゃあ、お前の女主人も使い捨てるのに躊躇ためらわなかつただろ」

「殺してやる……殺す殺すコロス殺してやる……」

部屋の温度はますます下がり、ニイロの吐く息は、もう明らかに白い。

しかし、それでもニイロは挑発をやめない。

「おやおや、俺は殺しちや駄目だつて言われてたんじゃないのか？

ご主人様の言いつけも守れないんじゃ、こりやガラクタ確定だな。こんなポンコツで役立たずのガラクタじゃあ、捨てられても当たり前だよなあ、ガ・ラ・ク・タ・ちゃん」

「ガラクタだとおおおお!!」

言うが早いか、人形が両手のサーベルを振りかざしてニイロに向かつて突進した。

しかし、怒りに任せた突進は直線的だ。

「ほら、やっぱりお前はガラクタだ」

ニイロの手にした武器、散弾銃ショットガンが火を噴いた。

室内戦用にと準備していた短銃身ショートバレル——俗にソードオフとも言われる——のポンプアクション5連発散弾銃ショットガンが人形を迎撃する。

小さいとはいえ60cmはある標的を、この距離で外すことはない。

まともに散弾を浴びた人形は、破碎された部品を撒き散らしながら壁際まで吹き飛んだ。

ニイロの攻撃はそれで止まらず、2発、3発と撃ち込んで徹底的に人形を破壊する。

薄い壁には大小無数の穴が開き、向こう側が見えた。

魔道具という、ニイロの理解の及ばない仕組みで動く殺人兵器に、中途半端な攻撃で反撃を受ける愚は避けたかった。

念の為に1発を残し、4発を撃ち込んだところで銃撃を止め、ジリジリと慎重に近づいて様子を伺う。

ドガンドガンとけたたましかった銃声が止むと、それを埋め合わせるかのごとく静寂が部屋の中を支配した。

人形の周囲を覆っていた禍々しい空気は霧散し、室温も正常に戻っているようだ。

ホラー物ならもう一波乱ありそうな場面だが、人形の四肢は無残に砕け散り、見た目だけは愛らしかった顔も半分が吹き飛んでいる。ピクリとも動き出す様子は無い。

残った顔や、千切れてボロボロになった衣装の隙間から見える、白磁のようだった肌の色が、なぜか血のようにどす黒く染まっているのが不思議だったが、きつと魔術的な理由だろうと深く考えないことにした。

考えたところで理由がわかるとも思えないし、ひたすら不気味なだ

けだ。

「凄まじいな……」

「どうやら大丈夫と判断して構えていた銃を降ろすと、チエセルが言う。」

「それが散弾銃の威力を言ったものか、あの人形の不気味さを言ったものか、はたまたその両方か、ニイロには判断がつかずにただ無言で頷いた。」

「あれがああ首狩り姫だったのか？」

「チエセルは残骸になった人形を気味の悪いものを見る目で見つめながら言った。」

「いや、俺は誘拐犯の女が言ってるのを聞いただけです。ナントカって人が作った首狩り姫だって。有名なんですか？」

「ああ、有名というか、半ば伝説というか……100年くらい前の高名な魔道士が作った魔道具の人形で、10体作られた内の1つだ。」

「当時権勢を誇った帝国貴族の一族を一夜で滅亡させたとかって言われている。帝室の宝物庫に『顔無し道化師』と『鏡姫』ってのが現存してるそうだが、残りは散逸してて不明だ。残っててもあと1体か2体くらいだろうとは言われてたが、実際に現存してたってことだな。」

「まあ、よくある話で子供の躰に『言うこときかないと首狩り姫が来て、首をちよん切るゾ』ってな具合に使われてな、俺も子供の頃に聞かされたよ」

「なるほど。まあ、その辺もあの誘拐犯達に聞けば少しはわかるかも知れないですね」

「そうだな。とりあえず、ここの検証もしなけりゃならんし、兵を呼んでいいか？」

「部屋の中は、一連の出来事に乱雑を極めており、壊れた家具類に誘拐犯達が食い散らかした食べ物、人形の残骸、それにローギルの遺体も残されている。」

「これらを検証するのもチエセル達の仕事だ。」

「そうですね。お願いします」

ニイロはそれに同意してから、外に通じる、今は開け放たれた扉から外に出た。

見ると、少し離れた一面に拘束した誘拐犯達を集めてあり、周囲を兵達を取り囲んでいる。

そちらの方へとゆっくり歩きながら、多機能ゴーグルに仕込まれた通信機を起動してサクラコに連絡を入れる。

「サクラコ、ニイロだ。こっちは粗方あらかた片付いた。サリアも無事だよ」

『よかった。こちらは変わりありません。フオーゼさんも峠は越えたと思いますが、まだ感染症が心配ですので、暫くは経過観察が必要ですよ』

「そうか。じゃあこの後、後始末が済んだらサリアも連れてそちらに向かうよ。メリーチエ様も心配してるだろうから、そう伝えておいて」

『了解しました。それと、ニイロ……サリアさんを無事助け出して下さって、有難う御座います』

サクラコが改めて礼を言う。

サクラコとしては自分が守れなかったという罪悪感があるらしい。

ニイロとしても自分のせいで巻き添えを食ったという認識がある為、サクラコが罪悪感を感じる必要は無いと思うし、礼を言われると少々おもほゆ面映い。

自分がサリアを助けるのは当たり前だ。

だが、サクラコの気持ちもわかるので、あえてそれには触れずにおく。

「いいさ。とにかくこっちを出る時にまた連絡するよ。んじや、また後で」

そう言って通信を切った。

すると、それを待つていたかのように誘拐犯の女——チエルカがニイロに向かって叫んだ。

「あんた！ あんたこれから、あたしらの依頼主に会いに帝国に行くんだろう？ 頼むよ！ あたしも連れて行っておくれ！ ローギルの仇を取りたいんだ！

それさえ済めば縛り首だろうと斬首にだろうと好きにして構わない。

依頼主との交渉はローギルがやってたから詳しくは知らないけど、あたしにだって伝つてはある。絶対役に立って見せるから！　お願いだよ！」

そう叫びながら、チエルカは後ろ手に拘束されたままニイロにすが縋ろうとする。

兵士達はそれを慌てて押さえつけようとするが、ニイロは手を上げて制した。

「悪いけど、それは出来ないよ。さっきも言っただろ？　あんた達を裁くのはドマイセンであって俺じゃない。あんた達は、これからドマイセン市に連行されて、そこで裁きを受けるそうだ。そこであんた達の罪がどう裁かれるのかは、俺には興味が無い。

俺が今興味があるのは、どうすれば二度とこんなことが起きないか、それだけだよ。

確かにあんたの協力が得られれば早いのかも知れないけど、その為にルールを破る気は無いね。もし、仇を取りたいのなら、あんたに出来るのは知ってることを全部話すことだけだ」

そうチエルカに向かって諭さとすように語る。

ニイロに拒否されたチエルカは力なく項垂うなだれ、兵士達に抱えられるようにして元の位置に戻された。

その様子を見届けてから、ステルス・モードを解除したファージ達を呼んで兵士達に協力して見張るよう指示し、ニイロ自身は保護されたサリアに今後の予定を話そうと、彼女達が保護されている家の方に歩き出した。

その後姿をチエルカは見ている。

彼女の目に諦めの色は無かった。

第30話 ヨーネス大森林

ヨーネス大森林は、リドリスファール王国の西側、バネストリア帝国との間を隔てる緩衝地帯となっている。

その大きさは最も広い所で南北に約1000km、東西に約500km。面積にすれば日本列島よりも広い。

その植生は緯度的に高緯度から中緯度地域に跨る位置にある為、場所にもよるが、イメージ的には南米や東南アジアの密林^{ジャングル}ではなく、ブナやカシノキの生い茂るヨーロッパの森林や、シベリアの針葉樹の森を思い浮かべると近いかも知れない。

地形は起伏に富んでおり、最も高い部分と低い部分の標高差は1000m以上にもなっていて、その点からすると、富士の樹海や大台ヶ原などの原生林に似た部分もある。

ヨーネス大森林の東、リドリスファール王国に面した地域は、その距離の長さから複数の王国貴族が統治する領地となっており、その内の一、タイネンザール侯爵領から徒歩で5日ほどヨーネス大森林に踏み入った場所にニイロの姿があった。

「あ、2匹そっち行ったぞー」

トラッドC60自動小銃を油断なく前方に向けて構えながら、右手の方に向けて鋭く警告を発する。

その声に応じて、ニイロの右側、10mほど離れた立木の陰から焦げ茶色の塊が飛び出した。

「やーつとかよっ！ そりやつ!!」

焦げ茶色の塊——ハイ・オークの傭兵ダグが、短く持った得物のハルバートを横薙ぎに一閃させて、飛び掛ってきた小鬼^{ゴブリン}1匹の胴体を一刀の元に両断し、そのまま体ごとクルリと回転すると、今度は下段から跳ね上げる要領で飛び掛ってきた2匹目の小鬼^{ゴブリン}を下腹部から頭部にかけて縦に切り裂いた。

死人のような青黒い肌と、痩せた手足、ぽっこりと突き出た腹が特徴の小鬼^{ゴブリン}の姿は、ニイロの感覚からするとファンタジー物に出てくる『ゴブリン』と言うよりも、どちらかと言うと仏教の地獄を描いた昔の

絵草子に出てくる『餓鬼』に近い。

ただ、この辺は現地語の小鬼を意味する『プレツタ』という単語の発音に、『ゴブリン』を当てた翻訳の問題でもあるので、あまり細かく気にするのは止めた。

そういえば、ニイロが初めて出会ったアルファ・アース人であるバレットの知人が、アルファ・アースに現れたゴブリンの被害に会ったと言っていたのを思い出す程度だ。

デンゼル・ワシントン似の黒人男の顔を思い出し、少し懐かしく感じる。

「取りあえず、今ので近くにいるのは終わりだな」

最後まで残った一匹に銃弾を叩き込んで片付け、ニイロが上空のクラブから送られて来るデータで確認してから、そう宣言する。

それを合図に、ニイロの左右で警戒していたコズノーとダグ、後方の警戒に当たっていたタイネンザール侯爵領軍の兵士、フランドがニイロの元に集まってきた。

フランドはニイロがヨーンネス大森林へ侵入するに当り、そのお目付け役として同道している年配の老兵士だ。

タイネンザール侯爵自身は現在王都詰めということで、タイネンザール領の領都テラスボンに挨拶に寄った際に会った留守居の重臣から、『序ついでで良いので』ということ、ヨーンネス大森林内の害獣の間引きを依頼され、その検証役として領軍の中から退役間近のフランドが同行する運びとなった。

「23、24……これで小鬼ゴブリンが合わせて120と2匹目ですな」
フランドが成果を記した帳面を懐に収めながら、やや呆れたような口調で言う。

ファンタジー物であれば、討伐の証として耳などの屍体の一部を切り取って持ち帰る場面なのだろうが、行き帰りに何日も掛かる道程でそんなものを抱えていては荷物になるし、途中で腐ってしまつて悪臭を放ち、堪ったのもじゃない。

もちろん、本当に貴重な素材となるなら、荷物になろうとそれなりの防腐処理をして持ち帰るが、小鬼ゴブリンでは何の価値も無い。

そこで、間引きを依頼したタイネンザール侯爵の領軍から同行したフランドが、成果を確認して記録する役目を負っている。

ベータ・アースで言えば、戦場で武士の戦果を確認する役目である軍目付や軍監いんさめつけのようなものだが、あくまでも序ついでの依頼ということ、準貴族でもある騎士ではなく、平民扱いの兵士であるフランドが同行することになった。

「もう少し奥に開けた土地があるみたいだから、そこまで行ったら休憩にしよう」

クラブから送られて来るデータで地形を確認しつつ、皆に提案する。

同行者達からは特に異論もなく、そこらじゅうに散らばる小鬼ゴブリンの死骸を全員で手分けして始末し終えると、ダグを先頭にニイロ、フランド、コズノーの順で黙々と先に進むこととなった。

今回、ニイロには一つ目的があつてこの地にやつて来ている。

それは、ニイロがガンマ・アースにやつて来る以前に複数送り込まれた調査用の探査機プローブの回収だ。

それらの探査機は、様々なデータの収集を行った後、バッテリーの消耗によつて行動不能になる前に、いくつかの人跡未踏と思われるポイントで休止状態スリープとなつて回収されるのを待っていた。

その内の一ヶ所が、現在向かつているヨーンネス大森林の奥地にある。

元々、ニイロが使役するクラブ達は、探査機プローブから探査に関する機能を大幅に削除オミットして汎用に改造したものであり、大部分が共通のコンポネントを使用していることから、回収した探査機プローブの部品をクラブの補修部品として再利用することができる。

特に、人間の居住地域近くに派遣された探査機プローブには、より接近しての調査の為に、昆虫型の超小型情報収集ユニット、通称ピーピング・ビートルが搭載されているものがあり、今回、ニイロが回収に向かつている探査機プローブにも、それが搭載されていた。

目立たずに音声と映像を拾えるピーピング・ビートルがあれば、帝国に潜入しての調査にも役立つだろう。

残念ながら、あくまで学術探査用の探査機^{プロローブ}本体にはクラブのような戦闘に対応したAIが搭載されていない為、航空戦力の増強とはいかないが、ピーピング・ビートルのユニットだけクラブに移植して使うことも出来る。少なくとも情報収集力がアップすることは間違いない。

実は、まだサクラコがフィーゼの看護でドマイセンから動けない為、具体的な行動を起こせず暇を持て余したニイロが、この目的の為にヨース大森林に向かうことを、『黙って行くのも何だし……』と、あまり深く考えずに軽くダスターツ伯爵に断りを入れたところ、サクラコも連れずに単身出掛けるといふニイロに、護衛の騎士団を付けると伯爵が言い張って揉める一幕があった。

ニイロとしては護衛ならファージもクラブもいるし、ちよつと行つて片付けてくるという感覚だったのだが、伯爵からすればニイロの身柄は王国のみならず、共同で鉱山の浄化設備建設推進を行っているビンガインやドマイセンにとつても重要なものであり、ここでニイロの単独行動を許して万が一の事態が起これば、その責任はダスターツ伯爵個人だけでは済まされない。

どうしても保険を掛けておきたいダスターツ伯爵と、騎士団をぞろぞろ引き連れての行動など勘弁してもらいたいニイロが、互いに妥協点を探って話し合つた結果、ヨース大森林に詳しい傭兵を道案内兼護衛として同行させるということで妥協することになり、折りしもノレーゲン山脈方面への斥候業務を終えたダグとゴズノーに白羽の矢が立った次第である。

ダグに言わせれば「あいつに護衛つて必要か？」といった具合だったが、領内における活動実績から伯爵の信頼も有り、ニイロとしても見知つた顔の方がやりやすいので妥協しやすかつたのだ。

ちなみに、紅一点のニーアーレイは、なんでも実家から緊急の呼び出しが掛かつたとかで今回は不参加となっている。

獣道に沿って、木々の下生えをニイロから借りたマチェットで、ダグが先頭になってパワフルに払いながら進んでいく。

その後姿を見ると、ニイロも彼等を雇つたのは正解だつたと思えて

くる。

もし1人だったら、ここまで行軍速度は稼げなかつただろう。ファージに先行させることは出来たが、足場が不安定なこともあって、速度的にはここまでスムーズに進めたか、やや疑問だ。

ヨーネス大森林内での注意事項や、遭遇する害獣エンカウントの特性、始末した害獣の死骸処理の知恵など、アドバイスも的確で助かっている。

やがて一行は休憩地点と目算した、すこし開けた空き地（とは言っても他より木々の密度が低い程度の違いだが）へと到着した。

さすがに5日目ともなると全員慣れたもので、見張りを上空のクラブに任せ、暗黙の内に手分けして下生えを払ったり、邪魔な木を切ったり抜いたりして全員がゆったり座れるだけのスペースを確保する。

「ここからだ、目的地までは後3時間つてとこだし、少し早いけど昼飯にして、残りを一気に詰めようと思うんだけど、それでもいいか？」
ニイロが確認を取ると、めいめいに了解の返事があったので、大型用亜空間ポーチから、キャンプ用の簡易テーブルセットを取り出して手早く組み立てた。

コルエバンでも使った、ホームセンターなどでも買える御馴染みやつだ。今回の行程でも既に何度か使用している。

同様にカセットコンロやプラスチック製の食器など、必要な物も取り出して昼食の準備を進める。

今回のメニューはパック入り白飯にレトルトの中華丼と親子丼を各1食づつ、合計2人前。

なにしろ朝からずつと行軍と戦闘の繰り返しで、1食分だけでは量的に少々物足りないのだ。

コンロ2つに大き目の鍋で湯煎して温める。電子レンジが欲しいが無いものは仕方が無い。

食器には洗う手間を省く為にラップを張り、温めた白飯を盛ってレトルトの具をかければ出来上がり。湯煎に使ったお湯は捨てずに飲み物に流用する。

衛生がどうのと、そんなことを気にするような野郎おとしはここにはいない。

付け合せは秋刀魚の蒲焼とポテトサラダの缶詰、デザートはナッツとドライフルーツ入りのヌガーバーとパック入りフルーツゼリー、飲み物は粉末のインスタントコーヒーと、同じく粉末の炭酸オレシージュースである。

亜空間ポーチという大量に物資を運べるチートな手段はあるものの、時間の経過による生鮮品の劣化は防げない。

よって、内容は長期保存の利く軍用の携帯口糧レーションに近いものになってしまうのは仕方が無いことだった。

それでも味は悪く無いし、ダグ達ガンマ・アースの住人からすれば初めて口にするものも多く、基本的に評判は良い。

もちろん、個人によって好みの差はあるので、異世界物にありがちな日本産だから絶賛されるというものは無く、例えばダグなどは日本人の国民食カレーライスが苦手で、その代わり日本人には馴染みの薄いチリコンカーン（チリビーンズとも言ふ、西部劇などでカウボーイが食べてる豆料理）が気に入ったらしい。

また、コスノーには日本茶が、『枯草の煮汁飲んでるみたいだ』と不評だったが、インスタントコーヒーは大いに気に入ったそうで、今回の報酬に現物を1ケース（紙コップ付き10食入り1パックが6個入って60食分だ）追加することを約束させられた。

「もう少しで折り返しか。フランドンさんよ、けっこう間引いたと思うが、今んとこの成果はどれくらいだ？」

ダグが缶詰のポテトサラダをフォークでパクつきながらフランドンに聞く。

一口ごとになぜか顔を顰しかめるのだが、別に嫌いというわけでも無いらしい。聞けば「美味しい」と言うし、むしろ好きな味なのだそうだし。きつと人間にはわからない、ハイ・オーク的な何かなのだろう。

フランドンは懐から帳面を取り出し、中身を確認しながらダグに応えた。

「ええとですな、ゴブリンがさっきので122匹に、ヨーネスポイズンボアが6匹、ヨーネス土蜘蛛が27匹、ヨーネス森林狼が33頭、森林牙猫が11頭、森林赤冠走竜が43頭、ヨーネス背赤ヒゲマが8頭に、

ヨーネス赤鼻トロールが12匹・・・もう笑ってしまいますな。

過去にタイネンザール侯爵領軍で間引きに入って、数的にはこれ以上の成果を上げたこともあります。その時は期間も長かったし犠牲者も多く出ました。それがたったの5日でこれとは・・・今から心配なのは、帰って報告しても信じてもらえるかどうか・・・」

「フランドは遣る瀬無い表情で首を振りながらニイロを見つめる。森林牙猫というのは灰色の毛皮を持つ、豹かチーターのような動物で、サーベルタイガーのような大きな牙を持ち、樹上から下を通る獲物に飛び掛って仕留める猛獣だ。」

森林赤冠走竜は集団で狩りをする2足歩行の蜥蜴で、体高は1m少し。その姿はジュラシツクな映画で有名なラプトルを想像してもらうと近いと思うが、体は茶色い羽毛で覆われ、頭頂部には鶏のような赤い鶏冠トサカがついていた。

ヨーネス赤鼻トロールは、身の丈2mを軽く越す巨人で、ニイロが見たところ類人猿に近い原人といった感じで天狗のような赤い鼻が特徴だった。トロールと翻訳されてはいるが、その名の元になったファンタジーな生き物のように、再生するというような能力は無い。

「まあなあ。普通は見通しの利かない森の中で不意打ちを食らうのが一番恐こええんだが、軒並みこつちが有り得ねえ遠くから見つけて、有り得ねえ距離から不意打ち食らわしてるからなあ・・・」

そしてダグまでもジトリと責めるかのような眼差しをニイロに向ける。

実に理不尽である。

「なっ、何だよ、俺が何か悪いことでもしたか？」

ニイロが抗議するが、ダグはニヤニヤしながら柳に風と受け流してしまう。

「いや、なーんも悪くねえよ？　悪く無いからこそ、お前さんの護衛って意味あんなかなーと。」

なにしろ噂じりユドーの街を襲った100を越すギガントライを一晩で殲滅して、コルエバンに押し寄せたドマイセンとビンガインの万を越す軍を殺戮して、今や配下の空飛ぶ悪魔を従えて、両国を裏

で操る魔王サマだしー。

まあ、俺たちや楽な上に美味しいもん食わせてもらってるから、何の不満も無いしな」

そう言いながら、秋刀魚の蒲焼の最後の一切れをパクリと口の中に放り込む。

「なにが『だしー』だ、そのツラで………。しかも数はインフレしてるし、また何か後付けの設定増えてるし。だいたい否定しろよ！お前俺のこと知ってたんだから事実じゃ無いってわかってるだろ。何だよその『おお、今気付いた』みたいな顔は！

だいたい、護衛にしても本当は1人で来るつもりだったんだよ！でも、そうしないと伯爵が騎士団連れてけなんて言うし、そんなゾロゾロ着いて来られても面倒だし、サクラコも『ダグさん達なら安心です』なんて言うから……。」

自分でも何で言い訳してるんだろうと思いつつも、支離滅裂にボヤクニイロ。

その横では、一人コズノーが、我関せずとコーヒーを啜っていた。「はー、コオヒイうめえ……。」

昼食を兼ねた休憩を終え、一行は目的地近くまで辿り着いていた。

この辺りはこれまでと植生が変わっており、人の腰程度の高さの低木の藪となっていて、その分見通しは良くなっている。

前方には、また高木の林が帯のように行く手と視界を遮っており、その先に目的地でもある一辺が30mほどの池が存在しているはずだ。

この池は周囲に生息する動物達の水場にもなっており、当然のように水を求めてやってくる動物と、それを狙う肉食獣達とのエンカウントの確率も上がることになる。

実際に、今しもニイロの目の前では、体長7〜8mにもなるうかという1頭のアン〇ラスに襲い掛かる2頭のゴ〇ラの怪獣大決戦が繰り広げられていた。

その足元近くには、2m越すくらいの小（と言っても大きい）ア

○ギラスの姿も見えるので親子かも知れない。

前者は恐らくアンキロサウルス系統と思われる曲竜類(鎧竜)で、後者は体格的に体長5mほどのT・レックスに代表される獣脚類の一種と思われるが、T・レックスにしては小さい。

頭の大きさも頭身が小さく見えるので、アロサウルス系か、デイノニクス(ラプトル)系かとも思うが、デイノニクス(ラプトル)系にしては生えていたとされる羽毛らしきものは見当たらず、代わりにヤマカガシのような、くすんだオレンジ色と黒の文様が体表を覆っている。

「うわあ……」

特撮ではない。本物の生死を賭けた弱肉強食の戦いだ。

ニイロ達は怪獣達の争いからやや距離を取った藪に潜んで、戦いの行方を見守る。

「どうするよう…」

ニイロの背後から、ダグが小声で囁いた。

その隣からコズノーもニイロにアドバイスを送る。

「あの様子だと、待つてもあそこでメラダウス共の食事の時間が始まるだけだ。やれるんだったら、あの2頭を片付けた方が早い。ガルカーンの方は放っておけば、勝手に何処かに行くだろう。」

図体はでかいが、草食で大人しく臆病な動物だし害も無い。この辺りが縄張りならば人里に出てくる心配も無いだろう。あいつの革は鎧のいい材料になるが、この人数じゃ解体するのに時間が掛かるし、持って帰るのも大変だ。今回は諦めよう」

どうやらゴジ○の方はメラダウス、ア○ギラスはガルカーンというらしい。

そのアドバイスを受けて、ニイロはすぐに決断する。

「んじゃ○ジラはやつつけよう。猫まつしぐらの方は放置で」

「[6-1]」

単にCMのキャッチコピーみたいな名前だなど思っただけの軽口だが、当然ガンマ・アースの住人に通じるわけがない。

ニイロの意味不明な言葉に、ダグ、コズノー、フランドは一瞬キョ

トンとした表情になるが、すぐに深く考えても無意味と悟ったのか何も言わなかった。

そんな3人をよそに、トラッドC60自動小銃を亜空間ポーチに仕舞い、代わりにチェスカー・ズブロAFSを取り出す。

アルファ・アース製の自動小銃の散弾銃版で、ベータ・アースにもAA-12という同じような銃が実在するが、これに限らず銃器に於いては、単に入手の容易さからアルファ・アース製のチェスカー・ズブロAFSを使うに過ぎない。

サリアの救出時には、同じ散弾銃でも狭い室内での戦闘を考慮して、全長の短いソードオフ仕様の散弾銃を使ったが、今回のように屋外であれば、命中率も良く連射の利くこちらの方が使いやすい。

使用する弾は大型獣用のスラッグ弾（一粒弾）で、これをセツトした8発入りの弾倉マガジンを取り付け、予備の弾倉マガジンも用意したら準備完了だ。

ギガントライの時に使った重火器だと、アングロスもどきまで巻き込む可能性大なので自重した。

「じゃあ、やるよ。基本、クラブに任せるから、そのまま伏せて待機で宜しく」

ニイロはそう3人に告げると、上空のクラブへ指示を出しながら、腰を落としたままの姿勢で数歩前に進む。

そこで片膝を地面に付け、もう片方を立てた膝撃ちの姿勢を取って銃を構える。

狙撃してメラダウスの注意を引き、ガルカーンから離れた所で上空からクラブが12・7mm機銃を浴びせて倒す作戦だ。

未だに組くんず解ほくれつの格闘を続ける怪獣達までの距離は約50m。命中率に難のあるスラッグ弾でも、この程度の距離であれば特に問題は無い。

バン！

2頭のメラダウスの内、心持ち大きな方の個体を狙って発射した1発は、側面から肩の辺りに命中する。

「ギャアアアオウ!!」

メラダウスは苦悶の叫びを上げ、自分に苦痛を与えた不屈き者を視

界に捉えた。

爬虫類独特の感情の無い眼がニイ口を睨む。

(さすがに1発じゃ倒れないか)

こちらに気付いたからには突進してくるであろうと予測して、自然と銃把じゆうばを握る手に力が籠こもる。

しかし、その予想に反して、ニイ口の狙撃を受けた個体は「ギャオウ！」と一鳴きすると、くるりと反転して遁走にかかった。

「ありや」

思わず脱力して声が出る。

しかし考えてみれば、自分に傷を負わせる敵がいれば、まず逃走にかかるのは野生動物ならば当たり前だ。

反撃するのは逃げ場が無い、追い詰められたと判断した時がほとんどだろう。

そして、あの個体は本能に従って逃げ出すことを選択しただけのことだったが、今回は相手が悪かった。

ダダダダッ！ダダダダッ！！

襲っていたガルカーンから少し離れた地点で、上空からのクラブの二連射が、逃げ出したメラダウスに降りそそぐ。

50口径キヤリバー(12.7mm)の雨に打たれたメラダウスは、血と肉片を周囲に撒き散らして倒れ伏した。

もう1体のメラダウスも、仲間が倒れるのを見て危険を察知したのか、すぐに逃走を図るが、やはりクラブの銃撃を浴びて1体目の後を追うことになった。

襲われていたガルカーンの親子からすれば結果として助かったのだが、それがわかるはずもなく、のそのそと2体揃って逃げ出していった。

「もう捕まるんじゃないぞー。竜宮城へご招待なんて考えなくていいからなー」

逃げていくガルカーンの親子に声を掛けながらニイ口は立ち上がる。

背中に棘状の突起を持つアルマジロみたいなシルエットは、無理矢

理見れば亀に見えないこともない。

後ろの3人からすれば謎発言だが、そこは華麗にスルーされた。

邪魔を排除すれば、目的地まではあと一息。

一行は一気に残りの距離を詰め、目的地の池の畔ほとりに到着する。

一辺が30mほどの池の水は澄んでおり、小さな魚が泳ぐ姿が見て取れる。

水際に生えた草は、水を飲みに来た動物がついでに食べたのだから、刈り揃えたように短くなっていた。

実際、今もニイ口達のいる場所の対岸には、大型犬ほどの大きさの馬とも牛ともつかない四足歩行の動物が10頭ほど、のんびりと水を飲んだり草を食んでいる様子が見える。

ニイ口達を見ても逃げ出す様子が無いのは、池を挟んでいるからだろうが、群れのリーダーらしき個体は用心深くニイ口達の様子を伺っていた。

「よし、すぐに済ませるけど、一応周囲の警戒を頼む」

ニイ口は3人に頼むと、自分は腰の亜空間ポーチからタブレット端末を取り出すと、暗証番号パスワードを入力して池の水底で休止スリープしているはずの探査機プローブに指令コマンドを送信した。

その反応はすぐに現れる。

静かだった水面がにわかには波立ったかと思うと、薄いグレーのロービジで塗装された探査機プローブが、しぶきをあげて空中に飛び出した。

対岸を見ると、さっきまでいた群れは早くも姿を消している。

水面から飛び立った探査機プローブは、そのままニイ口の元に来ると着陸して指示を待つ。

この機体がどれだけの年月、この水底にいたのかは聞いていないが、見た限りでは多少汚れてはいるものの目立った損傷も無く、塗装の剥げや錆さびも見当たらない。

ポーチからチェック用の回路計テスターを取り出し、特に今回の最重要目的であるピーピング・ビートルを収めたユニットを手早くチェックした。

(よし、これならすぐクラブに積み替えての実戦投入もOKだ)

ニイロはチェックの結果に満足げな表情を浮かべると、取りあえず大型用の亜空間ポーチを展開して探査機^{プローブ}を収容する。

後始末を終えて、周囲の警戒に当たっていた3人に宣言した。

「んじや、帰るぞー！ 無事帰るまでが遠足だからな!!」

やっぱりスルーされた。

第31話 足止め

ニイ口達一行は、無事ヨーネス大森林を抜け、依頼のあった大森林内の害獣駆除の報告も兼ねて、タイネンザール侯爵の治める領都テラスボンに立ち寄った。

ここで間引きした害獣の内容と数が常識に合わない、報酬の件で多少もめたものの、同行していたフランドの証言もあって何とか納得してもらい、そのフランドとも別れて馬車でダスターツ伯爵領のリュドーへと戻る。

ここで、この街を拠点としているダグ達とも別れ、代官屋敷に預けていた電動二輪車を引き出して、単独でルードサレンへと向かった。

電動二輪車を預けていたのは、『ちゃんと戻りますよ』という、周囲への意思表示である。

リュドーまでの馬車での移動に時間を取られたこともあって、ヨーネス大森林で目的の探査機を回収してから、既に20日以上が経っている。

ダスターツ伯爵への帰還の挨拶も済ませ、宿に戻ったニイ口を待っていたのは、先に特殊輸送車両でドマイセンから戻っていたサクラコ。それに、ニイ口は初対面となる一組の男女だった。

サクラコは、回復成ったファイゼと、看護と護衛の為に残った人員を乗せて、5日前にルードサレンへ帰還しており、その際に帝国の関係者だという二人を伴っていた。

「バネストリア帝国第二王女、ティリザ・エルノ・バネストリア様に仕えます、ファノ家のチェク・ファノと申します。こちらは我が家に仕える森蜥蜴人のロッツエ。

この度は、こうして面会の機会を頂きまして感謝申し上げます次第。また、帝国の不屈き者がご迷惑をお掛けしましたこと、主人に成り代わり、幾重にもお詫び致しますと共に……」

放っておくといつまでも続きそうな口上を、ニイ口は慌てて止めた。

「待って下さい、そもそも謝る相手が違う。あなた方が謝るべきは、亡

くなつたエルナントさんのご遺族だし、負傷したフィーゼさん、誘拐されたサリアさんだ」

ニイロがそう言うと、チェク・ファノと自己紹介した女は、申し訳無きそんな顔でニイロに弁解する。

「はい。ダスターツ伯爵ご本人も含め、そちらの方々へも直接お会いして謝罪させて頂きました」

そう言つてチャク・ファノは深々と頭を下げた。

その言葉に、側で聞いていたサクラコが無言で頷く。

どうやらルードサレンに到着してすぐ、エルナントの遺族の元へと向かつて謝罪したということのようだ。

「そうですか。では、俺への謝罪は不要です。それよりも事を起こした首謀者の情報を聞かせて下さい」

ニイロがそう催促すると、チャク・ファノは真剣な表情のままニイロの要望に応えた。

「はい。では、その前に少しだけ、現在の帝国内の情勢をご説明しておきます。

恥ずかしながら、現在、帝国では帝位の継承を巡って内乱の一步手前という状況で、優位に立つのは先々代の皇帝陛下の弟御であらせられますゼールス・ビアノース・バネストリア公爵です。

それに先々代の長男で先帝の弟御であらせられますザルーク・シール・バネストリア殿下が異を唱えて争つておいでです。

私の仕えるテイリザ様は中立で、先々代の第二王女、先帝の妹御に当られます」

「なるほど、要するに叔父と甥が争つてることか……関係者で女性はテイリザ様だけですか？ テイリザ様は第二王女つてことだったけど、第一王女様は？ あと、他にご兄弟とかは」

「えっ？ は、はい。第一王女、サラネア様はもう降嫁されていて、現在はノズコンシア侯爵夫人となつておられます。ノズコンシア侯爵ご自身は皇弟ゼールス派です。

嫡男で次男だった先帝は亡くなられ、三男のオルグス様は行方不明……ですが、私共の調べですと既に亡くなられている可能

性が高いです。他にご兄弟などはおられません」

ニイ口の質問に、なぜ女性皇族にだけ興味を示すのか、チェク・ファノは意図を掴めず少し戸惑いを見せる。

ニイ口の頭にあつたのは、あの首狩り姫が言っていた言葉だ。

それが首謀者本人かは定かではないが、少なくともあの人形が言っていた『ご主人様』が女性である可能性は高いと睨んでいる。

「ふーん……すると、まだ第二王女様も容疑者から外すわけにはいかないか……」

「なっ！ テイリザ様はそのような姑息な策を巡らせるような御方ではありません！」

つい、漏れたニイ口の呟きに、チェク・ファノは猛然と抗議の声を上げた。

すると、今まで黙って口を挟むことのなかった森蜥蜴人のロツチェが、初めて口を開いてチェク・ファノを窘める。

「落ち着け、お嬢。ニイ口殿はテイリザ様の人となりをご存知無いし、テイリザ様を首謀者と断定されているわけでもない。まだ事実を積み重ねて検討されている最中というだけのことだ」

その冷静な指摘には、逆にニイ口の方が驚かされた。

リザードマンとは紹介されたものの、ファンタジーアートに出てくるリザードマンと言うよりは、SFに出てくるレプティリアンやデイノサウロイドと言った趣きの外見からは、言っては悪いがあまり知的に見えないということもある。

いや、確かに目を見れば、爬虫類の無機質・無感情な瞳ではなく、確かな知性と意志を感じさせる眼をしているのだが。

「これは……申し訳ない……」

ロツチェに指摘されて落ち着きを取り戻したのか、チェク・ファノもバツが悪そうにしながらニイ口に詫びた。

「いいえ、気にしないで下さい。ロツチェさんの言う通り、情報が少なすぎてまだ判断できないというだけの話です。」

今、わかっているのは、首謀者は俺を取り込みたくて関係者の誘拐を企んだこと。目的は劣勢の挽回ということから、現在劣勢に追い込

まれている長男のザルーク派が怪しいということ。これは実行犯を手配した、なんとかつて男爵——横からサクラコが「テネツセラ男爵です」と注釈を付けてくれた——が長男派なのも容疑を裏付けている。

それに、優勢な皇弟派からすると、今、わざわざ王国を巻き込む危険を犯す必要性は皆無だつてこともある。

ただし、チエク・ファノさんの話だと、テイリザ様が直にザルーク殿下に聞いたただしたところ、殿下は全く知らない様子だった、と……まあ、これは知つてて惚けた可能性もあるかな」

「テネツセラ男爵は現在行方不明です。領地に戻った形跡も無い。既に消されている可能性も高いでしょう。それに、男爵が手配したと言われる実行犯の数は、資金的に男爵が賄える数を越えています。」

男爵をザルーク殿下の派閥に紹介したのはウォルムズ子爵ですが、子爵によれば紹介料として少くない金額を男爵より受け取ったとか。

このことから、テネツセラ男爵は何者かによつて送り込まれた作業員と考えられるのですが、その何者かが仮に皇弟派だとすると、わざわざ劣勢の派閥に対してそのような工作をする目的が……」

チエク・ファノの説明の声は、最後は消え入るように小さくなつていく。

「ありませんよねえ。要するに、筋道立てて考えるには、まだ材料が足りてないつてことです。現時点で考えても、それは先入観になって邪魔なだけ。今は材料集めが先つてことです。」

そこで一つ、こちらから材料を。首狩り姫つて人形、ご存知ですか？」

ニイロの問いにチエク・ファノとロツチャは不思議そうに顔を見合わせる。

「首狩り姫つて、あのお話に出てくるアレですか？」

「そうですね。俺はお話の方は知らなかったけど、ドマイセン軍の人が教えてくれました。昔のなんとかつて魔道士——ここですかさず「ヴェールサルクです」とサクラコが注釈を入れる——が作った」

0体の内の一つで、現存してないはずだった、って」

「え？ うそ、あれって実話……？」

「だった……まさか実在してたのですか？ どうして首狩り姫だと……」

ニイロの話に、チエク・ファノは驚きの表情を見せ、ロツチャは驚きつつも確認してきた。

「自分で名乗ったんですよ。これはドマイセン軍の人も聞いてます。

このくらいの大きさ——両手で縦60cmほどの大きさを示しつつ——で、赤いドレスに両手に双剣持つて、実行犯の口封じに使われました。もつとも、もう今はただのガラクタになって、本当に現存してませんけどね」

「戦ったのですか……」

「ええ、ドマイセンのチエセルって軍区長の人と一緒に」

「チエセル……オンド・チエセル？ 雷剣チエセル？ コルエバンの敗戦で中央から北東区の軍区長に左遷されたと聞いたけど……」

「ああ、多分その人です。二つ名持ちとは聞いてなかったけど、コルエバンにもいたって言うたから、その人でしょう。

そして、その人形から色々手掛かりは得られてるんですよ。

誘拐犯のチエルカって女の話だと、あの人形はチエルカが魔力を注入する前から、既に誰かが魔力を注入していたそうで、自分の魔力で上書きできていなかったことから、首謀者一味の中に少なくとも自分以上の魔道士が存在するはずなんだそうです。

まあ、チエルカ個人は魔道士として中の下といったところだそうで、これだけで絞り込むのは難しいけど、サクラコに調べてもらって、もう一つ、犯人に繋がる証拠も入手できてるんで」

それを聞いてチエク・ファノはホツとしたように胸を撫で下ろす。「ならば！ やはりテイリザ様は無関係です。テイリザ様ご自身は、優れた研究者ではあらせられますが、魔法の行使自体はお世辞にも……少なくとも魔道士を名乗れるものではありませんし、それに、配下の魔道士にも男性ならば数人名前が浮かびますが、そこま

で優れた女性魔道士はいなかったはず。

それに、テイリザ様は我々にニイロ殿に協力するよう申し付けられました。首謀者であるなら、そのようなことはおっしゃらないと思います」

チエク・ファノの必死に主人の無実を主張する。

その様子に、ニイロは苦笑しながらも答えた。

「気持ちばかりですが、まだ白紙です。全てこれから調べればわかることだし。さっそく明日、ダスターツ伯爵に一言挨拶したら、ちよつと出掛けるつもりです」

「えっ？ 出掛けるって、どちらに？」

まるで近所に行くてくるような感じで出掛けると言われて、チエク・ファノは思わずニイロに聞き返した。

「どちらって、帝国に決まってるじゃないですか。首謀者にきつちり話をつけないと。もう準備出来てる？」

最後の問い掛けはサクラコに対するものだ。

「はい。補給品のチェックは済ませましたし、後はニーロに最終チェックと収納だけしてもらえればいつでも。場所はいつもの所で、コンテナにはスローンさんが見張りの人員を出して下さっています。

ただ……ニーロは戻ったばかりですし、数日休まれては如何でしょう？」

そう言つてサクラコは少し心配そうにニイロの顔を見た。

しかし、ニイロはサクラコの気遣いに感謝しながらも、断固とした口調で宣言する。

「ありがとう。でも、俺達の存在で迷惑を蒙こうむった人達がいるんだ。これを片付けないと安心して休めないよ。だから、挨拶を済ませたら、すぐに出発しよう」

「そうですか。でしたら私も反対はしません。ニーロが決めた以上、私も精一杯サポートするだけです。

それに……私からもサリアさん達を苛めてくれたお礼、亡くなったエルナントさんに代わって、しっかりしなくてはなりませんし」

サクラコは静かな表情の下に決意を込めて誓う。

彼女にとつても首謀者への怒りは本物なのだ。

「えっ？ だってそんなすぐって……国境には検問もありますし、まずはテイリザ様にお伝えして、向こうにも色々準備を……それに、明日だなんて、私達の方も準備とか連絡とか、そんな簡単には……一月、いえ、一週間、いや、せめて数日の猶予を……」
チエク・ファノは思わずうるたえた様子でニイロに再考を促すが、すかさずサクラコに釘を刺された。

「あら、あなた方まで私達に合わせて一緒に動かれる必要はありません。そちらで自由に動かれたらいいと思います。」

「そんな……」

途方に暮れるチャク・ファノの肩を、ロツチャは首を左右に振りながら、宥めるように叩く。

表情の見分けのつきにくい森蜥蜴フォレスト・リザードマン人である彼だが、この時ばかりは諦めの感情が容易に見て取れた。

翌日、ダスターツ伯爵に面会して帝国へ出掛けてくる旨を告げると、当然ながら大反対を受けることになった。

伯爵のみならず、メリーチェやダスターツ領の騎士団長ギータン・ポアルソン、伯爵の首席秘書官であるカウネル・ラツチなども、入れ替わり立ち替わりニイロの翻意を促すが、ニイロの意思は固く、必ず戻るからと約束させられた上で納得してもらうことができた。

ヨーネス大森林へ行った際に困らせられた護衛についても、帝国と王国の緩衝地帯である大森林と違い、この度は明確に帝国へ立ち入るということ、王国の関係者を同行させることは、さしものダスターツ伯爵と言えど主張するのは憚はばかられたようだ。

代わりに、ヨーネス大森林へ行った時のように傭兵を雇っては？

という話については、『エズレン回廊に行く予定なので、経由地であるビンガインで帝国方面に詳しい者を雇う（かも知れない）』ということに納得してもらった。もちろん、カツコ内は心の声なので伯爵には聞こえていないが。

ニイロ達を単独で行かせることを諦めきれないダスターツ伯爵から、『身の回りの世話役にサリアを連れて行っては？』との打診もあった。

ダスターツ伯爵としては、例えニイロが帝国へ行っても、王国との関係を切らせない為の鎧かすがいとして、サリアの身を預けるといふ思惑から出た提案だったが、『そういうのは好きではありません』とニイロが断ると、これにはダスターツ伯爵も素直に謝った。

爵位を持つ者が自称平民に頭を下げることなど有りえないことではあったが、見ていたポアルソンやラツチなども特に驚くこともなく、この辺りは日頃のダスターツ領の面々の在り様を表しているのだろう。

だからこそ、ニイロもこの街を気に入っている。

こうして挨拶回りを終えると、ダスターツ伯爵以下の面々に見送られて旅立つことになった。

皆、厩舎の一面に止めてあった特殊輸送車両バスの周囲に集まり、メリーチエやサリアは涙ぐんでいる。

（いや、別に今生の別れじゃないし、ちゃんと戻るって言ってるんだけどなあ……）

ニイロとしては、ちよつと長期の旅行に行つてくるといった程度の感覚なのだが、ガンマ・アースに暮らす人々の感覚では、長期旅行＝命がけという感覚の違いから来る反応の違いだ。

それで多少の戸惑いはあるものの、別に悪い気はしない。

一人ひとりと挨拶を交わし、特殊輸送車両バスに乗り込んで、いざルードサレンを発たとうとした、ちょうどその時、見送りの一同の後ろから秘書官の一人が大慌てで駆け込んで来ると、特殊輸送車両バスの正面に立ち塞がってニイロを止めた。

「お、お待ち下さい！　お待ち下さい！　今、バネストリア帝国から使者の方が、ニイロ様にお会いしたいと！」

タイミングが悪いにも程がある。

涙の別れテイク・ワンはカットされ、呼び戻しに来た秘書官に案内

されて、客間に通されたニイロとサクラコは、無為の時間を過ごすことになった。

帝国からの使者の身許や、来訪の目的の確認に時間を取られた為で、そんな2人がいる部屋に、ようやくダスターツ伯爵の首席秘書官であるカウネル・ラッチが顔を覗かせたのは、既に呼び止められてから5時間近くが過ぎた頃だった。

「やあ、お待たせして済みませんね。何しろ、何も確認しないまま帝国の自称使者をあなた方に合わせるわけにはいきませんから」

「いえ、事情はわかりますから気にしないで下さい。それで、使者の方は何と？」

「一応、王都の方にも鳩便を飛ばして返事もありませんでしたが、向こうにも使者とやらが来ているそうです。どうやら、あなたの所在がわからずに複数の使者を派遣しているみたいですね。」

それで、当りを引いたのはオルデギー子爵の配下の者だそうで、目的や内容はニイロ殿に直接話す、と。

ちなみに、オルデギー子爵は皇弟派の人間のように、護衛を2人連れてますが、武装は解除させています。お会いになりますか？」

返事をする前に、ニイロはちらりとサクラコを見る。

サクラコが小さく頷くのを確認すると、ラッチに答えた。

「会いましょう。話を聞いて見ないと始まりませんからね」

「わかりました。では、こちらに」

ラッチに先導されて、帝国の使者が待つ応接室へと案内されたニイロとサクラコは、そこに帝国の使者というチョビ髭を生やした小男と2人の護衛、そして、さも当然のような澄まし顔で使者の前に座るダスターツ伯爵の姿を見ることになった。

これには少し面食らったが、考えてみればここは伯爵の館なので当然とも言え、部屋の中には、他にダスターツ伯爵の護衛騎士4名がいる。

ささやかな内心の動揺を表に出すことなく、ニイロは使者に対して挨拶した。

「お待たせしました。私がカオル・ニイロ。カオルが名でニイロが姓。

苗字持ちですが私の国では苗字持ちが普通なので貴族ではありません。平民です。

そしてこちらは私の相棒でサクラコです」
そう言つて自己紹介とサクラコの紹介を済ませる。

ニイロの紹介を聞いた使者は、ニイロが「平民」と名乗った瞬間、嘲りの表情を浮かべた。後ろに控えた護衛の2人も、顔に明らかな侮蔑の色が見られる。

使者は、まだ立たせたままのニイロに向かって、いかにも大仰な態度で告げた。

「そうか。私は主であるオルデギー子爵より使者の任を賜つた、ビルボン・ガルナーだ。その方に申し渡す。

よいか？ 動くな。何もするな。余計なことはせず、大人しくこの地で暮らすがいい。これはゼールス・ビアノース・バネストリア次期皇帝陛下の慈悲である。わかつたら下がってよいぞ」

その言葉に最初に反応したのはダスターツ伯爵だった。

顔面に怒気を漲らせて立ち上がるようにする伯爵に、ガルナーの護衛2人は思わず身じろぎするが、ガルナー自身は全く反応しない。

これはガルナーがただの文官で、伯爵の放つ殺気に気付くことすらできなかっただけのことだ。

しかし、その伯爵の動きは、伯爵の背後に立つサクラコが無言で肩を抑えてとどめた。

「なっ……」

思わず首だけで振り返る伯爵にサクラコは優しく微笑み、小さく口を動かすことで伯爵に伝える。

(お・ま・か・せ・を)

そしてニイロの方をちらりと見やった。

「ご用件はそれだけですか？ なるほど。つまり、さつさと帝国に来て騒動を起こせ、と。そういうことですね？ 押すな押すなは押せ、つてことですねえ。」

要望されたからには、応えなきや仕方が無いですもんね。いや、元々行く気ではありませんでしたが、わざわざ言つて来たつてことは何か

知ってるって白状したようなもんだし、これで少なくとも空振りにはならなそうだ。うん」

公然と言い放つニイロに、ガルナーは目を白黒させて声を上げた。「きつ、貴様！ 何をしたか知らんが平民風情が思い上がりおって、何を戯けたことを！ 我等を愚弄するとは首を切られたいか！ ダスターツ閣下もこのような下賤の輩、さつさと……」

「黙れ帝国のドブ鼠！ 首を落とされるは貴様の方ぞ!!」

いきなりのダスターツ伯爵の怒号に、ガルナーは最後まで言葉を紡ぐことが出来なかった。

「よいか！ ニイロ殿は武によって村を救い、砦を奪還し、街を救ったのみならず、知恵によって鉾山や耕地の改良にも助言を頂いた、我がダスターツ伯爵領、延いては王国の恩人である！

黙って聞いておれば、我等が恩人に対してのその方の言動、これは我が王国に対する侮辱に等しいと思え！」

王国きつての猛将の怒号に、哀れガルナーは顔面蒼白となって声も出ない。

「儂はこれより王都に使いを出して国王陛下に一部始終を報告し、この無礼に対して、帝国のオルデギー子爵及びゼールス・ビアノース・バナストリア公爵への膺懲の軍を催すことを発議する！

よいかドブ鼠！ 事は既に貴様の薄汚いそつ首一つで終わらせられると思うな！」

ダスターツ伯爵は怒りに任せてそう宣言するが、さすがに事が大きくなりすぎである。

これほどまでに自分の為に怒ってくれるダスターツ伯爵には感謝するが、さすがに軍を催すとなるとニイロも放ってはおけない。

「閣下、伯爵閣下、お気持ちには感謝しますが、軍を催すのはさすがに……逆に騎士や兵士の皆さんの迷惑になって申し訳ないですよ」

「そ、そうか。ニイロ殿がそう言うのであれば軍の発議はやめておこう。ただ、陛下への詳細の報告は行うが、それは構わんな？」

「はい、当然それは構いません」

「よし。それでは……ギータン!!」

ダスターツ伯爵が大声で騎士団長の名を呼ぶと、ほどなく応接室の扉がノックされ、呼ばれたギータン・ポアルソンが姿を現した。

「お呼びでしょうか」

「うむ。そこにいる帝国のドブ鼠3匹、さつさと外に放り出せ。それから王都に使いを出すので人選を」

指示されたポアルソンは配下を促して、まだ伯爵の怒気に当てられ呆然としているガルナーと護衛2人を引き立たせて連行して行く。

残ったニイロは、ダスターツ伯爵に改めて礼を述べた。

「閣下、私の為に怒って頂いて、有難う御座いました」

そう言って頭を下げるニイロに、伯爵は少し照れたように答えた。

「いやなに、本当のことだ。身分も重要だが、それより何を成したかの方が、より重要だと僕は思っておる。そこらの貴族でも成し得ぬことを成した貴殿を尊重するは当たり前のこと。

もつとも、それを理解せん者も多いのは嘆かわしいことだがの。

それより、もう夕刻も近い。そなた達なら夜の闇も苦にせんのだろうが、ここは一つ、今晚だけでも泊まっていったらどうだ？

なに、もう帝国に行くのを止めようなどとは思っておらん。おらんが、2人が一晩だけでも泊まっていてくれればメリーチエが喜ぶから」

ダスターツ伯爵の誘いに、ニイロはサクラコを見る。

顔を見合わせたサクラコは、にこりと笑って小さく頷いた。

「そうですね。なんだか今日は少し疲れたし、じゃあ、お言葉に甘えて泊めて頂こうかな」

そう言いながら腰の亜空間ポーチから数本のウイスキーの瓶を取り出すニイロに、伯爵は思わず破顔した。

第32話 同行者

ダスターツ伯爵の館で一夜を過ごしたニイロは、昨晚の酒の余韻が少し残ったままの朝を迎えた。

窓から朝日の射す気持ち良い朝……という訳にはいかず、来客用の寝室の窓から薄暗い外を見れば、夜半から降り出した雨が、やや透明度の低い窓ガラスを濡らしている。

雨足は強くないが、空模様を見ればすぐに止むことも無いだろう。

出来れば晴れて欲しかったが、出発には影響無い。

昨晚、ニイロはダスターツ伯爵や他の伯爵領幹部達と遅くまで歓談した。

伯爵が就寝の為に退出し、家庭持ちの騎士団長ポアルソンが家路に着いた後も、スローンや騎士、兵士達と城下町へ繰り出して共に痛飲することになった。

ニイロは普通のことだと勘違いしていたが、準爵位持ちの騎士と、平民である兵士が一緒になって交流するというのは、実は珍しいことらしく、ダスターツ伯爵領ならではの光景らしい。

その間、サクラコは伯爵の孫娘のメリーチェや、侍女長のエルンを筆頭にした伯爵家に仕える女性陣と共に開催された女子会(?)に参加したようだ。

まだ微かに残る胃部の不快感を抑えつつ、朝食の準備が出来たことを知らせに来たサリアに、そのまま食堂へと案内された。

先導して歩くサリアは、時折、何か言いたげにチラチラとニイロを振り返るが、ニイロはあえてそれに気付かない振りをしておく。

食堂に入ると、既にサクラコは席についており、同じく席についたメリーチェと、侍女長のエルンも加わって何やら真剣な表情で話していた。

食堂に入ってきたニイロにはサクラコが先に気付き、互いに朝の挨拶を交わす。

なぜかメリーチェが多少挙動不審な様子だったが、ちょうどダスターツ伯爵が、首席秘書官のカウネル・ラッチを伴って現れたので、そ

のまま雑談をしながらの朝食会と相成った。

そうして和やかな時間も過ぎ、全員が食後のお茶を口にし始めるそのタイミングで、サクラコがなぜか改まった口調でニイロに話しかける。

「ニイロ、お願いがあるのですが、聞いて頂けますか？」

「お願い？　もしかして、帝国に行くのを延期して欲しいとか？」

突然の申し出に、他に思い当たる節もなく、少し首を傾げながらニイロは聞き返した。

ヨーネス大森林から戻ったばかりのニイロの体調を心配して、少し休憩期間を採るようにサクラコが提案してくれたことはあるが、それについては先に問題を片付けてから休むということに納得させたりもなかった。

「あ、いえ、それは良いのです。後でちゃんと休むと約束してもらいましたから。そうではなくてですね……」

サクラコにしては珍しく言いよんでいる。

ニイロとしては、これまで全てをニイロ優先で考え、行動してきたサクラコには全幅の信頼を置いていた。

例え、それがサクラコの オートノマス・マシン A M としての『設定』によるものであったとしても、サクラコの希望であれば出来る限り応えてやりたいと思っている。

「ん？　違う？　じゃあ、とりあえず言ってみなよ。別にそれで怒ったりはしないしさ」

安心させるようにそう言って、サクラコに続きを促した。

「はい。それでは……その……実は、サリアさんを、今回の帝国行きに同行させることを許してもらえないでしょうか」

「え？」

その申し出はニイロの予想に無かった。

サリアが（そしてメリーチェも）着いてきたがっていることは薄々知っていたし、ダスターツ伯爵もニイロという戦力を王国に繋ぎ止めたいという政治的な思惑から、そうなることを望んでいることも知っている。

しかし、伯爵には既に釘を刺しておいたし、危険が伴うことが明らかかな今回の旅に同行させる気は一切無く、それはサクラコも承知だと思ひ込んでいたのだ。

思わずニイロはカップのお茶を口に運ぶのを止め、向かいに座るダスターツ伯爵を見るが、伯爵も驚いた表情でサクラコを見ている。その後ろに立つ秘書官のラッチも同様だ。

伯爵は、ニイロが自分を見ていることに気付くと、小さく、しかし、激しく首を横に振って『儂じゃない』と無実を主張していた。

その様子を見ると、伯爵にしても寝耳に水だったのだろう。

しかし、その他の面々、伯爵の横に座るメリーチェや、その後ろに控える侍女長エルン、それに食器の上げ下げに甲斐甲斐しく動き回る他の侍女達の顔を見ると、『してやったり』の表情が読み取れるのを見ると、どうやら昨夜の『女子会』の面々による企てらしいとわかる。

当のサリアも、他の侍女達と一緒に動き回りながらも、耳を大きくしてニイロの言葉に神経を集中させているようだ。明らかに必要人数分以上のカップに茶を注いでいた。

「いや、それは……危険だっことは十分わかってるよね？」それはサクラコに対する確認の言葉だったが、サリアもコクコクと首を縦に振っている。

「もちろん承知しています。でも、ドマイセンの時は使節団全体の安全については注意していても、殿下やメリーチェ様など主要人物以外の個人が狙われることについて想定していませんでした。

ですが、今回同行させるとなれば話は違いますし、私とニイロがいれば大丈夫です。クラブやファージ達も頑張ってくださいますから」

「うーん、でも万が一を考えるとなあ……」
煮え切らないニイロに、食堂にいる全員の期待の籠った目が突き刺さる。

「儂は反対せんぞ？ ニイロ殿であれば問題無かろう。ちゃんとサリアの両親にも責任を持って話しておくし、後の心配はいらん」

横から伯爵が口を挟んできたが、『賛成』ではなく、『反対しない』という言い方がズルい。あくまでも『ニイロが望むなら』反対しないよ、

ということになるのだから。

ジロリとニイロが睨むと、伯爵はツイつと視線を逸らす。口笛でも吹いてトボけそうな按配だ。

これでは、このまま拒否の姿勢を続ければ、ニイロ一人が悪役になりそうな雰囲気である。

そのプレッシャーを受けてたじろぎつつも、「ちよつと失礼」と周囲に断つてサクラコを食堂の外の廊下へと連れ出した。

周囲には誰もおらず、聞く者もないことを確認してからニイロは切り出す。

「サリアを連れていけば、何日も一緒にいることになるんだぞ？ そうなると、必然的に俺達の出自やサクラコの正体がバレるって危険性があることは理解してる？」

そりや今は慕ってくれてるけど、そうなってしまうえば今の関係だつてどう変わるか……」

ニイロは元ベータ・アースの人間であつてガンマ・アースの人間ではないし、サクラコはA オートノマス・マシン M、俗に言うアンドロイドであつて人間ですらない。

別にガンマ・アースに悪意を持ってここにいる訳では無いし、サクラコが人間でないと知れても、説明が面倒と言った以上の困ることはないのだが、せつかく築き上げたダスターツ領の人々との友好関係に、無闇に波風を立てなくても、という感情が先に立つのだ。

「それでしたら、恐らくサリアさんであれば事実を知っても変わらな
いと思います。具体的な根拠は無いのですが……機械の私が『女の勘』だと言つたら、ニイロは笑いますか？」

これにはニイロも言葉に詰まった。

その様子を見てサクラコは畳み掛ける。

「これから行く場所に危険があるのは本人も承知しています。でも、別に帝国に戦争に行くわけではありませんから、サリアさんであれば相手に無用な警戒をさせることなく交渉も出来ますし、サリアさんに普段の雑用を任せれば、その分、私がニイロのお手伝いに時間を取れます。それに……」

さらに言い募るサクラコは手を上げて押しとどめた。

「ああ、わかった。わかったよ、もう。降参だ、降参」

「では!？」

「サリアの同行を許可するよ。サクラコにそこまで頼まれたら、断れるわけないじゃないか」

ニイロが全面降伏すると、余程嬉しかったのだろう、サクラコは名の如く花の咲くような笑顔をニイロに向ける。

「有難う御座います!・でも、これはニイロにもメリットがあると思うのです! 2人がもし、もしもそういう関係になれば、サリアさんだったら私も昨晩みたいにヤキモキせずに済みますし、私はニイロの子を産めませんが、お世話だったらお手の物ですから……」

「えっ?・ちよつ、ちよつと待った! そういう関係って、いやいや!

俺とサリアの歳を考えてくれよ。20くらい離れてんだぞ? ほ

とんど娘みたいな歳の子に、それこそ事案だつて! それに昨晩?

あ、あれ? 何で知ってんだ!？」

ばれてーら。

昨晩、酔った勢いで繰り出した城下町で、騎士や兵士達とそういうお店に行ったのは、独身漢オトコ同士の秘密だったはずなのだが、ほか図らずも外出したニイロをステルスモードで上空から自主的に護衛するクラブの優秀さが証明されてしまった。

うろたえるニイロをよそに、「じゃあ、サリアさん達に知らせて来ますね!」と、サクラコは足取りも軽く嬉しそうに食堂に向かう。

残されたニイロの「いや、ほら、俺も独身だし? 付き合いもあるし? たまにはそういうお店にだって……」という、誰に向かつての言い訳かわからない呟きは、食堂から聞こえてきたサリアを祝福する歓声によって打ち消された。

リドリスファール王国からバネストリア帝国へ至る道は2通り。

1つは王国を西に向かい、緩衝地帯となっているヨーネス大森林を踏破するルート。

距離だけで言えば、最短距離を進めたとして、馬車ならば10日程で抜けられる距離なのだが、実際には馬車の通れる道も無く、危険な害獣の闊歩する森の獣道を徒歩で1ヶ月ほどかけて踏破することになる。

危険度も高く、サリアを攫った誘拐犯達はこのルートでの帝国入りを目論んでいたようだが、まともな人間であればこのルートを選ぶメリットは無い。

実際に探査機回収の為にヨーネス大森林に踏み入ったニイロの感想でも、もし、誘拐犯達がこのルートを辿っていたら、恐らくサリアの命は無かつただろうと感じている。

そしてもう一つが、リユドーの街の南のリンデン砦を、さらに南下してビンガインに入り、そこから西にルートを取ってエズレン峡谷、一般にはエズレン回廊とも呼ばれる迷路のような谷底の道を帝国に抜けるルートだ。

このルートは馬車の通れる道が整備されており、商人達に利用される。

峡谷内に点在する水場を兼ねた集落を辿りながら馬車で約2週間と、かなりの迂回を強いられるが、道中の安全を優先する者にとっては、ヨーネス大森林ルートと比べれば、こちらの方が遥かにマシということだ。

実際、ニイロ達一行も、特殊輸送車両が使えるということ、このルートを取ることにしている。

ロードサレンを出発する時に降っていた雨は、リンデン砦を抜けるころには既に上っており、今はビンガインへ続く道をひた走っていた。

とは言っても、時速30kmほどの安全運転（ノロノロ運転とも言う）だ。

馬車が通れる程度に整備されているとは言っても、ベータ・アースの日本のように舗装されているわけでもなく、雨で多少ぬかるんだり、馬車の轍の刻まれた道では、これ以上のスピードを出すとサリアがもたない。

いくら高度なサスペンションでも、衝撃吸収力には限度があるわけで、これは以前にニイロがメリーチエ達を乗せてコルエバンに急行した時や、サクラコが使節団を乗せてドマイセンに向かった時の教訓だ。

若い女性のキラキラリバースを見て喜ぶ性癖はニイロには無い。

取りあえず今回は期限のある旅でなし、これでも馬車より数段早いので、仕方の無いことだった。

リンデン砦を南下して、都市国家ビンガインに至る街道沿いに、つい最近まで使われていた砦の跡がある。

以前は、リンデン砦方面からのリドリスファール王国の侵攻を防ぐ、重要な拠点の一つと目されてはいたが、実際には富める王国側から貧乏なビンガインにわざわざ攻め込むメリットは皆無に等しく、ただ国家としてのメンツを立てる為だけに無駄に財力を浪費する存在だった。

それが、王国とビンガイン、正確には王国と、ビンガインの後ろにいるドマイセンとの関係が幾分改善されたことから、経済的に余裕の無いビンガインではこの砦を破却し、駐留していた100名以上の兵を削減して、その分を本拠であるビンガイン市に集中するという政策を採るに至った。

ただ、砦は破却したものの、街道警備の為の拠点は必要で、より街道に近い位置に兵を常駐させる兵舎と、塔と言うには些か語弊のある木製の見張り用の櫓が設置され、常時20名弱が駐留している。

「おーい、北から変なのが来るぞー」

見張り台の上で周囲に目を配っていた兵士の1人が、街道を北からやってくるニイロ達の特殊輸送車両バスに気付いて、下にいる仲間の兵に注意を促した。

「変なのって何だー」

「よくわからんけど、王国の貴族が乗ってる箱馬車みたいなやつだー。でも馬も引いてないのに動いてんだよー」

何事かと兵舎から顔を出した警備兵の隊長は、見張り役の言葉に苦

笑しながら周囲の兵士達に知らせた。

「あー、そりゃあアレだ。王国の魔王か戦女神だ。心配いらん」

魔王に心配いらぬというのも変な話だが、周囲の兵士達は、納得顔の者と、不思議そうに首を傾げる者に二分されている。

それを見た隊長は周囲に説明した。

「ああ、知らないやつもいるか。リンデン砦とコルエバンで負けたろ？ その、勝った方の連中さ。噂、聞いたこと無いか？ コルエバンでドマイセンを相手にした男と、リンデン砦で連合軍を敗退させた若い女の話。」

あれ以来、何度かここを通ってるが、多少風変わりな格好はしてるけど、話せば普通の連中だったよ」

その説明に感心する物、納得する者はそれぞれだが、隊長としてはそれで終わりと来訪者を無視する訳にもいかない。

ちゃんと道沿いに顔を出して、警備してますよとアピールするのも仕事の内だ。

さして待つまでもなく、ニイロ達の乗る特殊輸送車両は、まるで出迎えるかのように立ち並んだ警備兵達の二元にたどり着いた。もつとも半分は野次馬であるが。

「どうも、お勤めご苦労様です」

なぜか居並ぶ警備兵達の前に特殊輸送車両を止めたニイロは、運転席のウインドウを下ろすと、リンデン砦を通過する際にビンガイン側で払った通行税の納付証明札を差し出しながら、以前、通った時に話して顔を覚えていた隊長に向かって挨拶する。

サクラコも笑って会釈し、サリアも「こんにちはー！」と元気よく挨拶していた。

「いや、仕事だからな。そちらこそご苦労様。これからまたドマイセンか？」

ニイロの差し出した通行税の納付証明札の確認を部下に任せ、隊長は雑談の呈でニイロに聞いた。

その問いに、ニイロは少しだけ考えると、逆に隊長に問い返した。「いや、実はエズレン回廊の方に行きたいんだけど、隊長さん、近道知

りませんか？ まともなルートだと、このままビンガイン市まで下つて西の街道でしよう？ でも、それだと遠回りになりそうだから、こ
う、斜めに突っ切る道は無いもんかと思って」

「ん？ あるぞ。たまに王国の商人が帝国に行ったり、その逆に帝国の商人が王国に行くのに使う道がある。直接これ——と、特殊輸送車両^{バス}を指差しながら——で行くんだよな？ まあ、一応、馬車も通れる道だから問題ないはずだ。

この先に三叉路あるのは何度か通って知ってるよな？ あれの右の方に入るんだよ。

するとワーバエって小さな村がある。以前、砦があつた頃は物資の調達とかしてた村だが、そこを過ぎるとセミテ村、ゴレット村。セミテもゴレットも、村ってよりは家が数軒あるだけの集落って感じだが、ここまでは一本道だから迷わんだろ。

ゴレット村までは、各村まで馬車なら一日づつとところだ。ただ、ここから少しわかりにくいんで、ゴレットでもう一度聞くといい。エズレン回廊に入る少し手前に出られるはずだ」

「なるほど。右に行つて、ワーバエ、セミテ、ゴレットで、そこから先はもう一度確認ですね。助かります」

「ただ、こつちの道は言ったように大荷物積んだ商人狙いの盗賊が出る可能性がある。まあ、あんた達なら平気だろうが、一応気をつけてな。出たら片付けてくれて構わんよ」

そう言つて隊長はニヤツと笑つた。

その笑顔には苦笑で返し、警備兵に通行税の納付証明札を返してもらうと、隊長に「それじゃ俺達はこれで」と挨拶してから、ニイ口は特殊輸送車両^{バス}を発進させた。

走り去る特殊輸送車両^{バス}の後姿を見送る隊長に、側にいた兵が尊敬の眼差しで話しかける。

「隊長、凄いつすね。あの魔王と普通に話せるなんて」

「ああ？ さつき言つたろ？ 話せば普通だったって。まあ、それはいいとして、本国に鳩便だ。一応、知らせておかんとな」

そう言つて面倒臭げに兵舎の方へと歩み去つた。

一方、のんびりと特殊輸送車両^{バス}の車内では、運転席のニイロにサクラコが尋ねた。

「ニイロ、どうして急にルートを変えるのです？ 何か不都合がありましたか？」

少し心配げなサクラコに、ニイロは笑いながら答えた。

「ああ、ごめんごめん、相談もせずに。実は単なる思いつきなんだ。ああ言えば多分、隊長さんは俺達が通るルートを本国に知らせるだろう？ それが仕事だしさ。」

でも、そうすると、帝国にも情報が行くんじゃないかなーと思つてさ。

それで最初のルートだと人目も多いだろうけど、抜け道ルートなら人も少ないだろうし、向こうにその気があれば、手掛かりが向こうからやってくるかも？ ……つて。

手掛かりはいくらあつてもいいし、食いつくかどうかはわからないけど、ハズレならハズレで、それでもいいんだし、まあ、要は撒き餌だよ」

「では、前方の警戒を厳重に」

「うん。でも、向こうが動いたにしても、時間的に接触できるのは最短でも3日後？ 4日後くらい？ もつとかな？」

情報の伝達速度とか、人員の移動速度とか、こっちのスピードを考えたら、何かあるにせよまだ先の話さ。時間はあると思ううよ」

「では、サリアさんに護身用の道具の使い方に慣れてもらう時間も取れますね」

そう言つてニツコリと微笑みかけるサクラコに、サリアは固唾を呑みながら答えた。

「がつ、がんばります……」

第33話 キャラバン

「あれ？…これって人じゃないですか？」

最初にそれに気付いたのは、意外にもサリアだった。

警備兵の隊長に教えてもらった最初の村、ワーバエ村を過ぎて、次のセミテ村に向かう途中のことである。

本街道を逸れて既に6日目。

本来ならば、ガンマ・アースで使用されている普通の馬車であっても、2日もあればセミテ村に到着できていたはずだ。

それなのに、馬車より速度を出せる特殊輸送車両での移動にも係わらず、まだこんな場所に居るのは、途中で珍しい草花や動物を見かける度に足を止め、観察や採取、分析作業などをしながら進んだ結果だ。

加えて、ワーバエの村ではサクラコが病人や怪我人の治療と回復指導を行ったり、サリアが村の女達の手伝いをする事で村人達との友好を深め、余分に一泊して、村の風習や地域の伝承などの話を聞く時間を取ったからでもあった。

急ぐ旅ではないというのも事実だし、馬車で移動するより時間が掛かっていることにだけ目を瞑れば、これは、この世界の様々な事象について調査するという、本来の目的の一つをこなしているのだから問題は無い。

そして何より、帝国からの介入があるのならば、出来れば人通りが少なく、他人に迷惑を掛けにくい場所で迎え撃ちたいという思いがある。

お陰で時間が余る為、サクラコなどは暇な時間にニイロの許可を得た上で、嬉々としてサリアに分析用の機械やデータ機器の使い方をお教えたりもしていた。

今はワーバエ村を出て、次のセミテ村という集落に向かっているが、サリアは予備の10インチ携帯端末を使って、2kmほど前方で上空から哨戒しているクラブ・ワンから送られて来る地表データを観ていたところだった。

「ほらこれ、ここ、ガウ草が茂ってるのに、中にコネオネの木みたい

なのが生えてるんですよ。ガーウ草は強いから、弱いコネオネの木がこんな風に生えるのっておかしいなって思ってる。

それで見てたら動いたんで、何かいると思ってる見たら人だったんですよ。びっくりしちゃいましたよ。あ、ほらまた」

そう言ってる、横に座るサクラコに画面を指差しながら説明している。

画面上ではクラブのAIによる判定でも人であることが確認された為、人であることを示すマーカーが表示されるようになっていた。

実のところクラブから送られて来るデータは、オートノマス・マシン A Mであるサ

クラコであれば、携帯端末を通さなくても受信できているのだが、その事実についてはまだ時期尚早というニイロの判断で、サリアには知らされていない。

別に秘密にする必要は無いし、その内話すつもりなのだが、単にニイロがなんとなく逡巡しゆんじゆんしているだけの話だ。

サクラコも、ニイロの許可が無い内は、自らサリアに話すことは出来ないのです、そのまま人間として振舞っている。

「凄いですね、サリアさん。クラブより先に見つけるなんて」

サクラコが本気で感心している。

褒められたサリアは思い切り照れた様子で説明した。

「コネオネの木って、実は冬の保存食になるし、葉っぱはお茶にすると美味しいんですよ。それで私が村にいた時も、よく採りに行ってたんです。でも、ガーウ草と一緒に生えてるとこなんか見たことなかったから、それで気付いたんです」

ガーウ草の茂みに隠れた人間は、隠蔽の為、体に草木を付けた即席のグリーンスーツを着用していたようだが、植生まで考えが及ばず、逆にサリアに疑念を抱かせることになったと言うわけだ。

高精細映像とはいえ、10インチの小さなモニターで、この小さな違いを見抜いたのは間違いなくお手柄だった。

「こりゃ凄いよ、ホント。着眼点もいい。俺達だと、そういう所に目が行かないからなあ。でも、これは獵師……じゃないっほいよね？」

運転席に座るニイロが、多機能ゴーグルに表示された映像を見ながら言う。

上空に展開させたクラブ2機の内、クラブ・ワンがガーウ草の茂みに潜む人物の拡大映像を送ってきていた。

茂みに潜む男は2人。

どちらも着るものはくたびれており、獲物を狙う地元の猟師に見えなくは無いが、それにしても潜む場所が道のすぐ脇の茂みでは、狙う獲物は街道を通る人間のように思われる。

念の為、クラブ・ツーを先行させて道の先の様子を探らせると、ほどなく、5 kmほど先の、道が狭隘きょうがいになった場所に、総勢30名ほどの盗賊らしき集団が三々五々、屯たむろしているのを発見した。

恐らく、先に発見した不審者2人は斥候で、通り過ぎた後で本隊に獲物が向かったことを狼煙か何かで知らせるのだろう。

「これはどう見ても、普通の盗賊団だと思います。ビンガインの警備隊長さんの仰ってた、隊商狙いの盗賊でしょう。」

いくらなんでも、帝国が手配したのなら、もう少し統率の取れたマシン連中を送ってくるのではないのでしょうか。

これなら無視して強行突破も出来ると思いますけど、どうします？」

映像を見ながらサクラコが感想を述べる。

ニイロ達一行がビンガイン市を經由して、エズレン回廊を通って帝国へ、という本来のルートから逸れたことを、帝国も掴つかんでいると仮定した上で、情報の伝達に掛かる時間や人員の移動などを考えれば、そろそろ何かあっても不思議ではない。

「相手はおっさん1人と小娘2人。帝国さんはこれで足りると舐めきってるのか……」

「無くは無いですけど……ニイロ、それ、本気で言ってます？」

少しジト目で睨まれた。

「ごめん、冗談。そろそろ何かあっても不思議じゃない時間は経てるけど、さすがにこれは、俺もただの盗賊団だと思う。」

首狩り姫なんて、あんな呪いの人形まで使ってくるような連中が、

こんな盗賊使うとは思えないし。

でも、どうしようか。強行突破が一番手間無くていいけど、ここで無視して後から来る人が被害に遭うのも嫌だしなあ。かと言って、全滅させるつもりなら、いくらでもやりようはあるけど、全員を無傷で捕らえるのは人数的に無理だし……」

盗賊を1人も逃がさないのは簡単だ。クラブに命じて上空から全員を問答無用で射殺させればいい。

もし、それを行ったとしても、ニイロ達が築いた信用と、盗賊然とした連中を比べれば、ニイロ達を咎める声は殆ど出ないだろう。

乱暴な話だが、この世界ではそれが普通だ。犯罪者にも人権がくとか、人道に基づいて裁判をくなどと言い出す人間はまずいない。

しかし、だからこそニイロとしては、せめて問答無用という手段を控えて、なるべく捕らえて裁きを受けさせたいと思うのだ。

「ですが、私達は警察ではありませんし、出来ることと出来ないことがあります。あまり難しく考えなくていいのではないでしょうか。

何も全員捕らえるんじゃないやなくて、出来るだけ捕らえたら、後の始末はこの国、ビンガインに任せてしまえばいいと思います」

「そっか……そうだな……」

結局、出来る範囲で彼等の武装解除を促し、それでも抵抗するのであれば撃つしかない。

それで撃たれて怪我を負っても、それは彼等の自業自得だ。そう腹を括る。

ニイロのその様子を見て、サクラコはさらに提案した。

「危険はありますけど、サリアさんの初陣にも丁度いいんじゃないでしょうか?」

「ういじ……えっ? 私ですか!? それも冗談です、よ、ね?」

サリアは突然自分に飛んで来た話にうろたえながら、ニイロとサクラコを交互に見やった。

「ああ、それはいいかも知れない。今後、危険があるのは間違いないし、サリアも少し慣れておくのはいいと思う。経験値稼ぎみたいなもんだな」

「ええつ、でも私戦えませんか？ 剣だつて使えないし、教えてもらつた道具くらいしか……」

「大丈夫。メインでやるのは俺達だし、後ろで見ればいいだけだよ。いざつて時に冷静に動けるよう、荒事に慣れておくのが狙いさ。」

ただの盗賊相手じゃちよつと過剰戦力かも知れないけど、念の為ファージも出すし、サリアはまず落ち着いて、指示した時か自分に危険が及びそうになった時に、今まで教えたことを実践するだけでいい」

サリアには護身用として、以前、デンクレルの街でサリアをゴロツキから守つた際にも使用した四連装のスタンガンとスタンロッドを渡してあつた。

他にも緊急用の小道具で、小型の通信機と催涙スプレーなんかも渡してある。

使い方についてもレクチャー済みで、実際に使用した訓練も行つていた。

いずれも非殺傷兵器であり、緊急時を除けば、ニイロはサリアが人を傷つけることを望んでいない。

「私達にとつてサリアさんはもう、お客様ではなく仲間なのです。ファージやクラブ達が守ってくれるので心配もありません。もちろん、ニイロも私も」

その言葉に勇気付けられたサリアは、意を決した表情で「はいっ！」と力強く返事をする。

不安はあつただろうが、ニイロとサクラコに励まされて、俄然やる気になったようだ。それだけ2人に対する信頼が厚いということだろう。

その返事を聞いたニイロは、特殊輸送車両《バス》の運転を自動に切り替え、緊張を解すほぐように笑いかけながら振り返つた。

「よーし。んじゃ、始めようか」



「ちくしょう！　そうそう上手くはいかねえか！」

前を見れば倒木で道を塞がれ、後ろを振り返れば道の脇の茂みから、何人もの武装した男達が飛び出して来るのを見て、ゴノワースは思わず毒づいた。

隊商キャラバンの護衛についたのは初めてではなかったが、これまで幸運にも途中で襲われたことは一度もなかった。

大きな街や拠点を結ぶ街道は、基本的に管理する国が面子メンツに賭けて警備の兵を巡回させており、途中で盗賊団が出没することは稀だ。

ただ、今回はリユドーの街で帝国まで往復する護衛の仕事にありついた時に、ビンガイン市を経由せず、時間短縮の為にショートカットの裏道を使うと聞いて嫌な予感がしたのも事実だった。

しかし、運悪く冬の間の北方哨戒の仕事に漏れ、いささか手元不意ふにょいな状態では、比較的金額の大きいこの依頼をスルーすることが出来なかったのだ。

おまけに隊商キャラバンの護衛という仕事は、メンバーが固定化され易い傾向があるので、上手く行けば継続的な契約に繋がる。

商人にしたところで、毎回初対面の護衛を集めるより、何度も一緒になって腕前、人柄共に信頼がおけると確信できる傭兵を雇いたいに決まっているのだ。

そんな訳で、ゴノワースは欠員キャラバンの出た隊商の募集に、一も二も無く飛びついた。

出発前の顔合わせでは、他に7人の護衛の傭兵を紹介された。

内、4人は帝国人で、剣と盾を持つ戦士が1人に短槍（と言っても人の背丈くらいはある）を持つ槍士が1人。それに弓士と魔道士が1人づつ。弓士は女だった。

残り3人は王国人で、戦士の男が2人と弓士の女が1人。これに槍士のゴノワースが加わる。

雇い主の商人の話によれば、基本的に8人を護衛として雇っているそうで、何らかの理由で欠員が出る度に補充していると言う。

今回はゴノワースと、もう1人の王国人の女弓士が補充要員だそう
だ。

これに雇い主の商人マイルズと御者2人、総勢11人が隊商キャラバンの隊員だ。

護衛任務ということで、ゴノワースは有り金をはたいて新調した大盾と、長年の相棒である手に馴染んだ短槍、予備の片手剣スクラマサクスを持って参加した。

主武器は短槍だが、一応は剣や弓も扱える。器用貧乏と言われることもあるが、本人は臨機応変だと思っていた。

2頭の騎馬と3台の馬車に分乗し、傭兵に護衛された隊商キャラバンの往路は、天候にも恵まれて何事も無く、予定通りに帝国の一都市であり、雇い主の商人の本拠地でもあるラダンカルに到着した。

ガンマ・アースに急がば回れことわざという諺は無いが、途中のエズレン回廊では幾つかある回廊内のルートの内、最短距離ながら不穏な噂のあった北部のルートを避け、遠回りでもなるべく南部ルートを選んだことが功を奏する結果となったようだ。

ここでの時間のロスを調整する為に、ビンガイン領内ではビンガイン市をショートカットするルートを取ったのだから。

実際、北部ルートを選んだらしい他の隊商キャラバンの中には、到着予定日を数日過ぎても音沙汰の無い隊商キャラバンがあるという噂も聞こえて来ている。

ラダンカルには休息と、荷物の積み替えで一週間ほど滞在した後、復路は往路のルートを逆になぞる形で再び王国のリュドーへと向かう。

無事にエズレン回廊も抜け、脇道に逸れてからも順調に道程を消化。後はこの先のワーバエの村を過ぎれば安全な街道に出られる。

リュドーに着いたらゴノワースの契約は一旦終了となるが、双方に支障が無ければ契約の延長も可能だ。

(こんな調子なら延長してもいいかも知れない)

商人にしては少々人が良すぎるキライのある雇い主。

護衛の傭兵達は互いの立場を弁え、適度な距離を持って接してくるし、旅の途中に模擬戦をして確認した互いの腕前も悪く無い。

そんなことを考えながら、交代で騎馬による前方警戒に当たっていた

ゴノワースの目に飛び込んできたのが、道を塞ぐ倒木だった。後方を見ればけっこうな人数の盗賊達が、わらわらと隊商キャラバンに追いつがって来る。

「30はいるか？ 数が多いぞ！ 打ち合わせ通り先頭へ！」

そんな声が後方から聞こえて来た。ベイリルとか言う王国人の戦士の声だ。

敵の数が多かった場合、一時的に先頭の馬車の周囲に集まって防御を固め、まず敵の数を減らすことに専念するという事前の打ち合わせ通りの指示だった。

後方の2台の馬車が無防備になるが、大勢の敵に対して戦力を分散し、各個撃破されるよりマシだ。ちゃんと事前に雇い主の承諾も得ている。

ゴノワースも馬首を巡らせて先頭の馬車に寄せ、下馬して背負っていた大盾を取り出すと、馬車の荷台にいる雇い主のマイルズに声を掛けた。

「マイルズさん、これを。立てて構えて、あんたは背を低く、頭を上げないように。流れ矢に注意してミシユリの防御に。ミシユリはこいつの陰から、どんどん撃つてくれ」

マイルズに自分の大盾を渡しながら、荷台の上から矢を射掛ける王国人弓士のミシユリに指示した。

無口なミシユリはコクリと頷く。うなず

それを確認したゴノワースは、もう1人の弓士、帝国人のシーエラにも声を掛ける。

「悪いな、シーエラ！ 金欠で盾一枚しか持つてなくてよ！ 次は2枚用意しとくぜ」

「いいさー！ 気にしなさんな！ ミシユリはいい女だからね！」

シーエラは間断なく矢を射掛けながら豪快に笑い飛ばした。

ゴノワースは別に、わざわざミシユリを選んで盾を渡した訳ではない。

たまたま依頼主のマイルズが近くにおり、たまたまその横でミシユリが矢を射ていたからそうだっただけの話だ。

傭兵同士で出身国を気にする人間は滅多におらず、戦闘中に個人的な好き嫌いで物事を判断をするような傭兵は三流以下だ。

もちろんシーエラも、それを承知の上での軽口だった。

「あんたもいい女だよ！」

そう返しながら、襲い掛かってきた盗賊の胸を短槍で一突きにして蹴り飛ばす。

そのまま手を持ち替えると、石突で別の盗賊の顎を撃ち抜いて昏倒させた。

倒れた盗賊に槍の穂先を突き立てて止めを刺し、3人目の盗賊は打ちかかってきたところを、素早く腰から抜いた予備の片手剣スクラマサクスで受け流してから、体勢が崩れた隙を突いて胴を横一文字に切り裂いた。

「やるねえ。あたしが旦那一筋じゃなけりゃ、あんたにもチャンスあつたかもよ？」

シーエラが軽い調子で笑いながらゴノワースを褒める。

彼女は既婚者で、この隊商キャラバンの護衛に参加している帝国人の戦士が彼女の旦那だ。

あつという間に3人を倒したゴノワースだったが、別にゴノワースが特別強かったわけではない。たまたまゴノワースに襲い掛かってきた盗賊が弱かったただけだ。

ゴノワース自身の自己評価は中の上くらいだと思っている。上の下にはまだ足りない、と。

戦士として同じリユドローの街を拠点にしていたハイ・オークのダグや、石壁の異名を持つコズノーにはまだ及ばないが、この程度の相手なら苦戦することもない。

少し腕の立った4人目の盗賊をなんとか裁いて、馬車の後方で戦う仲間の傭兵の方を見ると、帝国人の魔道士ブルワが、土魔法で作った土壁を交互に重ね、障害物にすることで数に勝る盗賊達の行動範囲を抑制して人数の不足を補っている。なかなか上手いやり方だ。

この乱戦で多少の手傷を負った者はいるようだが、今のところ死者や戦闘不能に陥った者はいない。

そちらの助太刀にゴノワースが駆け出そうとした瞬間、雇い主のメ

イルズの慌てた声が聞こえたことで足が止まった。

「ああ、馬車……商品が……」

その声の後方の馬車を見ると、盗賊の一部が一番後ろの馬車を無理矢理方向転換させて持ち去ろうとしている。

人数差を補う為に、先頭の馬車に守りを集中した結果だ。

こういった場合には、こういう作戦を採るということは、雇い主のメイルズにも伝えてあったし、その為に、高価な商品ほど優先的に先頭の馬車に積むよう工夫していたが、それでも馬車一台分を持ち去られては大損害だ。

ほぼ同時に気付いた帝国人の槍士カツタルから、魔道士ブルワに「土壁をー」と指示が飛ぶ。

しかし、ブルワは口惜しげに「すまん！ あの位置までは届かない」と、代わりに真ん中の馬車の後ろに小さい土壁を築く。これで真ん中の馬車まで持ち去られる危険は無い。これ以上の損害の拡大は防いだ形だ。

「こいつらを片付けて追えば、まだ追いつける！ 諦めるな！」

ゴノワースはそう叫ぶと、再び援護の為に後方に駆け出した。

王国人戦士と切り結んでいた盗賊に横から一突きお見舞いし、さらに襲ってきた盗賊の上段からの攻撃を、槍の柄で受け止めた。

そのまま相手の勢いに任せて姿勢を沈めることで、撃ち下ろされた剣の勢いを相殺し、逆に伸び上がる勢いで盗賊の剣を払いのける。

一瞬、相手との距離が空いたことで妙な間が生まれたが、それを切り裂くように後方から叫び声が聞こえた。

「ミシユリッ！」

シーエラの声だ。

目の前の敵を牽制しつつ、そちらに目をやれば、どうやら盗賊の放った矢を受けたらしいミシユリを、駆け寄ったシーエラが介抱しているようだった。

ゴノワースがメイルズに渡した盾の陰から、弓による牽制をしていたミシユリだが、メイルズが馬車を持ち去られる動揺で盾を倒してしまい、障害物の無くなった彼女に敵の矢が当たってしまったのだ。

シーエラが雇い主に遠慮なく非難の言葉を浴びせ、マイルズも謝りながら盾を起こしている。あの様子ならミシユリも命にまでは別条無いようだ。

それを見てホツとしたのも束の間、いつの間に関り込んだのか先頭の馬車の前方から忍び寄る2人の盗賊の姿が目に入る。

既にかなり近寄っていて姿勢も低い為に、荷台の上にいるミシユリとシーエラからは見えない位置だ。

2人の盗賊は、伏せるような姿勢のまま荷台の縁を回りこんで、彼女達を挟み撃ちにするつもりらしい。

それを目撃したゴノワースの行動は、頭で考えるより先に体が反応した結果だった。

「シーエラ！ 馬車の下に2人！ 手前と奥だ！」

思わずそう叫ぶと、手に持った愛槍を躊躇うことなく投擲する。

狙いは変わらず、荷台の陰から躍り出て襲い掛かろうとした、手前の方の盗賊を背中から刺し貫いた。

しかし、武器を放った大きすぎる隙を、目の前の盗賊が見逃してくれるはずもない。

がら空きになったゴノワースの右腕に、盗賊の剣が食い込む。

幸いにも肩当に当たって勢いを殺がれた剣は、それでもゴノワースの利き腕に小さくないダメージを与えることに成功した。

「ぐぬうっ！」

痛みに思わず呻き声が漏れた。

それでもすかさず、左の腰に佩いた予備の片手剣を、自由の利く左手で逆手に抜くが、順手に持ち替える暇が無い。

目の前の盗賊の下卑た顔がニヤリと歪むと、嵩に懸かかって剣を振り回してきた。

ゴノワースは何とかそれを捌くが、利き腕ではない左手で、しかも逆手に持った剣では力も入らず、傷を増やしながら次第に追い詰められていく。

自らの愛槍を手放してまで警告したシーエラ達がどうなったのか、その確認すら、する余裕が無かった。

「いい加減にくたばりやがれ！」

粘るゴノワースに痺れを切らした盗賊の、力任せの一撃に耐え切れず、予備の片手剣スクラマサクスまで弾き飛ばされた。

しかも、運悪く弾け飛んだ剣の柄が、ゴノワースの顎を掠め、脳を揺らす。

「ゴノワース!!」

女の声が彼を呼ぶが、その声はミシユリのものであったのかシーエラのものであったのか。

体が意志に反して上手く動かず目が回る。平衡感覚を保てず膝をついた。

何とか踏ん張ろうとしても、足に力が入らず踏ん張りが利かない。

目の前の盗賊が、ニタニタと勝ち誇った笑みを浮かべて、振り上げた剣がスローモーションのように振り下ろされ……。

タタタン!!

何かが爆ぜるような乾いた音が周囲にこだました。

同時に、ゴノワースに死をもたらすはずの盗賊の顔が弾け飛び、ゆくりとゴノワースに向かって倒れ込んでくる。

赤く生臭い血がゴノワースの全身に降り掛かった。

「ブルワ!？」

倒れてくる盗賊の死体を突き飛ばして除け、仲間の魔道士の名を口走りながら彼を探す。

盗賊の死因は剣でも槍でもなく、矢によるものでもない。

あるとすれば、魔道士のブルワによる魔法攻撃くらいしか思い当たらなかつたからだ。

タタタン!! タタタタン!! タタン!!

破裂音はまだ続く。

その度に盗賊達の悲鳴が上がり、血煙を上げながら倒れていく。

何が起こったのか混乱する中、脳震盪による症状からようやく少し回復したゴスワースの目が、呆然と空を見上げる魔道士のブルワを見つけた。

その様子を見れば、ゴノワースを救ったのがブルワではないらしい

とわかる。

戸惑いながらも、空を見上げるブルワの視線の先に目をやると、それはいた。

「あれは確か……」

無意識に眩きが漏れる。

ゴノワースは、以前、それを見たことがあった。

場所は荷物の配達というチンケな仕事で立ち寄ったルードサレン。たまたま行われていた、リンデン砦奪還と、コルエバン防衛の祝賀パレードでのことだ。

翼も無いのに空中を自在に飛ぶ、明らかな人工物。

まるで空を飛ぶ蜘蛛か蟹のように見えるそれ。

今、よく見れば2体いて、時折、薄い灰色の体の下にぶら下がった黒鉄色の捧の先から、赤い火の弾を発射される度に盗賊達が倒れていく。

隊商キャラバンが襲われたことに気付いたニイロ達が、偵察中のクラブ・ワンとクラブ・ツーキャラバンに隊商の援護を命じた結果だった。

ゴノワースは、まだよく力の入らない体に鞭打って、なんとか立ち上がると、転がっていた自分の片手剣スクラマサクスを拾い上げながら仲間達に自分の知ることを伝えた。

「あれは味方だ！ 近くにコルエバンの英雄が来てるぞ！」

「「おおおーっ!!」」

「なんだ？ 英雄？」

「あれって味方？ 援軍!?!」

その知らせに仲間達が奮い立つ。

コルエバンの英雄の話を知らない王国人はいない。

帝国人の護衛達は知らない者もいたようだが、実際に仲間の士気が上ったことに勇気付けられたようだ。

逆に盗賊達の方は、得体の知れない敵の援軍に動揺を隠せない。

1人が身を翻して逃げ出すと、やがて我先にとバラバラに四方へ逃走していった。

こうなると、人数に劣る側は追いかけることも出来ない。

深追いを避け、まずは少し休息を取りつつ、手分けして損害の確認を済ませることになり、切られて痛む右腕を押さえ、座り込んでいたゴノワースの元に、ミシユリとシーエラが歩み寄って来た。

「助かった礼は言うよ。でも、自分の得物を手放すなんて、あんな無茶はして欲しくなかったね」

シーエラは、一応文句を付けるが顔は笑っているし、ミシユリは黙ってゴノワースの腕の傷の応急手当に掛かる。

「悪いな、体が動いちゃったんだ。自分でもビックリさ。次から気をつけるよ。そういやミシユリも矢を受けてたみたいだったが、大丈夫か？」

手当てを受けながら、シーエラの抗議に苦笑しつつ答え、ミシユリにも声を掛ける。

「左肩だし、鏃^{やじり}も抜けたから大丈夫」

普段から無口で、あまり表情の動かないミシユリだが、そう答える彼女の顔が、少し嬉しそうな表情に見えたのはゴノワースの気のせいだったのか、それはわからない。

そんな話をしていた3人の元に、他の傭兵5人と雇い主のメイルズも三々五々集まって来る。

持ち逃げされた馬車を追わねばならないが、その相談だ。

馬車と共にいる盗賊は、恐らく10人前後。後から逃げた盗賊が合流していればもっと増えるだろう。

対して今から追うとすれば徒歩では厳しい。

なので、手段は騎馬になるが、使える馬は元から騎馬として使っていた2頭と、残る馬車から外して使える2頭。合計で4頭だ。

これではいくら傭兵の方が腕が立つとはいえ、多勢に無勢では返り討ちになる危険性も高いし、そうなって馬まで失えば、残った馬車で先に進むことが出来なくなる。

それに、今回の襲撃による傭兵の方の被害もそれなりに大きく、利き腕をやられたゴノワースや肩に傷を負った弓士のミシユリは戦力にならない。

結局、ほぼ無傷で戦力になりそうなのは、王国人の戦士ベイリルと

帝国人魔道士のブルワ、帝国人弓士のシーエラの3人だけだ。

「あれが加勢してくれば……」

そう呟く帝国人の戦士ジャスタル——シーエラの旦那だ——の視線の先には、上空をフラフラと飛びまわるクラブ・ワンの姿がある。先程まではもう1体いたはずだが、いつの間にか姿が見えなくなっていた。

「それにしても、あれは何なのでしょう？ 王国人はご存知のようですが、英雄がどうか。人が作った魔道具のようですが」

魔道士のブルワがゴノワースに尋ねる。

魔法に関しては一日の長があると評される帝国の出身者としては、ことさら興味を惹かれるようだ。

「ああ、王国とドマイセンが、リンデン砦とコルエバンでドンパチやったつてのは聞いてるだろ？ その時に活躍したそうだ。他所から来た人間だそうだが、俺も詳しくは知らん。

ルードサレンでやった祝賀パレードの時に、遠くから見たことがあつたんだよ。英雄様本人も、リユドーで何度か見掛けたことがある程度だ。

あの、空飛んでるやつは魔人形ゴレムみたいなもんつー話だが、その辺はほら、本人に聞けば教えてくれるかも知れんよ」

そう言つてゴノワースが指差した先は隊商キャラバンの進行方向。

ワーバエの村に続く道を、馬の引かない不思議な箱馬車が、土煙を上げながら向かって来る姿が見えた。

第34話 噂

ニイロ達一行は、ワーバエの村を過ぎて、次のセミテに向かう途中、道の脇に潜んで獲物を狙う盗賊の集団を発見した。

そこでまずは斥候としてかなり手前の位置にいた2人の盗賊を、ニイロとサクラコが手分けしてスタンガンで麻痺させ捕縛する。

軽く尋問して人数などを聞きだした後は、拘束して特殊輸送車両^{バス}の荷台に放り込んでおいた。

と、までは良かったのだが、サリアの護衛用にと亜空間に収納してあったファージ達を出すなど、準備をしている間に、肝心の盗賊本隊の方に帝国方面からやってきた隊商^{キャラバン}が襲われるという、何とも間の悪い事態になってしまっていた。

盗賊の本隊を見張っていたクラブ・ワンとクラブ・ツーからの警報で気付いたニイロは、慌ててクラブ達に隊商^{キャラバン}の援護を指示し、自分達も押っ取り刀で駆けつけた次第である。

「気付くのに遅れて、助けに入るのが遅くなってしまつて申し訳ない」
そう言つて、本当に申し訳無さそうにニイロは謝った。

最初からクラブに命じて排除していれば、隊商^{キャラバン}に被害を出すことも無かつたのだ。

それをただの盗賊と見て、サリアの経験値稼ぎだとか、なるべく手荒な手段を用いず捕縛を、などと考えた結果なので、ニイロとしては内心の罪悪感が半端ない。

平謝りのニイロに、隊商^{キャラバン}の主であるマイルズは慌てて礼を返す。

「いえいえ、こちらこそ危うい所を……本当に助かりましたよ。なにせ思いの他、相手の数が多かったものですから、一時はどうなるかと……」

それにしても、彼^かのコルエバンの英雄殿に助けて頂けるとは……仲間^かの商人に自慢ができる。

馬車を一台持ち去られてしまいましたが、まだまだ私にも運があるということでしょう。このお礼は必ず」

マイルズはニイロの手を取って感謝するが、そうして感謝されれば

されるほど、ニイロは居心地が悪くなっていく。

それを誤魔化すかのようには、マイルズに告げた。

「いや、礼なんていいんですよ。あ、それと、盗賊が持っていた馬車なら、今取り返しました」

「へ？　今？」

「ええ、馬車を奪って逃げた盗賊の動向は、クラブ……今、空飛んでるやつですけど……あれに指示してモニターしてたんで、うちのファージ……あ、今、そこで土壁壊してるのと同じタイプのやつですけど、ファージに指示して追い掛けさせてたんです」

マイルズがニイロが指差した先を見ると、キャラバン隊商の護衛の傭兵で軽傷だった3人と一緒に、3機のファージ達が土壁を壊して道を均したり、転がったままの盗賊の死体をせつせと処理していた。

傷を負った5人は、サクラコとサリアが手当てしている。

この場所に到着し、道を塞いでいた倒木を排除していた時は4機いたので、いつの間にか1機減っている。

空を飛んでいたクラブも2機いたのが、今は1機しか見えない。

いつの間に、どうやって指示したのか、マイルズにはわからないが、それらが馬車を追いかけて行ったということなのだろう。

「は、はあ……」

「ただ、さすがにクラブとファージじゃ馬が言うこと聞いてくれないんで、誰かに取りに行ってもらっていいですか？　この先、2kmくらいのとこなんですけど、ファージに案内させますから」

現実離れた話に、今一実感が乏しかったマイルズだが、段々とその朗報が事実だと実感されていくにつれ、じわじわと喜びが湧き上がってくる。

商品の三分の一が紛失すれば大損害だったが、それが取り戻せると言うのだ。

「ク、クレバン！　い、急いで馬を！　あと、誰か一緒に行ってやってくれ！　馬車を取り戻せる！」

マイルズは大慌てて御者に命じて馬を用意させ、護衛の選抜に掛か

る。

当たり前だが1人で行けば、乗って行つた馬を連れて帰れないので同行者が必要だ。それに馬車を方向転換させるのに人手も欲しい。

結局、御者のクレバンとマズロー、それに傭兵のベイリルとブルワの4人が、2頭の馬で馬車を取りに向かうことになった。

そんなやり取りを見ていたニイロの所に、今度は手にメモを持ったサリアがやって来る。

「サクラコさまが、これを出してもらつて下さいって」

渡されたメモを見ると、内容は鎮痛剤や抗生物質などの医薬品の名前と型番が書いてあつた。

医薬品は特殊輸送車両バスに備え付けのクーラーボックスに一通り備蓄されていて、医薬品のパッケージには、当然ながら英語か日本語でラベルが表示されているのだが、サクラコは傭兵の治療で手が離せないようだし、サリアはこの地ガンマ・アースで使われている文字しか読めないのだ。

一応、サリアも機器の扱いなどで必要に迫られて勉強はしているのだが、覚えることは他にも山ほどあつて、さすがにまだ一週間程度では限界があつた。

例えば、鎮痛剤のアスピリン一つにしても、メモに書いてある『Aspirin』の文字を絵として捉え、同じ形のものを探すことは出来る。

しかし、この方法だと、パッケージの表示が『ASPIRIN』だったり、『アスピリン』だったりした場合に同じ物と認識できないのだ。

アルファベットに漢字にカタカナにひらがな、サリアの苦労は果てしないが、それをフォローするのは吝やぶいかでない。

「おっけー、すぐ持つていくからサクラコの手伝い頼むね」

「おっけえ？　ですか？」

「ああ、そうか。了解とか、わかつたつて意味ね」

「あ、はい。わかりました……おっけえ、わかつた、おっけえ……」

サリアはぶるぶると呟きながら、サクラコの元へと戻つていく。

こういつた何気なく使う単語や表現でも、時々通じないことがあるのはご愛嬌だ。

堅苦しかったり丁寧な表現よりも、気軽な会話の中で出やすいが、これはお互いに慣れるしかない。

ニイロは一旦、特殊輸送車両バスに戻ると、サクラコのメモにあつた医薬品を準備した。

痛み止めと抗生物質を配合した塗り薬の外傷薬に、飲み薬の鎮痛解熱薬や消毒済みガーゼなど。いずれもベータ・アースなら一般の薬局・薬店で買える物だ。

以前、フィーゼの治療の際にサクラコから聞いた話だと、ガンマ・アース人に対してあまり強い薬剤を使うと、薬効成分の過剰投与になつてしまう危険があるそうで、比較的効き目の穏やかな薬品をチョイスした方がいいのだそうだ。

一通り揃えた医薬品を、サリアの自作の植物の蔓で編んだバスケットに詰め込み、サクラコの元に届ける。

「これで大丈夫です。腕の傷口は縫いましたけど、この糸は自然に溶けてしまいますから抜糸の必要はありません。後でお薬を……あ、ニイロ、有難う御座います」

サクラコは、患者への説明の途中で薬を届けに来たニイロに気付くと、荷物を受け取って説明の続きを始める。

「この塗り薬を、必ず洗った清潔な手で、こちらのガーゼに塗ってから、傷口に当てておくようにして下さい。毎日取り替えるように。」

あと、化膿止めと痛み止めの飲み薬も一週間分出しますから、毎日、朝昼晩の食後に3回に分けて飲んで下さいね。

痛み止めは、痛みがある程度引いたら飲まなくてもいいですけど、化膿止めは途中で止めると逆に悪化することがありますから、必ず飲みきって下さい。

だからと言って、面倒だからと一度に沢山飲むのも絶対駄目です。あと、お薬の効き目が変わつてしまいますから、一週間はお酒も控えるようにして下さい」

「えー、しかし先生よう、右腕だから俺一人じゃ取替えられねえし、酒も駄目つてのは、ちよつと勘弁してもらえませんかねえ」

傭兵のゴノワースが地面に直接座り込んだまま不満を述べている。

サクラコは医者だと思われたのか、先生と呼ばれているし、横で聞いていると、まるで病院の診察室のような会話だ。

考えてみれば、サクラコは元々が医療業務用のAオートノマス・マシンMなので、確かに本職ではあるのだが。

「何も一生飲んで駄目とは言ってません。一週間くらい我慢出来なくて、傭兵が務まるんですか？ それに、付け替えも一人で出来なければ誰かに頼めばいいのです。ええと、貴女のお名前は？」

サクラコは、ゴノワースの後ろで診察の順番を待っていたミシユリに声を掛ける。

突然声を掛けられた彼女は驚いたようだったが、すぐに名乗った。

「ミシユリ」

「では、ミシユリさんも今の説明聞きましたよね？ まだリユドーまではご一緒されるのでしようから、お薬の付け替えを手伝ってあげて下さい。」

あと、お薬の方も説明のメモと一緒に渡しますから、用法・用量を必ず守るよう管理してあげて下さいね」

「わかった。ゴノワースは管理する。お酒も駄目」

「お………」

「早く治したくないのですか？」

ゴノワースが何か言おうとしたが、彼には拒否権も無ければ発言も許可されない。

サクラコの、氷のような視線を浴びて、ただ口を閉ざすしか無かった。

「では、次の方。ミシユリさん……ああ、ちよつと待つて下さい………ニール、女性ですから、診察は特殊輸送車両バスの中で行いたいのですが、許可お願いできますか？」

サクラコは、肩の傷を見せようと何の躊躇ためらいもなく片肌を脱ぎにかかると、ニールに特殊輸送車両バスの使用許可を求めた。

「え？ あ、うん。もちろん許可するよ」

肩を負傷しているようだし、診察で着ている物をはだける必要もあ

るだろう女性に、プライバシーを守れる場を提供するのに否は無い。許可したことで、サクラコとミシユリ、それに助手役のサリアの3人は、連れ立って特殊輸送車両の中へと消える。

その後姿を見送ったニイロが、ふと視線を戻すと、まだその場に座り込んでいたゴノワースと視線が合った。

何か言いたげな視線に思わず尋ねる。

「何か?」

「ん? いや、こうして見ると、聞いてたのと少し違うなと思ってね。もっと恐ろしげな魔王っぽい男かと……」

「あー」

ちよつと頭痛がしてくる。

噂に尾緒はつき物と言うが、その噂の対象が自分となると、やはり勘弁して欲しいと思うのが当然だ。

余程のことでもなければ、別にそれで怒ったりする気も無いけれど。

「俺は普通の平民だよ、普通の。成り行きで争いを止めたいと思ったら、ああなつちやつたけど、この歳で英雄とか魔王とか、勘弁して欲しいよ。恥ずかしいったらありやしない」

「普通は成り行きで戦争止めるなんてしないし、出来ないけどな。」

あんたの姿はリユドーで何度か遠くから見掛けたことはあったんだ。ダグって男は知ってるかい?」

ひよんな所で思いがけない名前が出てきた。

「ハイ・オークの?」

「それだ。なんだ、じゃあ知り合いつてのは本当だったのか」

ゴノワースが感心したように声を上げる。

「ああ、ここに来る前にも一仕事手伝ってもらったよ」

「なるほど。前にな、そのダグが言ってたんだよ。てつきり酒場の馬鹿話の類だと思ってたんだが……コルエバンの英雄殿は、あのギガントライも1人で倒す化け物で、空飛ぶ悪魔を従えてドマイセンもやつつけちまった魔王みたいな男だってな」

それを聞いてニイロはがっくりと肩を落とした。

「悪魔だ魔王だの設定流したの、あいつかい……」

「いやまあ、話してたのは他所から流れて来た野郎共相手だったし、傭兵にやあ血の気の多い野郎も多いから、あんたにいらんチョツカイ出さないよう、脅したつもりなんじゃないか？」

横でゴズノーとニーアーレイが変な顔してたから、俺も全部本当だとは思わなかったし。

「そーいや、『ヘンテコな格好見て舐めて掛かると後悔するぞ』なんて釘刺してたしな」

ゴノワースも話の途中でヤバいと気付いたのか、途中からダグの擁護に回るが、ヘンテコは余計だった。

「うん、ギルティ。あいつ、今度会ったら絶対泣かすわ」

今のニイロの出で立ちは、いつものゴーグルに茶色の皮鎧風コンバットスーツ一式だ。ヘルメットも被っていない。

武器も尻のホルスターに護身用の自動拳銃オートマチックと、マチェットを腰に佩いているくらいで、自動小銃は亜空間ポーチに仕舞ってある。

マチェットも実際に武器として使う気は無く、見た目で丸腰だと思われるとかえって危険と言うことで、見せ掛けだけのお飾りだ。

ベータ・アースの安全な日本と違うのだから、それなりの格好をしているだけで、安全な土地ならもつとラフな格好で過ごしたいに決まっている。

一応、自分の格好が異質だヘンテコという自覚はあるので、ガンマ・アースこっの服装も試したが、着心地や機能など、様々な点でまだコンバットスーツの方がまだマシだったのだ。

特に、この世界のズボンズボンは、かなり大き目のウエストサイズで前が塞がっており、紐でウエストを締めるタイプか、前開きの場合には複数の小さなボタンを一個一個止めるタイプしか見当たらない。

小用の度に焦りながら複数のボタンを外したり、紐を解いてズボンを太腿辺りまで下げて、というのは、大人の男としてさすがに受け入れ難かった。ファスナー（ジッパー）は意外に偉大な発明品だ。

「ぎんっ……いや、うん、まあ、お手柔らかにな。それはそれとして、だ。」

ダグの話じやドラゴンや転移魔法について調べる旅をしてるって聞いたが、そこんところは本当かね？」

「ああ、それは本当だけど…….?」

ニイロは少し眉を顰めた。

目の前の男が帝国の工員で、ニイロの旅の目的を確認する為に探りを入れてきた、という可能性もあるのだ。

「だとしたら、2つ提供できる情報がある。1つは、この先のエズレン回廊の北側のルートにドラゴンが出るって噂だ。

とは言っても、俺の勘だとまずデマだろうと思ってるが、最近、北側ルートで行方不明になる隊商が出てるんで、ドラゴンに襲われたんじゃない? なんて噂があるんだよ。

まあ、実際はただの盗賊団の仕業だろうが、逆に盗賊団だって確証もまだ無いもんだから、色んな噂になってるらしいんだ。

俺達は危険を避けて南側ルートでここまで来たが、あんた達なら行けるんじゃないのか？」

あと、2つ目だが、こんなところにいるってことは、帝国の魔法学者に会いに行くんだろ? だとしたら学都に行っても無駄足だぜ。帝位争いのグダグダで、学都の学者はほとんど疎開しちゃってるよ。

行くんなら、帝国の西の方にあるコット・ベルニスって街を目指すといいらしい。たいていの学者はそっちにいるそうさ。

ただ、これも聞いた話なんで保証はできん。向こうで自分でも確認してくれ。命を救われた札にしちゃあ、シヨボい情報で申し訳ないが」

そう言つてゴノワースは、本当に申し訳無さそうに自由になる左手で頭を掻いた。

本人の言う通り、情報としては心許ないものがあるが、それにしてもニイロにとっては貴重な情報である。

帝国行きの目的については誤解されているようだが、あえて誤解を解く必要も無いだろう。

「いや、ドラゴンと転移魔法については、本当に情報が少ないんで助かるよ」

ゴノワースにはそう礼を言って、後は作業が終わって手隙になった他の傭兵達も加えての雑談をしていると、やがて奪われていた馬車を取り戻しに行った一行が戻って来た。

途中で捕らえた盗賊の斥候2人を、ビンガインの警備兵に渡してくれるよう頼んだり、メイルズから重ねて礼を言われ、帝国に着いたら必ず自分の商会に寄ってくれるよう懇願されるのを、何とか言質を取られないよう宥^{なだ}めて交わし、やがて別れて再び帝国への旅路につくのだった。

「せっかく気合入れて覚悟してたのに、出番ありませんでした……」
サリアがどんよりしている。

事前に初陣だの経験値稼ぎだのと言って盛り上げておきながら、盗賊はクラブ達で排除してしまった。

隊商が襲われたのは予想外のアクシデントなので仕方が無い。

「ま、次があるよ」

ニイロは苦笑しながらサリアに声を掛ける。

またトラブルがなければね、という言葉は声にしなかった。



商都アイ・ノワイスの北地区には、その北側を流れるナースチア川を利用した水運による輸送を生業とする商家が多く立ち並ぶ。

そして、それらを見下ろす一等地には、その統括を一手に司ってきたノズコンシア侯爵の館があった。

もつとも、その館の主は現在、別の屋敷へと移っており、今、明け渡された館に住まいするのは、先々代の皇弟、ゼールス・ピアノース・バナストリアである。

元は先々代の皇帝の存命中に一時臣籍に降下し、オルトレアス公爵を名乗っていたが、先々代の皇帝が崩御し、先代の皇帝、甥に当るコノヴァン帝が暗殺されてすぐに、強引に皇統に復帰して元のバナストリア姓を名乗っている。

帝国の宮廷では、中肉中背の、特に目立つことのない凡庸な人物と

目されていたが、コノヴァン帝暗殺以降の皇統復歸の手法や、あつという間に近衛軍を掌握した手腕など、それまでの評価が如何に間違っていたか、その話題が宮廷雀達の口端に上らない日は無い。

「……そのような次第で多少遅れましたが、所定の場所に無事到着しております。後は閣下の下知あらば、戦場には2日で到着して見せましょうぞ」

執務室として使用される部屋で、壁際に設置された執務机に座るゼールスに対し、やや時代がかつた古風な口調でゼールスに報告するのは、帝国西端に所領を持つサザリウス伯爵。

後ろに書類ケースを抱えた部下を伴い、商都への到着の挨拶と報告にやって来ていた。

痩せた体躯は浅黒く、長く伸ばして後ろで纏めた白髪とのコントラストが印象的だ。

既に老齢と言っているいい年齢ではあるのだが、鍛えられている為年齢よりは若く見える。

「わかった。此度の事の成否は貴殿の働きに掛かっていると一言でも過言で無い。その時は先鋒を務めてもらうことにもなる。連絡するまで、まずはゆっくりと体を休められるとよい」

ゼールスの言葉に、サザリウス伯爵は感激の面持ちで礼を述べる。「お心遣い、痛み入る。この老骨、全霊を持って馳せ参じる所存。いつでも申しつけ下され。それでは！」

そう言うと、白髪の老将は部下を伴って颯爽と身を翻して退出していった。

嵐の如き来客が去った部屋に残るのは3人の男。

「相変わらず嵐のような御仁でしたな」

ゼールス派の右腕と目される男、コズニーク侯爵が溜息交じりの感想を述べた。

「まあ、そう言うな。帝国の西の端の領地で、真に危機を感じながらも省みられなかったあれの気持ちは、儂にもよくわかるのだ。それに、自分の畑に関することならサザリウスは有能な男よ」

ゼールスは、苦笑交じりにサザリウスを擁護した。

「ええ、その点についてはサザリウス卿を疑ってはおりません。彼を推挙したのは私ですよ？ 彼なくしては今回の作戦は有りえませんが、それよりも、これで準備は整ったと言って良いでしょう。早速、明日にでも号令を掛けて、行動に移りたいと思いますが、宜しいですか？」

「よかろう。戦力の次第は？」

「はい。今回は極力平民を徴発せず、機動力に重きを置いて貴族の私兵のみで構成しておりますので、騎兵3000と弓騎兵1500、それに魔導兵500の4000に、サザリウス卿の300が主兵力となります。」

これに傭兵を1000と、輜重兵として1000を已む無く徴発しております。まあ、このくらいは誤差の範囲かと。

対してザルーク殿が集めうる貴族の私兵は、せいぜい1500から、多くとも2000には届きません。仮に慌てて平民から兵を徴発するならば、こちらと同じことをするだけの話。しかし、あの方の性格からして、それは無いものと考えます。

恐らく彼我的戦力を見て、帝都に籠城なさるでしょうが、そうなればサザリウス卿が決め手となるでしょう。

明日、陣触れをしたとして、兵の移動に掛かる時間などを見越せば、戦端を開くのは恐らく一月後（ひとつき）かと」

「うむ。では、そのようにせよ。他に何かあるか？」
ゼールスは重々しく頷く。

最後の問いは、これまで発言していないもう一人、ゼールスの息子であり、唯一の子であるカイサル・エレース・バネストリアに対するものだ。

医療が発達しておらず、平均寿命の短いガンマ・アースでは、既に老齢と言ってもよいゼールスが、40歳を過ぎてから生まれた息子であり、まだ20歳にも届いていない。

見た目はあまり父に似ていない栗毛の貴公子であり、年齢的に祖父と孫と言っても不思議ではない実の親子である。

「懸念でありましたオルグス一派の残党ですが、逃亡しておりました

オルグスについて、逃亡先であったレントス男爵の館を急襲し、ほぼ壊滅させたと報告が来ております。

オルグス本人の遺体も確認されていますので、この件はこれで終わりを見てよいかと思われます。

次に、オルデギー子爵に命じてありました王国方面の件ですが……どうやら悪戯に刺激した結果となったようで、オルデギーに代えてアスリンデ男爵に後始末を命じております」

その報告に、ゼールスの片眉がくいつと上る。

「オルグスの件はわかった。しかし、オルデギーは何をやらかした？」
「それが、どうやら王国のダスターツ伯の妨害にあったとか。

とは言え、ヨーネス大森林という天然の防壁がある以上、これから王国が何を企んでも、こちらが帝国を掌握して対策をとる時間は十分でしょう。

王国に関しては、ドマイセンを焚きつけて注意をあちらに引き付けた甲斐はあったと。

件の人物についても、ノズコンシア侯爵の意見で使者を送るよう手配はしましたが、あまり気に留める必要も無いかと。一応、アスリンデ男爵にエズレン回廊さほじの出口を固めるよう命じてあります。後は放置しておいても、然程影響はありますまい。

だいたい、ノズコンシア侯の心配が過ぎるのですよ。あの話、いくらなんでも盛りすぎです。父上が心配なされる西の連中でも同じことが可能でしょうか？」

「……わからんが……まあ、無理だろうな」

カイサルの問いに、ゼールスは少しだけ考えた後、慎重に答える。
「それと、父上、一つお聞きしても宜しいでしょうか。どうしてそこまで急がれるのです？ あと二月ふたつきほど待って、春麦の収穫が終われば農民の徴発にも支障は出ないでしょう。

そうして兵力を整えてから、一気に押し潰す方が確実と思うのですが……」

その息子の問いにゼールスは満足げな表情を浮かべた。

甘やかして育てたつもりはないが、年がいつてからの子ということ

もあり、ゼールスの目からすればまだ至らない部分も多い。

それをこうして、実務につかせながら勉強させているが、最近はず々諾々と言われたことをこなすだけでなく、自分で考えて具体的に提案できるようになってきたのは良い兆候だ。

ただ、だからと言って提案を採用するかどうかは別だが。

「そうだな。目の前の敵だけを屠るのであれば、それでいいだろう。これが他国との戦であれば、儂もそうするだろうな。」

しかし、これは内戦だ。敵も味方も元は帝国の臣民だぞ？ 勝つても負けても、被害を蒙るのは帝国ではないか。これほど馬鹿らしい話はない」

「御言葉ですが、それでも貴重な騎士に損害が出るよりは……」
「同じだ。お前は農民というものは畑で取れると考えておるか？ だとすれば考えを改めよ。もっとも、儂も昔は考え違いをしておったのだから、それを責めはせん。」

ただな、儂は末弟であった故、若い頃は比較的自由に、色々と見聞を広める機会に恵まれた。他国を旅し、西の連中の脅威を知ったのもその時だ。農民や商人の真似事もした。その経験からして言うところ。

貴族は知らん者も多いが、ただ種を蒔いて、放っておけば収穫できるというものではないのだ。儂の後を継いで帝国を担うつもりなら、一人前の騎士を育てるも、農民を育てるも同じだと心得よ。

そして此度は、被害を最小限で抑えて西からの脅威に備えるという一点が肝要なのだ。それが騎士だとか農民だとかは些細なことに過ぎん。

サザリウスの見立てでは、恐らく数年の内には動きがあろう。儂も同じ意見だ。その時の為に、今は無駄な被害は出せんのだ。

いいか、戦はこの1度で終わらせる。そして、一刻も早く西からの侵攻に備える体制を築くのだ。

この事は何度も訴えてきたが、誰も取り合ってはくれなんだ。

或いはザルークならばとも思ったが、あれも足元しか見ておらん。ならば儂がやるしか無いであろう。

はつきり言ってるな、この歳になつて帝位などどうでも良いのだ。しかし、相手が可愛い甥であっても、この地を守る気概が無い連中に任せてはおけん。帝国は儂が守ってみせようぞ」

ゼールスは血を吐くような表情で宣言した。

第35話 ソーコーの街

ニイ口達一行がエズレン回廊の東の入り口に当るソーコーの街に到着したのは、マイルズ商会の隊商を盗賊団から救って2日後のことだった。

これまでの行程からすれば大幅なスピードアップを図った結果だが、これはここまで、待てど暮らせど帝国からのアプローチが無く、どうやら帝国側は様子見に徹しているのでは？ という予想に至ったからで、それならばさつきと乗り込んで片付けてしまおうという結論に達した結果である。

当たり前の話ではあるが、やはり現実には、相手がこちらの思惑通りに考え、都合よく動いてくれるとは限らない。それでも、ガンマ・アースに対する現地調査の仕事が捗ったと考えれば、特に悲観する必要も無いだろう。

帝国中立派の使者であったチャク・ファノの言によれば、ニイ口達にチョツカイを掛けてきた帝国内の勢力は、『劣勢を挽回する為に、ニイ口達を利用しようと考えた』という話だった。

そこから導き出される推論として、まず最大派閥である皇弟派は無関係と考えられる。

残るは長男派と三男派で、これはまだ、どちらも情報が少なすぎて特定に決め手を欠くし、三男派は最近壊滅したと聞くが、残党が余計なことをしないともしない切れなかつた。

兎に角、早急に情報を集めて首謀者を特定し、意図的に派手な決着をつけることで抑止力とする、というのが、ここ数日で至った結論だ。

このまま手を引くことは弱気と取られて、かえって災いになる可能性があるし、目立たない方向での決着も考えたが、天秤に掛ければ派手にやった方が抑止力の効果は大きくなるという判断だった。

ニイ口個人としては目立つことは避けたいが、周囲の安全と引き換えなら、その点是我慢もやむを得ないと納得した。

ソーコーの街は、人口1000人程の小さな街だ。領主はおらず、

どこの国にも属していない。

人口が少ないことを逆手に取り、村長を中心に街の有力者による合議制で運営している。

エズレン回廊の入り口という、交通の要衝ではあるのだが、水場に乏しく耕作地に適した土地も少ない為、それ以上の人口を維持することが厳しいのだ。

ニイロ達一行は、ソーコーの西の入り口で、新たな集落への訪問では半ば恒例となった、『なんだありやあ』『やあ、どうも』という門衛との会話イベントをこなし、街の北側にある宿を紹介されて、一旦そちらへと向かった。

南側にも宿はあるが、最近、この街から分岐するエズレン回廊の北ルートが不穏なので、どうしても南ルートを選択する客が南側の宿に偏るので空気が無いということだった。

特殊^バ輸送車^ス両を宿の馬車留めに入れ、部屋を確保すると、ニイロはサリアを連れて街中に情報収集へと繰り出すことにする。

サクラコは他に仕事があるので留守番だ。

まるで西部劇に出てくる荒野の街のような造りの通りを、ニイロとサリアは連れ立って歩く。

これでタンブルウイードでも転がっていれば、まんま西部劇だが、残念ながらそれは見当たらない。

ニイロはいつもの皮鎧風コンバットスーツにゴーグル姿で、ヘルメットは置いてきた。

武装はヒップホルスターに収めた10mm^{オートマチック}自動拳銃とスタンロッドのみで、腰には使う予定の無いマチェットを佩いている。

サリアが着ているのは、サクラコの色違いの予備の服をサリアのサイズに合わせてサクラコが仕立て直した、水色を基調とした大正ゴシック風ナース服。

仕立て直しの際に若干デザインを変えたそうだが、基本的にサクラコとお揃いなので、サリア本人は随分と気に入っているようだ。

いつもはダスターツ伯爵邸仕様の侍女服を、普段の仕事着として着用しているので、今回はニイロと一緒にのお出掛けということで、少し

おめかししてみた、ということらしい。

一応、腰のポーチに護身用の4連装テイザー銃と、スタンロッドが収められている。

もつとも、万一の際はニイロの亜空間ポーチにいくらでも武器は収めてあるし、今、2人の目の前には護衛役のファージ・ツーが、マニピュレーターを兼ねた6本足でユーモラスに青い頭を揺らしながら進んでいた。ビープ音で小さく某国民的アニメ映画の散歩の歌を奏でているのは、ご機嫌ということなのだろうか。

当然、上空にはステルス・モードで姿を隠したクラブ・ツーも護衛についている。

「あ、ファージさん、そこ、その角を右です」

ファージ・ツーはサリアの指示に『ピポッ』と了解(?)のビープ音で答え、先頭に立って十字路を右へと入っていく。

「曲がったらすぐ看板が見えるって宿の人が……あ、あれですね！」

サリアが指し示す先に、軒先に下げられた看板が見えた。

看板には、交差した剣と槍の上に麦の穂が数本生けられた筒型のカップの図象が描かれていて、『仕事・酒・ザルドの店』という文字も見える。

ガンマ・アースでは比較的小規模な街で見かける酒場兼傭兵斡旋業の店だ。

ファンタジー物では冒険者とか冒険者ギルドというものがよく出てくるが、ガンマ・アースには冒険者も冒険者ギルドも存在しない。

代わりにいるのが傭兵で、国同士の戦争から個人の護衛、対害獣モンスターの仕事などを請け負っている。

いつだったかニイロが傭兵のコズノーに、冒険者という職業は無いのか尋ねたところ、『冒険するのは勝手だが、それじゃ金にならないだろう』と笑われ、そうではなく、ファンタジー物に出てくるような冒険者の定義を説明したが、『それは傭兵なんじゃないのか?』と逆に聞かれて困ったことがあった。

冒険者ギルドの代わりには、口入れ屋くちいと呼ばれる人材の仲介斡旋を

生業とする業種があり、依頼主からの依頼を出入りする傭兵に斡旋している。

現代の日本では職業斡旋は公的事業である為に消滅してしまったが、口入れ屋は江戸時代まで普通に存在していた業種だ。

ただ、このソーコーの街のように比較的小さな街では、依頼の数が限られていることもあって、眼前の店のように酒場との兼業の店が殆どだった。

まずはニイロが先頭になって、西部劇の酒場にあるようなスイングドアを押し開けて中に入ると、店の中にいた人間の視線が一齐にニイロに注がれる。

店の中は外観から受ける印象よりも意外に広い。

手前に4人掛けの丸いテーブルが4つと、奥の左手側に6人掛けの長方形のテーブルが一つ、右に2人掛けの小さい正方形のテーブルが一つ置いてある。

正面は4人ほど座れるカウンター席になっていて、カウンターの中にある髭面の男は主人らしい。

昼間ということもあって、店内は閑散とした印象だが、それでも数人の先客がいて、入り口手前の左のテーブルには傭兵らしい4人組、奥の小さい方のテーブルには森蜥蜴フォレスト・リザードマン人の2人組が陣取っていた。

「なんだい、ありゃあ……」

ニイロに続いて入って来たサリアと、その後続くファージ・ツィを見て、テーブル席の傭兵の1人が小声で呟いた。

ファージ・ツィは有名な西部劇に出てくる、夕陽が似合うガンマンのテーマソングを小さく奏でている。

(いや、ファージ、それ誰もわかんないって)

ニイロは内心で突っ込むが、言っても仕方が無い。

気を取り直して店内を進み、カウンターに席を取った。

ファンタジー物などでは、ならず者に難癖をつけられるテンプレな場面だが、ニイロの内心のワクワクも虚しく他の客が絡んでくることはない。現実はそのものだ。

考えてみれば、ファンタジー物に出てくる冒険者ギルドにしても、

ここのような酒場兼用の口入れ屋にしても、ベータ・アースの日本で言えば職業安定所のようなもので、そんな場所で無用のトラブルを起こせば、どんな腕利きでもロクな職を斡旋してもらえないはずがない。ちよつぴり落胆しながら席に着くと、情報を仕入れるのが目的であつても、店に金を落とさないのは礼儀に反するだろうと、取りあえず飲み物を注文した。

「俺にはエール。彼女には……………サリア、何がいい？」

「ええつと、お酒はあまり……………こういうお店に入ったのも初めて……………」

言われて気付いた。

今まで失念していたが、考えてみれば彼女はまだ14歳。中学生と同じ年頃だ。

そんな彼女を酒場に連れ込めば、ベータ・アースの日本なら完全に『事案』だ。

もつとも、ガンマ・アースでは特に問題にされることは無いが、二イロの気持ちとしては失態である。

「あちやあ、うっかりしてた。マスター、酒以外に飲み物あるかい？」

「ああ？　うちは酒場だぞ？　酒場で酒以外の飲みもんと言ったら水しかねえよ」

「あ、じゃあ、お水下さい」

そう言つてサリアは水を注文する。

日本人はつい、こういつた飲食店で出てくる普通の水はタダだと思いがちだが、ガンマ・アースでは普通の水もタダではない。

湧き水や井戸水を一旦煮沸して、湯冷ましとして飲料水にしてある。手間隙も掛かつており、ちゃんと飲める水は貴重なのだ。

「それで？　酒も飲めねえ娘つこ連れてうちの店に来たってことは、仕事の依頼か？　見たところ傭兵には見えねえ……………けつたいな格好だな……………受ける方じゃねえよな？」

髭面のマスターは二イロとサリアに注文の品を出しながら尋ねた。

サリアの後ろにいるファージにも、ちらりと好奇の視線を送るが、そちらについて聞くのは我慢しようだ。

「いや、悪いけど、どちらでも無いんだよ。帝国方面に向かう予定なんだけど、エズレン回廊の北ルートにドラゴンが出るとかって噂を聞いてね、それで詳しい話や他の情報は無いかと思ってさ。」

宿で聞いたら、情報ならザルドさんの店が早いってお勧めされたんだ。あと、何か摘めるもの、ある？」

出されたエールに口をつけながら、何でもない様子で探りを入れる。

マスターは、「何でえ」とつまらなそうな調子で口にしながらも、ニイロがツマミを追加注文したことで用意しながら答えてくれた。

「ああ、北ルートの話かい。何でも向こうからこつちに向かった隊商が、2つばかり行方不明とかって話だな。」

その内の1つが、帝国でも有名な大商会の隊商で、護衛だつてばかり付いてたはずなんで、それが行方不明つてことはドラゴンでも出たんじゃ？　つて噂だ。たいして根拠のある話じゃねえよ。

それにな、ちゃんと着いた隊商もいるんだよ。

北ルートと言つても1本道つてわけじゃねえし、北ルートの中のどこかに危険がある可能性はあるが、まだ様子見つて感じだな。

ただ、南ルートなら最近是不穏な話も聞かねえし、多少時間が掛かつて南ルートを使う連中が増えているのは確かさ。

お前さん達も、興味本位なら悪いことは言わねえ。覗き穴から針で刺されるのは嫌だろ？　大人しく南ルートを取った方がいいんじゃないかねのかい」

マスターはそう言つて南ルートを勧めてきた。ついでに注文のツマミを盛つた皿も差し出してくる。

覗き穴云々は、好奇心は猫を殺すという諺のガンマ・アース・バージョンだ。

見てくれは髭達磨だが、意外と人がいいと見える。「んー、そうだなあ……」

ニイロは曖昧に答えると、差し出されたツマミを口にした。

硬くなったパンを薄く切り、味付けして2度焼きした、いわゆるラスクというやつだ。

ベータ・アースの日本でも普通に入手できるが、甘い味付けが多いのに比べ、これは塩味でハーブを使った風味付けがしてある。ガーリックトーストに近い味だった。

形はスティック状に切っており、見た目は太目のフライドポテトに近い。

「あ、これ美味^{うま}い。ほら、サリアも食べてみて」

そう言ってサリアにも勧めた。

「あ、ほんとですね。甘い飲み物にも会うかも。このハーブは何でしょう？ サクラコさまのお土産に少し買っていつでもいいですか？」

サリアもニイロが差し出した皿から一つまみ取り出しては、美味しくポリポリ食べている。飲み物がただの水というのがアレだが、さすがに持ち込みの飲料を出すのは遠慮した。

その様子を見ながら、マスターも満足げに頷いている。

「そうだろうさうだろう。エールに合うハーブの配合は、俺も苦労したんだ」

「うーん、ベースはミクサの実ですよねえ。いや、ビネーレの葉かなあ。他にも何種類か使っているみたいですけど」

「ほう、いい線突いてるじゃねえか。確かにミクサでも似た風味は出せるだろうが、ありやあ、この辺じゃ採れないからな。ビネーレで正解だ。お嬢ちゃん、なかなかやるな」

「むふー。うちの村だとミクサが採れたんですけどね。ビネーレは無かったですけど、お屋敷に勤めてた時に、料理人の方に教えてもらったんです。

あ、そうそう、ビネーレがベースならザキシの種を乾燥して挽いたものを加えたら、ピリつとしていいかも……」

「ほうほう、嬢ちゃん、詳しく聞こうか」

何だか料理談義になっている。

ミクサだビネーレだと言われても、ニイロにはさっぱりだ。

話についていけないニイロは、仕方なく店内の様子を伺った。

奥のテーブルの方を見れば、2人組の森蜥蜴人は、時々ニイロの方

をチラチラと盗み見ながら小声で何か話している。

シユーシユーと空気の漏れるような擦過音の多い言語は、彼等独自の言葉なのだろう。少なくともベータ・アースの人間が通常使う共通語ではなかった。

ここにサクラコがいれば分析できたかも知れないが、残念ながらニイロには理解不能だ。

ニイロ達が店に入って来た時、やや慌てたような素振りに見えたのが少し気になってはいたが、単に珍しい格好に驚いただけかも知れないし、今の様子を見れば、特に良からぬ相談をしていようにも見えないので放置することにする。

そのまま、何気なく店内を見渡す風で、入り口近くのテーブルにいる4人組の方へと視線を向ければ、やはり小声でヒソヒソと何事かを話し合っていた。

よく見ると若い4人組で、一番年長と思われる男でも20歳を少し越えたくらいだろう。

さらに、一番年少に見える少年は恐らく14〜5歳くらいか。ベータ・アースでは有りえない特徴——獣状の耳を持つ獣人だ。

(おー、いるんだケモミミ。いや、いるって聞いてはいたけど……) ちよつと感動する。

(あ、でも、ダグも考えたらケモミミか)

ハイ・オークの傭兵ダグも獣人といえば同じカテゴリーに入るだろう。ただ、見た目が人間に近いかどうかの違いに過ぎない。

(でも、イノシシ男をケモミミと呼んだら、何か負けな気がする……)

もちろん、ニイロの個人的な感想である。

テーブルにいる獣耳少年は、丸い狸のような耳を持つ以外は人間と何ら変わらないように見える。

尻尾があるのか気になるところだが、ニイロの位置からだ他のテーブルや椅子の背もたれが邪魔になって確認できなかった。

4人は相変わらずチラチラとこちらを伺うが、その視線はどうやらファージとサリアに注がれている。

確かにファージの存在は気になるだろうし、歳の近い傭兵の少年達からすれば、美少女と言つていいサリアは目を惹くだろう。

何しろ、伯爵位を持つ貴族の家という、採用基準に容姿の水準も高いものが要求される場所にいたのだから。

ただ、サリアはそんな少年達の気も知らず、マスターと料理談義に興じているし、ファージの方はサリア達の話に合わせてなのか、某マヨネーズ会社提供お昼の料理番組のテーマソングを、ビープ音で器用に奏でていた。

(お前、ただだけ曲のレパートリー広いだよ……)

当然、ニイロの内心の突っ込みがファージに届くことは無かった。

時間は少し^{さかのぼ}遡る。

ニイロとサリアが出掛けた後、1人宿に残ったサクラコは、2階建ての宿の2階にある部屋で、傍目にはベッドの端に腰掛けたまま微動だにせずにいた。

飾り気の無い部屋はサリアと2人用として取ったもので、サクラコの視線は部屋の反対側にある、もう一つのベッドの上に固定されたまま、何かを見つめているようで実は何も見てはいない。

そんな奇妙な時間が30分ほど過ぎた時、サクラコの人工頭脳に声にならない声が聞こえた。

『ダウンロード終了。パケットに異常なし。サクラコちゃん、お疲れ様』

その声は、ニイロの故郷であるベータ・アースにいるアルファ・アース人で、ニイロ担当オペレーターのシンシアのものだ。

今回の物資転送の下準備と、ガンマ・アースで収集した各種分野のデータの報告の為、サクラコは1人残って通信を行っていた。

『無事に済んで良かったです。今回はデータ量が多かったですから』サクラコが答える。

実際に声に出したのではなく、通信機能によるもので、もし、ここに人がいても、相変わらず静かに腰掛けたままのサクラコの姿が映るだけだ。

『ぎつと見た感じだと、今回は植物関係多いねえ。あと、風俗や生活風習関係もかな？ 地味系だけど、地味だからこそ、関係の学者さん達、すつごく喜ぶんだよね。』

データの反響、凄いいよー。TVのドキュメンタリー撮影の申し出までであつたんだって。

それで、じゃあ二度と帰れる保証はありませんけど、ベータ・アースまで撮影班寄越してくれたら協力するんで転送許可申請しますか？ って返事したら、それつきり連絡無いんだって。

聞いた時は笑っちゃった。

あ、スポンサーの申し出も殺到してて、アルファ・アースの方じや選定に苦勞してるみたい。営利目的じゃないから、あんまり露骨な申し出は却下してるみたいけど、それでも数が多いから。

お陰でニーロさんには、なるべく不自由しないよう補給できるから、有り難いんだけどね。

あ、そうそう、報告にあつた現^{ガシマ・アース}地の協力者の件だけど、オーティス課長の話だと、特に問題ないって話だったよ。円滑な活動の為に現地の協力者の重要性は高いからって。

女の子つてところに私は引つ掛かるんだけど……映像見たら可愛いし……まあ、サクラコちゃんが大丈夫って判断したんだから信用はしてるけど……大丈夫なんだよね？』

いきなりマシンガン・トークが始まった。

しかし、サクラコはそれに動じることもなく、落ち着いた様子で答える。

『はい。性格は素直で、すれた所もありませんし、伯爵家で侍女をしていただけあって、頭の回転も十分です。よく気のつく、とても良い娘さんだと思います。』

何よりニーロを慕っていますし、他に悪い虫がつくより、よほど良い選択だと思います』

『ニ、ニーロさんは、彼女のことは？』

『はつきり聞いたわけではありませんが、正直、まだ恋愛対象としては……現状では保護者でしょうか。でも、人の気持ちは変わ

るものなのでしょう?』

『むー。それはそうだけど』『て言うか、あんた達、公機関の通信で、なんて話してんの』

いきなり違う声が割り込んだ。

シンシアの上司であるアデル・オーティスの声だ。

『あ、オ、オーティス課長、も、戻られたんですね……』

『あ、じゃないわよ、人が席外してる隙に……まったく。あんた達、姑と小姑じゃないんだから……』

『それでは、ニーロと合流しますので、物資の転送は明後日ということ。いつものように場所を確保したらビーコンを上げますので、後は宜しく願います』

お説教の始まる気配に、サクラコは素早く話を切り上げた。

『あつ、サクラコちゃんズルい!』

シンシアの抗議の声は聞かなかつたことにして通信を切った。けっこう黒い。

腰掛けていたベッドから立ち上がったサクラコは、そのまま窓辺へと向かうと、質の悪い曇ったガラス（それでも高級品だ）戸を開け放ち、窓から半身を乗り出した。

「そこにおられる方、敵対の意思はおありでしょうか?」

この問い掛けは、ちゃんと声に出してのものだ。

サクラコの視線は階下の通りではなく、正面を見据えていて、当然ながらそこに人はいない。

「……無回答であれば不本意ですが敵と看做し」 「わかった! 姿を見せる。逃げないし敵対の意思もない」

サクラコの声に被せるように、彼女の頭上、2階建て宿の屋根の上から慌てた様子の男の声が聞こえた。

「そうですか。では、部屋の鍵は開けておきますので、ちゃんと入り口からお越してください」

そう言つて窓際から身を引こうとした、ちょうどその時、サクラコの拡張された視界は、屋根の上の人物とは違う、もう1人の人間の姿を捉えた。

(あら、あの方は確か……)

なぜ、こんな街にいるのかは不明だが、サクラコの記録では、過去に面識のある人物だ。

ニーロへの報告は当然として、来客の用を片付けた後で、こちらから接触を図るべきだろうか？

(ああ、早くニーロと合流したいのに……)

それが今、彼女の一番の不満だった。

第36話 いらぬ気遣い

最初に対象が声を発した時、彼は、まさかそれが自分に対するものだと思わなかった。

「そこにおられる方、敵対の意思はおありでしょうか？」

しかし、こうして宿の屋根に潜み、対象を監視すること1時間ほど、この近くに自分以外に対象から声を掛けられる存在はいないと断言できる。

「……無回答であれば不本意ですが敵と看做し」「わかった！ 姿を見せる。逃げないし敵対の意思もない」

判断に費やした時間は1秒も掛かっていない。

ここで対応を誤れば、絶対にただでは済まない予感があった。

「そうですか。では、部屋の鍵は開けておきますので、ちゃんと入り口からお越しく下さい」

こうなったら腹を括るしかない。

彼は溜息混じりに張り付いていた屋根から身を起すと、次の瞬間には音も無く屋根の上から姿を消した。

「どうぞ。開いていますよ」

部屋の前に立つと、扉をノックして訪いを告げる間でもなく、中へと誘う声が聞こえた。

長年に裏街道に身を置いてきた者として、あまり人に気付かれるような行動は無意識に避ける傾向があることは自覚している。

今も、意識して気配を消していたわけではないが、それなりの行動を取ったはずだった。

それなのに、部屋の中に入る人物は、まるで身近にいて観察するかのように、自分の行動を正確に把握していた。

「……失礼する」

忸怩たる思いの中、扉を開けて中へ入った。

部屋は二人部屋。

その中央には小さい丸テーブルが置かれ、それを挟んで両サイドに

寄せてベッドが設置されている。

染めているのか、初めて見る鮮やかなピンク色の髪の毛の少女は、テーブルの向こう側、窓を背に椅子に腰掛けて待っていた。

「どうぞ、立ち話も何ですから、お掛け下さい」

そう言つて自分の正面の席を指し示す。

彼は言われるままに席に掛けながら呟いた。

「本当に……いたんだな」

サクラコは、その呟きを聞きとがめると聞き返す。

「いた？ ですか？」

「3人で宿に入ったのは確認した。その後、2人が出掛けた事も。しかし、俺が位置に着いた時点で、あんたが残ってるはずの部屋に人の気配無かった。

何度も直接目で確認しようかと迷つたが……そして部屋から気配がしたと思つたらこの様だ。確かに俺も似たようなことができるが……」

あれは次元が違う、という言葉は飲み込んだ。

サクラコがベータ・アースとの通信を行つていた時のことだ。

膨大なプログラムを走らせる必要のあるベータ・アースとの通信中、サクラコ本体は必要最低限の機能を残してサスペンド・モードに入る必要がある。

サスペンド・モードのサクラコは完全に無防備となるが、男の存在は把握していたし、緊急時は直ちに復帰して対処できた。

「いましたよ、ちゃんと。でも、良かったですね、余計なことをしないで。」

あなたの存在は知っていましたし、特に害も無いようでしたから、こうしてお招きしたのです。

私はただ座つていただけですから、別に見られても構いませんが、女性1人の部屋を覗こうなんて、軽蔑されても文句言えないでしょう？」

「害も無い……か。見張ってるつもりが見張られてたつてことか……」

男は自嘲気味に笑った。

「お名前……は、お聞きしません。貴方の立場もあるでしょうから。私のことはご存知ですね？ 一応、名乗りますと、サクラコと申します。」

前まえ以もつてお知らせ下さったなら、きちんとした御持て成しの準備も出来たのですが、生憎こういう場所ですので……」

サクラコは足元に置いた保冷バッグから、缶入りの炭酸飲料を2本取り出して、1本を男の前に置いた。

機会があれば後でニイロやサリア達と一緒に、特殊輸送車バス両に備え付けの保冷庫から移しておいたもので、ベータ・アースでは老若男女に御馴染みの、赤い缶入り炭酸清涼飲料水コラだ。

戸惑う男に、サクラコはにこりと笑って説明する。

「別に警戒することはありませんよ。ただの飲み物ですから。コーラと言って、私共の国では、子供から大人まで、普通に愛飲されています。」

こうして開封して、後は缶から直接飲むなり、カップに注いで飲むなり自由です。

炭酸……まあ、簡単に言うが無害な泡ですね。エールの泡と同じものですが、炭酸が入ってますから、開封前に無闇に振ったり乱暴に扱うと、開封した時に噴出ふきだしてしまいますので注意が必要です。が、それを楽しむもの、この飲み物の楽しみ方かも知れません」

そう言って解説しながら、開封してカップに注いで見せる。

シユワシユワと小気味良い音と、泡を放ちながら、謎の黒い液体がカップに注がれ、同時に甘く爽やかな香りが漂ぬった。

「冷えた状態が一番美味しく飲めますので、温ぬるくならない内にどうぞ。本当は氷があればいいのですが、そこまでの準備はしてなくて……」

あ、慣れないで一気に飲むと咽てしまうかも知れませんが、最初は少しづつ」

普通であれば、何が盛られているかもわからない飲み物に口をつけることは決して無いが、こちらに敵意は無く、相手を信用しているとアピールするためにも躊躇うことは出来ない。

見ればカップの中の黒い液体は、今も不気味にシュワシュワと音を立てて泡を吹き出していて、見た目の印象と真逆の、漂ってくる爽やかな香りが、男の混乱に拍車をかける。

男は意を決して差し出された黒い液体の入ったカップに口をつけた。

「美味い……」

エールよりも強めの泡が口内をピリピリと刺激し、未知の柑橘系の爽やかな香りが、泡と共に鼻腔を駆け抜ける。

甘いがさっぱりとした喉越しは、嫌な後味を残すこともなく、口の中をきりりと引き締めた。

思わず残りをゴクゴクと飲み干すと、とたんに胃の腑からゲップが上ってきた。

「こ、これは失礼……」

思わず顔を赤くして謝罪する。

「いいえ、それもまた、この飲み物のお約束の一つです。美味しく飲んで頂けたなら、それで結構ですよ。」

それに、先程も言った様に、これは気取って飲むものではなく、余暇に気軽に飲む、ごく普通の飲み物ですから安心して下さい。

気に入って頂けたのであれば、もう1本余分にありますから、お土産にどうぞ」

サクラコは、そう言って開封していない缶を1本差し出した。

「……それでは、一応、お聞きしますが、どちらの手の方で、何の目的で潜んでいたのか、お教え下さいますか？」

普通なら答えるはずの無い質問だ。

しかし、男の方は、こういった場合の対処法の指示も受けていた。そんな想定は無用だと思っていたが……。

「二応、名前も告げておく。アロックだ。俺をここに送ったのは、帝国第二王女、テイリザ様に仕えるファノ家。目的は、王国から帝国に向かったという情報を元に、おそらく通るであろうこの街であんた達を待って、その監視と、第三者からの襲撃等があった場合の……」

「護衛だ」

護衛という言葉に自嘲気味のニュアンスが入る。

あつさり見つかつておいて、護衛も何も無いものだ。

「そうですか、チャク・ファノさんの所の方でしたか。それにしても、随分簡単に明かして下さいましたね」

「ああ、もし見つかつた場合は、あんた達には全て話していいと指示が出ていた……馬鹿げた指示だと思つていたが、これではチャクを笑えんよ」

指示されたのは『対象の動向を監視し、特に第三者の接触があれば早急に報告すること』『対象を第三者から保護すること』、そして最重要の指示は『決して対象と敵対せず、必要があれば全ての情報の開示を許可する』だ。

ファノ家に仕える者は、長年に渡つて己が技術おのを鍛えて来た。

もし露見すれば己の技術おのの拙さの結果であり、その場合は全てを内に秘めて自力で退路を開くか自決するのみ。

それを、見つかつたらさつさと降参してしまえという、前代未聞の指示に憤りを感じたのは、アロックだけではなかつたはずだ。

結果は裏目に出たが、屋根の上に潜んでいたのは、ただ監視するだけならば見つかるはずがない、という男の矜持きよつじが行わせたことだった。

「後学のために聞かせてくれると有り難いのだが、なぜわかつた？ 簡単に見破れる程度のものだつたのか？」

「ええ、そうですね。簡単でした。でも、自信を無くされることは無いと思いますよ。言うなれば、私達の方が反則しているようなものからです。

種明かししましょうか。その窓から、少し上の方を覗いて見て下さい」

アロックは言われるままに、椅子から立ち上がると窓辺へと移動した。

「そうですね、だいたいあの辺りを……クラブ」

そう言つて窓辺に並んだサクラコが指差す辺り、4〜50mほどの空を見つめると、突然、空の一部が陽炎のように揺らぎ、そこに異形

の物体が出現した。

「あ、あれは……」

それを目にしたアロツクは絶句する。

話には聞いていた。コルエバンの英雄が使役する僕しもべがいる、と。

「ありがたい、クラブ。もういいですよ」

サクラコがそう言うと、上空の異形は了解したとでも言うように、マニピュレーター手を一振りし、また陽炎のような揺らめきを残して消え去った。

「騒ぎになるので普段は姿を見せていませんが、ああやって護衛してくれています。ですから、あなたの行動は一部始終把握していましたし、必要ならあなたを排除することは簡単でした」

「あんなものが……観客がいるとも知らず、とんだ茶番を演じてたというわけだ……」

しかし、姿を消す魔道具の存在なら知っているし、周囲に魔力の反応は無かった。我々として、そのくらいの用心はしていたのに……あんだ達の力は、帝国の魔導技術を上回っているってことか」

アロツクはがっくりと肩を落とす。

「上か下かはともかく、私達からすれば、魔法や魔力うんぬんの方が、よっぽど意味不明なのですけどねえ。

でも、これでおわかり頂けたように、私達に護衛は不要です。むしろ、武力を行使する際の邪魔にしかありません。

あなた方にも都合があるでしょうから、監視まで止めろとは申しませんが、敵対の意思が無いのであれば、私達が武力を行使する際に巻き込まれないよう、出来る限り距離を取られることをお勧めします。

そうですね、絶対安全と言えるのは半径2kmほどでしょうか。一応、警告しておきますので、それ以下の距離で巻き込まれた場合は不運と思って諦めて頂くしかありません」

「ちよっ、ちよっと待ってくれ。2kmってそんな……それで」

2kmも離れて監視など、出来るはずが無い。無茶が過ぎる要求だ。

アロックは抗議するが、サクラコはすぐに畳み掛けてきた。

「別に監視するなどは言っていないではありませんか。元々、自分達に対する監視を黙認すると言ってる時点で、こちらがする必要もない譲歩をしていると理解できませんか？ 普通は監視など断られて当然でしょう？」

しかも、親切に安全圏の目安までお知らせしているのですよ？ 対象を監視するなどという業務に就いている時点で、危険は織り込み済みなのではないのですか？

後は、そちらの責任に於いて、そちらの判断にお任せしますということですよ」

「ぐっ……」

全く反論が出来ない。

サクラコに見つかった時点で逃げなかった自分を呪うが、クラブを見せられた後では逃げて逃げられたとも思えない。

答えに詰まるアロックに、サクラコはさらなる追撃を仕掛けてきた。

「それで、あなたは戻られたら、今言ったことをお仲間にも周知して下さい。

それと、こちらでも譲歩するのですから、あなたのお仲間の一番偉い人に、こちらの要求も伝えて下さいね」

「……要求？」

「はい。簡単なことです。お仲間で魔人形、首狩り姫でしたか、あれを動かせるレベルの魔力を持った女性を全員を集めて、私達と引き合わせて頂きたい、と。」

人数が数千人とかですとさすがに考えますが、チャクさんのお話では、一応、それほど大人数ではないと伺いました。

時期の方はなるべく早く、理想としては私達が帝国に到着してすぐ、というのが理想ですが、そこまで無理は言いません。前まえ以もつて可能な時期をお知らせ下さったら多少は待ちます」

どれほどの無茶を要求されるのか身構えたが、サクラコの言った条件は意図が不明すぎて、アロックには判断できる範疇の外だ。

「わかった。その件は確実に上に伝える」

「では、連絡はいつでも、屋根からではなく普通に訪ねてきて下さい。そちらから連絡が無い場合は、帝国に入った時点で、ファノ家、でしたね。そちらに連絡を入れるようにしましょう。」

私はこれから二ーロの所に行きますので。一緒に行くなどと無粋なことは言わないで下さいね?」

話は終わり、ということだった。

アロツクは、疲れた様子で、このソーコーの街で、臨時の拠点としている一軒屋に戻った。

途中、いつものように尾行を警戒し、いくつものフェイクを織り交ぜながらの帰還であるが、あのサクラコという女に見せられた『反則』を思えば、それらの行動が全て虚しく感じられてしまう。

建物に入る間際、ちらりと上空に視線をやるが、雲一つ無い快晴の空が広がるのみだ。

(上から堂々と監視されてりや、何したって無駄じゃねえか…….
しかも、こっちはいるかどうかすら見えないときてる)

無論、建物の中や軒先の死角を利用してみたり、変装してみたりと工夫は思いつくが、向こうもそのくらいの事は承知で種明かししたのだということくらい理解できる。

恐らくまだ、手の内を明かしていない手段で防げるのだろうと予測できた。

今、この瞬間に、あの女がこの場所に『道案内、ご苦労様でした』と、澄ました顔をして訪れてもアロツクは驚かない。

情報を扱う部署に身を置くからこそ、一方的に知られているかともいう予想に、具体的な恐怖を感じるのだ。

ファノ家の上層部からの、神経質すぎとも思える『絶対に敵対するな』の指示が、今のアロツクには心底理解できた。

「アロツク、どうした? 何かあったのか」

先に拠点にいた森蜥蜴フォレスト・リザードマン人のナクがアロツクに声を掛ける。

「対象と接触した。至急、上に報告を上げにやならん。鳩便出せるか

？」

「接触したのか!? 何で!？」

アロツクの答えに、ナクは驚きの声を上げる。

別に接触自体は禁じられていなかったが、ナクは仲間内でも隠行術に長けるアロツクが対象と接触したということに不審を覚えたのだ。

アロツクは、かいつまんでナクに経緯を説明した。

「対象が使役してるって魔人形ゴレムか……じゃあ、俺の行動も？」

いきなり対象の男の方が店に現れた時は驚いたが、ありやこつちを知ってて来たのか」

「そつちも?」

「ああ、ザルドの店でシージージャと打ち合わせしていたら、いきなり現れたんだ。

こちらに気付いた風はなくて、どうやら北ルートのことを気にしているようだった。偶然かと思っただが、あれはわざとこつちに予定ルートの情報を漏らしたってことか？」

俺は一旦こつちに戻って、向こうにはシージージャが残ってるが、やつにも知らせておいた方がいいな」

無論、誤解だ。

ニイロがザルドの店に現れたのは単なる偶然である。

「しかし、そんなのがいるとなると、これ以上隠密に張り付くのは不可能ってことになるぞ? こうなったら、いつそ懐に飛び込むしか……」

「いや、それはチャクお嬢が既に申し出て断られてる」

アロツクは首を左右に振って打ち消した。

「とにかく、向こうの要求も伝えねばならんし、上に話を上げたら、後は指示待ちだ。

それまでは、幸いにも巻き込まれるのを承知なら、監視と護衛を続けること自体は許してくれるそうだから、これまで通りにするしかない。

とは言っても、あの馬無しの箱馬車で移動されたら着いていけるわけも無いから、この街限定の話だな」

「まあな。森の中なら何とかして見せるが、街道を夜中も休まず走り続けられたら、馬の方が潰れつちまうからなあ。」

後は回廊この出口うで別働隊に張つてもらうしか無ねえか……何だそれ？」

アロツクがナクと会話しながら無意識に手で弄ねんでいた赤い円筒に、ナクの視線が止まった。

「ん？ あ、ああ、例の対象がな、土産だと言ってくれたんだが……中は単なる飲み物だ。コーラとか言ったが、連中の国の飲み物だそうだ」

「大丈夫なのかよ、それ」

ナクは訝しげに赤い円筒を見た。

赤地に白で模様が描いてあるが、文字のようにも見える。

「対象が今更俺達に危害を加える理由も無いだろう。始末するつもりなら、とつくに始末されてるさ。」

向こうの宿で出された物も飲んだが、確かに美味かった。甘いんだが複雑な甘さで、香りは柑橘系に似てる。エールより強烈な泡が口の中で弾けるんだ。

皇族や貴族だつて、これより美味しいものは飲んだことがないかも知れんぞ？

それに、この容器の材質、鉄に似てるが、ただの鉄じゃないことは確かだ。押せば凹むほどの柔らかさで、しかも軽い。

この滑らかな加工や着色の技術なんかは、相当の鍛冶師でも再現できるかどうか……もつたないが、これも送つて報告するべきだろうな」

「へえ、そんなに美味しいのかよ……俺も飲んでみてえが、やっぱり報告に回すべきなんだろうなあ。どうせならもつと貰つてくりや良かったのに、お前めえも気が利かねえなあ」

ナクは手渡された缶を持ち上げたり眺めたりしながら、冗談半分にアロツクに文句を垂れた。

それに対し、アロツクは意外にも真剣な表情で呟く。

「そうか。タダは無理でも買い取るって手はあるか……機会が

あれば売ってもらえれば……1個小銀貨1枚なら何とか……10個くらいは……」

「ちよつ、小銀貨つて本気かよ！ はあ？ これ1個で小銀貨1枚出すつて？ ただの飲み物もんなんだろう？ そんだけ美味かつたつてことか!？」

ナクは森フオレスト・リザードマン 蜥蜴人の特徴でもある大きな目を見開いて、手に持った缶とアロツクを交互に見比べた。

ベータ・アースの日本と、ガンマ・アースのこの地域とでは、当然、物価が違う。また、食料品などの日々の必需品は安く、耐久消費材は価格が跳ね上がる傾向にある。

なので一概には言えないが、概ねの目安としては小銀貨1枚は1万円程度と置き換えるといい。

小銀貨は4枚で大銀貨（銀貨）となり、銀貨2枚（約8万円）あれば家族4人が1ヶ月を食つていけた。

「美味かった。連中の国では誰もが普通に飲むものだと言っていたが、本当なら夢のような話だ」

「はあく。まあいいや。俺はそんな恐ろしい飲み物は願ひ下げだ。いか？ 相手はあくまでも監視対象なんだから、下手な接触はするなよ？ 絶対だぞ？ わかつてるよな？」

やや不安そうな面持ちでナクが念を押す。

「わかつてるさ。仕事は仕事、そこは信用しろよ」

ガンマ・アースが、押すなよ？ のフリが通じない世界で何よりだ。

アロツクは真面目に答えると、報告を纏めるべく仕事に掛かった。

第37話 ザルドの店

ソーコーの街の、酒場兼口入れ屋であるザルドの店。

そのスイングドアを押し開けて、ドヤドヤと傭兵らしき一団が店に入ってきた。

「ふいー、やっと着いたぜ。マスター、エールと食いも……うおっ!!」

一団のリーダーらしき男が、カウンターに座るニイロとサリア、そしてその後ろに控えたファージ・ツターの姿を見て驚きの声を上げた。

他の男たちも『何だ何だ』と一様に警戒と好奇心の声を上げる。

「あー、驚かせて申し訳ない。護衛の魔人形^{ゴレム}だけど、悪さしなけりや何も危険は無いから安心してくれ」

騒ぎに気付いたニイロは、振り返ると、そう言つて男達を安心させる。

サリアはファージが他の客の邪魔にならないよう、自分の方に手招きして、少し端に寄るように指示していた。

「そ、そうか。いや、動いてる魔人形^{ゴレム}なんて、初めて見たから驚いたぜ。魔道具が自慢の帝国でも、実際に動く魔人形^{ゴレム}なんて見る機会は滅多に無いからなあ。

見たこと無い格好だが、あんた達も帝国から来たのか？」

サリア^{少女}の指示を大人しく聞くファージに、男達の警戒も解けたようだ。

8人の集団は、それぞれ4人掛けのテーブル2つに別れて座りながら寛ぐ体勢^{くつろ}に入っている。

「いいや、逆だよ。これから帝国に行くんだけど、どのルートを取るか悩んでてね。それで色々話を聞いていたところさ。」

北ルートでも無事に着いてる隊商^{キャラバン}もあるって言うし」

「ああ、俺達も北ルートで来たんだよ。急ぎらしくて雇い主がどうしてもつてな。今日一日休んだら、また明日からソータム（四力国連合の一つ）まで強行軍だぜ」

傭兵のリーダーは、やれやれと言つた表情で愚痴^{こぼ}を零す。

その愚痴に、仲間達が『まったくくたげ、あの強欲商人め！』などと賛同の氣勢を上げるのを余所にして、マスターのザルドが横から口を挟んできた。

「ほう、お前達、北ルートで来たのか。それじゃあ、ちいとばかり情報を提供してつてもらおうかい。報酬はエール一杯無料にしてやるぞ」
口入れ屋としても、仕事を斡旋する際に、近隣ルートに関する情報は重要だ。

ニイロにしても渡りに船というやつで、おこぼれに与^{あず}かることが出来た。もちろん有料ということで、マスターには小銀貨を1枚握らせた上で。

しばらくマスターによる事情聴取が行われた後、いくつもの印や書き込みがなされた、お手製のエズレン回廊のルート図を睨みながら、マスターが呟いた。

「こりゃあ、この水場に何かあるなあ」
いくつかある北ルートの内、一番大きな水場を通るルートが怪しい。

北ルートを無事に踏破した隊商は、いずれもこの水場を経由しなかった隊商キャラバンに限られていた。

「回廊内では水場は命綱だからな。行方不明になつてような大きな隊商キャラバンじゃ、他の水場じゃ勝手が悪い。恐らくここを使おうとして災難に遭った可能性が高いな。」

逆に、無事に通れた隊商キャラバンの規模なら、無理にここを使う必要も無え。それで難を逃れたつて寸法だろう」

その内の水場を示す印の一つを指で叩きながら、マスターが予想を述べる。

後はしばらく様子を見ながら、問題の水場を迂回させるよう通達して徹底させればいい。根本的な解決にはならないが、街としての信用は保てる。

どこを通るかは旅人の自由なのだから、わざわざ費用を掛けてまで調査したり解決に乗り出す義理は無いということだ。

一応、そういう結論に達し、ニイロとしてもそろそろお暇しうか

と思案した、ちょうどその時、店のスイングドアを開いてサクラコがやってきた。

それに気付いたニイロが手を上げてサクラコに合図すると、嬉しそうな表情で小走りに駆け寄ってくる。

「ふん、両手に花かい」

その様子を見て、マスターがニヤリと笑う。「モゲちまえ」と小さく呟いたのは、最初から店にいた若手傭兵の年少組の1人だ。

そんな外野は苦笑一つで無視して、ニイロはサクラコに声を掛けた。

「ご苦労様。変わったことは？ あ、何か飲むか？」

「いえ、飲み物はけっこうです。後、いくつか報告したいことが」

ニイロの隣、サリアと逆側の椅子スツールに腰掛けながらサクラコが答えた。

「じゃあ、来たばかりで悪いんだけど、一旦出て、歩きながらもいかな？ セっかくだから、他の店なんかも見てみたいし、サリアもいい？」

「はい！ おっけえ？ でしたっけ？ こういう使い方いいんですよね？」

サリアが以前、ニイロに教えてもらった異国の言葉を交えて答えた。

「そうそう。気軽に『了解』って意味の返事するのに使うから、それで正解。オツケーってね」

「あ、それと後で、サクラコさまにお土産もあるんですよ。このお店のマスターが作ったお菓子。美味しいんです」

サリアは土産用にと、この店のラスクを包んだ布の包みをサクラコに見せる。

使い捨ての紙袋やビニール袋、包装紙などが無いので、こういった乾き物の場合は食料品であっても、風呂敷のように布で直接包むのが一般的だ。

ベータ・アースの日本人が見れば、衛生面から顔を顰める者もいそうだが、この地ではそこまで神経質になる者はいない。

こればかりは日本人が神経質すぎるのか、ガンマ・アース人が大雑把すぎるのか、微妙なところである。

「そう。それじゃ、それは宿に戻ってから一緒に頂きましょうか」
そう言っただけでサクラコは優しく微笑む。

2人の了解を得たことで、ニイロは手早く勘定を済ませ、3人でザルドの店を後にした。

ニイロ達一行が去った後、ザルドの店では残った傭兵達が三々五々雑談に興じていた。

「しかし、見ない格好だったが、ありや何者なのかね」

「帝国方面に行くとか言ってたから、ソータルかカーレム辺りかね。四方国連合の下（南）の方から来る人間は珍しいし」

「連れてる魔人形ゴレムが凄かったな。帝国でもあんなの見たことないし、買えばいったい幾らの値が付くやら」

そんなことを駄弁りながらエールを呷あおっている。

「サリアちゃんかあ……可愛かったなあ……」

若手傭兵4人組の1人、フーセルトが呟いた

リーダーと狸耳の獣人少年を除いた2人の内、背の高い方だ。年の頃は高校生くらいだろうか。

「うん、この辺じゃあ見ないレベルだよな。都会じゃああいう服が流行ってるのかな。俺らも都会で活躍できるくらい腕上げりや、あんな彼女も作れたり……」

背の低い方、バスレルが、しきりに頷きながら同意している。

「ならさー、声くらい掛けりや良かったじゃん」

狸耳の獣人少年、ビーグが、テーブルに置かれた皿の木の実を摘みながら、横からツッコミを入れる。

「馬鹿言え。隣にあんな得体の知れないおっさんいるし、なんか魔人形ゴレムもピポピポ言っただけでつかないし。」

でも、あのおっさんと、どういう関係なのか。親子くらい歳離れてそうだったけど、血が繋がってるようには見えなかったし、主人と使用人にしちゃあ親密そうに話してたし、まさか愛人とか？

……つて、ゼネル、どうしたのさ、さつきからずっと黙つてるみたいけど」

そう言つて、先ほどから一言も発しないリーダーの若者に向かつて、少し心配そうに尋ねた。

「んん？ いや、なーんか、ずっと引つ掛かつてるんだよ。さつきの連中のこと、どつかでちらつと見たか聞いたかした気がするんだけど……思い出せなくて」

「え？ なになに？ 知つてんの？ だったらもう一度、サリアちゃんに会えるチャンスがあつたり!？」

背の高い方の傭兵少年が、思わず身を乗り出しながらリーダーに聞くが、それに答えたのはリーダーではなく、カウンターから出てきた店のマスター、ザルドだった。

「ほう、ゼネルも少しは情報つてやつに気を使うようになったか？ さつきのアレな、俺の見立てじゃ、あれが恐らく『ドマイセンの悪夢』だぜ」

また何やらニイロの与り知らぬ二つ名が増えている。

「ドマイセンの？」「悪夢？ なにそれ」

ゼネルは何かを思い出すように眉を顰める。フーセルトの方は全く心当たりが無いようだ。

「ほれ、少し前に王国とドマイセンがやりあつて、ドマイセンが酷い目に会つたつて噂あつたらろ」

「……思い出した！ あれか、コルバエンとか言う所まで攻め込んだけど、そこでケチヨンケチヨンにされたとかつて」

「おう、それだ。あの2人が入つて来た時にピンときたぜ。あのケツタイな格好で、一応、腰から剣は下げてたが、使い込んでるようには見えなかつた。」

それで何処かの商人かとも思つたんだが、あの連れてる魔道具ゴレムを見てピンと来たね。あんなもん、そこらの商人がホイホイ連れ歩けるもんかい。

噂じゃあ、あの男、魔道具ゴレムを操つて、1万の兵を退けたつて話だ。それに、後から来た娘の髪の色むすめ、見たろ？ ああ見えて、ドマイセ

ンとビンガインの將軍2人を一騎打ちで討ち取ったって話だぞ？」
ニイロだけならず、サクラコの方も謎の設定が増えていた。

ビンガインのツール・ハルマインも、ドマイセンのオルフ・ヤノスも健在だ。と言うか一騎打ちなどしていない。

「ホントかよ。普通のおっさんにしか見えなかったぞ？ 後から来た娘もすつげえ美人だったけど、強そうには見えなかったけどなあ」

背の低い方、バスレルは半信半疑だ。

「馬鹿言え。だからお前は半人前なんだよ。この先も傭兵家業を死なずに続ける気なら、もつと観察眼つてやつを養え。」

いいか？ 普通はな、あのくらいの娘が、この手の店に初めて入る時は、例え先に知り合いがいると知ってても何がしかの緊張つてもんが出るもんだ。

それが、あの娘ときたら、その辺の小間物屋や乾物屋に入る程度の緊張すら見せねえ。実際、先に来てた方の娘っこは、男と一緒にでもそれなりに緊張してたしな。あれが『普通』であるもんかよ」

「ふーん、おかしいと思っただよ。だから、ドケチな親爺オヤジが、あんな小銀貨1枚金で取って置きタの地図まで見せてたし」

ゼネルが納得したように呟いた。

「バーカ、ドケチは余計だ。北ルートに興味津々だったからな。これで上手いこと障害を取り除いてくれりゃ、調査に無駄金使わなくて済むし、そうでなくても現状維持。誰も損はしないだろ？」

ドヤ顔でそう話すザルドに、ゼネルは呆れた様子で溜息をつくだけだった。

酒場兼口入れ屋であるザルドの店を出たニイロ達3人は、連れ立ってソーコーの街の目抜き通りを散策していた。

目抜き通りと言っても小さな街である。広場を中心に十数軒ほどの商店が軒を連ねただけの通りに過ぎない。

これからエズレン回廊に向かう隊商キャラバンは、大量の水の補給が必要になるが、それは別の場所で行われているので、買い物目的で通りを歩く人影自体は疎らだ。

「わかった。じゃあ、他には何かあるかな？」

「はい。これは関係無いかも知れませんが、実は、この街でニーアーレイさんと思しき人を見掛けました」

思いがけない名前にニーロが聞き返す。

「ニーアーレイ？」

「はい。遠くから見掛けただけです。声などは掛けられなかったのですが……」

遠くから、と言った際に、ちらりとサリアの方を見たことからして、ニーロにもファージ、またはクラブとの映像リンクによって確認されたのだと予想はついた。

そのサクラコが言うのだから、その人物認識能力からしても人違いという可能性は低い。

「ニーアーレイさんがいたんですか？ この街に？」

ニーアーレイという名前にサリアも反応する。

カジユ村からルドサレンまで、しばしの間ではあるが一緒に旅をした人物なのだ。サリアにとっても知らない人物ではない。

「ええ。あれはニーアーレイさんでした。間違いありません」

「ダグ達の話じゃあ、実家から急な呼び出し食らったとかで、ヨース大森林には同行しなかったんだけど、もしかして実家がこの街にあるってことかな？ 俺はてつきり、王国出身だと思ってたけど」

「あ、ニーアーレイさんは王国の方じゃないですよ。微妙にアクセントが違いますもん。多分、ビンガインか、あの辺りの出だと思えます」

サリアが解説してくれた。

この辺りの微妙な違いは、異邦人であるニーロには判別不能だ。サクラコにしてもデータ不足で断定出来ないでいた。

現地の住人であるサリアならではの情報だ。

「そうなんだ。そういうのは外国人である俺らにはわかりにくいもんなあ。ちなみに、俺のアクセントはどう？」

「あー、ええっと……その、何と言うか、棒読みっぽい？ 感じがあります。いえ、下手じゃないし、悪くは無いですよ？」

ニーロの思いつきの問いに、サリアは言い難そうにしながら答え

た。ただ、その答えは多少自信があっただけにショックだったが。

しよんぼり肩を落とすニイロに、サリアが慌ててフォローを始め、その様子をサクラコは微笑みながら見守る。

少しの間、優しい時間が過ぎた。

「それで、ニーアーレイさんはどうします？」

ややあつて、サクラコがニイロに尋ねた。

「どうする……うーん、どうもしないよ。わざわざ探して御用聞きするのも、何か違う気がするし」

友人と呼んで差し支えの無い間柄である。彼女が助力を求めんならば、喜んで手を貸す。

しかし、彼我の移動力を考えれば、ニイロ達に用があつて追つてきたとは思えないし、傭兵仲間であるダグもコズノーも置いてこの街に1人で来たのなら、彼女の個人的な用件に横から首を突っ込むのは逆に遠慮すべきだと思えた。

「そうですか……そうですね、それでは、予定通りに明日の朝に出発ということでは」

「あの、やっぱり北の危なそうな所を通るんですか？」

恐る恐るサリアが尋ねる。

ニイロがいれば大丈夫だという思いはあれど、だからと言って恐くなくなる訳じゃない。

「ううん。予定通り北ルートだけど、問題の水場は避けて最短ルートを行くつもり。」

頼まれて引き受けたのならともかく、わざわざ無用のトラブルに突撃する趣味は無いよ。ドラゴンの噂もデマの線が濃厚だし、問題の解決は然るべき人達がやるべきだからね」

「どうやら酒場の親爺の思惑は外れそうな気配であった。」

第38話 スーメリア

エズレン回廊の北ルート。その北側最大の水場に通じる南北に走る街道に人影があった。

両側を切り立った崖に挟まれた、道幅5メートルほどの狭隘きょうあいな場所所に、上手く壁の窪みを利用して築かれた簡易の見張り台があり、そこに6人の姿が数えられる。

外見からは3人が何処かの貴族に仕える騎士らしく、家紋の入ったお揃いの胸ブラスト・アーマー 鎧を着込んでいる。残り3人は傭兵らしく、装備はバラバラだ。

「どうやらこちら側にまでは、追っ手も手が回ってないようね。ウルト、悪いけど奥方様のところまで走ってちようだい。今の内にお急ぎ頂くように、と」

リーダーらしき金髪の女騎士が、別の若い騎士に指示する。

ウルトと呼ばれた若い騎士は、一瞬、不満げな視線を傭兵達の方に向けたが、それでも黙って頷くと、踵を返して北の方——水場のある方向へと駆け出していった。

「へへっ、すいませんねえ、氣い使わせちゃって」

下卑た笑みを浮かべながら、傭兵の1人が女騎士に向かって声を掛ける。

仲間の傭兵も、挑発するかのごとくニヤニヤ笑いを浮かべていた。

「きつ、貴様ら……」

「ズナーク殿、気にしないで下さい。今はそんな場合じゃ無い」

残った騎士の男が思わず剣の柄に手を伸ばすが、すかさず女騎士が制止した。

「しかしスーメリア殿……」

「仕方無いです。先の襲撃で乗騎あしを優先的に狙われたのが痛かった。妨害が目的ならいい手です」

ズナークは憤懣ふんげんやる方ないといった表情で抗弁しかけるが、スーメリアに制されて思い止まる。それで怒りの矛をなんとか収め、前方の監視に気を向けた。

スーメリアは、その様子にやれやれと一息つくつと、まだニヤニヤ笑いを浮かべたままヒソヒソと何やら話し合う傭兵達から目を逸らし、ズナークと並んで監視の目を南側に注いだ。

思い起こせば、あつという間の出来事だった。

主家であるダースカルク家が三男オルグス派として帝位争いの場に加わり、ダースカルク家の寄子よりこである彼女の家も、否応無くオルグス陣営に組することになった。

そのこと自体は別にいい。主家に仕える身であれば、個人の思惑など省みられないのは普通のことだ。

しかし、オルグスの舅しゅうとであり、派閥の屋台骨であったギスタエス公爵が病に倒れると、オルグス派は見る見るうちに崩壊の一途を辿り、肝心なオルグスは既に討たれ、今はその遺児を奉じて逃亡の途にある。

さらに、オルグス派の残党と共にエズレン回廊内へと逃亡したまでは良かったが、北ルート最大の水場——通称、コレム口の泉で隊商を装った追っ手に奇襲され、なんとか撃退はしたものの、60名ほどいた手勢の半数を討ち取られる大被害を蒙ってしまった。

実際、彼女の兄も乱戦の中、帰らぬ人となってしまうているが、それを悼む余裕すら無い。

しかも、間の悪いことに信頼できる騎士達の被害が大きく、戦力不足を補う意味で雇い入っていた傭兵達との戦力バランスが1対2となってしまうことが、状況の悪化に拍車をかけた。

金で雇われた傭兵達が、いつ寝返つても不思議でない状況なのだ。

そのことを傭兵達も自覚しており、それが傭兵達の不遜な態度に繋がっていた。

（団長はビンガインまで逃れればと仰るけれど、立場の弱いビンガインでは、もし帝国が強硬に身柄の引渡しを迫った場合に折れる可能性が高いと兄上は言っていた。

それでも多少の時間は稼げるだろうし、その間に他の四方国連合……いや、出来れば王国と繋ぎが取れば……しかし、かし王国に繋ぎと言った所で、伝手すらない現状では……そ

れに敗残の身を引き取るメリットすら王国に示せないでは机上の空論……)

目は前方を警戒しながらも、心はこの先の身の振り方について、あでもないど止め処なく思案する。

しかし、どう考えたところで名案が浮かぶはずもなく、どんどん気分は落ち込んでいく。

積極的に選んでこうなったわけではない。主筋であるダースカルク家がオルグスの傳めいと(守り役)であったため、ダースカルク家に従つて当主である兄と共に軍役についた、半ば義務感に従つただけである。今はその兄も帰らぬ人となったが、事態が急すぎて実感すら沸いてこない。

(兄上は、どうしてそうなったかよりも、先をどうするかを考えろと仰つていたけれど、それでも考えずにはられないな……どうしてこうなったのか……どうしたらいいのか……) 深い絶望に暗澹たる気分が身を襲う。

しかし、事態は彼女にそんな気持ちに浸る暇さえ与えてくれなかった。

「——ぐうっ！」

横に並ぶズナークの呻き声が、彼女の意識を思考の澱から現実へと引き戻した。

「ズナーク？」

思わずズナークの方を振り向くと、いつの間に忍び寄ったのか、背後から傭兵の1人がズナークを見張り台の柵に押さえつけ、もう1人が同じく背後からズナークの背に剣を突き立てる姿があった。

「ズナーク!!」

ズナークは彼女の叫びに反応することなく、ずるずると崩れ落ちる。致命傷なのは明らかだった。

その光景に、ほとんど無意識の内に剣を抜き放とうとしたが、残る傭兵の1人に彼女も背後から押さえつけられ、剣を引き抜くことが出来ない。

「ボルロー！ きつ、貴様等！ 裏切るのかっ!!」

彼女の抗議の叫びにも、ボルロと呼ばれた傭兵——ズナークを背中から刺した男——は、余裕のニヤニヤ笑いを顔に張り付かせたまま嘯いた。

「別に説明もいらねえだろ？ これ以上、あんた達についてても上がり目は無さそうなんでね。貰うもん貰って、さっさとお暇しようってことさ。

ついでにちよいとばかり、騎士サマの味見ってやつをさせてもらおうって寸法よ。こうなったら当然の報酬だろ？」

ボルロの言葉に、他の2人も下卑た笑い声を立てる。

裏切りの可能性は予想していたし、用心もしていたつもりだった。しかし、いざ現実になると、こうもあっさり成功させてしまったことにショックを覚える。

剣を取り上げられ、なんとか拘束を振りほどこうとする彼女の試みも、3人も男達が相手では逆に彼等の嗜虐心を高ぶらせるだけだった。

「貴様等あああ！ 離せっ!! 離せええええ!!」

「うるせえ！ 大人しくしやがれ！」

苛立った傭兵の1人が、いきなりスーメリアの鳩尾に膝蹴りを入れる。

「ぐはっ」

苦いものが胃の腑からせり上がり、苦痛の余り、くの字に屈んだところに、背中への肘打ちが加わって呼吸が詰まった。拳による追い討ちがスーメリアの整った顔にヒットし、眼前に火花が飛んだ。口の中に鉄の味が広がる。

容赦の無い打擲に意識が半分飛びかけるが、それでも意志の力で意識を繋ぎとめた。絶対に思い通りにはなつてやらないという強い意志で。

「まったく、素直にしてりゃあ痛い目も見ずに済むつてのによお」

男たちは面倒臭げに悪態をつきながらも、楽しげに、実に楽しげにスーメリアの鎧を剥ぎ取りに掛かる。

胸 鎧の留め金を壊し、鎖帷子の革ベルトを切り取って剥ぎ取つ

た。

スーメリアも必死で抵抗するが、いかに鍛えた騎士とはいえ武器も取り上げられた上に多勢に無勢だ。

(……兄上！)

もし、兄の死によつて引き継いだ、あの魔道具がここにあれば、傭兵の3人くらい蹴散らしてみせる自信がある。

剣技に於いては若干、妹の後塵を拝していた兄が、十人近くの敵を相手に無双してのけた程の性能を誇る魔道具だ。

しかし、それも今回は偵察任務ということで、荷物になるために水場の陣屋に置いてきてしまっている。

後悔しても時は戻らない。このまま辱めを受けるくらいなら、いっそ——そういう思いが一瞬頭を過ぎった。

「離せええええ！ 私に触れるなあああ!!」

——ヴーン

スーメリアの絶叫と男たちの下衆な笑い声が響く中、微かな、ごく微かな異音をスーメリアの耳は捉えていた。

いつから聞こえていたのかは自分でもわからない。聞いたことのない音。周囲には自分達以外誰もいない。そもそも、そんなものに気を取られる余裕も無かった。

しかし、その音は気のせいではなかったらしく、傭兵の1人が、ふと訝しげに頭上を見上げた。

「ん？ 何だあれ？」

誰の声だったのかは定かでない。

ただ、3人の男達に押さえつけられた体勢から、無理矢理首を捻って見上げたそこに、彼女は白に近いグレーの大きな四角いテーブルのような物体が、ゆらゆらと宙に浮いているのを目撃した。

その物体は、男達が驚きで呆然と硬直するのを見るや、いきなり人の背丈ほどの高さまで急降下したかと思うと、そのままの勢いで滑るように数メートルの距離を滑空し、棒立ちのままの男2人を左右に拡げた腕でなぎ倒した。

「へぶっ！」「うがっ！」

ちょうどダブルリアットの形で2人が弾き飛ばされ、何が起こったのが把握しきれないまま1人残った男の隙をスーメリアは見逃さなかった。

位置と体勢から相手の剣を奪うことが無理と即座に判断すると、手の届く範囲だった腰の後ろのナイフを素早く奪い取り、そのまま脇腹へと突き刺す。

「ぐっ、この野郎ー」「チッ！」

男が罵声を上げるのと、スーメリアが舌打ちをするのはほぼ同時。上手くナイフは奪えたが、その後の一撃は男が着込んだ鎖帷子チェインに邪魔されて、ほとんどダメージを与えることは出来なかった。すかさず体勢を整えてナイフを構えなおす。

「糞がー 舐めんじゃねえ!!」

男はナイフを奪われたことを知るや、逆上して自分の剣を引き抜くと、スーメリアに襲い掛かった

相手は刃渡り60cmほどの直剣であり、こちらは刃渡り15cmに満たない、剣とも呼べない得物ナイフである。多少の練度の差は無意味。もし、まともに斬撃を受ければ、ナイフは容易く折れてしまうだろう。

勝機は相手の初撃をかわして懐に入り、一撃の突きに賭けるしか無かった。

「この糞アマ、死ねやー！」

わめき声を上げて上段に振りかぶった男の剣が振り下ろされることは無かった。

——パンツ！ パンツ！ パンツ！

乾いた破裂音が3つ、谷間に響く。

剣を振り上げたままの男の体がビクンと痙攣したかと思うと、そのまま脱力して崩れ落ちた。

「えっ？」

何が起こったのかわからず、呆然とするスーメリアの元に、またもあの飛行物体が降りてきた。

周囲を見れば、弾き飛ばされた2人の傭兵も、倒れたままびくりと

も動かない。

「……死んだ？」

崩れ落ちた傭兵をよく見ると、頭からとめどなく血が流れ出し、周囲には血溜が出来かけている。残る2人の傭兵も同じ状態だった。

謎の物体は、ピポピポと音を発しながら、スーメリアの側まで飛んでくると、銀色の腕をせわしなく振って、まるでボディランゲージのように何かを伝えているようだ。

少なくとも、スーメリアに対しては危害を加えようとする様子は見えない。

「助けて……くれたの？」

スーメリアが呟くと、謎の物体は頷くかのように前後に揺れた。

どうやら意思の通じる相手とわかり、安堵から体から力が抜ける。

そのまましゃがみ込むと、両手で自分の体をかき抱き、ぶるりと身を震わせた。

「あいつら……あつ！ 奥方様！」

身に降りかかった出来事に失念していたが、傭兵達の裏切りが現実になったのならば、水場で待機していた本隊の方でも反乱が起こっているはずだ。

この場にいた3人だけの問題とは思えない。

思いついたと同時に立ち上がり、落ちていた自分の剣を拾い上げると、思わず駆け出そうとしたスーメリアを、押し止めるかのように謎の物体が行く手を塞いだ。

「何？ 行くなと言おうの？ でも、急がないと奥方様達が危ないのよ！ だから止めないで！」

この場所から水場まで、走って30分は軽く掛かるだろう。

どのタイミングで傭兵達が反乱を起こすかわからないが、もし始まっていれば間に合わない可能性も十分にあった。

焦る彼女は行く手を塞ぐ謎の物体を避けようとするが、謎の物体の方もピポピポと音を発しながら、尚も行く手を塞ぐ。

「一体何なの!? だから、邪魔をしないで！」

苛立つ彼女に何かを伝えようとするかのごとく、謎の物体は腕

マニピュレータ

を振り回し、やがてピシリと彼女の背後を指差すように腕^{マニピュレータ}を振り上げた。

その様子に振り返った彼女の目に映ったのは、馬が引かない、不思議な箱馬車の姿だった。

「助けるのが遅くなって申し訳ない！」

ニイロはスーメリアと顔を合わすやいなや、開口一番、そう言つて勢いよく頭を下げた。

サクラコとサリアも、ニイロの後ろで並んで畏^{かしこ}まっている。

北ルート最大の水場であるコレム口の泉を避ける方向で帝国側へと向かった一行だったが、近くまでは行くということで、念の為にクラブを偵察に出したのだ。

同程度の高さの目線からは上手く隠された見張り台も、上空から監視できるクラブのカメラからは逃れようもなく、そこに数人の人影があることも即座に露見した。

しかも、監視する内に仲間割れなのか、争い出したところまでは、ニイロも介入するつもりは無かったのだ。

着ている装備から、片方がどこかの騎士であり、片方が傭兵であることは想像がついた。

冷たいかも知れないが、どちらも武装勢力同士の戦いであれば、横から口を出す義理は無い。上空からの映像だけでは戦いの理由などわかるはずもなく、騎士だから正しい訳はない。その逆も然りだ。

しかし、騎士の1人が女性で、傭兵の男達が3人掛かりで暴行に及ぼうとしたことで状況は変わった。

通常の戦いであればともかく、女性の尊厳を踏み躪る行為まで及ぼうというのであれば、絶対に見過^ごすことはできない。

ニイロは即座に方針を変更し、上空監視のクラブに対して介入を命じた。

最悪でもニイロ達が駆けつけるまで女性を守るよう指示したのだ。

結果はニイロ達を待つまでもなく、クラブの独擅場で終わったが、そういう理由もあって介入が遅くなった為、ニイロとしても何とな

く、『不要な嫌な思いをさせた』という罪悪感があつたりするのだ。
「え？ あ、いや、助かりましたが、あれは貴殿が寄越してくれたもの
なのですか？」

スーメリアはそう言って、今はニイロ達の頭上に浮かぶクラブを見
上げた。

「ええ。クラブと言って、分かりやすく言えば魔人形ゴレムですかね？ 厳
密には違うけど……クラブ！ ご苦労様、通常任務に戻つて
くれ」

ニイロはスーメリアに説明しながらクラブに命じた。

指示されたクラブは、『ピポツ』と了解を告げると、ステルスモード
に移行して上空監視に戻る。

ゆらゆらと蜃気楼のような揺らぎを残して姿を隠すクラブに、スー
メリアは驚きの声を上げた。

「きつ、消えた？ いったいこれは?！」

「光学迷彩…….と言つても、俺も理屈を知ってるわけじゃない
ので、詳しい説明は勘弁して下さい。

以前見たことがありますけど、魔道具で着ている者の姿を隠すロー
ブがありました。そういうもの、と思つてもらえれば」

「空を飛び、消える魔人形ゴレム…….それに、馬のいない箱馬車…….」
ニイロの説明を聞いたスーメリアの脳裏に、以前、兄の言っていた
言葉が思い浮かぶ。

「…….も、もしかして、貴殿はあの王国の英雄殿では!? だと
したら、兄上が言っていた、英雄殿が援軍に来てくれるというのは本
当だったのですか!？」

「えっ?！」

突然詰め寄ってきたスーメリアにニイロは戸惑う。

あの、などと言われても返答に困るし、勝手に援軍と言われても、そ
んな話をしたことなど無い。

何より、鎧を脱がされ、ノースリーブの肌着一枚になっている彼女
に視線を落とせば、半分露あらわになった膨らみに、目のやり場に困ってし
まうこと甚はなはだしい。

「やっぱり、おっきいのがいいのでしょうか……」後で検証してみる必要がありますね」

後ろで何か言ってる。

が、そちらに構う余裕は無い。

「ちよつと待って、近い近い！ それに、『あの』とか言われても困るし、どこかの援軍なんて話は聞いたことも無いですよ」

「普段あんなに嫌がってるのに、『英雄』の部分は流すのですね」「やっぱり大きくて綺麗な人がいいのでしょうか……」

まだ後ろで何か言ってる。

が、やっぱりそちらに構う余裕が無い。

ニイ口の否定に、スーメリアは肩を落とす。

「兄上が言っていたのです。馬のいない箱馬車に乗り、空を飛ぶ魔人形ゴレムを操る英雄、ドマイセンを撃退した王国の英雄が味方になってくれる、と。

事態が急転して、我々は負けたけれど、援軍が来てくれれば奥方様達を無事に安全な所まで送り届けることが出来るから、それまでの辛抱だと……」

これはニイ口達にとって重要な情報だ。

つまり、目の前の女性はサリアの誘拐を企んだ一味だと想定できた。

一方的な皮算用で、ニイ口達にとっては迷惑極まりない話だが、彼女の言い分には、誘拐などという手段を用いた後ろめたさは感じられず、知らない可能性が高い。

どうやら思いがけない所で手掛かりを掴んだようだった。

第39話 コレム口の泉

「これは、さっきの空を飛ぶ魔人形が、今現在見ている映像です。これを見た限りじゃ、言われるような反乱は起こっていないようですね」
とにかく急いで連れて行ってくれという、スーメリアの懇願によって、仕方なく特殊輸送車両への同乗を許可し、運転をサクラコに代わってもらって北ルート最大の水場であるコレム口の泉へと向かう車内で、10インチの携帯端末に映し出された、クラブから送られて来る映像を見せながら、ニイロが説明する。

焦りのあまりか要領を得ないスーメリアの話を、なんとか整理して理解したところによれば、傭兵による反乱は時間の問題であり、既に起こっているかも知れないということだったが、どうやら杞憂だったようだ。

しかし、今、この瞬間に暴発しても不思議ではなく、戦力は傭兵側が約20人に対して、騎士側はズナークが殺されて残るは9人（スーメリアを含む）に、非戦闘員として奥方様と呼ばれる女主人と赤ん坊、それに世話係の侍女達が3人いるそうだ。

水場の周囲には、隊商の休憩用に1棟の簡易な長屋のような木造の建物があり、その前方に先の襲撃で1台だけ残った馬車と、それを囲むように幾つかの幕舎が建てられている。

どうやら、騎士の一行は長屋を使い、傭兵達は幕舎を利用しているようで、周囲には10人ほどの傭兵達の姿も見えるが、その配置や体の向き、動きからして、外敵に備えるというよりは長屋の方に注意が向いているのは確かのようにだった。

「でも、間違いありません。この動きは、合図で奥方様達のいる建物の出入り口を塞ぐつもりでしょう。この建物の出入り口は2ヶ所。正面と、正面から見て右手の側面。」

貴重品を狙っているでしょうから、火をつけることはしないと思うけど……それに、馬車も押さえられていては、徒歩で奥方様達を連れ出せても逃げ切れない」

10インチの携帯端末の映像を食い入るように見ながら、スーメリ

アが言った。

「ただ、さつきも言ったように、我々は援軍の要請に応じてここに来たんじゃありません。我々は、我々の目的があつてここにいるのだし、冷たいと思われるかも知れないけど、国のいざこざにまで首を突っ込む気は無いですからね？」

もし、彼等が本当に騎士の皆さんを襲うようなら手助けはしますけど、配置が怪しいからと先制攻撃なんか出来ませんよ？」

と、ニイロはスーメリアに釘を刺す。

スーメリアの話信じらるならば、サリアの誘拐を目論んだのは三男のオルグス派で間違いは無いようだが、スーメリアのような末端の騎士の立場ではそれほど深い話は通っておらず、単に『王国の英雄と言われる凄腕の異邦人を味方として招聘した』という程度の話になつていようだった。

首謀者の特定には、もう少し上の立場の人間に話を聞くべきと判断し、スーメリアの言う『奥方様』であれば、多少は詳しい話を聞けるかも知れないと同行を承諾したのが現状だ。

「それは……それは仕方がないです。無理は言えませんから。それに、私の魔道具があれば人数の不利も多少は補えますから、今は一刻も早く合流して、必要ならばここで傭兵達を解雇してから、少数でこのエズレン回廊を抜けるしか……ない、の、でしょうね……」

落ち込んだ様子でそう話すスーメリアだが、ニイロがそれに対して言う言葉も無かった。

ニイロ達にも都合があるし、下手な安請け合いでぬか喜びさせても責任の取り様が無いのだから、今は流れに任せるしかないのだ。現実の物事は、なかなか物語のように都合良く回ってくれない。

「とにかく、もう15分ほどで到着するんで……って！ 動いた!？」

手元の10インチ携帯端末タブレットには、2手に別れて長屋の2ヶ所の出入り口を封鎖するように動く傭兵達の姿が映し出された。

音声までは拾えていないが、室内から放たれたと思われる矢を受け

て倒れる傭兵の姿も見える。

「くそっ！ あと少しだったって言うのに！」

珍しくニイロが毒づいた。

内心、傭兵達が暴発する前に、異邦人であるニイロ達が現れることで、それが一時的にでもガス抜きとなつて暴発を未然に防げるかも？

と、それこそ皮算用していたのが無駄になってしまったからだ。

もちろん、実際にそう上手くはいかないだろうことも予想はしていたが、本当に現実の物事は、なかなか物語のように都合良く回つてくれない。

「急いで！ 急いで下さいー！」

スーメリアが焦燥の声をあげた。

エズレン回廊北ルート、最大の水場であるコレム口の泉。

周囲は切り立った崖に囲まれた、南北に20m、東西に50mほどの空き地の中央に、湧き水によって形成された瓢箪型の小さな池があり、そのほとりに簡易な木造の、長屋のような建物があるだけの殺風景な場所である。

旅人が夜露を凌げる為だけの目的で建てられた長屋には窓すら無く、池側に面した正面の出入り口と、もう1ヶ所、側面に入り口が設けられているだけだ。

内部も特に仕切られおらず、誰かが置いていったのか、古い戸棚とテーブル、椅子が数脚あるだけ。最大でも十人程度が雑魚寝できる程度の広さしか無い。

あくまでも、水の補給のついでに、一晩だけの逗留といった程度に利用されるものだった。

「ウルト、盾はしっかり押さえろ！ サズイール、頭を上げるな！」

矢あ食らいたいのか！ コービン、そのテーブルと戸棚は横の入り口の盾に持って行って、そっちの入り口は塞いでしまえ！

矢は大事に使い！ 数が無いんだ、確実に相手の数を減らすことだけ考えろ！ あっちの人数さえ減らせば、腕はこちらが上なんだからな！」

正面の入り口を挟んで激闘を繰り広げる騎士達の後ろで、騎士達の団長であるグラスバールが声を枯らす。

大柄な体躯に、癖の強い茶色い髪を長く伸ばした様子は、厳つい顔とアンバランスにも見える。

その肩には、不意打ちで食らった矢が未だに突き立っているが、矢を抜く暇も惜しいとばかりに指示を飛ばしていた。

傭兵達の幕舎に、条件の話し合いに赴いた際、交渉が決裂して長屋へと戻る隙を突かれて受けたものだ。

そんな彼に、背後から女性の声が静かに呼びかける。

「グラスバール」

「はっー！」

振り返ったそこには、白髪に？身の女性、スーメリアに『奥方様』と呼ばれる、カーヒア・ファナ・ハイドナ子爵夫人の毅然とした姿があった。

ハイドナ子爵夫人は、3人いる侍女の内、最も年長の少女に赤子を抱かせて自らの後ろに控えさせ、残る2人の少女を両脇に、勇気付けるように両手で肩を抱いている。

「傷の手当を。交渉は決裂したのですね？」

グラスバールは、そう言つて傍らの侍女を肩の治療に当らせようとするハイドナ子爵夫人を片手で押し止める。

「今は手当ては無用です。かえつて動きにくくなる。」

交渉の方は、予《か》ねての打ち合わせ通り、この場で契約を打ち切り、ここまでの報酬に謝礼として1人につき小金貨1枚（40万円相当）を上乗せして支払うと提示しましたが……やつら、こちらの足元を見て、1人当り大金貨5枚（2千万円相当）を要求して来ました。とても呑める額ではありません」

命を賭けた商売である傭兵にとつて、現代人の感覚からすれば2千万円は決して高くないのかも知れないが、ガンマ・アース人の感覚からすれば破格の要求だ。

落ち延びる身とはいえ、子爵家であるからには、それなりの財産を持ち出して来ており、払えるかと言えば実は払える。

しかし、先行きの見えない将来に備え、払えるからと無秩序に持ち出していい財産ではないのだ。

当初の提示額である小金貨一枚にしたところで、事前の契約に基づいた報酬とは別に支払われるものであって、これだけでも十分以上の譲歩であった。

「大丈夫なのですか？」

それは肩の傷を気遣った言葉だったのか、それとも現在進行中の事態に対しての言葉なのか。

グラスバールは後者と判断して展望を語った。

「確かに敵の数は多いですが、今は敵の数を減らすことに集中しています。同数くらいまで減らせれば、戦いの腕はこちらの方が上です。

後は、正面にある馬車を奪回して、ソーコーまで落ち延びれば希望はあります」

「……そうですか。わかりました。今はお前達だけが頼り。頼みます」

そう言つてハイドナ子爵夫人はグラスバールに頭を下げ、その様子に、侍女達が息を呑む気配が伝わった。

貴族である子爵夫人が、人前で準貴族である騎士に頭を下げることは通常有り得ないのだから。

「……お任せ下さい」

グラスバールは、それだけを言つて奮闘する部下達へと意識を切り替えた。

命に代えてなどとは言わない。

若い頃から目をかけてもらい、時に息子のように接してくれた子爵夫人を守ることは、グラスバールにとって極当たり前のことだった。

「ミジエン、どうだ？」

ハイドナ子爵夫人と話す間、グラスバールの代わりに外の様子を窺^{うかが}っていた部下の女騎士に様子を聞く。

「今のところ突っ込んでくる様子は無いけど、こっちも打って出れば、あつという間にボヤニの実（ベータ・アースで言う毬栗^{いかり}）ですよ」

「火は？」

不安にさせることを恐れて子爵夫人には言わなかったが、グラスボールが一番心配しているのが、長屋に火を付けられることだ。

一応、貴重品の類は長屋内に持ち込んでいる為、金銭目的の傭兵達が火を放つ可能性は低いとは思っているが、絶対に無いとも言えない。

傭兵達からすれば、ここでオルグス派の残党を壊滅させたとして、ゼールス派なりザルーク派から恩賞を受け取るという選択肢もあるのだ。

「その心配も、今のところ大丈夫みたいです。裏に回られて火魔法使われたら危ないけど、水場も近いですから、ボヤ程度なら私の水魔法で何とか」

「そうか。その時は頼りにしてるぞ」

「それより、ズナークとスーメリアは大丈夫でしょうか。あつちには傭兵も3人連れていったはず。2人なら易々とやられはしないと思いますけど……」

ミジエンは残った騎士の中で、女性は2人だけということでした。スーメリアの事を心配していた。

「こういった場合、敗者の女性がどんな目に遭うか、それがわからない彼女ではない。」

「わからん。わからんが、向こうで何かあれば戻って来るはずだ。戻らないということは、ウルトの報告通り、我々を待っていると考える。」

スーメリアがいれば、アレントの残した魔道具が使えるんだが……ミジエン、あれは何かならんのか」

残念ながら、腕力一辺倒のグラスボールでは、魔道具の知識について全く役に立たない。

残る騎士の中で、魔道士と呼ばれるまでの力は無いが、それでも一応は魔法を使えると言っているミジエンしか、頼れる相手がいなかった。

「無理です。魔道士ならともかく、私程度じゃ使用者権限の書き換えは出来ませんよ。スーメリアが使えるのも、アレントの妹で、あらかし予め登

録されてたからだそうですし」

ミジエンは申し訳無さそうに答える。

こうして話している間にも、入り口の、盾で塞がれていない開口部から飛び込んできた矢が、対面の壁に突き刺さる。

今のところ被害は無いが、こうしては埒が明かない。何より、食料と水の問題があった。

長屋の中に持ち込んだ水と食料は1日分しかなく、大部分は表の馬車に積んだままで。

このまま兵糧攻めに遭えば、数日であれば騎士達は耐えられるだろうが、子爵夫人と侍女達、何よりまだ乳離れすら済んでいない赤ん坊が耐えられない。

ベータ・アースでも、乳の出が悪かったり、母親を亡くした赤ん坊を、人間の母乳と成分が近い山羊の乳で育てたという例があるが、ここガンマ・アースでも似たようなもので、乳の為に連れてくる山羊(似た動物)も、馬車用の馬と共に、馬車の近くに繋がれていた。

時間は敵に有利だ。ぐずぐずしていれば、帝国からの更なる追っ手まで来ないとも限らない。

「パーシ、残りの矢は何本だ？」

相手の隙を見ては矢を放っていた騎士に尋ねる。

「あと7本。1人は確実に仕留めたと思うのですが、後は向こうも警戒してて厳しいです」

(すると残りは恐らく16人か？ こっちは8人。打って出るか……)

腕の差があるとはいえ、相手は訓練用の動かぬ案山子ではない。剣を持ち、こちらを倒そうと襲ってくる人間だ。

それを倍近い人数を相手に、こちらが全員無傷で倒せると思うほど自惚れてはいない。

1人で2人を倒せばいいと言葉では言っても、向こうだって律儀に1対2で掛かってきてくれはしないし、実際に乱戦になれば、大きな被害が出るだろうことは必至だ。

しかも、ここで終わる旅ではなく、これから先も赤ん坊を含む5人

の非戦闘員を抱えての逃避行である。

これ以上人数が減れば、確実に今後には差し支える。そういえば、さしものグラスボールも迂闊な決断は出来ない。

そんな懊悩するグラスボールの耳に、更なる厄介事の知らせが飛び込んで来た。

「団長、あれ！」

慌ててミジエンが指差す方を見ると、傭兵達が陣取る馬車の周辺の、更に奥に見える断崖の壁に動くものが見えた。

大きさは2mほどで、鼻先の尖ったオオカミのような精悍な顔に、ジャガーのような靱な土色の体躯を持ち、雄は頭頂部から背中にかけて緋色の鬣たてがみを持つ肉食獣。

カモシカのように断崖絶壁をもともせずには渡り歩き、上から獲物を見つけると降りてきて、5〜10頭ほどの群れで狩る。

性質は荒く、『引くことを知らない』とまで言われる凶暴な獣だ。故に、『エズレン回廊で最も遭いたくない相手』とまで言われる。

「ダイオスか！ 厄介な！」

見れば、こちらへの攻撃に夢中で、周囲への警戒が疎かになっている傭兵達は、背後に忍び寄る7〜8頭のダイオスに気付いていない。

一見、これで傭兵達が混乱してくれば、膠着した事態を打開するチャンスなのだが、もし、混乱の中で移動の足である馬や、赤ん坊の命綱でもある山羊が狙われた場合、事態はより深刻度を増してしまう恐れがあった。

状況の変化に、グラスボールは即座に決断する。

「いいか、ダイオスが連中に襲い掛かったら、それに乗じて打って出る。

ウルト、お前はここで奥方様達を守れ。絶対に入り口を死守しろ。パージ、お前はまず、ここから弓で馬と山羊を襲うダイオスがいたら優先して倒せ。今、馬と山羊を失う訳にはいかんだ。矢が尽きたら遊撃に回れ。

残りは全員、俺に続け。ダイオスは厄介だが、まずは傭兵連中の数を減らすことを優先する。囲まれないよう注意しろ」

「「おう！」」

矢継ぎ早に出される指示に、全員が呼応した。

背後に迫るダイオスの群れに、傭兵達はまだ気付いていない。

やがて、群れのリーダーと思しき大柄な雄が、その緋色の鬣たてがみを靡なびかせて、傭兵の背後から一気に襲い掛かった。

「うわああああ!!」

「今だっ!!」

思いがけない伏兵に、傭兵達が大混乱に陥つたのを確認すると、ほぼ同時にグラスバールが突貫の合図を出す。

グラスバールを先頭に、6人の騎士が傭兵達に襲い掛かった。

騎士vs傭兵vsダイオスの三つ巴の混戦である。

怒号が飛び交い、血飛沫が飛び散る。どの陣営も、自分達以外は全部敵（餌）とばかりに、当るを幸いと剣（牙）を振り回す。

そんな乱戦の中、後方で警戒する弓騎士のパーシだけに全体を見通す余裕があった。

馬と山羊を襲うダイオスに警戒しつつ、味方の危機の度に声を枯らして警戒を促す。

案の定、手薄になった長屋の入り口にも、傭兵が隙有りとばかりに駆け寄るが、ウルトに指示して対応させつつ、自分の細剣レイピアを抜いて横から仕留めた。

「パーシ殿!」

「悪いねウルト、今のは君のカウントだよ。事情が事情なんだから大目に見てくれよ? 全く正々堂々もあつたもんじゃないね」

誰に対しての言い訳なのか、そんなことを呟きながら、戦場になった水場を見渡す。

全体的に有利に進んではいるが、味方の被害も皆無ではない。すぐにもこの場を離れて加勢に飛び出したいが、団長命令に背く訳にもいかない。

ジリジリするような焦燥が心を蝕む。

「ん?」

ふと、見張り台を築いた方の道に、見慣れないものが目に映った。

それは、頭の中で疑問を言葉にするよりも早く、物凄いスピードでこちらに突っ込んでくるように見える。

「……………あ?」

その、馬のいない箱馬車は、猛烈なスピードでウルトとパーシの守る長屋の前まで突っ込んで来た。

呆然と見つめるパーシ達をよそに、ちょうど長屋の入り口を塞ぐような形で急停車すると、横の扉が乱暴に開かれ、中から見知った顔が飛び出して来る。

「スー! スーメリア!?!」

スーメリアは慌てて呼びかけるパーシに気付くと、必死の形相で詰め寄った。

「パーシ! 私の魔道具は!?!」

「あ、ああ、それだったら出掛ける前から動かしてないから奥に……………」

スーメリアはそれだけを聞くと、パーシを突き放すように長屋の奥へと駆け込んでいった。

目を白黒させて戸惑うパーシと、出番すらないウルト。

そんな2人に、開け放たれた箱馬車の中から、やや緊張感の無い男の声が掛かる。

「えーっと、お取り込み中しません。奥方様ついていらっしやいますか?」

その声に振り返ったパーシ達が見たのは、頭の前から爪先まで、見たことの無い奇妙な装備に身を固めた男と、目にも鮮やかなピンク色の髪をした少女の姿だった。